琴吹闇斗のペルソナ崩し

虹那駆並

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
琴吹闇斗のペルソナ崩し

【Ｎコード】
Ｎ７８８２Ｌ

【作者名】
虹那駆並

【あらすじ】
同級生を殺した僕。それを目撃した謎の女、亜由。僕らは事件を隠蔽した。しかしそれから学園では、奇妙な事件が起き始める。一年前に行方不明となった姉に、ペルソナ崩しを呼ばれるほどに人の裏側・本性を見破るおかしな能力を持った中学生、つまりこの僕は、ことごとくそれらの事件に巻き込まれて……。とにかく僕は、狂おしいペルソナ被りな少年少女達と接しこの夏、姉の行方不明の真相にたどり着く――。

序章：ペルソナ有りのまえおき

僕は物心ついた頃から、人の仮面（ほんしつ）の裏を見抜く能力を持っていた。
早い話が、幼い頃から、ずっと人の汚いところを見続けてきたということだ。
だから、どれほど人が下劣で劣悪で、醜く見にくく、汚染されて汚濁していて、信用も信仰もできない存在であることを、知りすぎていた。
姉はそんな僕を、ペルソナ崩し、と呼称したことがあった。

「ペルソナ崩し？」
「ええ、人は誰もが仮面を被って生きているでしょう？　さらに、大多数の人はその仮面を何枚も持っていて、時と場合と対峙する人間によって、絶望的なまでに巧みに器用に使い分ける。そして、その裏側の素顔は、誰にも気付かれまいと計算を働かせ、生き続ける」
その通り。そして、仮面（ペルソナ）を被るというのは、おそらく最悪にして、最善の行動。思ったことを包み隠さず全て口にすれば、きっと周りを破壊する。
「でも、貴方（あなた）はその裏側（すがお）を、いとも簡単に見破る。嫌でも、意識的にも無意識的にも、奥の奥のそのまた奥深く、ドロリとした黒く汚いソレを全て見透かす。だから貴方は、ペルソナ崩し、なのよ」
ひどく真面目な顔つきで、姉は僕にそう話した。
「へぇ、そうなのか」
対する僕は、特になにも思わなかった。

そして、今もなんとも思っていない。
反論を許さないほどに的を射た姉の意見だけれど、そんなことは今となっては、今になったからこそどうでもいい。
だって、そんな姉、もういないんだから。

目を瞑ると、僕が僕に言っている。
「お前は、死ぬべきだ」
僕は答える。
「本当、その通りだよ」

・つづく・

序章：ペルソナ有りのまえおき（後書き）

こんにちは、もしくは初めまして。
作者です。
この作品は、以前僕が執筆した「学園マーダーケース」を完全にリニューアルさせた作品であります。なので「学園マーダーケース」とストーリーやキャラクター、トリックが重複したりする場合がございますので、前作を知る方々はそこをご了承くださいませ。
では、「琴吹闇斗のペルソナ崩し」、お楽しみいただけると光栄です。

一章：論理的な琴吹闇斗

世界からこの空間だけ隔離されて、切り取られているような錯覚を受けるくらいに、空虚で暗黒。

その部屋は狭くて、暗かった。

僕が通う中学校は、北校舎と南校舎があり、どちらも四階建てだ。二つの校舎は、渡り廊下によって結ばれている。北校舎側に職員が主に使う駐車場、南校舎側に運動場。正門から見て二つの校舎の奥、つまり西に体育館と柔剣道場。

その部屋は、北校舎の四階にある。

部屋には横びらきの扉が一つだけついていて、その上のプレートには黒のマジックペンで『資料室』と書かれている。

ただ、今は使われていないというのは明白だった。

僕は三年二組の生徒であり、使っている教室があるわけだが、資料室はその教室の半分ほどにも満たなかった。それほどまでに小さい、無意味な部屋。

北校舎の四階は、不要な階と呼ばれていた。何故なら、そこにある部屋・教室には今使われているものはただ一つとしてなかったのだ。

誰も来ない。来る必要がない。それがこの階。そして、その階の奥にあり、存在すら誰も知らないであろう資料室。

しかしそこに、僕は連れてこられた。

下校時刻になり、どの部活にも所属していない僕はすぐに帰ろうとした。しかし、その僕の腕をものすごい力で掴んだのが、同じクラスの須藤（すどう）だったわけである。

扉と向かいあうかたちで窓がひとつあり、黒いカーテンの隙間から、細く光が差し込んでいる。

僕が須藤によってこの部屋に連れてこられるのは、これで六回目であった。

「何度も言ってんだろ。お前……気持ち悪いんだよ」
この部屋に来るたびに聞かされている台詞（セリフ）を、やはりいつも通り、須藤は吐き捨てるように言った。
「へぇ」
僕は特に須藤に恐怖を感じていない。感じても感じなくても、結末にさほど変わりはないのだから、感じるだけ無駄だ。とても論理的、いたって簡単（イージー）。
僕の態度が気に入らなかったのだろう、須藤は舌打ちをすると、突然僕の右頬を思い切り、殴った。

ドガアンッ

入って左手に位置する掃除ロッカーに、僕は背中を打ち付けた。頬がズキズキと痛む。
「オレはお前のことがすっげぇムカツクんだよ」
だから殴るのだろうか。あまり論理的とは言えない。動機がただの感情だなんて、下らない。
ここのところ毎日これだ。僕はいい加減うんざりしていたし、日に日に増える傷口を他人に気付かれずに生活するのにも苦労している。
須藤威（すどうたける）の名前を知らない人間は、このあたりではあまりいない。
理由は簡単で、須藤がとても気性の荒い不良だからだ。タバコを吸って飲酒していれば不良というわけではない。もちろん須藤はそれもあるが、他の面でもことごとく悪いのだ。
まず、イジメ。これは今僕が受けているという解釈で問題ない。イジメといっても、複数でではなく、あくまで須藤一人に。だって、須藤の仲間といえば、この町のヤクザや、須藤同様不良と他称される高校生達だけなので、この学校に須藤の仲間なんて存在していない。
ただそんな須藤は、おそらく皆にとって脅威だ。

須藤のイジメというのは、ただ単に暴力だ。暴力しかない。教員に相談したところで、一応須藤は説教を受けるだろうが、反省するどころか、さらに暴力が悪化する。

過去に須藤の過激なイジメによって登校拒否になってしまった生徒、七人。自殺した生徒、一人。

そして、過去に須藤の過激なイジメを受けて、今現在普通に生活している生徒、〇人。

とにかく短気で、気に入らないことがあると教師ですらも殴る暴れ者だ。先程の教師が説教どうのこうのというのも昔の話で、今では教師すらも須藤と関わろうとはしなくなっていた。

高校生でも、中には須藤に頭を下げる奴もいるらしい。

とにかく、家に引きこもる・引っ越す・死ぬ以外に須藤から逃れることはできない。

ただ、僕はそうしようとは思っていない。だいいち、過去にイジメを受けていた娘を持つ両親は、イジメと聞くと過剰反応を起こす。だから僕は、事実を隠しているし、客観的に見ればこれが一番論理的だと信じている。

「お前さ、ちょっと頭がいいからって調子に乗って、ほんとうんざりなんだよなァ。だってよ、教師もこの学年の奴らも、全員お前を“天才”だの何だのって言いやがる。それ聞いてると、マジで頭にくんだ……よッ！」

ドガッ！

「がッ……」

僕は腹を膝蹴りされて、背中を掃除ロッカーにつけたまま、ズルズルとずり落ちて、その場でうずくまった。その僕は須藤は見下ろし、不気味で気持ち悪い笑みを浮かべている。

部屋は、意外と埃っぽくはなかった。ただ、床はプリントだの本だの、花瓶や置物だので散らかっている。

「つまりよ、オレはお前に、学校来んなっつってんだよ。分かるよ

な？」

僕は髪の毛を掴まれ、強制的に立ち上がらされた。

須藤の方こそ、何故学校に来ているのだろう。とても質問したいが、事態の悪化を招きそうなので、やめておく。

僕がなかなか答えないのが気に入らなかったのか、やはり須藤は僕の顔面を殴った。

「ぐッ……かはっ、けほ、けほ」

僕はしばし呼吸が困難になったが、その僕に須藤は容赦なく蹴りを浴びせかけてきた。

ドガッ、バキッ、ドゴッ、ガキッ、ドガドガ、バゴンッ、メキッ、ドッ――

それは、とても長い時間続いた。体のあちこちが痛くて、痛みから涙が出てきた。

ただ、僕はやはり明日からも学校に来る。須藤の暴力は、痛いだけで恐くも怖くもない。だいいち、僕は“こわい”なんて感情を抱くことはない。

痛みはじきに過ぎ去るものだし、悲観することもない。鼻血も出てきたが、それもじきに止まるものなので、焦ることもない。

その僕を、須藤は時に罵り、時に笑って、蹴り続けた。

「がッ……グっ……あァ！　ぐはっ……うッ！」

「ハッ、ざまァねぇな、秀才さんよォ？」

顔面を、思い切り踏みつけられる。

「ぐうぅぅぅぅ……」

先程述べた須藤から逃れる方法、引きこもり・転校・自殺。ただそれ以外に、決定的に須藤から逃れる方法が一つ存在している。でも、それをやるのは面倒だ。

今日も血を吐くまで続きそうだ。

と、痛みで朦朧（もうろう）する中で、須藤のこんな声が聞こえてきた。

「そういや、お前の姉もイジメで自殺したんだってなァ？　ハッ、姉弟そろってイジメられっ子ってかァ？　にしても、イジメで自殺とは……くハッ」

須藤は醜く汚い満面の笑みを浮かべながら、僕に顔を近づけて、言った。

「バカじゃねぇか？　ソイツ」

――ピクッ

馬鹿、莫迦、バカ、ばか、バか、馬迦、莫鹿、ばカ、馬か、ば鹿？　ばぁカ？　バあカだって？

僕は、ふらふらと、立ち上がった。

「ア？」

須藤はそんな僕を、怪訝そうに見た。

「……るよ」

「ハ、何か言ったか？」

ああ、言ったさ。

論理的に、殺してやるよ。

「姉さんを、侮辱したな」

「あァ、それがどうした？　イジメで自殺とか、マジで馬鹿だと思うだろ？　だってよ……」

両手を広げて、薄笑いながら言う須藤。

そうか。なら、須藤には死んでもらおう。

「本当は、お前怖いんだろ？」

ぴたり。

須藤の時間が、一瞬、止まった。

ペルソナ崩し。姉は僕をそう呼称していた。

「はァ？　テメェ、何言ってやがんだ？」

「なるほど。この世の中の何もかもが怖いか。裏切られるのが怖くて、拒絶されるのが怖くて、それ故、信じるのが怖いのか。だから、その前に自分から誰をも拒絶する」

「テメェ……」

怒りに顔を歪める須藤。しかし構わず、僕は続ける。

「自分がその程度の弱い人間だと思われるのが嫌だから、自分を強く見せている。はは。不良やヤクザの典型的な思考パターンだな、単純すぎる。本当は叱られたい？　本当はそんな自分に手を差し伸べてもらいたい？」

実に論理的じゃない。

「甘えるなよ」

「……ッ――殺す！　殺してやるぜテメェッ！」

顔を真っ赤にして掴みかかってくる須藤だったが、僕は余裕でよけれた。

面倒なことになったな。

「なんだよ、優しさを求めて仮面を被るお前に、人なんて殺せるのか？」

僕は、足元に落ちていた花瓶を拾った。

その僕を見て、須藤は顔を恐怖に慄(おのの)かせた。

今まで、誰をも恐怖させ、誰をも支配した男のその表情は、無様そのものだった。

「僕にはできるよ。何せ、失うものも得るものもないのだから」

だから、やってもやらなくても同じこと。

僕は、花瓶を、須藤の頭目がけて、思い切り、振り下ろした。

血が飛び散り、須藤はうめき声を上げ、床に倒れた。

その須藤に、僕は馬乗りする。

こんなにも簡単に、立場は逆転する。

「こんなことしちゃったら、最後までやらないとね」

「うわっ、やめろテメェ！」
泣きだす須藤。なんだか哀れに思えてきたが、この男は、今までイジメの対象にしていた生徒達から何度その台詞を言われ、何度無視して、殴り蹴り罵り絶望させたのだろう。

ガッガッガッ――

僕が花瓶を振り下ろすたびに、須藤の頭・顔面からは血が出た。須藤は初めの方は悲鳴をあげながら、必死にやめるよう懇願してきていたが、じきにぐったりしてしまった。だけれど死んでない。僕は何度も花瓶で須藤を殴りつける。何度か叩きつけたところで、花瓶はガシャンと音をたてて割れてしまった。
かすかに息のあった須藤は、よく注意しなければ分からないほどにだが、顔を綻(ほころ)ばせた。
助かる、とでも思ったのだろうか。
「甘えるなって言ってるだろう？」
僕は手を伸ばし、置物を取った。
ずしりと重い置物を、躊躇(ちゅうちょ)も手加減もせずに、そのまま須藤の顔面に向かって、振り下ろした。

ぐしゃり。

「……」
さて、ここからが面倒だ。人殺しなんては生れてはじめてだが、特にどうってことはない、食事を取るくらいに軽くて簡単な行為だった。ただ面倒なのは、食器を洗うよりも、後が大変だということ。
僕は立ちあがって、須藤の死体を見下ろした。
ああ、返り血のせいで、僕の制服が台無しだ。これはどう誤魔化すべきだろう。ふと、外を見る。
「雨か……」

ふむ。なら、トイレで水洗いしても、傘を忘れたと言えば、着て帰れる。

先程まで雨なんて降ってなかったのに。どのくらいの間、僕は須藤を殺していたのだろう。

気付くと、どこからか吹奏楽部のヘタクソな演奏が聞こえてくる。

手を見ると、汗がにじんでいた。ああ、体も汗だくだ。

まさか、緊張していたのか？　この僕が。

「君の決断は正しかった」

突然、声が聞こえてきた。

「！」

僕は、声のしてきた方向を見る。掃除ロッカーが、そこにはあった。

その掃除ロッカーの扉が、ガチャリと内側から開かれた。

「……なッ！」

中から、長い黒髪の少女が出てきた。

「……いつからそこに？」

訊いた直後、僕はハッとなって右手で自分の口を押さえた。

なんて馬鹿なことを訊いているんだ僕はッ……、そんなの、須藤と僕がこの部屋にやってくる前からに決まっているじゃないか。

落ちつけ。僕は気付かれないように、そっと深呼吸をする。

「そんなの、君達がこの部屋にやってくる前からに決まっているだろう」

ほら、やっぱりだ。

ただ、僕は妙な感覚を覚えた。

まるで、ずっと昔からこの少女のことを知っているような……、

いや、きっとこれが初対面だ。雰囲気から推測するに、僕と同じ三

年生だろうか。僕の学年は計百七十二人から成り立っている。知らない顔は多いのだ。この少女、目立たなそうだし。

「ふふふ」

「？」

凍結してしまったかのように無表情だった少女だったが、突然笑いだした。視線の先には、ぐちゃぐちゃに潰されてもはや原型をとどめていない血まみれの顔をさらして死んでいる須藤。

「どうした？」

僕の視線に気づいたらしく、少女は怪訝そうな顔をしてこちらを見た。第一印象の“陶器のように無表情な少女”というのよりは数段マシらしい。

「いや別に、なんで笑ってるのかな、ってね」

「疑問の対象になりうるべきは君だ。どうしてそんなに浮かない顔をしているんだ？」

「それが僕の通常の表情だ」

「ふふふ。そうか、ふむふむ、なるほどね」

しばらく少女は僕のことを面白そうに観察していたが、やがて飽きたのか、再び死体に目を向けた。

「久しぶりだな、死体を見るのは」

「以前に見たことあるのか？」

「ああ、昔はよく見た」

「そう……」

言葉の真偽が分からない。ん、分からない……？

嘘だろ、コイツ、心が何も見えない。どんな人間なんだ、嘘を見抜けない、言動・行動を見ても一向にスタイルが分からない。

ペルソナ崩しとまで言われ、今までの人生で人間の全てを見てきた僕が……ッ

「君、名前は？」

少女のブレザーには、名札がついていなかった。当然、それでは名前を知ることができない。

「名、前？」
少女は不思議そうに首を傾けた。
「名前なんて、なんで興味があるの？　そんなもの、無駄な記号でしかない。君は数学の√（ルート）だのπ（パイ）だのが将来必ず役に立つと考えている？」
「名前は役に立つよ。使うシーンが多いからね」
なんだかこの少女、おかしい。不自然だ。この世にいることが、ぎこちない。
「うーん、君の名前は何と言う？」
名札を見れば分かると思うのだが。
「琴吹闇斗（ことぶきやみと）」
いい名前だと思う。闇は僕そのものなのだから。
「いい名だな」
「うん」
名前を褒められたのは初めてだ。皆僕の名前を知ると、「変な名前」「不気味」「縁起悪そう」などと言う。僕の親がおかしいのではない。この名前を付けたのは、他でもない僕の姉なのだから。
僕が生まれた時、言葉を話せるようになって間もなかったという僕の姉は、僕の顔を見た瞬間「やみと！　やみとだ！」と言ったらしい。それで僕の名前を闇斗にした親もどうかとは思うが。
「私は亜由（あゆ）だ。亜鉛の亜の理由で亜由」
「いいね。亜という感じの字源は古代の墓を上から見た形なんだよ」
「知ってる」
名字を名乗ってくれていないが、まぁいい。下の名前で呼べと言うことだろう。
と、少し時間を無駄にしてしまった。何をしているんだ。今重要なのは、名前なんかじゃない。
「ところで亜由、君はこれから、どうするの？　このことを誰かに言うのだろうね？」
だったら、面倒だがこの少女のことも殺さないといけなくなる。

「なんで？」
「え？」
逆に問い返されてしまった。
「私がなんでこのことを他言しないといけないの？」
「いや、しないんだったらいいんだ」
どうも話しにくい子だ。やっぱり普通じゃない。
改めて、観察してみる。
髪は黒く長く、背中の半分ほどまで伸びている。前髪は目の少し上まであり、その下の目ももちろん黒いが、それ以上に暗い。目が光を失っている。
目鼻立ちはとても整っていて、肌は白くて手足は細かったが、弱弱しいという印象は持たない。
神秘的、という言葉が似つかわしいように思える。
顔の潰れた死体と、飛び散る血。この状況をつくりだし、返り血を浴びている僕。こんな光景の中にいて平然としている亜由。僕はそんな彼女に、少し魅(ひ)かれる部分があった。
「死体って、とても美しいと思わない？　全ての人間の到達地点、死という概念。死んだらもう生き返らない。ああ、この人と会話をすることはもうできないんだな。終わり。終了」
どうやら、本当にそう思っているらしい。亜由はなんだか、楽しそうだ。須藤の死体に、何故か羨望の眼差しを向けている。
「僕は思わないよ」
「どうして？」
「死体なんて、醜いだけじゃないか。死に顔って大抵汚いと思わない？　死んだことで、今まで隠してきた汚い本性(うらがわ)が全部出てきたって感じ」
だいいち、死なんて、結局は単純で思索する価値もない。置物で殴ったら須藤が死んだ。はい、これだけ。
「だから美しいんだろう？　普段見ることのできないものを見ることができる。ゾクゾクしない？」

「しないよ」
どうやらこの子、変態だ。
「さて、隠蔽を始めないと」
僕はそう言って、ブレザーを脱いだ。そうすれば、下のYシャツは血を浴びていない。ああ、胸のあたりはYシャツが露出しているので、血がかかっている。ここも水で洗わないとだ。
「ふふふ。ねぇ闇斗」
いきなり呼び捨てか。僕もだけど。
「何？」
僕は次に自分のズボンを見る。馬乗りになっていたので、血がかかっているのは腿のところだけだ。これは濡れ雑巾で拭きとれるかな。ちなみに、僕の学校はジャージで帰ることは禁止されているし、制服を着て帰らないと、“傘がなくて雨にうたれたのでブレザーは濡れています”ということにできない。
「君、隠蔽の仕方分かるの？」
「分からないけど、すぐに考えるよ」
「私が協力してあげよう」
亜由はそう言って僕の目の前まで歩いてくる。亜由は僕より少し背が低いので、必然的に僕を見上げるようにする。
そうして、吐息がかかるほどに顔を近づけて、ふふふと口元だけで小さく微笑んだ。
「……遠慮するよ」
自分でできる。それに、女の子に助けてもらうなんて、みっともない。
「どうして？　私、いい方法を知っている。だいいち、ここにいる時点で私は君の共犯者だ。そんな気はないけれど、やろうと思えばこれを暴露できるのだよ、私は」
「そうしようとするなら、ここで君の首を絞める」
「嘘だね」
「本当だよ」

そんな細い首、簡単に締め上げれる。
「でも、私これでも君に感謝してるんだ。その男には迷惑していたからね」
亜由は、一歩僕から遠ざかってから話しだす。
「この部屋は私がよく利用していたのだが、その男はこの部屋に気付いて以来、毎日のように来るようになってね。廊下から足音が聞こえてくるたびに私は掃除ロッカーに隠れていたのだが、今日君がその男を殺してくれただろう？　だからこれは、少しばかりの恩返しだ」
言っても聞かなそうだし、いらない“貸し”ははやめに返してもらおう。
「じゃあ、協力してくれよ」
「ええ、もちろんだよ。この死体の処分は、私に任せて。君は死体を掃除ロッカーに押し込んで、飛び散った血を雑巾で拭きとって」
「どう死体を処分するの？　信用していいんだろうね？」
「君はだいぶ疑り深い性格をしているようだね」
当然だ。今まで人の仮面の裏をずっと見続けてきたのだから。
「死体を細かく鋸（のこぎり）で切り分けて、学校中のゴミ箱に、紙とかに包んで少しずつ捨てていく。そうすればゴミ処理場で燃やされて、証拠隠滅」
「なるほどね」
それなら問題なさそうだ。面倒な仕事だが、亜由がやってくれるらしいし。
「鋸はこの部屋にあるからね、君は水を汲んだバケツと雑巾を持ってきて、拭くだけだ。あと死体を掃除ロッカーに」
「分かったよ」
すると、亜由は僕の横を通り抜け、窓際にぽつんと置かれた机の後ろにある椅子に腰かけた。どうやら特等席らしい。
僕はさっそく、須藤の死体の両脇に手を入れて、掃除ロッカーまで引きずる。須藤の体はこの短時間で冷え切っていた。死体はとて

も重いので、苦労した。
掃除ロッカーに死体を押し込んで扉をしめると、あとは血だまりの中に須藤の歯や、少し肉片が散らばるだけとなった。花瓶が割れたりもしたし、頬でも落ちたのだろう。あと、髪の毛。
僕はブレザーを片手に持って、資料室から一旦出た。
亜由……、完全に信用したわけではないが、告発される心配はいらなそうだ。
とても不思議な子だ。
僕はその階にあるトイレに入ると、洗面台で蛇口をひねり、ブレザーを洗った。
目の前に、埃にまみれた鏡がある。息を吹きかけて埃を払うと、自分の顔を見ることができた。
「え？」
いつもの僕じゃない。
狂気に満ちている。口元は歪んでいて、目はいつもよりも見開かれていた。血が頬にもついている。
「冗談じゃない。殺人ごときで、僕が興奮だなんて……」
おかしな考えを振り払う。
なんなんだよ。この“殺しに快感を覚えた”ような顔は……ッ！
こんな顔を、僕はあの少女の前でしていたというのか。
僕は顔を洗った。
「はー……はー……」
少し、目が覚めた。どうやら今まで、何かが詰まったようになっていたようだ。まるで夢を見ていたような、幻覚を見ていたような。
どうやら僕は、少なからず殺人という行為に酔っていて、動揺していたらしい。いいだろう、認めてやる。
ただ、これに快感を覚えるなんて、あってはならない。そんなの僕が今まで見てきた汚い人間の裏側そのものだ。自分に対する嫌悪感。
鏡をもう一度見る。いつもの僕の顔だ。ただ、目の奥に何かを潜

ましていた。今まで眠っていた何かが、目覚めたような……

「誰なんだよ、オマエは」

僕は鏡の中の僕にそう言うと、トイレを出た。

ズボンとYシャツの胸元を隠すように、ブレザーを抱える。それが見られるようなことがあっては大変だ。

階段を下り、二階まで行く。僕はバケツと雑巾を、自分の教室に取りに行くつもりだ。三年二組の教室は、南校舎の二階にある。なので、渡り廊下を通らなければいけない。

どこからか聞こえてくる吹奏楽部の演奏と、雨が校舎や地面を叩く音だけが荒涼と聞こえてくるが、それはここは違う世界から聞こえてくるように感じた。渡り廊下に人の姿はなく、ひっそりとひんやりと学校は人の温もりを吸収していく。

変な学校だ。中学一年、入学したての僕がはじめに感じたこと。教師も生徒も、まるで何かに操られているようだ。自分の意思があるようでなく、ないようである。この学校は、明るいようで暗く、暗いようで明るい。まさに矛盾。うやむやな“不確定”が漂う世界。

でも学校なんて社会なんて世界なんて、所詮どこもそんな感じなのかもしれない。全てが表面的、その原因は、誰もが自分を偽っていることに起因する。

変な世界だ。生まれてから常に感じていること。

その時になってやっと、正面から、人が一人歩いてくることに気付いた。馬鹿が。考え事なんてしてるから気付くのが遅かったんだ。

ここで目撃されたのは致命的だったように思う。だって僕は本来、とっくに帰っているはずの帰宅部なのだから。

前から歩いてくる男子生徒は、一応知っている顔であった。

「闇斗じゃないか。どうしたんだ、変な顔して」

「秋元（あきもと）は、写真部で？」

「ああ。ん、そのブレザーびしょ濡れだな。なんでだ？　スプリンクラーでも誤作動したか？」

秋元拓哉（あきもとたくや）。多分、三年一組。写真部に所属していて、去年同じクラスだった。

友達はいるけど親友はいない。それが秋元拓哉の本質をとらえていると思う。

他人を、ある一定のラインよりも自分に近づけない。自分を探らせない。それが彼だ。

クラスメイトと会話をしていても、読書をしていても、歩いていても、生きていても、全て下らない茶番だと考えているのだろう。取るに足りない世の中だと。

心の底は暗くて純粋。

「いや、帰る途中、校門を過ぎたあたりで突然雨が降りだしてきてね、ブレザーを頭にかぶせて、教室に折りたたみ傘を取りに戻って来たんだ」

「そうか。……、じゃあな」

「ああ」

僕達は、すれ違った。

このことは亜由には黙っておこうと思う。自分の失敗を知られるのが、嫌だったからだ。

にしても、亜由はどんな人間なのだろう。あの冷静さ。慣れているみたいだ、死体にも隠蔽にも。

ただ、亜由はこのことを誰かに言ったりはしない。それは、直感的にも本能的にも、楽天的でない考えとして、僕の中で確定していた。

僕は水を半分のところまで汲んだバケツと雑巾を二枚持って、水がこぼれないように気をつけながら、資料室に戻った。途中、人とすれ違うことはなかった。秋元だけだ。

亜由は机の上にノートを広げ、シャープペンシルで何やら書き込んでいた。

「何してんだ？」

僕はバケツを床に置いて、訊く。部屋は血のにおいが充満していて、むせ返りそうだった。
「別に大したものじゃない。ただの日記だ」
「へぇ、そう」
亜由はノートを閉じた。普通の大学ノートだった。
資料室。まず入って左に掃除ロッカー。右側には、何故かダンボール箱が崩れそうなほどに積み上げられていて、たくさんあった。左奥は今亜由が日記を書いていた机と椅子。正面に窓と黒いカーテン。右奥に、大きな本棚が二つ。中には本がびっしりと入っている。
その本棚に、亜由は大学ノートを入れた。
「そのノート、亜由のじゃないの？」
雑巾を水でぬらして、訊く。
亜由は視線を本棚に固定したままで答える。
「私のだ。でもここに置いておくの」
「どうして？」
「ここは私の部屋だからな」
「……どういうこと？」
ミステリアスなことこの上ない。
まさか、この部屋に住んでいるのだろうか。一瞬そんなことを思ってしまった。
「この本棚につまっている本も全て私のだ。家から運び込んだんだよ。家に帰っても仕方がないから、放課後はここにいるようにしているの。昼休みもだけど」
「へぇ」
なぜ家に帰っても仕方ないのか、というのは訊かないでおいた。
それよりも、僕ははやく作業を行った方がいいとも思うし。
「ああ、指紋をつけたのはまずかったかな」
独り言だ。
でも大丈夫だろう。須藤が着ていたのは制服だし、他の生徒の指紋もたくさんついてるだろうし。

僕は雑巾でさっそく血を拭き始めた。ねっとりとした血を、雑巾は吸収していく、それをバケツの中で洗ってしぼってまた拭く。それを繰り返す。

血は広範囲に飛び散っていて、完全にふき取るには時間がかかった。その間、亜由はずっと本を読んでいた。

「ところで亜由って、三年生だよね？」

「ええ」

「何組？」

「あなたは何組なの？」

「二組だけど」

「私は一組よ」

一組というと、先程すれ違った秋元と同じクラスか。

亜由は答えながら不機嫌そうな顔をしていた。あまり自分のことを詮索されたくないようだ。

僕は隠蔽作業を終えた。すると、亜由が口を開いた。

「君、人を殺してみて、どうだった？」

「どうだった、って？」

「人を殺してみて、何を感じる？　罪悪感、快感、解放感、達成感、優越感、劣等感、達成感、嫌悪感、絶望感、安心感。人を殺して感じることは人それぞれなの」

「……」

僕が黙っているのをどうとったのかは知らないが、亜由は話し始めた。

「私は快感と解放感ね。人を殺すと、自分を圧迫していた何かが消えて楽になる解放感が生まれる。それが快感につながるんだ。純粋に人を殺すことに対する楽しみにね」

亜由の口ぶりはまるで、過去に自分も殺人を犯したことがある、というようなものだった。この冷静さも、それなら説明がつく。

亜由は続けた。

「普通人は、人を殺すと罪悪感を覚えるわ。でも中には違う感情を

持つ人間がいる。特に快感を覚える人間、それが私と君なのよ」

「僕は違うよ」

僕は、ひどく冷静に告げた。

「僕は、自分を他人と考えているんだ。だから、特別何か感情を覚えたりはあまりしないし、他人の苦しみを自分の苦しみととらないように、自分の苦しみを苦しみととらない。僕は、常に自分を一歩下がった位置から見るようにしているんだ」

「それにしては、先程のあなたの表情はおかしかった」

「……」

鏡にうつっていたあの自分を思い出す。

薄暗い部屋を、重苦しい雰囲気が支配する。

「ねぇ、花瓶の破片はどうする？」

「そのままにしておいていい。私が片付けておく」

「ありがとう。バケツは？」

「それもそのままでいいわ」

僕は他にやることも見つからなかったので、言った。

「僕、もう帰るよ。今日はありがとうね」

「こちらこそ」

本から視線を外さずに、亜由は言う。黒いカーテンの隙間から差し込む光が、亜由を照らしていた。

僕は扉をあけると、廊下に出た。教室に鞄を取りに行かないとだな、と思った。

「ただいま」

合鍵で扉を開けて、家に入ると、「おかえり」という母さんの声が聞こえてきた。

僕は鞄を玄関に置くと、洗面所で手を洗った。リビングに行くと、キッチンのほうから何かを炒める音が聞こえた。僕が人殺しだと知ったら、母さんはどう思うのだろう、とふと思った。

「シュークリーム買ってきてあるよ」

「おお、ありがと」
僕は冷蔵庫の扉を開けて、シュークリームを取り出した。
「傘忘れたからね、ブレザーびしょ濡れなんだ。洗濯物に出しておいたよ。明日までに脱水かけといて」
「はーい」
シュークリームを食べながら僕は、母さんもだんだんと元気が出てきたみたいでよかった、と思った。
僕には一つ学年が上の姉がいた。
と、僕は亜由が姉に似ている、ということに今になって気付いた。
あの、不思議で不自然で奇妙な存在感。透明だけれど確信をつくような口調。
まぁ、その姉は一年前に消えたのだが。
行方不明。
姉さんになにがあったのか、それは誰も知らない。姉さんはどこかで自殺したのではないか、という考えも当時はあったが、それはないと僕は思う。行方不明になった当時、姉さんはイジメられていたらしい。でも、遺書も何もなしに突然自殺することなんてないと思うし、一年が経った今でも死体が見つからないのはおかしいと思うからだ。でももう姉さんはおそらくこの世にはいないのだろう、それは分かっていた。
姉さんが消えて、僕の家族からは活気が消えてしまった。でも最近では、だんだんとそれも戻ってきたみたいだ。僕もいるのにいつまでもこんなではいけないと両親も思ったのだろう。
だから、僕は須藤にイジメられていることを親達には黙っていた。そんなことを言ったら、両親はおかしくなってしまうのではないかと考えたからだ。
家族の前でも、僕はいつも通りに平然と飄飄（ひょうひょう）と過ごせた。ほら、人殺しなんてこんなものだ。
もしかしたら何かの用で資料室に教師が入るかもしれない。そし

て掃除ロッカーを開けるかもしれない。そういう不安も少しはあったが、でもそれはないだろうと分かっていた。今日に限って、あの部屋に教師が入ることはないだろう。それが論理的というものだ。

夜、自分の部屋の電気を消して、布団に入る。

目を瞑ると、須藤を殺した時の光景が蘇って来た。

倒れてうめき声をあげている須藤。その上に乗って、ひたすら花瓶で須藤を殴っている僕。

僕はどんな顔をしていたのだろう。

自分が分からない。そんなことを感じたのは、生まれてからこれが初めてだった。

次の日は金曜日。晴れだった。

学校へ行く途中、歩いているだけでも汗が全身から滲み出てくる。今は夏。来週からは体育で水泳の授業が始まる。僕達男子がプールに入れるのは水曜になるだろう。

学校に着き、教室に入る。いつも通りの風景だった。皆、友人との会話を楽しんだり、読書をしたりしている。どうやら須藤の死を知る者はいないらしい。

僕は鞄を自分の机の上に置いて、教科書やノートを机の中に入れていく。

「今日は早いね。いつもは遅刻ギリギリに来るのに」

左隣から、声をかけられた。

「だって、遅刻とみなされないなら、間に合うギリギリまで睡眠を取った方が、論理的だろう？　別に早く来てもやることないんだしさ」

左隣に座る女子生徒。吹奏楽部の小町夢羽（こまちむう）。ほとんどの吹奏楽部生徒の演奏はヘタクソだが、夢羽の演奏は素直に上手だと思う。

「じゃあ今日のあなたは論理的じゃない、と？」

「いいや、今日は早く来てもやることがあるんだ」

「あなた、嫌な奴だ」

「ほとんど毎日言うよね、それ」
「だってあなた、嫌な奴だもん」
「はいはい」
僕はクラスメイトとの会話を打ち切り、資料室へと向かった。

なんとなく予想はついていたのだが、資料室では、亜由が机に突っ伏して寝ていた。
すーすーと、小さく呼吸音をたてて寝ている亜由。
窓が開けられていて、カーテンが風に揺られていた。そのおかげもあってか、血のにおいはあまりしない。
「ん……、君、なんでいるんだ？　朝のはずだぞ」
亜由は丁度目覚めたようだ。
「それはこっちの台詞だよ。亜由、なんでここで寝てるの？」
「ああ、朝早く来てね、眠ってしまったようだ」
本当だろうか。
「換気のためにね、窓を開けているんだよ。死体の処理は今日あたりからぼちぼち始めるさ」
「ああ、よろしく」
僕はそう言うと、確認のために掃除ロッカーをあけた。
須藤の死体は、首をカクンとこちらに折って、立っている。
うん、異常なし。
僕は資料室をあとにした。
教室に戻るとチャイムが鳴って、朝のホームルームがはじまった。
担任教師は岡部（おかべ）という体育教師である。
岡部は連絡事項を生徒達に伝えた後、付け加えるように言った。
「昨日、先生に須藤のお母さんから電話があった。話によると、須藤が家に帰らないらしい。前にも何回かあったが、またどっかで遊び歩いてるんだろう。何か知ってる人がいたら、先生に教えてくれ」
クラスメイト達が小声で、「またかよ～」と言うのが聞こえる。
須藤が家に帰らないというのは、今までに何度もあった。無断で

友達の家（高校生の不良仲間とかの）に泊っていたりというのがほとんどであった。だから今回のこともそれだろうと教師達は考えているようだ。

まぁ、行方不明とされるのも時間の問題だろう。なぜなら、彼は二度と帰らないのだから。

休み時間、僕は気になって一組の教室を訪ねた。亜由のことを確認するためだ。僕は彼女に見覚えがなかった。訪ねてみて、僕は驚愕した。念のために、全てのクラスを確かめた。それぞれのクラスの生徒に、亜由という名前と彼女のいでたちを伝えたが、結果は同じだった。

いや、驚愕と言っても、少しは察しがついていた。でも、それは常識では考えられなことだった。

亜由なんて人物は、この学年には存在しなかったのである。

・つづく・

二章：人を呪う小町夢羽１

1◆小町夢羽

私が初めて呪いを使ったのは、小学校五年生の時だった。
私は幼いころから、友達が多くて、皆のリーダー的存在であった。文武両道、つつがなくこなし、周りからは常に羨望の眼差しを受けていた。
しかし、小学校五年生になった時、私の学校の私のクラスに転入生がやってきた。
名前なんてどうでもいいので覚えていないが、とにかくその子は私よりも頭がよく、私よりも運動ができて、私よりも愛嬌があって、私よりも全てで優れていて、いつの間にかクラスメイト達が尊敬するのは私でなくてその子になっていた。
私は皆の前では“誰にでも優しくするいい子”を演じていた。だから私はその転入生とも仲良くしなければならなかった。
でも、本当は嫌だった。なぜこんな奴と仲良くしなきゃいけないんだろう、と常に思っていた。そいつは、私から名誉と地位を全て根こそぎ奪った最悪の、下劣で卑劣で汚らしい、実に憎たらしい女なのだ。
必死に努力した。その子より頭が良くて、その子より運動ができて、その子よりも面白いお話ができたら、皆も私のところに戻ってきてくれる。
でもいつもその子にはとどかない。悔しかった。こんな経験は初めてだったのだ。その転入生と一緒にいる時、皆が声をかけたり「すごいすごい」とはやし立てるのは、私でなくその子なんだ。
殺してやる。
そう思って、私はその子を呪った。
はじめは、冗談だったのである。

藁人形（わらにんぎょう）を作っている時も、我ながら無駄なことをしているなと自嘲ぎみに笑っていた。でも心の底では本気だったのだろう。こっそり抜き取ったその子の髪の毛を藁人形に巻き、釘をうった。やっているうちに楽しくなって、いろんな箇所をうちまくった。最後には藁人形は形を崩し、ボロボロになっていた。

結果、その子は死んだ。朝布団の上で肉の塊となっていたらしい。しかも、体はぐちゃぐちゃになっていて、とても元が人間だとは思えなかったという。

私は全く罪悪感は感じていなかった。ただ、嬉しいと感じていた。その子が死んで、皆は私の元へ戻って来た。再び私は羨望の眼差しを受ける身となったわけだ。

あの日から、私はいろんな人を呪ってきた。でも、殺したのは最初の子だけだ。他の子は、髪の毛を自作藁人形に巻き、手のあたりを強く握ったりした。すると、その子は手を骨折するのだ。私は自分が特別だと気付いていた。私には人を呪う才能があると分かっていた。私は少しでも気に入らない奴は、骨折させたり足を潰したりしてやった。

私の名前は小町夢羽（こまちむう）。現在中学3年生。最も恐れられている不良、須藤威（すどうたける）の恋人だ。

三ヶ月ほど前に威のほうから告白をしてきたのである。不良が彼氏となるとこの周辺でも自分の地位をさらに上げることが可能なため、私はそれを承諾した。

そんな威は現在、行方不明だ。

私の部屋には彼の鞄が置いてある。それは彼が消えた日、木曜日に彼が私に預けていたものである。結局部屋に持って帰ってしまった。教師やクラスメイト達は、彼はどこかをぶらついていると考えているみたいだが、私はそうでないと知っていた。

木曜日。威は「ムカつく奴がいるからちょっとシメてくる。お前はオレの鞄持って校門のとこで待っててくれ。十分くらいで行くと思う」と私に告げていた。彼が今は使われていない資料室で、気に

入らない奴に暴力をふるっているのは、前々から知っていた。私はうなづいて、彼の鞄を持って校門のところで待っていた。

しかし、威は戻らなかった。ずっと待った。一時間は待ったかもしれない。結局、私は彼の鞄を持ったまま家に帰った。前にもこういうことが一度あり、彼は違う門から勝手に帰ったりしていたのだ。彼は自分勝手なところがあり、予測できない行動を起こす人間であった。だからこそ、その時は深く考えなかった。でも、今考えるとひとつの推測がたった。

威は資料室で、彼が暴力をふるっていた奴に、逆に殺されたのではないだろうか。

だったら私のやるべきことは分かっている。真実を確かめ、威を殺した奴を呪う。まぁ、殺すのはなんだから、頭蓋骨損傷とか複雑骨折とか程度にとどめてあげるけど。いや、やっぱり心臓を一突きして殺そうか……。

今日は日曜日。明日は月曜日で学校だ。資料室に行こう。私は威を殺した何者かを呪うための藁人形を部屋で作りながら、そんなことを考えていた。

2

人間は不平等な立場と平等の醜さを持って生まれる。

「なんてね。醜さも平等じゃない」

今日は月曜日だ。

僕は給食袋をぶらさげながら、登校していた。給食袋というのは、給食当番が身につけるエプロンやバンダナなどが入った袋だ。僕は先週の当番だったので、自分の使ったエプロン、バンダナを洗って次の当番に渡さなければならなかった。

外は暑く、じめじめしていた。明日はプール開きだ。といっても入れるのは女子だけで、男子は水曜。明日の体育では、男子はクソ暑い中、ハードル走だ。考えただけで嫌になる。

今日あたり、須藤が行方不明ということになるだろう。いくらなんでも木・金・土・日と帰らないのはおかしい。だが、僕が殺したということはまずバレないだろうし、須藤の死体も見つからないだろう。

「そう、絶対的に完璧。不確定要素なんて微塵(みじん)もない」

僕は先週の金曜の朝と昼休みと放課後、資料室を訪れた。亜由(あゆ)は本を読んでいたり、日記をつけたりしていた。結局僕は、亜由にあのことを確認することができなかった。あのことというのは、「亜由がこの学年に存在しない」ということである。そのことを指摘すると、彼女は豹変して襲いかかってくるのではないか、という考えがあったからだ。それは指摘してはいけないことだというのが、僕には分かっていた。まぁ襲いかかってきたら殺すけど。後始末を一人で、というのは面倒だ。

ただ、亜由が着ているのはこの学校のブレザーに違いなかった。学校の制服がブレザーになったのは二年前のことである。それ以前は、男子は学ラン、女子はセーラー服であった。どうでもいいけど。

家から二十分ほど歩くと、学校についた。教室では生徒達が騒いでいた。いつも通りの光景だが、ただ一つ違う点がある。須藤がいない。それはとても平和なことだった。須藤の消失を悲しむのは彼の親族くらいだろう。

僕はある意味、社会的にも正しいことをしたかもしれない。

死ぬことでやっと人を安心させる人間、それは屑(くず)と呼ばれるべきで、僕もそれ。

「今日は遅いね」

左隣に座って本を読んでいた小町夢羽が話しかけてきた。

「今日の朝はやることないからね。論理的だろう?」

「それ、あなたの口癖なの?」

「まぁね」

夢羽は、病的に几帳面な女子生徒だ。

結構可愛い方で、僕好みだけど、どうやら向こうは僕を嫌ってい

るらしい。なら話しかけないでほしい。

艶(つや)やかな黒髪は肩のところで切りそろえられており、くくったりはされていない。慎重は特別低くも高くもなくて平均的。うちの黒いブレザーと黒いスカートがよく似合う。そういえば、亜由も似合っていたな。亜由はなんかブレザーと一体となったと表現すべきほどに溶け込んでいた。

夢羽は知的そうな顔をしていて、口調はクールだった（僕に対してだけ。つまり他のクラスメイトと話す時は、楽しそうにキャピキャピ話してる。だから僕に話しかけるなって）。

「論理的、って嫌な言葉。それに無意味で不毛な言葉だよ」

「どうして？」

僕は教科書類を鞄から出しながら、適当に会話を成立させていく。

「生物に感情がある限り、論理なんて覆されるだけだからよ。ロボット相手ならまだしも、人間相手にそんなもの、暇つぶしにもならない。チェスとかでも論理的思考なんて崩されるだけでしょう？あれは一手も二手も三手も相手(にんげん)の先を読むものなんだから。単なる気まぐれで相手は戦術を崩したりできる」

「そうかな？」

よく分からなかった。チェスこそ論理的に戦略をあやつる人間が勝つだろう。

「そうよ。論理なんて無駄なこと考えないで、相手の裏の裏の裏をかくことだけに専念するの」

「それは一回裏をかいただけと何も変わらないね」

「じゃあ裏の裏をかくのは何も考えないのと同じ？　違うでしょう？」

さっきから、何の話をしていたんだっけ。

まぁいいや。お互いにとってもただの時間つぶしだし、そもそも会話なんて繕(つくろ)うものだ。

「要するに、論理的なんて下らない格好付けの言葉ってこと。あなたにはお似合いね」

「そりゃどうも」
直後、チャイムが鳴って担任岡田登場。
話を聞くところによると、どうやら須藤の行方不明を、やっと本格的に考え出したらしい。

昼休み。
僕は資料室を訪れた。
死体のにおいをにがすため、掃除ロッカーと、窓が開けられている。掃除ロッカーの中には、須藤の死体がたたずんでいた。頭(こうべ)を垂れていて表情は見えないが、きっと顔はぐちゃぐちゃで血肉しか見えないだろう。
「君、もしかしてここを訪れるのを習慣化させようとしている？」
「須藤の死体が完全に処分されるまではね。まだはじめてないの？解体」
「腐敗の様子を観察したい。とても興味がある」
「そう」
悪趣味め。
資料室にある亜由の本の内容は、ほとんどが暗かったり、残酷だったりするものばかりだった。小説ではノワールやホラー、サスペンスなど。中には、殺人の仕方などが丁寧にのっている不気味な本もあったし、おかしな儀式のやり方が書いてあるものもあった。一体、どこにこんなものが売っているのだろう。
亜由が日記をつけている大学ノートを棚から抜き取ろうとすると、いつの間に背後に回っていたのか彼女が僕の手を掴んだ。
「絶対見るな」
亜由の口調は静かだったが、同時に氷のように冷たく、背筋が凍る思いをした。
「分かったよ」
僕はそう言うと、大学ノートから手を離した。
亜由はまた窓際の椅子に座り、本を読みだした。

僕は窓から身を乗り出して、外の景色を眺めた。心地よい風が僕の頬を優しく撫でる。

向かい側に南校舎があり、下は昇降口(しょうこうぐち)があり、花壇には花が植えられている。

「人を殺すのって簡単だと思わない？」

突然耳元で亜由の囁く声がしたかと思ったら、突然僕は背中を押された。

「――ッ！？」

不意打ちだ。何の前触れもなしに、いきなりの行動だ。

当然僕は、窓の外側に体を押し出され、重心のバランスが崩れ、頭から地面へ、下へ、落下――

「うッ」

するとこれも突然、今度は後ろに抱きとめられるようなかたちで押し戻された。一度落ちそうになったが、再び資料室に戻ってこれた、といった感じだ。

「ほらね、私が助けてなかったら、君は死んでいた」

僕の体に細い両腕をまわしたままの状態で、亜由は言った。首筋に吐息がかかって、ビクッとした。

「……」

僕が何も言えずに黙っていると、亜由はくすりと笑って、僕から離れた。

「死にたくないんでしょう？　だったら軽率な行動はとらないほうがいいわ。人なんてほら、信用できないものだし。四面楚歌(しめんそか)なんて現代社会を揶揄(やゆ)した四字熟語でしょ？」

「そうだね」

でも、亜由の言葉には間違いがある。

死にたくない？　逆さ。僕は早いうちに死にたい。ただ、保険として、一応として、「どうせいつでも死ねるから」ってことで生きてるだけだ。いや、動いているだけで生きてはいないかもしれない。

さっき転落しそうになった時、亜由が僕を資料室内に引き戻した

直前、僕は、ホッとしていたのさ。

言わないけれど。

それにしても、言うことやること全て姉にそっくりだ。そういや姉も、亜由のようにおかしな儀式の書いてある本や、ノワール、サスペンスなどの暗く、残酷な話が好きだった。僕も姉さんにいろいろな事を聞かされたものだ。亜由と一緒にいると、死んだ姉さんに会っているような錯覚に陥ることもある。

そこまで考えた時だった。亜由はいきなり席から立つと、窓と掃除ロッカーをしめて、僕の手を掴んだ。

「どうした?」と訊くと、彼女は人差し指を自分の口元にあてた。

亜由は僕の手を掴んだまま、積み上げられたダンボール箱の裏に身を隠した。続いて僕もダンボール箱の裏で身を縮める。亜由はダンボール箱を動かして自分達を囲うようにした。僕も協力した。

現在、背中は本棚の側面にあてられており、左に亜由と壁、前と右は段ボールに囲まれているかたちとなっている。五つほどダンボール箱はそれぞれ積み上げられており、膝をかかえて座っている僕らの体はすっかり隠されていた。

なぜ隠れたのかということはすぐに分かった。廊下から、足音が聞こえてくる。それはこちらに近づいてきていた。次の瞬間、扉がガラガラと開く音がした。

普通だったら心臓がバクバクと音をたてて暴れ出し、汗が滲み、体が震えだしてとめられなくなるのだろうが、生憎僕は普通じゃないし、この状況を冷静に思考していた。

この部屋に誰かが訪れることなんて、あり得ないはずだ。須藤も死んで、この部屋の鍵が壊れていて出入り可能だということを知っているのは僕と亜由だけなのだから。須藤に前にイジメられていた奴らは死んでいるか登校拒否。

だとすると、たまたま誰かが入って来たか?

ダンボール箱とダンボール箱の隙間から、入ってきた人間の姿が見える。

「！」

思わず、あっと声をあげそうになった。この僕がだ。冷静を取り柄としている僕が驚く事態。その人物。

小町夢羽が、そこにいた。

僕の左隣の席に座っている吹奏楽部の女子生徒。

入って来たのがよく知る少女だった、というだけで僕が狼狽しているわけがない。

夢羽と須藤が交際しているというのは、学年中知る人ぞ知る事であった。

そんな夢羽がここに来たことが、偶然だとは思えない。つまり僕はこう考えた。

夢羽は、須藤を探しに来たのではないか。

僕は思考する。掃除ロッカーをあけられたら、須藤の死体が発見されることになる。このダンボール箱だって外から見たら不自然だろう。もしどかされたら、僕と亜由が発見される。どうすればいい？　須藤のことも僕らのことも発見せずに、そのまま帰ってくれるのが一番望ましい。でも、そんなにうまくいくわけない。そんなご都合主義的展開、現実にあるわけない。実に論理的でない。

「もっとこっち……」

そんなふうなことを、隣の亜美は口の動きだけで伝えて、僕の腕を掴むと、自分のほうへと引き寄せる。

僕は仕方なく、体を亜美に密着させる。ちょっと暑いよ、冬だったら暖を取れるが。

隙間から、夢羽の姿を確認することができなくなる。こちらに近づいてきているのではないだろうか。そんな考えが頭をよぎる。

ギィィ……

「！」

この音は、掃除ロッカーが開けられる音だ。

「きゃっ！？」
夢羽の小さな叫び声が聞こえた。続いて、夢羽が尻もちをつく音。
「畜生……」
呟いた。バレてしまった。完全に見つかった、須藤の死体が。
亜由が、僕の頬をつついてきた。何だろうと思って亜由を向くと、亜由は目だけでこう伝えていた。

殺せ。

「……」
さぁ、どうしよう。いよいよ困った。亜由も、腐敗観察だなんて気持ち悪いこと言わないで、さっさと処理すりゃいいものを。心の中で罵倒する。全然協力になんてなってねぇじゃねぇか、ふざけんな、お前が処理するって言うから任せたのによ、畜生……
おっと、こんなの論理的じゃない。
どうすればいいんだ。
隙間からのぞくと、夢羽が地面を這いずりまわっていた。
何をしているんだ？
隣から、強烈な視線を感じる。見ると、案の定亜由が僕を睨んでいた。身長の差が問題なのだろうが、そんな上目遣いに睨まれても、へぇ可愛いなぁ、としか思わないよ。ああ、言ったら殴られ……いや、亜由だったらナイフで刺してきそうだった。
にしても、殺す？　どうやって？
あの時はたまたま偶然近くに花瓶があったわけだし、置物があったわけだし、そんで今はない。
それにあの時は姉の名前を出されて、僕の中で“論理的”が逆さまになっていたんだ。人殺しなんて、すればするほど身の破綻を招く。
いつも通りの冷静な僕が「これ以上殺すのはまずい。嘘がふくらんでいくように、人を殺すのが続くことになるぞ。下手なことはし

ないほうがいい」と言っている。
あれ、僕はこんなにも自分を大事にしていたっけ。自分を他人と見ているだなんて格好つけたけれど。
今一番恐れなければいけないのは、夢羽が職員でも友達でも警察でも、とにかく誰かにこのことを話すということだ。須藤の死体が発見されると、まずい。いや、でも須藤の死体が発見されても、僕が犯人だとは分からないのではないだろうか？　僕は頭をフル回転させていた。一番いい選択は何だ？　一番いい決断は何だ？　何をするべきなんだ？　何をしなければならないんだ？　何をしてはならないんだ？　何なんだ？　僕は結局何なんだ？
疑問符の旋回。混乱。焦り。焦って焦って焦った上に焦った。ジワジワと、不安と恐怖が僕を押しつぶそうとしてくる。
何なんだよ、僕は。さっきまで自分は冷静だとか普通じゃないとか論理的だとか、なのに今焦ってて、意味が分からない。感情のコントロールができないのか？
夢羽が立ちあがるのが分かった。夢羽が、部屋を出ていってしまう。待て待て待て待て、考える時間が少なすぎるだろ。
今考えをまとめてるんだよ。殺した場合、始末が必要。あ、そういや今は昼休み。今夢羽が消えたら、夢羽は学校で死んだということになるわけで……じゃあ何もしない場合、きっと事は露見して、須藤の死体は発見される。それだけでは僕が犯人だとは、でも、あれ、じゃあ、おいおい――

バタン。

「……」
資料室の扉が、閉められた。
廊下を歩いていく夢羽の足音が、遠のいて遠のいて遠のいて、聞こえなくなった。

「何をしているんだ、君は？」
僕と体の側面を密着させている亜由が、僕の顔を覗き込んだ。
「勝手に殺したり、促したら殺さなかったり。君はよく分からない奴だな。今のは――」
つん。
亜由は人差し指の先、ツメを僕の額に押しつけてきた。
「誤った決断だったよ」
亜由は立ちあがって、ダンボール箱を押しのけると、いつもの席についた。
「……くッ」
反論すらねぇや。
重苦しい空気（そう感じているのは僕だけかもしれないが）。
仕方ない。教室に戻ろう。
「亜由、僕帰るよ」
「君のせいでこの部屋のことがバレてしまうかもしれないじゃないか。まぁ全て終わったことだ。どうしようもない、バイバイ臆病者（チキン）さん」
「……」
その通り。とんだ愚か者だよ、僕は。

教室に帰りながら、考える。
夢羽が誰かに言ったら、須藤の死体が見つかる。警察も殺人事件と見て捜査を始める。犯人が僕だという証拠はあるだろうか？　バレたらアウト。僕の今後の人生はすべて崩れ落ちることになる。
犯人が僕だと分かるかどうか。僕が思いだしているのは、秋元拓哉（あきもとたくや）のことだった。僕はあの日、教室にバケツを取りに行った時に秋元に目撃されている。帰宅部の僕があそこにいるのはおかしい。この証言によって、僕に疑いがかかるのではないだろうか。
「……ん？」
なら、須藤の死体をどこかに隠せばいいじゃないか。別の場所に。

「……いや」

そんなの時間稼ぎじゃないか。とにかく、資料室に須藤の死体があったという証言が伝われば、須藤は学校内で殺されたこととなる。そうすると秋元の証言一つで僕は立派な容疑者。

とにかく、どうしようにもどうにもできない。

第一、もうこの時点で夢羽を殺すことはできない。夢羽が一人になる機会など、もうないだろう。下校中、と言ってもまわりは住宅街だし。

「……まずいな」

そう呟きながら、僕は教室に戻って来た。

夢羽は自分の席についていて、その右側の自分の席に、僕はつく。隣では夢羽が、シャープペンシルの芯の入れ替えを熱心にしている。

さて、本当にどうしよう。どこかへ呼び出して殺そうか。でも、あんな死体見た後で、そんなことを言ってくる奴がいたら、夢羽はきっと疑う。

「はぁ……」

我ながら、とても危険な状況だ。

別に警察にバレても、僕はまだ未成年なので大きな罰を受けることはないし、遠くへ引越せばうしろ指を指されることもない。でも、きっと両親にショックを与えることになる。それに、自分としても、順調にきている人生を狂わせることはしたくなかった。

横目で夢羽を観察する。彼女はこちらに見向きもしない。どうやら僕が犯人だとは分かっていないようだ。いや、これだけで決めつけるのは論理的でない。

だが、この様子だとまだ誰かに言っている、ということはなさそうだ。

そういや、夢羽は最近吹奏楽部を時々サボッているらしいが、それは須藤と付き合っていたことが影響しているだろうから、今日あたりからまた部活に専念するつもりかもしれない。

その時、夢羽は何かを思い出したかのように、口を半開きにして前を向くと、椅子から立ち上がった。そのまま彼女は、席について読書をしている女子生徒に後ろから抱きついた。女子生徒は驚いて振り返る。別に女子同士のスキンシップは珍しいことでもない。廊下でも皆やっている。みる度に思うよ、気持ち悪いなぁ、よそでやってくれないかなぁ、ってね。

読書をしていた女子生徒、というのは山越文子（やまこしふみこ）という名前の、確か……吹奏楽部である。夢羽は山越の頭に手を置いたまま、何やら話している。

「文子、最近フルート上手だよねー。私がサボリ気味の間に、抜かされちゃったかも」

それはお前が悪い。

「え、そんなことないよ。夢羽がやっぱり、一番上手なんじゃ……ないかな？」

「そお？」

「うん。私も今頑張って練習してるけど……」

文子は内心、夢羽のことが嫌なんだろう。というか、嫌なのだ。頑張って練習してる私のほうが、もう夢羽よりも上手。なのに、なんで夢羽はサボッてばっかのくせに、自分が一番だと思って……悔しい悔しい……

大方、こんな感じかな？　簡単なペルソナだ。

「やぁ、何をぼーっとしてるんだい？」

背中を突然ばしんと叩かれた。振り返ってみると、同じクラスの琴音（ことね）が立っていた。この髪型だから、琴音の方だろう。

「僕がぼーっとしてるのはいつものことだよ」

「あは、それはその通り。闇斗は自分をよく理解しているね。僕とは大違いだ」

琴音は女子なのだが、一人称は「僕」である。

「理解なんてしてないよ。知ってるだけだ」

「あは、なるほどね。うんうん、理解と認識は別物だ。相変わらず

闇斗の言葉は核心をついているな」
「きどって格好付けているだけだよ」
「うんうん、素直なのはいいことさ。まぁ、いいや。君がいつになく思いつめたような顔をしているから、恋の悩みかと思ってね」
そんなわけねぇだろ。
「ま、君に限ってそんなことは悲しいことに絶対にないから、一体何を考えているのだろうと気になったのさ。悩みがあるなら僕に相談してくれよ。疲れているんじゃないのかい？　君の生き方は矛盾だらけだからね」
言って、颯爽と去って行く琴音。結局、何だったんだろう。あの子はあの子で心の底は歪んでるのだが。
見ると、夢羽は文子のもとから戻って、シャープペンシルを自分の筆箱の中にしまっていた。
“なんでも完璧にしようとする”夢羽は病的なほど几帳面だ。今芯の入れ替えをしていたシャープペンシルを見ても、それは分かる。芯を入れるところについている消しゴムがいっさい使われていない。きっと何かこだわりがあるのだろう。机の上には消しカスひとつないし、筆箱を見ると中もきれいに整理されている。机の左はじに、次の授業で使う教科書とノートがきれいに重ねられている。
「ん、何？」
僕の視線に夢羽はやっと気付く。
「いや、なんでもないよ」
「そう。なら見ないでくれる？」
「そのつもりだよ」
まったく、嫌な女だ。

放課後、僕は資料室には行かなかった。浅野を殺せなかった僕に亜由は怒っていたようだったので、気まずかったからだ。
家に帰ると、母さんは買い物に行っているらしく、誰もいなかった。鍵を使って家に入る。僕は手を洗うと、二階にある自分の部屋

に向かった。僕の部屋の隣に、姉さんの部屋がある。
僕は姉さんの部屋に入った。電気をつける。真正面に机。右にベッド。左に本棚。見ると、本棚には本がほとんどなかった。おかしいな。前は亜由が持っているような不気味な本がずらりと並んでいたのに。
姉さんの部屋には、アイドルのポスターも貼られてなくて、女子中学生の部屋だとはとても思えない。
姉さんの机は薄く埃をかぶっている。机には引き出しが三段ついていて、1番上の引き出しには鍵がかかるようになっている。引いてみると、やはり鍵がかかっているようで、開かない。一つ下の引き出しを開けると、シャープペンシルや鉛筆が入っていた。ノートも入っている。大学ノート。亜由が日記をつけている大学ノートと種類が同じだ。
僕は部屋から出た。自分の部屋に入ると、鞄を机の上に放り投げて、ベッドに倒れこんだ。
浅野はどう行動するのだろう。亜由の言うように、浅野には死んでもらうのが一番いい。誰かに須藤の死体のことを言う前に。でもそれももう遅いかもしれない。
死体が見つかっても、僕が犯人だとは分からないだろう。証拠はないはずだ。僕に疑いがかかる可能性はある。僕が一番恐れているのは、秋元が証言することだ。あの時間に僕を目撃した、それだけで僕は十分な容疑者になるように思える。ああ、これ言うの何度目だろう。何を考えても、結局秋元のところへ思考はループしてしまう。
「もうおしまいだな」
どうしたらいいか分からない。というか僕は生れてからずっと、何一つ分かっていない。ああ、意味分からないこと言ってるな、僕。
「どうでもいいや。どうせ」
どうせ、自分も他人さ。

次の日も晴れだった。
汗をかきながらなんとか学校につく。
教室にはいつも通りの光景が広がっていた。暴れ者の須藤がいなくなったので、クラスメイトも教師達も内心喜んでいることだろう。
鞄を自分の席に置く。隣に座って本を読んでいる浅野が、僕を見ていた。僕が浅野のほうを向くと、彼女は目をそむけた。また僕が目をそらすと、彼女は僕のほうを横目でちらちらと見てくる。どうしたことだろう。昨日は僕のことを気にかけてなかったのに。
僕は教室の入り口が騒がしいことに気付いた。見ると、文子が女子達に囲まれていた。文子は右腕にギブスをつけていた。どうしたのだろう。
「山越、右腕骨折だってさ」
後ろから声がした。振り返ると、同じクラスの男子が二人立っていた。
「骨折？」
「ああ。昨日吹奏楽部の途中でいきなり、腕が痛いって言いだしたみたいでさ。病院行ったら骨折だったんだって。さっき廊下で聞いたんだけどな」
「へぇ」
僕は驚いた。同じような話を、以前にも何回か聞いたことがあったからだ。
「なんで吹奏楽部で怪我する奴多いんだろうな。右手骨折で、今度のコンクールに山越は出られないみたいだぜ。残念だろうな、アイツ頑張ってたみたいだし」
「前は誰だったっけ？」
「二宮（にのみや）だよ。４組の。アイツもドラム順調だったのにな」
僕はもう一度文子を見た。突然骨折っていうのはどういうことだ？　疲労骨折というやつだろうか。
気になって隣の夢羽を見ると、彼女は口元を綻ばせていた。
嬉しそうに、笑っていたのだ。

四時間目の授業が終わった時だった。
突然、左側から髪の毛を引っ張られた。
「痛いっ！」
僕は小さく声をあげると、髪の毛を引っ張っている隣の生徒を見た。夢羽だ。夢羽の机の上にはノートと教科書、筆記用具がそのままの状態になっている。
「何？」
「少し、お話しようよ」
「……？　まぁ、いいけど」
なんであんな強く髪を引っ張ったのだろう。やっぱり僕のこと嫌いなのだろうか。
「単刀直入に言ってね、私があなたが大嫌いなの」
「なんで？」
「あなたって、欲がないじゃない。ダラダラと、仕方なく、意味もなく生きてるって感じ。何の欲もないから、何も作らず、誰も愛さず、何もしない。本当に、何もしない。全ての欲が弱い」
「無“欲”は強いよ」
「うるさい。そんな言葉遊びをしようって言ってるんじゃないの」
「そう」
いきなり改まって、何なのだろう。嫌いなら話さなけりゃいいだろ。どうも苦手だよ、こういう人間。だいいち、意味があって生きてる人間なんているのか？
「とにもかくにも、あなたって見てて凄いムカつく。威があなたをイジメてたってのも頷けるし、むしろ私から率先してイジメてあげたいぐらい」
なるほど。この会話、僕に探りを入れているのか。
「悪いけれど、僕は須藤にイジメられたことはないよ。何の話をしているの？」
「んー？」

夢羽は、僕の顔をじっと見つめてくる。探るように、観察するように、なんだよ、人の内側を覗くのは僕の役回りだろう。
「ポーカーフェイス発見」
そう言って僕を指さしてくる夢羽。
僕は肩をすくめて見せた。
「もういいかな？　僕、手洗ってきたいんだけど」
「なーんか、さっきから反応がぎこちないね」
「……ッ！」
一瞬反応してしまったことが、大失敗であった。
僕の演技はやはりどこかぎこちなかったのだろうか、と、反応してしまったことが、不覚であった。
ニヤリ。夢羽が嗤（わら）う。
「先週の木曜日の放課後、何してた？」
ドクン。
心臓が音をたてた。
ネットリとした汗が、全身から溢れだす。
畜生、何をしているんだ、僕はッ。冷静になれよ。たった一回の失敗で、動揺してるんじゃねぇ。それこそ相手の思う壺じゃねぇのか。
「べ、別に、そのまま家に帰ったさ」
「へぇ？」
ニヤリ。三日月のかたちに、夢羽の口元が歪む。
「！」
負けた。こんなところにこれ以上いたら駄目だ。
「じゃあ、もういいかな？」
僕は言って、夢羽に背を向けた。
ベランダに出て、水道の蛇口をひねって、顔を洗う。
僕があの手の駆け引きに負けるなんて……。
屈辱（くつじょく）で屈辱で……
「屈辱だ」

そのまま給食の時間になり、僕は自分の給食をとりにいった。
教室の前で、給食当番達が皆に給食を配っている。僕のお盆にスープをのせたのは、給食当番である夢羽だった。
僕は俯いて、目を合わせないようにした。
「はぁ……」
僕は溜息をついた。
夢羽に、誰かに須藤の死体のことを話している様子はない。それは幸運だったが、これではあまりにも自分が惨めだった。こんなのが続いたら、僕の精神は、二日ともたない。
「どうにも論理的じゃない」

昼休みになって、僕は亜由のところに向かった。
亜由に今後どうしたらいいか意見を訊こうと思っているが、どうせ「殺せ」としか言わないだろう。
「論理的じゃない」
それなら、警察に自首したほうがマシだ。殺しなんて、やればやるほど自分の首をしめることになる。
もっとも――
「完璧にバレないなら、それが最良の選択だけれど」
それも、僕のような人の死をどうにも思わない人間には。
姉の死は今でもひきづっているけれど……。
資料室の扉を開けると、亜由は僕を見てニヤリと笑った。夢羽のようにシニカルではなく、悪戯思いついちゃったって感じの笑み。
「何だ、その顔。何か楽しいことでもあったのか？」
「その通り。君、今日の朝来てくれないんだもの。これからは毎朝来てくれよ」
「気が向いたらね」
亜由は読んでいた本を閉じて、立ち上がる。
亜由はとことこと、掃除ロッカーに向かって歩く。やはりかすかに血のにおいがする。

「こんなの初めて見たわ」
そう言って、扉を開ける亜由。
「ん？」
そこにあった須藤の死体に、僕は違和感を覚え、それは確信へと変わる。
「何？　その胸の穴」
須藤の左胸に、野球ボールくらいの大きさの、綺麗な穴が開いていたのだ。そこから、中身が下に落ち、赤黒い酸化した血液が流れ出て固まっている。
「今から言うのは私の考え。でも絶対、正解」
亜由はそう前置きしてから、少しの間を持たせて、言った。
「呪いよ」

・つづく・

二章：人を呪う小町夢羽２

1

さて、自分について、考えてみる。

僕はきっと、自分すらも偽っているんだ。冷静で何の感情もなく全てに興味がないという存在を、他人にも自分にも演じている。

だから、時々本当の自分がでてくると、僕は戸惑う。お前は僕なのか、と。

自分が弱くて周りの凡人達と何にも変わらないつまらない人間だと、自分でも思いたくない。

ただ、それだけの話。

そしてそんな僕は今資料室にて、亜由の言動に思わず訊き返してしまった。

「呪い？」

全く、どうしようもなく、理解に苦しむ、意味の分からない言動だった。

「ええ」

さも当然のことのように頷く亜由。

「丑の刻参り、っていったほうが分かりやすいかしら」

前に聞いたことがある。確か、夜中の二時頃に神社の神木で藁人形に釘を打ち付けるのだ。藁人形には誰かの髪の毛を結ぶ、もしくは編み込んでおく。するとその誰かは死ぬ。

僕はそれを亜由に言う。

「よく知ってるわね」

実はこれは姉に教えてもらったこと。

「その通りよ。おそらく誰かがそれと同じようなことをしたの。須藤の髪の毛をつかってね」

「その誰かってのは？」
「分かるでしょう？　昨日この部屋に来た女よ」
そういえば、夢羽は床を這っていた。あれは髪の毛を拾っていたのか。
「あの子、須藤の彼女らしいじゃない？」
「うん、そうみたいだね」
「あの子は須藤を殺した犯人を呪い殺そうとした。そしてこの部屋で髪の毛を入手したのね。なぜそれで須藤がこうなったのか。それは拾ったのが須藤の髪の毛だったからよ。あの子は長髪でしょ？　だから自分の髪の毛を間違って拾って自分が死なないように、短い髪の毛を拾ったの。私も長髪。すると君か須藤かでしょ？　あなたは運がよかったわけね」
なるほど。じゃあ拾っていたのが僕の髪の毛だったら、今頃僕は死んでいたわけか。考えると、ゾッとした。
「でも、丑の刻参りだってどうして分かるんだ？　それにそんなのが本当にあるわけないんじゃないかな。作り話だからな、できるわけない」
ひどく論理的で一般的で科学的な、僕の常識。
「何も丑の刻参りだけが呪いじゃないわ。でもあらゆる種の呪いには相手の髪の毛がいるのよ。私が呪いだって思った理由はね、この傷口よ。こんなきれいな穴。実際にあけられると思う？　前に本で読んだの。呪いの種類ではね、藁人形に加えた危害と同じことが相手に起こる、というものがあるの。一目でそれだと分かったわ。藁人形の左胸に穴を開けたから、須藤の左胸にも穴があいた」
亜由の話を聞きながらも、僕は納得がいかなかった。呪いなんていう非科学的なこと、本当にあるのだろうか。この少女、そんな本ばっか読んでるから、こんなたわ言並べてるだけじゃないだろうか。
「でも呪いなんてないね。亜由、少しは大人になろうか」
僕が軽口を叩くと、亜由は僕を睨みつけてきた。
「いえ、あるわ」

断言しやがった。
「昔から伝わってきた儀式というものにはね、魔力が宿るものなのよ。私の考えでは、呪いは実在する。きっとそういうものは思いの強さによってできるかできないかが決まるの。呪いをかけるにも、才能がある人じゃないとできないのよ。あの女はきっと人を呪う才能があるのね」
僕はふと、山越文子（やまこしふみこ）のことを思い出していた。昨日、浅野は山越の髪の毛をとっていたのではないだろうか。あの、後ろから抱きついた時。
そして、突然右腕が骨折したという事実。藁人形の右腕を折ったから、山越の右腕が折れた。これだと納得がいく。納得が、いってしまう。
「君が知らないだけで、そういう“才能”というのは誰にも必ずあるの。気付いていないだけでね。君には何か、才能ないの？」
人の裏側を見る。ペルソナ崩し。僕の才能といえば、それかもしれない。
「呪い、ねぇ」
どうにも実感が湧かない話だ。
「そういう話、嫌いじゃなけれど、生憎……」
……ん？
「あ！」
思わず、声を上げてしまった。
「どうしたの？」
僕を見て、首をかしげる亜由。
「あの女……僕の髪の毛を、取ったのか……！」
「え？」
「そうだよ、あの時。何か不自然だったんだ。うわぁ、本当だよ、これじゃあ……あぁ」
「どうしたの、君。髪の毛を取られたってどういうこと？」
僕の勝手な思い込みに相違ないだろうが、亜由は僕のことを心配

してくれているのだろうか。
「そのまんまの意味さ。小町夢羽は、僕の髪の毛を入手している」
そう、あの、四時間目が終わり、給食の前の時間。
突然左から髪の毛を引っ張られ、意味の分からないお喋りをして。
しかもあの時の僕の不自然な失態、態度を見て夢羽は、僕が犯人だと確信しているに違いない。
「もしそれが本当なら……」
亜由は、僕に一歩近づいてきた。近い。亜由は僕の耳元で、囁いた。
「今日、君、死ぬよ」
「ッ！」
その声には、一切の感情が込められていないように思えた。
「どうするの？」
離れてから、さらに僕を指さして言う亜由。
「琴吹闇斗、絶対絶命」
僕は必死に考えをめぐらせる。
ってオイ待てよ、いつの間にかその呪いだの丑の刻参りだのを信じているじゃねぇか。
でも、そんなのないって楽観してもいられない。
証拠が、揃いすぎている。
須藤の死体を見る。
あんなきれいな穴を開けられるなんて、あるわけがない。
吹奏楽部で練習していて突然腕を骨折したなんて、あるわけがない。
何の意味もなく僕の髪の毛を引っ張る理由なんて、あるわけがない。
呪いがないと言い切れるだなんて、あるわけがない！
警察に言われるどころか、殺されるなんて次元の話だ。
あれ、僕は死んでもどうでもいい、とか考えてなかったか？
やっぱり僕のそんな考え、仮面だったか。本当の僕は死にたくな

いビビリだっていうことか。
落胆。
考えろよ、僕。
殺される前に、夢羽を殺す。
それしか方法はない。
それか――
「ねぇ、亜由、呪いってのは、才能があって心からそれを信じてるような人間じゃないと使えないんだろ？」
「そりゃあそうでしょうね。私も前に試したことがあるけれど、駄目だった」
じゃあ、僕が逆に呪いを使うなんて、できるわけがない。試す前から分かってる、僕にそんな才能あるわけがない。当たって砕けろほど無駄なことはない。
でも実際殺すのは駄目だし、無理だ。そんな時間も隙もない。機会も巡ってこないだろう。
駄目だ。
どうすれば、
どうすればどうすれば。
「殺されるのと警察に掴まるの、どちらがいい？」
亜由の声。聴覚神経も少しマヒしているらしく、ぼんやりと聞こえてくる。
「皆の前でもあの女を殺すことはできる。その場合、呪いで殺されることはなくなるわけよ」
それでは駄目だ。それでは駄目なんだ。
実際に殺せない。僕に呪いは使えない。亜由は僕に呪いを使う。
「けど、殺すとも限らないよな」
楽観的な思考だ。何考えてる。
「でも、どのみち須藤の死体を発見したアイツには死んでもらうしかない」
そりゃあそうだ。何考えてる。

「呪い？　呪い呪い呪い？　髪の毛、藁人形、時間、隙、殺意、恨み、須藤の彼女、須藤の死、ん、須藤の死？」

……。

「――須藤の死？」

「どうしたの？」

怪訝そうな顔をしている亜由。

「ハッ」

僕は、笑った。

呪いを使う少女。須藤の死体を見てしまった少女。どのみち殺さないといけない少女。僕を呪いを使って殺すまでいかないとしても、危害を加えるつもりであろう少女。

小町夢羽。

「論理的に殺してやるよ」

僕は資料室を飛び出した。

階段を駆け下りる。

次は五時間目。体育だ。僕はまだ制服なので、これから体育着に着替えなければならないな。

男子の水泳の授業が明日からであることに感謝。

女子の水泳の授業が今日であることに感謝。

全ての必然が、僕の味方だ。

三年二組の教室に到着。誰もいない。男子はハードル走で運動場、女子は水泳でプールに行ったのだろう。もう少しで五時間目がはじまってしまう。

「体育に遅刻して死なないで済むなら、とても正解だ」

放課後。

僕はトイレから出てくる時、人にぶつかった。

「あ、ごめん。ん？　なんだ、闇斗じゃないか」

「ああ、えーっと、琴音（ことね）の方か」

髪型と名札で確認。

「ん、何だい？　僕と彩音のどちらか迷ったのかな？」
「うん、まぁね」
「あは、うんうん、無理もない。何せ一卵性双生児だ。ただ、僕は綺麗なショートカットで、彩音は散切り頭だろう？　そこを有効活用してくれたまえ」
　してるよ。
「散切りだからって、彩音は病んでる、とか言っちゃいけないよ？　思ってほしくもないが、思想の自由は憲法に保障されてる。あは、皮肉だね」
　どこかだ。
「というわけで、僕も忙しい身だ。うんうん、そろそろ帰ろうと思う。本当は闇斗ともっとお話ししたいけれど、なるほど君は先程から焦っているらしい」
「忙しいって、琴音、帰宅部だろう？」
「あは、前に言っただろう、覚えていてくれよ。僕は週四で塾さ。うんうん、じゃあね」
　そう言って、やはり颯爽と去って行く琴音。
「週四って……随分頑張るもんだ」
　だから頭いいのだろうけど。
「さぁ、ここから大仕事だ」
　ポケットに手を入れて、さきほど急いで亜由から借りてきたナイフの刃の冷たさを感じながら、僕は三年二組の教室に急いだ。
　教室に入ると、中にいるのは小町夢羽一人だけだった。
「何？　放課後に残れ、って。用事は早めに済ませてよね」
　夢羽は椅子に足を組んで座って、片手に持った紙をひらつかせている。
『放課後、教室に残っていてくれ。闇斗』と、手紙には書かれているのだ。言うまでもないが、僕が書いて夢羽の下駄箱に入れておいたものである。
「ああ、今日の給食の前にした話の続きをしたくてね」

僕は、夢羽の向かいあうように、二メートルほど離れた位置に立ち、夢羽を見下ろす。

「続き？」

怪訝そうな顔の夢羽。

「僕も君が、大嫌いって話」

少しの間、夢羽は呆気にとられたような顔をした。しかし、すぐにいつもの人を見下さすような顔つきに戻る。

「へぇ、それは朗報。私も君が超嫌いだからね」

「うん。君みたいに、汚い人間が僕は一番嫌いなんだ」

「汚い？」

「そうだろう？　だって自分にとって地位の向上につながる相手じゃないと関わらなくて、自分にとって少しでも邪魔になった相手は容赦なく呪い殺す。人間の心を持たない、屑じゃないか。論理的じゃない」

夢羽が、眉を寄せる。

「悲しいね、そんな人間は。他人を愛せない、失格な人間は」

夢羽が、歯を食いしばる。

「常にまわりから“すごい”って言われたかった？　みんなよりも優れていると、まわりが認めてくれた？　でもさ、君が一番欲しいのってさ」

僕は、夢羽の仮面を――

「心、だろ？」

――崩した。

「ふざけんなッ！」

夢羽はそう言って、立ち上がる。

「黙って聞いてれば、勝手なことばかり言ってくれるじゃない。何なの、お前？　人の内側見透かしたようなその口調……」

「でも、君は自分のために他人を傷つけることに何の躊躇いも覚え

ない、外道な人間だろ？」
　それは僕も同じで。
「でも、君はそんな汚い自分が大嫌いだった。幼いころから自分は“悪い子”だと分かっていた君は、まわりから“良い子”だと言ってもらうことに異常な安心感を覚え、異状な執着を覚えた」
　それは僕と異なって。
「その強い思いが、君に人知を超えた、人を呪う能力を芽生えさせた。自分が“良い子”だと思ってほしくて思いたくてそれを想っていた君は、何の躊躇もなくその能力を使い続けて、これまで生きてきた。その考えこそが君の異常なのに」
　それは僕のペルソナ崩しにそう遠くなく似ていない才能。
「君は生まれもって、人間の資格がなかったんだよ」
　この瞬間、小町夢羽は壊れて崩れて乞われて屑れた。
「……ぁぁぁぁあああああアアァッ！」
　表情は破綻。いや、その表情が仮面の裏。その醜さが小町夢羽。
「あああああ……ッ、焦点あわねぇよ、まったくよォ」
　いつもの彼女はそこにいなくてどこにもいなくて元から偽者で曲者で借り物。
「何なんだよオマエ！　そうだよ、私は屑で愚図でどうしようもない歪んだ人間だよ！　でも仕方ないじゃん。人を愛せないんだよ！　心のそこから感動したり、共感したり、感嘆したり、嬉しかったり楽しかったり、そんなのできないんだ！」
　ガアンッ、と。
　机を蹴り飛ばす夢羽。目は真っ赤で涙が流れていた。
　そんな夢羽を僕は極めて冷たく、際どく詰めたく、見つめる。
「ハナから間違って生まれた欠陥商品、欠陥品、粗悪品、いつ自分に天罰が下るか怖くて恐くて恐くて怖くて、ここまで呪って呪って呪って呪って、活きずに生きて生きずに壊れて、駄目で駄目で、自

分が嫌で、でも褒められる自分が好きで、変われなくて換われなくて代われなくて替われなくて……」

はァー、はァー、

ふらふらと。よろめく夢羽。その表情が、人殺しのソレに変わった。

「……う、うわあああああああああああああッ！」

夢羽がこちらに飛び掛ってくる。

「ッ！」

僕はポケットから、亜由に借りたナイフを取り出す。

「！？」

夢羽はしかし、僕の隣を走り去っていく。

ガアン。

振り向く。

夢羽が教室の扉を勢いよく開ける音だった。

夢羽は真っ赤な顔だけを僕に向け、息遣い荒いままに言った。

「呪い殺してやるよ、オマエ」

夢羽は、教室から出て行った。

僕は溜息をつくと、ナイフをポケットにしまって、近くにあった机の上に座った。

追う必要はない。

「どんな呪い方でもいい。僕を呪え」

僕は窓の外をぼんやりと眺めながら、夢羽に告げる。

「お前は死ぬのが、関の山だ」

2◆小町夢羽

「はァッ……はァッ……」

私は校門を出てからも、走り続ける。

夕焼けにさらされて、町中が血まみれになったみたいになっている。

カー、カー。

上を見ると、電柱の上に一匹の黒い鳥（カラス）。

前にも後ろにも、横にも上にも、ましてや下にも、誰もいない。

私しかいない。

「心が欲しかった？　そりゃあそうだよ」

不幸すぎる。

こんな人間に生まれてしまって、不幸すぎる。

中学にあがって吹奏楽部に入ったころを思い出す。

とても、楽しかった。

自分のやりたいことを、やっと見つけた。そう思った。

毎日、練習した。それに伴って、演奏するのが上手になった。

まわりが、自分を慕ってくれて、褒めてくれた。

皆に、認めて欲しかった。

だから頑張った。

一年生の夏に、事故で腕を骨折した。しばらく練習ができなくなった。

部活に復帰すると、皆、私よりも上手になっていた。

夢羽ちゃん、骨折残念だったね。骨折してなきゃ、今も一番だっただろうに――

そう言ってきた奴がいた。骨折する前、私よりも下手だった奴だ。

呪ってやった。私と同じに腕を骨折させて。

私はそれから、吹奏楽部で私よりも上手になりそうな奴が出てくるたびに呪っていた。

皆よりも優れてなきゃ、皆に認めてもらえない。

だから、自分を優れて見せるためには、何でもやった。

これからも、そうだ。

なのにあの琴吹闇斗……

何なんだよ、あの、私のことを何でも知ってるような口ぶり。

初めて、見透かされた。

威を殺したアイツ。

今まで、いくら私でも、殺してしまっては本当に取り返しがいかなくなるような気がしていた。だから、最初に呪ったあの女以外は、殺さずにいた。

威を殺した犯人は殺すつもりだったが、それでも心臓を一突きするだけにしてやろうと思っていた。しかし、

「アイツだけは、ぐちゃぐちゃに殺さないと気がすまねぇ」

呪いなんて、警察にバレるはずがない。

まさに、完璧な殺人。

「ふはは……」

笑いがこみ上げてきてしまった。

呪いがある私は、最強だ。

家について、私は真っ先に階段を駆け上がり、二階の自分の部屋に入った。

「ふふふふふ、ひひひひひ、くく……ふはははは」

狂ったように笑い続けて、私は鞄から筆箱を出して、そこからさらにシャープペンシルを一本取り出す。

シャープペンシルの芯を入れておくところから、琴吹の髪の毛が三本出てくる。それを、藁人形に結びつける。藁人形はたくさん作ってあった。

「ははははは……はははははははははッ！」

私の笑い声が、暗い部屋に響く。

もう取り返しなんてつかなくていい。

私はこれからも人を呪い続けてやる。

この人生を、続けてやる。

これからも呪いによって、何人もの人間の未来を奪ってゆく。私は周りからみたら死神のような存在だろう。それでも構わない。

もう琴吹は威を殺した、だなんてどうでもよくなってきた。
とにかく誰かを呪いたい。ああ、なんか狂ってきた。
欠落製品、欠陥品、粗悪品。上等さ。
「死ね、琴吹闇斗ッ――！」
私は、暗闇の中で不気味に光る鋸(のこぎり)を、藁人形の首に向かって思い切り、振り下ろした。

ころん、と。
切断された藁人形の首が机の上に転がった。

3

次の日。
昼休みに僕は資料室を訪れた。朝は面倒だったので来ていなかった。
「君、死ななかったの？」
「まぁね」
亜由はふっと微笑すると、いつも通り起伏のない冷たい声で言った。
「そう、良かったじゃない。私も嬉しい」
朝のホームルームで、小町夢羽の死亡は伝えられた。そのことも亜由に言う。
夢羽がどんな姿で死んでいたのかは知らないが、別に気にもならない。
心臓に穴が開いてたかもしれないし、首が切断されていたかもしれない。もしくは全身潰れてたかも分からない。
でもどれにしたって、死んだことにかわりはない。
「それで、どうやって助かったの？」
亜由は読んでいた本を机の上に置くと、少し身を乗り出すようにして、訊いてきた。興味津々、といった感じだ。そんな亜由は少し

可愛い。
「簡単で論理的なことだよ」
僕は壁に背中をあずけるようにして立って、話し始めた。
少し面倒だけど、そんなに興味津々に訊かれては、仕方あるまい。
「僕は夢羽が他人の髪の毛をとるところを、何度か目撃してる。この資料室での時以外、彼女はシャープペンシルをいじっていたんだ。文子（ふみこ）の髪の毛を取った時、彼女はシャープペンシルの分解をしていた。正確には、芯を入れ替えようとしていた」
「ねぇ、その文子って子は死んだの？」
ああ、亜由は知らないんだったな。
「ううん。右腕骨折」
「ふぅん」
死ななかったからなのか、亜由は急に興味を無くすと、話の続きを促した。
「でもあの時夢羽が入れてたのは、シャー芯でなく、文子の髪の毛だったんじゃないかって僕は思ったんだ。夢羽は“なんでも完璧にしようとする子”なんだよ。だから髪の毛の隠し場所にも気をつかう。ほとんどの時間自分と離れないもの。学校でも家でも、常に一緒にあるもの。それは筆箱、シャープペンシルなんだ」
「それだけで決めつけたの？」
亜由はやはり前傾姿勢で問いかけてくる。
「ううん。昨日夢羽は僕の髪の毛を直接とったんだ。それは四時間目終了時で、夢羽の机の上にはシャープペンシルがでていた。他のマーカーや消しゴムはしまわれているのに、シャープペンシルだけがしまわれてなかったんだ。夢羽は僕の髪の毛を取った後、シャープペンシルの芯をまた入れ替えてた。僕は遠くから見たのだけどね。もちろん実際は芯でなく僕の髪の毛を入れてたんだろうけど」
「ふぅん」
僕はそこまで話すと、一度区切った。少し疲れた。
「で、どうしてあなたは助かったの？」

亜由が一番訊きたいは、そこのようだ。
「夢羽が筆箱と離れる時間はひとつだけ。水泳の授業の時だ。水泳だけが唯一、筆記用具を持っていかない授業だ。プールサイドは濡れるからね」
「なるほどね」
亜由が適度に相づちを打つので、とても話しやすい。
「昨日教室に戻った僕は、夢羽の筆箱を机の中から取って、開けた。五時間目は女子が水泳の番だったんだよ。教室には誰もいなかった。僕は夢羽のシャープペンシルを全て調べた。四本もあったよ。そのうちの一本の中に、やはり髪の毛が入っていた。しかも三本。僕のものだろうね。僕はその三本を出した。次に僕は、夢羽の給食袋を開けたんだ」
「給食袋？」
亜由が怪訝そうな顔をした。そんなことも知らないなんて、やはりこの子は生徒ではないのだろうか。
「エプロンとバンダナが入った袋だ。給食当番がつけるやつ。夢羽は給食当番だったんだよ。そして僕はバンダナについている髪の毛をとっていった」
「ああ、そういうことね」
亜由は言った。ここまで言ったので、どういうことだか分かったんだろう。
「そう。バンダナは頭につけるものなんだ。バンダナには夢羽の髪の毛がついていたよ。しかもちょうど三本。次に僕はその三本を、僕の髪の毛と同じ長さにハサミで切った。そしてシャープペンシルの中に、夢羽の髪の毛を入れたんだ。僕の髪の毛は適当に床に落としておいたよ」
「つまり、髪の毛をすり替えたわけね。あの女は自分の髪の毛を使って呪いを行った。だから呪いが自分にかかった」
「その通り。少し賭けみたいなものでもあったけどね。呪いが自分にかからないのだとしたら、全部無駄になるから」

それと、もしかしたら夢羽は、僕を殺すつもりはなかったかもしれない。文子同様、骨折くらいに済ませてしまうかもしれない。もしそうだと、夢羽は死なない。秘密を知った夢羽には死んで欲しい。

だから僕は昨日の放課後、夢羽を破壊したんだ。

「まぁその心配はなかったけどね。何せ、須藤の死体は心臓を打ち抜かれていたから」

つまり、夢羽は須藤殺しの犯人を絶対殺すつもりだったということ。

だから真の目的としては、夢羽の冷静さを失わせ、髪の毛のすり替えに気付かないようにするためだ。

亜由は読書に戻っていた。

開けてある窓から、爽やかな風が入ってきていて、亜由の長い黒髪を揺らしている。

僕は本棚の本を見る。

シリーズものが少しある。しかし、なぜかすべて、第一巻がなかった。仕方なく、二巻を手にとって、読んでみる。

亜由を見る。相変わらず、亜由の仮面の裏は見破れない。姉と同じだ。僕は姉の仮面の裏も見破れなかった。

「もう死んじゃったけどね」

須藤の死体の異臭が、ほんのりと漂う資料室で、亜由と僕はしばらく本を読んでいた。

・つづく・

三章：芸術的な雫根彩音1

1◆闇斗　六月二八日

僕が今回人を殺すことになったのは、何を隠そう、他でもなく、嘘でもお世辞でも冗談でも比喩でも、ましてや狂言でもなく、雫根彩音のためである。

きっと彩音が望んでいるのは、芸術的な死体をその目で見るコト。コト細かに美しいアートを彩音は常に心の底で望んでいる。

彩音のためなら何だってやるし、
「何だってできる」

彩音は僕にとって光りだし希望だし恩人だし、
「好きだといってくれた人だし」

彩音のためだから。
「人を殺してソレを飾ることに、僕には何の躊躇いもない」

それがたとえ、彼女の親友でも、
「彼女の双子の姉だとしても」

2　六月二五日

僕が休み時間に読書をしていると、同じクラスの雫根琴音が話しかけてきた。
「やぁ、闇斗」

「ああ」
僕は、紅葉の栞をはさむと、本を閉じた。この栞は以前姉とお揃いで買ったものだ。姉は、血まみれの手みたい、とか言っていた。
「どうしたんだ、琴音」
「うん、実は大事な話があってね。隣、いいかな？」
「いいよ」
今はもうこの世にいない小町夢羽の椅子に、琴音は座る。夢羽の死が皆に伝えられてから、一週間くらい経過した。
「いや実はね、彩音が君のことが好きみたいなんだ。ライクじゃなくてラブのほうさ」
「……へぇ」
彩音というと、琴音の双子の妹である、散切り頭の少女、雫根彩音のことか。
「で、僕にどうしろと？」
言うと、琴音はキョトンとした。
「決まってるじゃないか。彩音に返事してやってくれってことさ。断ってくれて結構だよ」
「返事って？」
再び琴音はキョトンとして、直後笑った。
「あはっ、わざとやってるのかい？　君は恋愛に無頓着か。面白い」
ああ、だんだんとどういうことだか分かってきた。なるほど、僕は彩音に告白を受けたようなものらしい。
「彩音もあれで、なかなかどうして恥ずかしがりやだ。だから僕が君に彩音の意思を伝えたって訳」
「ふぅん」
だからって僕にどうしろと言うのだ。どうにも面倒な事になってしまった。
「ま、君がわが妹の告白を断るのは分かっているさ。じゃあそういうことでいいのだね？　彩音には可哀想だが、世の中そういうものさ」

「うん、確かに面倒だし。僕はそういうの苦手だからな」
「そうだよね。じゃあその旨を彩音に今から……」
と。
その時。
「あああああああああーーーーっ！」
耳が痛くなるくらいの大声を上げながら、誰かが僕らの間に割り込んできた。
「？」
見ると、散切り頭の少女が目の前にはいた。
「姉から事情は今しがた聞いたかと推測して来ましたしだいでありますおそらくご存知雫根彩音ですっ！」
「――！？」
一気にまくしたててくる彩音。たしか、彩音は四組だったっけ。
「ちょっと彩音。彩音がきゃいーん恥ずかしーって言うから僕が闇斗に交渉したのに、何いきなり乱入してきているんだい。これでは僕のくだりは不要だったことになる」
そいつはその通りだな。ただ交渉とか言っていたが、琴音は悪い返事の方へ僕を誘導していた気がする。それは何故か。分からないさ。
「でもでも！　彩音扉のトコから二人のこと覗いてましたけど、どんな話してるか分からなくて不安になって、それにやっぱり自分で訊かないとかなーって良心の呵責（かしゃく）が」
何だソレ。
「というわけで琴吹サン！」
バッとこちらに振り向く彩音。目は姉の方と違ってパッチリとしていて、黒い散切り頭。姉と目鼻立ちはそっくりだが、何故かこちらのほうがとても幼く見える。
それにしても、琴吹サン、とは……新鮮な呼び方だ。
「ん、何？」

「彩音と交際していただけると嬉しいというか楽しいというか喜ばしいというか素晴らしいというか何というか、とにかくっ！」

芸人顔負けのマシンガントークを僕の目の前で披露する彩音。元気な子だな。

正直、苦手かもしれない、こういう善良な子は。

といっても、やはり心の奥底は歪んでいるけれど。

「彩音と交際してください！」

……。

周りを見る。

僕はクラスメイト達全員の唖然とした顔を確認できた。そしてそれがすべて僕に向いていることも。

うわぁ……

「……えーっと……」

どうしよう。これは論理とかじゃ解決できない状況だ。

不確定要素率百パーセント。すなわち、僕が一番苦手な状態・情態。

ちらり、と。

不安そうに、ギュッと瞑っていた両目のうち片方を開けてこちらの様子を伺う彩音。

「……」

固まってしまう。カタマッテシマウ。

って、これじゃあ駄目だ。冷静になれよ、僕。

そうだ。キッチリ断るんだ。じゃないといろいろ面倒すぎる。

「ごめん、彩音。僕はそれを受け入れるわけにはいかな――」

「――ええっ、どうしてですか！？」

「……あー、どうしてもこうしてもああしてもどうしても何としても、僕はそういうの、苦手なんだよ」

「それじゃあ彩音と条件は同じですね。共に弱点克服といきましょ

う！」
　いいよ、いかねぇよ。
「いや、とにかく僕なんて好きになっちゃ駄目だ。それは人生の終わりを意味する」
「断られたら彩音の終わりを意味します」
「それでも、他をあたってくれないかな」
「他って誰ですか。世の中は彩音と琴吹サンと姉さんとそれ以外にしか分類されませんよ。あとお父さんとお母さん。え、もしかして“その他”のカテゴリから探せと？　ええっ！」
……。
　僕らの会話を回りで聞いてる“その他”の方々はさぞかし気分が悪いだろう。
「まぁ、とにかく、僕は君にとって都合のいい返事を返すことはきっとできない、ということさ」
「ぐはァッ！」
「？」
　突然背後の姉にもたれ掛かる彩音。
「うー、彩音フラレちゃったかもー……」
「かもじゃなくて、まさにソレだよ……。だから言っただろう？　闇斗はこういう奴だって。苗字は寿（ことぶき）だけどさ、別に幸せ与えてくれそうな奴でもないんだよ？」
　なんだソレ。
「むぅーっ、でもッ！　彩音諦めません。諦めたら試合終了どころか彩音終了です！　覚悟してお手柔らかに構えていてくださいね、琴吹サン！」
　たったった。
　彩音は走って、消えていった。
「ずいぶんと難しいことを要求する子だ」
「あはは、迷惑かけたね。というか、かけるね」
　ころころ笑ってる琴音。

「ま、あの子の追っかけはしばらく続くだろうけれど、そこは僕の営業範囲外だ。つまり蚊帳の外」

「使い方微妙に違う」

「いいじゃないか。だいいち数学なんて全部違うよ。君は数を信用しているのかい？　一と〇，九九九九ずっと続くっ、ってのは同じ数なんだよ」

ああ、アレか。数学でやったよ。僕はそれよりもずっと前から知っていたけれど。

「まぁ、こんな下らない話はどうでもいいんだよ。釈迦に説法かもしれないけれど、君は少し恋愛ごとに興味関心を持ったほうがいいと思うな」

「釈迦の説法はそんな使い方じゃない」

この子、本当に頭いいんだろうか。学年三位だろ？　ちなみに僕は学年二位。一位は秀才の鏡ヶ崎恵仔だった。

「話を逸らさないでくれたまえ。君は何かな、そういうことに嫌悪感を抱いているのかな？」

「無関心を持っているんだ」

「あは、何だいソレは。いやしかし、うんうん、なるほど了解、独り合点。無関心ね。ということは君には欲情の欠如が見られる。うんうん、へぇ、まぁでもうん、ああ、でも大丈夫だよね、あれ、そうそう……」

後半はぶつぶつと独り言のようで、全く聞こえなかった。

と、その時チャイムが鳴った。

「ま、そういうことさ。じゃあね、授業中寝てちゃ駄目だよ。知ってるんだからね？」

悪戯っぽく笑って自分の席に戻っていく琴音。そういうことって、どういうことだよ。

ん？　というか、一番後ろの席が僕で一番前の列にいるのが琴音だぞ。何で寝てること知ってるんだろう。

「見たからに決まってるだろ」

考えてみたら論理的(あたりまえ)だ。

さて、問題が起きたのは昼休みだった。

僕は最近の日課となりつつあるのだが、いつもの如く資料室を訪れた。

「むにゃむにゃ……」

「……」

意外にも可愛らしい寝顔をさらしている亜由。

「……ていっ」

バシッ

「う？」

頭を叩くと、亜由はパチリと目を開けた。

いつも僕より亜由は先に来ている。しかも今回は寝てやがった。

「もしかして、本当にここで生活してるのかな」

「何か言ったか？」

「何も」

さて、何をしよう。

そうだ、本を読もう。

「ああ、そういえば君。昨日からやっと須藤の死体解剖に取り掛かっているんだ。いや、腐った死体を鋸(のこぎり)で切断する作業はなかなかにインタレスティングだよ。詳しく話していいか？」

「一人のときにやってくれ」

僕は掃除ロッカーをあけた。

「うわ」

思わず、声を上げてしまった。

掃除ロッカーの中に、バラバラにされた部分(すどう)が押し込まれていて、コロコロと、掃除ロッカーを開けると足元にそれらが転がってきたのだ。

ひどい異臭。

「姉がすきそうな光景だ」

僕がそう言った時。

「失礼しまーす」

ガラガラガラ。

と。

「……」

「……あれ？　琴吹サン？　どうしましたー？」

資料室に突然、雫根彩音が入ってきた。

「……、何してるの？　彩音」

「きゃっ、彩音なんて言われちゃった！　琴吹サン大胆！」

うるさいうるさい。もっと声の音量を落とせ。声を聞きつけて誰かが来たらどうすんだ。

「尾行です！」

びしっと、兵隊みたいに右手の側面を額にあてて、気をつけをする彩音。

「追っかけ（ストーキング）だね……」

琴音の言葉を忘れていた。言ってたじゃないか、気をつけろ、と。

「誰だい、その子は。資料室（ここ）の住人が増えることは、私にとってはあまり望ましいとも言えないのだが」

亜由が座ったままで言う。僕もそう思うよ。

「……」

「？」

見ると、何故か彩音は固まってしまっていた。

うん、理由は単純。

その視線の先は僕の足元に転がる、須藤の肉片たち。

それにしてもこの子も歪んでいる。僕には理解できないよ、彩音。

ペルソナ崩し。僕には今彩音がどう考えているのか分かる。

何なのコレ……
じゃあない。

わぁ、綺麗……

そう、彩音は考えている。
本当、理解できないよ、亜由の趣味も彩音の趣味も姉の趣味も。
かと言って僕も他人に理解されるような人格者ではないけれど。
「何なんですか、これ」
彩音は、須藤が納まっている血まみれの掃除ロッカーの中を指差して、訊いてくる。
ごまかすなんて論理的じゃないから、普通に言うさ。これがさも同然というかのように、ね。
「見れば分かるだろう？　人間さ」
「本物ですか？」
「このにおいで分かるだろう？」
「誰なんですか？」
「須藤威（たける）」
「へぇー」
夢見心地、といったような顔で、須藤を見る彩音。死体を実際に見るのは、初めてだろうか。
「琴吹サンがやったんですか？」
「うん」
「……」
急に黙り込んだかと思ったら、次の瞬間にはまた元のスーパーハイテンションに戻った。
「スゴイですっ！　感動します、尊敬します、というか敬愛しますっ！　うっわー、痺（しび）れっるーーーッ！　？　もごが……ご……」
「静かにしてくれよ、彩音。誰か来ちゃったら大変なんだって」
急いで彩音の口を僕は押さえる。彩音は右手でオッケーオッケー

とサインをだしてくる。仕方なく、手を離してやる。
「わお、琴吹サン強引。彩音ビックリ。えーっと、ところであそこの女の子は誰です？」
亜由を指差す彩音。
「ああ、あれは僕の家庭教師の先生だ。でも年齢が同じだからね、僕の家で教えてもらうってなると、親に誤解されちゃうだろ？　だからここで勉強を教えてもらってる。クールそうにしてるけど本当は怖がりで、前に二人で遊園地に行ったときには、お化け屋敷で泣きそうになってたんだよ。僕に思い切り抱きついてきたしね」
「嘘教えんな、殺すぞ」
おお、亜由怖い。彩音も少し亜由に恐怖しているようだ。殺すぞ、の部分にビクッと反応する。

それにしても、本当コレどうしよう。
「ねぇ彩音、このこと誰にも言わないでくれるよね？」
できれば殺しはしたくない。
「このことって。そこの死体サンのことですか？　それともこの部屋のこと？　家庭教師のお姉さんのこと？」
「家庭教師違うって言ってるだろ。君調子乗ってるな、それ以上私をからかうと、まず腹をかっさばいて肺と小腸をとりだして小腸を首に巻きつけて……」
いろいろ呟きだした亜由は無視。
「全部だよ」
「もちろんです！　宣誓！　彩音はって、ごもが……」
やはり僕は彩音の口を手で覆う。
「あとここでは大声出さないでくれるかな？」
ぶんぶん！　と、首を上下に激しく動かす彩音。いちいちオーバーアクションな子だ。
……疲れないんだろうか。そんなにペルソナ被るの。いや、この子にとってこの愛嬌の良さはペルソナではないのかもしれない。

「あいあいさー、です。なるほど、ここは秘密基地ってワケですね」
「そんな幼稚なもんじゃない」
ここは、死体をしばらく隠しておく場所だ。
なんて嘘。僕が自分の姉に似てる少女に会いに来る場所。
「で彩音。何で尾行なんて？」
「火を見るより明らかなことです。彩音は琴吹サン大好きなんです」
……。
と、亜由を見る。
「……」
亜由は、気持ち悪そうな顔をしていた。おいやめろ違うって僕はそんなんじゃないおいそんな顔すんな軽蔑すんな僕はだから違うんだって何度言わせんだ僕を下に見てんじゃねぇ他の奴らと一緒にすんなおいだから……
「どうしたですか、琴吹サン？」
ハッとなって、意識をこちらに戻す。
「別に。いや、実を言うと迷惑だ。僕には関わらないでくれ。構わないでくれ。近づかないでくれ。視界に入れないでくれ。人間に認めないでくれ。いると思わないでくれ。忘れるとか以前に認識しないでくれ、って、あれ？」
「うっ……うっ……」
アレあれアレあれアレ？　何でそんな大粒の涙を両目の端にためて、両手でスカートを握り締めてプルプル震えて、僕を攻めるような目で見るのですか？　何何何、怖い怖い怖い、分からないものは怖くて解からないものは恐い。
恐怖とはいつも、認識の外にあるから。
「うん、ごめん、言い過ぎた。いや、君が嫌いだって言ってるんじゃないんだ。むしろ好きさ。好意には好意で、悪意には無関心で応えるのが僕のスタイルでね。うん、だから僕は君は好き。ライクでもラブでも何でもいいけど、とにかく君には六十パーセントの好意と三十パーセントの好感と十パーセントの恋心を持っている」

嘘だけど。
「え、本当ですか!?　リアリー!?　ってごもごも……」
静かにしてくれ。口押さえんの何回目だよ。

この子といると、調子が狂う。
この子といると、狂う。
この子と狂う。
狂う。

いや、恋愛(くるい)はしない。狂い(れんあい)はしない。当たり前当たり前。僕は人を愛せないのだから。そしてそれを好都合と思っている。
小町夢羽は、違かったようだけれど……。
「ああ、本当だよ。はい、だからもういいね。帰ってくれ」
「なんで！」
この子は学習能力ないのか！
って、僕はこんな突っ込みなんていれる人間だったか？　なんか僕今、楽しくないか？
嘘……。
そんなはずない。
やめてよ。
好きだとか嫌いだとか、
気持ち悪いよ。
なんでそんな感情大事にするの？
なんでそんな環状大事にするの？
なんでそんな干渉大事にするの？
なんでそんな感傷大事にするの？
分からないよ。
怖いよ。
解からないよ。
恐いよ。

「とにかく琴吹サン、えーっと、あの、琴吹サンも彩音のこと好きって言うことはー、あれですね」
「どれ？」
「琴吹サン、わざとやってるんですか？」
ああ、琴音にも同じこと言われたな。
「なんか琴吹サンって、鈍感です」
「……」
調子狂うなぁ。空間狂うなぁ。
「ところでお姉さん、名前何なんですか？」
亜由の方に近づいていく彩音。
お姉さんって、同年代だぞ。……多分。
「なんで皆名前なんて気にするのだろう。流行りか？」
「ほへ？　名前はきっとえっと、……多分大分昔から重要なことだと思うです」
ずいぶん曖昧な言い方だな。曖昧模糊、そこから僕は亜由を連想する。
僕は亜由のことを、何も知らない。
名前も本名か怪しいし。
女で、資料室にいつもいて、気持ち悪い話が好きってことしか、知らない。
興味なくは、ない。
けど。
探求したいとは、思わない。
この姿勢も曖昧模糊。
この世界のようだ。いつも霧がかかってる感じ。立ち込める不確定論理。因子だらけ。因果だらけ。
「そうか、私のことは、亜由、とでも呼ぶと良いだろう」
「私は雫根彩音です！」
「興味ない」
「亜由サンは三年生……ですよね？」

「ああ」
「でも、多分今日はじめて見ました。何組ですか？」
「喋るな」
「え、……はい」
彩音、なんか可哀想。亜由はコミュニケーション苦手なんだよ。
僕もね。いや、僕は面倒なだけ。論理とかなんとか言って、本当はただの面倒くさがり。モコモコと曖昧模糊。
「うー、琴吹サン、亜由サンが恐いですー」
泣きっ面で近寄ってくる彩音。
「そうかな」
適当にあしらう僕。
と、その時。予鈴（よれい）がなった。キーンコーンカーンコーン、と。
「あっ、あと五分で五時間目！　彩音、一旦退散なのです！」
たったった。
彩音は走り去っていった。
「静かにって、何度も言ってるのに……」
僕は呟く。
「ふふっ」
「？」
亜由が小さく、笑った。
「何？」
「どうやらあの子には、周囲を明るくする才能があるようね。さっきから君、変だ」
「うん、少し自覚してる。ちょっと僕らしくないね」
冷静に傍観。それが僕のハズ。外しちゃいけない役回り。周りを観察する。鋭い洞察力で。
ちょっとさっきから僕、言葉遊びが多いな。
ふざけてるな。
「じゃ、僕もひとまず帰ろうかな。ごめんね、亜由、ここの住人増やしちゃって」

「とても迷惑だ。あと一人増えたら殺す」
「……」
物騒な世の中だ。

3◆雫根彩音　同日

「ふっふんふーん♪」
「どうしたんだ彩（あや）、口笛なんて吹いてるが。いいことでもあったのか？」
「まーねッ！」
五時間目と六時間目の間の休み時間。親友の奈野奈乃子（なのなのこ）が話しかけてきた。
奈乃子とは小学校四年生の時から仲が良くて、喧嘩すら一回もなくここまできている。
奈乃子は面倒見がいい子で、私の宿題を見てくれたりする。お姉ちゃんくらい頼りになる子だ。ちょっと男っぽい感じの女の子。これは悪口じゃなくて、本人にそう言うと、「そうか。嬉しいな。私はもっぱら男になりたかった」と言って笑う。
「琴吹サンが、彩音のこと好きって言ってくれたのー」
「琴吹サンって、琴吹闇斗だろ？　なー、彩、人の好みをとやかく言う気も資格も私にはないけどさ、アイツのどこがいいんだ？　怖いだろ、不気味だろ。なんか冷めてるし。私は無理だな、ああいうの。なんかコッチの心の中全部見透かされてる感じだ。対してコッチは、全然向こうのことは分からない」
「えー、そんなんじゃないよー」
私は奈乃子に抗議する。
「確かに琴吹サン、何考えてるかぜーんぜん分からないけど、でもなんか一緒にいると安心するっていうかいい気持ちっていうか何ていうか、いうかいうか！」
「へぇ、ま、彩が気に入って、そう思うってんならそうなんだろう

けどさ。私は別に何もそのことにゃ口出し……するかもしんねぇが。あまり突っ込みはしないポジションにでもいるさ。無関係とは言わないまでも無干渉ってな具合かな」

無関係ではないけれど、無干渉。それはいい立ち位置だけど、難しい立ち位置にも思える。

ところでそろそろ私の誕生日だなー。今日は金曜日で、土日をはさんで月曜日が二十八日。火曜が二十九日で水曜、つまり三十日が誕生日だ。私の誕生日という事は、つまり同時にお姉ちゃんもそうだ。

放課後は闇斗のところに行こう、と思った。

4◆闇斗　同日

僕が今いるのは、美術科準備室という部屋だ。

美術室の隣にある小さな部屋で、今ではほとんど使われていない。準備室なんていうのは名前だけで、単に過去の生徒作品などが乱雑に保存されているだけの部屋。窓がなくて、電気はあるけどつけていないから、真っ暗。闇。

ポスターや風景画等の絵はもちろん、版画や彫刻などもある。この部屋にあるものの中で一番異彩を放っているのは、部屋の隅に並んでいる人形達だ。普通の生徒達と変わらないほどの大きさ。一瞬、本当の人間と見間違えてしまうような見事な出来栄えのものもある。何年前につくられたもの達なのか。それを知る者は少ないだろう。何年も前からそこにあり、埃をかぶり、陽の光に当たることなく立っている。立ち続けている。経ち続けている。絶ち続けている。

今は放課後で、僕は先ほどまでここで彩音と会話をしていた。今は彩音も帰ってしまい、僕一人である。

そろそろ、彩音――いや琴音もだが――の誕生日だ。何かしてあげたいとは思うが、果たして何をしてあげればいいのだろう。

彩音はとても“芸術（アート）”が好きだ。この美術科準備室を彼女が最初

に訪れたのは、過去の優秀生徒作品を見たかったからしい。休日は琴音と一緒に美術館を巡ったりしているようだ。
琴音と違い彩音はあまり勉強はできないようだが、美術だけは五段階評価で五だと、以前自慢していた。
「それにしても誕生日、か」

5　同日

人を殺すことは、とても難しい。
いろいろな要素がかけ合わさって、やっと殺人という行為にはしるのだ。
偶発的にも衝動的にも計画的にも、意識的にも無意識的にも、論理的にも非論理的にも。
「君が須藤を殺したのはだから、とても勇気がいる行為だった。正しい決断だったけれどね。きっと君はいろいろ溜まっていたんじゃないか？　やりきれなさとか、孤独感とか、劣等感、鬱憤（うっぷん）とかね。そこに須藤のイジメが加わり、吹っ切れて須藤を殺したんじゃないか。私はそう推測する」
「そう」
それは間違い。あれは姉のことを馬鹿にされたからだ。
人を殺すのは非論理的。
だけど姉の名前が出ると、僕の論理はひっくり返る。
「ま、人が死ぬのなんて案外呆気ないってことだよ。ほら、小町夢羽は死んだけど、世界はあまり変化してない」
放課後。資料室にやってきた。
と、その時。
「参上、登場、推参、到着！　すっかりお馴染み雫根彩音です！」
ばーん、と。
資料室の扉が全開に開けられた。
「お馴染みじゃないよ。大声出さないでよ」

「あ、すいません。ビークワイエットってわけですね。マストですね、ハブトゥーですね」
「……」
明らかに不快、とまでの表情はさすがに亜由もしていなかったが、快適とは言いがたそうな表情だ。なんとも形容しにくいうんざり感が見られる。
「というわけでやって来ました、琴吹サンの婚約者、雫根彩音であります」
「してないよ」
「ガーン！」
めっちゃ落胆する彩音。
元気な子だなぁ。苦手だなぁ。
小学校も同じだったけれど（といっても何故か一回も同じクラスにならなかった）、その頃から元気だった。あ、そういえば琴音の方は小学校の頃は暗い子だったっけ。特に四年生のあたりはイジメられてた気がする、というか記憶がある。今では想像もできないが、勉強も全然できていなかったような。いつからだっけな、暗かった琴音が今のように明るく（それでもクールって感じだけど）、知性的な子になったのは。
なんてどうでもいいことを考えていると、彩音が急に切り出してきた。
「ところで琴吹サン。明日って暇ですか？」
明日は土曜日、土曜日は休日、休日は
「暇だね」
「じゃあ好都合に好都合を掛け合わせて八乗です！」
何だソレ。
「はいはい琴吹サン、なんとビックリ、琴吹サンを我が雫根ホームへご招待」
「を受けないよ」
「なんですと！」

静かに！

あれ、これもどうでもいいけれど、彩音、テニス部じゃなかったっけ？　行かなくていいのかな。でも彩音は運動オンチらしく、テニスも（やってるとこ見たことないけど）下手だ。だいたいテニス部にはエリートちゃんの鏡ヶ崎恵仔がいるから、比べられちゃ他の部員たちも皆下手の部類だろう。

「お願いしますよ。琴吹サン来てくださいよ、この機を逃すときっと琴吹サン恋愛ごととは無縁そうだから女の子の家になんて行けなくなっちゃいますよー？」

「余計な気遣いだよ。行かないよ」

「挑発が効かない！？　うえ～ん琴吹サン薄情だ残酷だ冷徹だ卑劣だ劣悪だ悪魔だ魔王だぁ」

「だから行かないって」

「暇って言ったのに！　ライアーだライアー。仕方ない、お姉ちゃんに頼んで強引に連れてきてもらおう」

「琴音にすぐに頼らないようにしなよ。だいたい琴音が出てきても僕は意見を変更しないよ」

「行ってあげればいいだろう」

……。

……あれ？

今の声って、

「行ってあげればいいだろう。だいたいその娘、とても諦めるような性質じゃない。最終的には行くことになるだろうから、なら無駄な言い争うしても不毛だ。だいいち君たちのミニコントが嫌でも耳に入ってきて読書にちっとも集中できない。悪いが今クライマックスなんだ」

そうですか。

「サンキューです亜由サン！　グッジョブです！」

「クライマックスなんだ、静かにしろ」
「はい……」
「ほら彩音、クライマックスらしいから一旦廊下出よう」
「ですね」
僕ら二人、資料室から一時退場。どうやら今回亜由が呼んでいるのは不気味な儀式の解説書とか都市伝説の本とかじゃなくて、小説らしい。まぁ怪しい小説に変わりはなさそうだが。だいたい死体をバラバラにしてゴミに紛れさせてゴミ処理場で燃やしてもらおうなんて考え起こす亜由だが、きっとそういう本ばっか読んでるからだ。相違ない。
「はぁ……」
また溜息。
調子狂うぜ。

6　六月二十八日

月曜日で、学校だ。
雨が降っている。昨日からだ。
「あ、カタツムリですよ、琴吹サン！　やり出せ角出せ中身出せー♪」
「中身出したら死んじゃうね」
カタツムリが死のうがどうしようが僕には関係ないけれど。
傘をさしながら、登校中。
家から出たら何故か門のところに彩音と琴音がいたのだ。
で、一緒に登校中。
「いや、僕らの通学路の途中に闇斗の家はあるからね。彩音が闇斗と行きたい行きたい駄々をこねてさ」
「なるほどな。お前も大変だな」
「何言ってんだ。大事な妹じゃないか、常套句ながら。君にも姉がいたじゃないか」

「死んだけどね」
「……ああごめん、気分を害したかい？　すまないね。でも、行方不明じゃなかったか？」
「一年間見つかってない。死んでるだろう」
「それは実に論理的だ、君好みのね。あは。いや失敬。ただ君の姉も特殊な人物だったよね。ほらあの連続殺人事件の……」
「あれあれ二人して彩音を無視してるんじゃないかと嫉妬心を燃やしてみたりー！」
彩音が割り込んできた。
「ああ、ごめんごめん。うんうん、僕はどうやらお邪魔のようだ」
ニヤニヤしている琴音。
土曜日。つまり現時点から一昨日。僕は仕方なく、雫根家にお邪魔させてもらった。両親は出払っていて、家には彩音と琴音だけがいた、いや、変な意味じゃなく。
午後の間だけだったが、まぁ騒々しくて疲れて調子も狂って楽しいのかどうか分からなかった一日だった。
ただ正直な話、退屈とは一秒も思わなかった。
自分たちでつくったらしいお菓子を一緒に食べたり、普段やらないテレビゲームをやったり、人生ゲームとかいうボードゲームをやったり。あとはチェス。琴音はなかなか強くて僕にとっても強敵だったが（ギリギリで僕勝利）、彩音のほうはもう弱いもいいところだった。それと、ターンテーブルやＣＤターンテーブル、ＤＪミキサー等の機材がそろっていて、彩音はＤＪの真似事をやったりしてた。琴音によると、彩音の最近のマイブームらしかった。
そんなこんなで、濃密三時間半だったわけである。

最近、学校には早く来るようにしている。なんとなく。本当になんとなく。論理的行動を心がけているはずの僕にとっては珍しく、なんとなく早く来るようにしている。たいていの場合は資料室で寝てる亜由を起こしにいくのだが。

確認は取っていないが最近は、ああ亜由はここに寝泊りしてるんだろうな、と確信していた。
で、学校についた僕の足は、自然、資料室に向く。
その途中。
「よぉ、琴吹」
「……？　うん」
「なんだ、変な顔して。ああ、だよなだよな、いきなり話しかけられて驚くよな」
「いや、別にいいけど」
廊下。普段いつも互いに何も気にせずすれ違うはずの人間に、今日は何故か話しかけられた。
確か名前は……奈野奈乃子。
なのなのこ。変な名前。
「いや、ちょっと気になったんでな。お前、彩と付き合ってるんだって？」
彩？
……誰？
「ああ、彩音のことか。いや、違うよ、まったく付き合ってるなんてとんでもない、滅相もない、誤解も甚だしい、誤解も猛々しい。完全に一から十まで、間違っている。本当彩音とは友達ですらもない。うん、つまりはそういうことなんだ」
「……」
奈乃子は何故か、呆れ返ったような顔をしていた。
「まぁいい。とにかく、彩音と付き合うなら真面目にやれよ。ふざけたことしてみろ、私はお前を殺すぞ」
「……」
そうか。そういえば奈乃子は彩音とよくつるんでいるな。ようは、親友。
理解できない概念。
だってそれ、偽りだろ？

ペルソナペルソナペルソナ。
「ま、お前に限って軽い気持ちで付き合うなんてことはないだろうな。私が心配してんのは、お前が“適当”にやることだ。いいか、本気じゃねぇなら、適当なら、私の親友に関わるな」
適当……。
「だってお前は、平気で人を殺しそうだ」

「……」
まさに、黙り込むしか、ない。
「私が言いたいのはそれだけさ。あ、それともう一つ、か。私は付き合いが長いから分かるんだが、彩はお前が思っているよりもずっとずっと――」
「――狂ってる、だろ？」
「……そうか、さすがお前だ。分かってるならいいのさ。じゃあな」
奈乃子は僕に背を向けて、他の生徒たちの中に消えていった。
「……なんだよ、マジで下らないな」
呟いて、僕は自分の教室に戻った。資料室に行く気が、どうにも失せてしまった。

その日は、いつも通りで、本当にいつも通りで、特筆すべきものもなく、ただただ平凡と時間だけが過ぎていき、空虚の中の満足感、満足感の中の空虚、そんなことを感じながらも世界に身をゆだね、夜にいたった。
授業は退屈で、昼と放課後は資料室、やはり資料室には彩音も来て、下校にも彩音は着いてきて、ペース狂いっぱなし、でもどこかに充実感を感じるような、そんな一日。
平和といえば平和なのだろう。
日常といえば日常なのだろう。
そんなことを考えながら僕は電気を消して、やはりいつも通り、

寝た。

7　六月二十九日

「おはようございます琴吹サン！」
「やぁ闇斗、今日も寝不足そうな顔だね」
「いつも十分寝てるんだけどね……」
今日は雨じゃない。
夏の雨は嫌いだ。ジメジメするから。
でも僕自身が、ジメジメしてるよな。
本当、なんでこの双子は、彩音と琴音はこんな僕と関わるのだろう。琴音のほうは妹のためかもしれないが。
それにしても、一緒に行くと疲れるから、さらに早く家を出てみたのだが……
無駄だったか。
「なんで彩音って散切り頭にしてるの？」
興味本位で訊いてみる。
「え、なんでって。可愛いでしょ？　でしょでしょ？」
「うん、まぁ可愛いけど。それだけなんだ」
「はい、何でですか？　琴吹サンはヘアスタイルに深い理由を持ってるんですか？」
「いいや。ただ、散切りじゃなくてもいい気がしてさ」
「でもショートカットだと、お姉ちゃんとカブります」
「そうだね」
他愛もない会話。
もし他愛があっても、僕には他愛なんて概念存在しない。
なんてね。格好付けの妄言さ、いつも通り。
いつも通り。
でもこの日はいつも通りになんて、いかなかった。

学校につく。
資料室の窓から見ることができる昇降口は一・二年生専用のものだ。三年生の昇降口は、運動場側にある。
僕達は三年生昇降口について、異変に気がついた。
生徒達が、ざわざわと、集まっている。昇降口の横、南校舎と運動場の間にある庭園、そこにある花壇のまわりに、集まっている。
「何だろうね」
琴音が言う。
「行ってみましょうよ、お姉ちゃん、琴吹サン！」
彩音は真っ先に駆けていった。彩音が生徒達を掻き分けて、人ごみの中に入っていってしまう。
「やれやれ、だね。我が妹ながら直情系だ」
琴音も歩き出す。
「はぁ……」
別についていく義理はないが、僕としても少し気になるので、行ってみる。
生徒達の群れのまわりを旋回し、生徒がいないポイントに着いて、花壇を、見た。
「……」
ソレを、見た。

花壇の土の上、つまり色とりどりの美しいチューリップなどの花たちの中に、椅子があった。
椅子の上に、人が座っていた。
首から上が、なかった。
ノコギリで切断されたのだろうか、切り口は荒い。
腹が、開かれていた。
中身が、椅子を囲むように、配置されていた。
花に、赤黒いベットリした液体が飛び散っていた。
でも、血の量はあまりない。他の場所で殺されて、ここに運ばれ

たのだろうか。
腹は中身がなくなっていたが、そこにスッポリ、顔が、生首が、収まっていた。
目玉が、なかった。いや、正常な位置になかったというだけで、半開きになった口から、二つの目玉は、覗いていた。
腹をさばいている以上、制服もなんとか着ているだけだった。
腕が二本とも、切り取られていた。
見ると、花たちに混じって、花壇に二本の腕は植えられていた。
体中の血がなくなってしまったのだろう。体はしぼんでいた。
制服の胸元に、名札がついていた。
花壇の外に、椅子に座ってるその子の鞄が捨ててあった。
それと、血まみれの顔からも、かろうじて、それが誰だか分かった。

誰が見ても明らかだった。
死んでいた。
奈野奈乃子は、死んでいた。

・つづく・

三章：芸術的な雫根彩音2

1　六月二十九日

結局、僕らはその後やってきた教師達に促され、一旦教室へ行った。

席に着いて、ぼーっとする。

していると、クラスメイトの男子が、話しかけてきた。

「よぉ闇斗。なんだなんだ～？　お前さ、雫根彩音と付き合ってんだろ？」

その話か。面倒だなぁ。

「いいや」

「また強がっちゃってよぉ。でも意外だな～、意外意外。だってさ、お前って頭いい奴が好きなんじゃねぇの？」

「何で？」

人の好みを勝手に決めるな。

「小学校の四年三組の時さ、なんか学年末に文集みてーなのつくったじゃん」

「そういえば」

この男子、四年の時同じクラスだったか。

「で、オマケコーナーみたいなので好きな異性のタイプっての書いたろ？　お前、頭がよくて論理的で清潔な女の子、って書いてたじゃん」

「ああ、そういえばそうだったかな。ごめん、あれ、嘘で適当に済ましちゃおうと思って、書いたんだと思う。別に頭いい子好きじゃないし、どっちかっていうと、苦手」

姉とか、小町夢羽とか、鏡ヶ崎恵仔とか。

「へぇ、そうだったのか。まぁお前、こんなの下らないって感じだ

ったろうしな。ちなみにオレも嘘ついて、ふざけて“同性しか興味ないわぁっ！”って書いたぜ」
うわぁ。
つまんねぇ。
「じゃあさじゃあさ、お前って意外と雫根彩音みたいな馬鹿っぽくて明るい子がタイプってこと？」
「ああ、そうだね」
話を早く終わらせたくて、適当に返事。
「ふーん、なるほどねー。でもよ、付き合ってるなら、明日の準備してるんだろうな？」
「明日？」
「知らないのかよ！　明日、彩音の誕生日だぜ」
「へぇ……」
僕は君がそれを知っていることのほうが驚きだ。
「ま、いいや。そろそろホームルームだし。じゃあな」
「うん」
去っていく、クラスメイト男子。
彩音のせいで、面倒くさいな、いろいろと。

「へぇ、それはとても興味深い」
資料室にて、亜由は言った。
「その殺された奈野奈乃子（なのなのこ）っていうのは、どんな奴なんだ？」
亜由には今、今日の朝あったことを話したところだ。
「彩音の親友、ってやつだ。なんか男っぽい喋り方する奴だった。あまり会話はしなかったけどね。もともと僕はクラスでも口数の少ないほうだし」
「へぇ、そうなのか。その割にはここではよく喋るよな」
「ああ、亜由はなんか話しやすい」
姉に似てるからね。
「そうか。まぁお世辞は結構と言うべきか」

「……」
「それにしても、疑いようもなく他殺だな。ソイツ、うらまれたりはしてなかったのか？」
「多分ね。面倒見がいい子だったから、友達も多かったように見えたよ。……ペルソナだけど」
「ん？」
「いや、なんでもない。とにかくうらまれてることはなかった」
「学校内で殺されたことになるんだろうな？」
「いいや。そうとは限らないよ」
今資料室にいるのは、僕と亜由だけだ。彩音は親友の死にひどく動揺していたので、今は琴音といるだろう、琴音と帰っただろう。
そう、朝のホームルームで、今日は学校を休みにする、と報告があったのだ。明日がどうかは、警察との相談で決める、とかなんとか。
「須藤が行方不明になって小町が死んで、次は奈野か。この学校呪われてるんじゃねぇの？」と言っているクラスメイトが多数いた。三人の内二人は僕が殺したんだよなぁ。
まぁとにかく、今は学校に警察が来ている。つまり、生徒は皆下校していて、僕も本来ここにいてはいけないのだ。
「奈野の死体は腹を開かれて首を切られて両腕も切られていたのに、花壇のまわりの血の量はその割には少なかった。つまり、奈野は別の場所で殺されたんだ」
「別の場所で殺されて、そこに運ばれた、と？」
「うん」
警察もそう考える。だからもしかしたら、明日は普通に学校になるかもしれない。今週末はテストだし、学校側もなるべく授業数を減らしたくはないところだろうし（まぁ、その分夏休みが削られるだろうが）。
「犯人は芸術家（アーティスト）ね」

「ああ、その通り。きっとこの犯人は、死体を飾ることを目的にしてるんだ」
「恨まれてない中学生が学校で殺されて、しかもそんなに飾られている」
「なら愉快犯。殺すことでなく、飾ることの」
そうとう、歪んでいる。
「なぁ、亜由。僕は少しだけね、犯人に心当たりがあるんだ」
「へぇ、そうなの。それだけの情報で。誰なの？」

「雫根彩音」

僕は極々自然に、普通に、さも当たり前のことのように、挨拶のような気軽さで、綿のような軽さで、言った。
そして亜由は極々自然に、普通に、さも当たり前のことのように、挨拶のような気軽さで、綿のような軽さで、頷いた。
「なるほどね」
「あの子はこういう事態を望んでいたよ」
「そうなのでしょうね。あの子は、その親友とやらの死体を見て、喜んでいたんでしょう？」
親友の死体を見て、
喜ぶ人間は、
社会的に見ると、
屑（くず）だ。
でも。
「ああ、そうだよ。あの子はその作品（したい）を見て、歓喜していた、見とれていた、魅せられていた、感動していた」
須藤の死体を見たときもそうだった。
「あの子は、殺されている人間が親しければ親しいほど、魅せられるんだ」
それが、雫根彩音の仮面の裏。

「かつてとても親しくしていた人間との関係が、一瞬で崩れ去る、快感。何の関係もない人間の死体だったら、いくら飾られていてもきっとあの子は感激しない」

仮面の裏は、歪んでいる。

ただ僕が今まで見てきたそれらの中でも、雫根彩音はかなり異常な方。

「築き上げた関係。今まで自分に接してきてくれた親友と、目の前で美しく飾られている親友との、差異」

「あらゆる差異に、雫根彩音は魅了されていたというのね」

歪んでるぜ。

もっとも、自分のことは棚に上げて、ね。

「まぁ、これだけで彩音が犯人だというのは、実に論理的じゃない。本当は全然違うかもしれない。彩音は何も関連していないかもしれない」

「それはその通りでしょうね。だいたい、あの馬鹿っぽい女に人を殺すことができるのか、私はとてつもなく疑問を抱く」

「ああ、ただ、彩音も歪んでる人間だって、僕は言いたかったのさ」

「皆そうでしょ。だって、人間だもん」

「そうだね」

さて、そろそろ学校から出なきゃいけないだろう。

「警察はこの部屋来ないかな？　須藤の死体が見つかったらまずいんだけど」

「ああ、でも一部屋一部屋じっくり見て回ることはないだろうな。一応、須藤の肉片はビニール袋に全部入れて、ダンボール箱の中にでも隠しておこう」

「うん、よろしく。ありがとうね、亜由」

「ええ」

僕は資料室をあとにした。

亜由は、警察が来ているのに資料室にいた。しかも、奈乃子の死を知らなかった。

「ミスしたね、亜由」
決定。亜由は生徒じゃない。そしてあの部屋に、住んでいる。
「どうでもいいけどね」
亜由の事情がどうであろうと、須藤の死体処分が終わるまでは、切ろうにも切れない共犯関係だ。
「互いの利害関係が一致しているなら、信用に値する」
それが人間社会の超基本。

2◆闇斗　同日

彩音と琴音がここに来た。そしてさっき、帰って行った。
案の定、彩音はとても喜んでいた。
美しく彩られ飾られた、かつての親友の死体を見れて。
とても喜んでいた。
今まで僕が見てきた彼女の笑顔の中で、二番目に輝いていた。
一番輝いていたのは、初めて僕と会った日。
僕は彩音の笑顔が好きだ。
彩音の笑顔を、ずっと見ていたい。
「琴音が言ってたことは正しかったんだ」
なら、計画続行だ。
僕が今いるのは、美術科準備室。
真っ暗。埃まみれ。不気味な人形が並ぶ部屋。
「僕は彩音にとても感謝しているんだ。だから、できる限りの恩返し。誕生日のお祝い、プレゼントを」
人を殺すことがいけないらしいことは、僕でも一応分かる。
でも、それが何だって言うんだ？
いけなくても、彩音のためならなんでもやるんだよ。
「さぁて、第二ステージを始めよう」
僕は、彫刻刀（ちょうこくとう）を手に取った。
不気味な光沢をはなつ、彫刻刀。

これを目玉に突き刺して、脳まで届かせて、ぐちゃぐちゃに相手の脳内をかき混ぜる。そうすれば死ぬだろう。それで駄目なら首を絞めれば十分。

標的が来るまで、彩音と初めて会った日のことでも思い出していよう。

静寂。慣れすぎた静寂。

その時、外から大人の話し声が聞こえてきた。

こちらに近づいてくる。

僕は舌打ちする。

「警察か……」

僕は人形たちの中に、姿を隠す。

扉が、開けられる。光が中に入ってくる。

やはり警察らしい男たちと教師らしい男が、部屋の中を覗き込んできた。

「ここは生徒の作品を保管しておく場所です」

「へぇ、そうですか。なるほどね、あそこの人形さん達なんて立派なもんだ」

警察らしい男が、こちらをジロジロと見てくる。

バレたらまずい。汗が、頬を伝う。

ドキドキする。

ドキドキドキドキドキドキ……

「何もねぇなぁ。先生、次のトコ行きましょう」

「あ、はい」

扉が、閉められた。

「ふぅ……」

胸をなでおろす。

今日の標的のほうも、無事にここに来てくれればいいが。

それからしばらく、物思いにふける。

時計がないので正確な時間は分からないが、その後、結構すぐに、標的は部屋に入ってきた。教師や警察達をかいくぐることは無事で

きたらしい。
「やぁ闇斗。彩音の誕生日プレゼントの件で来たんだ」
「ああ、本当にやるつもりなんだね。僕は止めはしないけどさ。じゃあ、要求どおり」
僕は雫根琴音を、殺した。

3　同日

僕が部屋で読書にふけっていると、一階から母の声が聞こえてきた。
「闇斗ー！　お友達から電話よー！」
「はーい」
僕は紅葉の栞をはさむと、本を閉じて机の上に置き、一階のリビングに下りて、受話器を受け取った。何故か母はニヤニヤしている。何だろう。
それにしても、お友達？　誰だろう？　そんな奴いないのだが。亜由だったら友達と呼んでもいいけれど。
「はい。代わりまし――」
『琴吹サン！』
「……」
彩音か……。
あまりの声の大きさに、耳がジンジンと痛む。電話なんだから、もう少し小さな声で喋ってほしい。
ちなみに今の時刻、午後五時半。
「何？　君の家にはもう行かな――」
『帰ってこないんです！』
「……？　誰が？」
『彩音よりも先に帰ったからもう家にいると思ったんだけど、彩音のほうが家のついたの先で、全然帰ってこなくて、どこかに遊びに行ってるのかなって、でも一回も帰ってきていないってお母さん言

うし、でも大丈夫だって、でもでも彩音の家、門限五時で……それで』

泣き声で、全然何言ってるのか分からない。全然僕には要領を得ない。

「落ち着いて、彩音。何かあったのか？」

『落ち着いていられません！』

「……！」

『あ、……ごめんなさい……、本当すいません、取り乱しちゃって……』

「いや、いいんだ。それで？　何があったんだ？」

『お姉ちゃんが、帰って……こないんです』

「……」

確かさっき、門限が五時だとかどうとか。今、五時半。琴音は真面目ちゃんだから、こんなこと今までなかったのだろう。

嫌な考えが、僕の頭を支配する。

奈野奈乃子の死。

彩音の、本性。

親しければ親しいほどに……

『彩音、どうしたらいいですか？　警察に知らせなきゃですよね？　琴吹サン、頭いいから……、あ、琴吹サン、何か、知ってますか？　知ってたら、教えてください！』

「知らないよ」

『どんなことでもいいんですッ！』

この子、混乱してる。電話ごしだから、これが演技なのかどうなのか見分けることは僕にはできないけれど。

「警察に知らせたほうがいいよ」

『……、はい、そうですよね。分かりました……』

「……」

何か、言ってあげるべきなのだろうか。

何か、言うべきなのだろうか。

何も、言わないべきなのだろうか。
何が、何なのか。
……分からない。僕には、分からない。僕だから。僕であるが故に。
『あの、琴吹サン』
「……何？」
『今から、少しだけでいいんです。……会えませんか？』
僕は、
僕はどうしたら、
どうしたら僕は、
分かるんだろう。
いろいろな、ことを。
「ああ、いいよ」
これが、初めの一歩になったら、
嬉しいな。

僕と彩音は、近くの公園で会った。
夏は日が長い。だからまだ、明るい。
「……やぁ、彩音」
誰もいない。
公園には、僕ら二人以外、意外、遺骸、誰もいない。
と、こんなのはただの言葉遊び。
同音異義語の、無駄遣い。
彩音はベンチで、うつむいて座っていた。こちらに気付き顔をあげる彼女。
「琴吹サン……」
憔悴（しょうすい）、していた。
まだ何も決まっていないのに。
琴音が死んだなんて、何も決まっていないのに。
何でだろう。何でだろう。何で決め付けてるのだろう。

犯人……なのだろうか。
いや、今はそういうの考えるときじゃ、ないだろう。
「お姉ちゃんが」
「うん」
「帰ってこないんです」
「うん」
「普通だったら、なんでもないのかもしれないですけど」
「うん」
「お姉ちゃんがこんなこと、あり得ないんです」
「うん」
僕は、彩音の隣に、腰掛ける。
「どうしたら」
「うん」
「どうしたら、いいんですか？」
じゃあここは一つ、真面目に、答えてあげよう。

「罪悪感を感じず、羞恥心を感じず、後悔を捨てて、思い出を捨てて、記憶を封印して、悲しみを封印して、そして、堂々と、何もなかったかのように、本当にそのまま真っ直ぐに、生きるんだ」

姉が死んだとき、僕がしたくて、できなかったこと。

「そんなの……」
彩音は、泣き出す。
「そんなの無理ですよ……」
涙を、こぼし出す。
「そうだよね。君達、仲、すごく良かったもんね」
特に彩音は琴音にべったりで。
琴音は彩音の面倒を見るのが好きで。
悲しいよね。

それが、ペルソナの上に成り立つ関係でないのなら。
「琴吹サン」
「何？」
「いえ、名前、呼ばせてください」
「うん」
どうもよく分からないことを言ってくる子だ。もしくはこれが普通で、僕がそういうことを知らないだけなのか。分からないだけなのか。
「闇斗」
名前。僕の名前。それを彩音は呼ぶ。何故か、幸せそうに。
姉が僕につけた名前を。
「闇斗。闇斗闇斗闇斗」
呪文みたいに、ずっと、僕の名前を彩音は、呼び続ける。
「闇斗闇斗闇斗闇斗闇斗闇斗闇斗」
僕の名前を唱えることで、悲しみを、中和させているかのように。
何かに満たされているかのように。

「闇斗、好きです」

今までと、違くて。
何かソレは、とても大事なことを言ったように、思えた。聞こえた。響いた。

「うん」
僕は、ただ、頷く。
何をしたらいいか分からなくて。
本当に、はじめ彩音が告白してきてから、分からないことばかり。
最近、分からないな。
いろいろなことなんて、曖昧模糊じゃなくて。
全部、分からない。

彩音は、抱きついてきた。
僕は特に何も思わなかった。
想わなかった。
そう、自分では思っているけど、実は何か思っていたのかも、想っていたのかも。
何かって、何？
しばらく、時間が経過する。
流れるように、この公園だけ、全ての不幸や汚濁や腐敗から、隔離されているかのように、やわらかい空間。
やわらかいくうかん。
やわらかいじかん。
やわらかいきもち。
分からない気持ち。
分からない時間。
分からない空間。
ただ、純粋に、思えた。
思うことが僕にも、できた。
彩音が、僕に、口付けする。
長い時間。それか短い時間。とにかく時間が、経過する。
分からないよ。
解からないよ。
分かりたいよ。
解かり……たいよ。
彩音は、また僕を、強く抱きしめてくる。
好きとか嫌いとか。何なんだろう。
僕は、彩音が、好きなの？
彩音は顔を僕の肩に埋めて。
強く、埋めて。
……。

「ありがとう」

少し間があって、彩音が僕に、礼を言う。
少し間があって、彩音が僕から、離れる。
少し間があって、また会う約束をして、彩音が僕に、背を向ける。
少し間があって、僕一人だけになって、僕も公園から、出て行く。
口演から、出て行く。

4　六月三十日

所詮次の日が来る。
「はは……」
朝起きて、何故か最初に、笑いが出た。
今日起こる茶番劇が容易に想像できて、笑いが出た。
「ふざけんな、僕」
今日の学校は普通にあるらしい。昨日の夜、連絡網がまわってきた。
顔を洗う。
朝食をとる。
朝食ととりながら、テレビでニュース番組を見る。
地方のことを伝えるニュースになり、昨日隣町で、鷺直美という女性が死んだとかいうニュースがやっている。隣町でも死人かよ。
その次は、女子中学生が殺された、というニュース。奈野奈乃子のことだろう。
歯をみがく。
鞄を背負う。
家を出る。
「おはようございます、琴吹サン」
「……うん」
雫根彩音は、普通だった。

明るくもなく、暗くもなく、社会的に見て、普通だった。
晴れ晴れと、していた。
でも空っぽ、なのかな？
でも何故だろう。すごく、幸せそう。
「一緒に行きましょう、学校」
「そうだね」
二人で、歩いた。
なんてことはない、普通の中学生なら誰でもいつでもしているような、会話をしながら。
時に笑って。
時に驚いて。
でもその会話に悲しみはなかった。
汚くない、会話だった。
でも中身は、なかった。
でも彩音は相変わらず、幸せそうだった。
なんでだろう。
邪魔者が消えた、からだろうか。

学校につくが、何処（どこ）も騒いでいなかった。
普通だった。
雫根琴音は、チャイムが鳴っても、教室に入ってこなかった。その席は、須藤や夢羽の席と同じように、ぽっかりと、空いていた。主人をなくした席たちは、ただただ空虚だった。
今日の朝はホームルームなんかではなく、運動場で全校集会だった。つまり、朝礼。一時間目まで食い込む、長いものらしい。きっと最近、行方不明者やら死亡者が多発しているので、緊急に開かれるものなのだろう。論理的に推測。
全校生徒が運動場に、うじゃうじゃと、気持ち悪く集合・整列。
こんなにいるんじゃ、何人か死んでもどうってことない。
人間は増えすぎた、無駄にね。

全校集会は、無駄に長い教頭の“よく気をつけて登下校してください。なるべく大人数で固まって帰り、一人で帰るなんてことがないようにして下さい”みたいな話と、ほとんど同じようなことを繰り返しているだけの校長の長い話と、最後に服装とか割とどうでもいいことについての生徒指導の教師の長い話があって、終わった。

ぞろぞろと、と。

ぞろぞろと、クラスごとに、教師陣の指示に従って、昇降口へ移動していく。

僕ら三年生も、自分達の昇降口へ歩き出す。

と、その時。

遠くが騒がしいことに気付いた。

叫び声、大声。声声声。

一年二年の昇降口からだ。つまり、北校舎と南校舎を結ぶ渡り廊下のある昇降口のあたりから。そっち側から、声声声声声。

何人かの野次馬生徒達が、列を乱して、走り出す。

何かあったのかと心肺した教師達が、走り出す。

皆が、走り出す。

異常に向かって。

僕も、走る。

普通だったら、決してしないが、でもしかし、今回は特別。

そして、僕は、着いた。

南校舎を迂回して、渡り廊下のソレを、見た。

渡り廊下二階分の高さがある。一階の部分が昇降口になっていて、屋根がついている。渡り廊下の一階と二階の間から屋根が出てきている、と想像してもらえば十分だろう。

その屋根の上に、ソレは並んでいた。

あのきれいだったショートヘヤが、血で汚れてる。

あの知性的だった顔が、血で汚れてる。

あの、あの、あの雫根琴音が、

血で、汚れている。

まるで、だるま落としみたいだ。

屋根の上を、左から順に、

右の足首、三つに切断された右足、お腹の右側、胸の右側、右の手首から肘まで、右の肘から肩まで、目玉。そして中央に顔。つぶれた目玉。左の肘から肩まで、左の手首から肘まで、胸の左側、お腹の右側、三つに切断された左足、左の足首。

それで左右の手首は、顔の口から、だらんと垂れていた。

最……悪。

差異……悪。

骨も肉も、ぐちゃぐちゃだった。全部、かろじてソレだと分かるだけだった。

見るも無残だった。汚かった。それはもう生き物ではなかった。気持ち悪かった。衆目に晒されて。あんな醜くて、でも美しく飾られて。生きてたのに、ついこの間まで喋って、笑って、生きていたのに。もう届かない。何も届かなくなった。駄目駄目。死んだ死んだ。亡くなった。無くなった。何もかも、消失した。

人間の中身が見れる。ああいう風に、なってるんだ。

喉頭、甲状腺、気管、肺、肋骨、心臓、横隔膜、肝臓、脾臓、膵臓、胃、小腸、大腸、子宮、胆嚢、エトセトラ……エトセトラ……

顔の後ろに、大きめのビニール袋があるのが見える。その中に、たっぷり血液が入っていた。

きっと犯人は、渡り廊下の窓からあの屋根の上に出て、あれを並べて、窓から校舎内に入ったのだろう。朝礼の間に。

ビニール袋の横に、鞄やぼろぼろの服がある。

僕は、彩音の姿を探す。彼女もこれを、見ているのだろうか。

探して、人ごみの中をかきわけて、歩いて、

見つけた。

彩音は屋根の上に並んだ姉を、見て、

笑っていた。
ただその笑いは、幸せとかじゃなくて、何だろう。
「ん？　幸せ？」
屋根の上にある琴音の顔を見る。
血で汚れてるし、口には手がつめし込まれてるし、目はないけれど、でも、僕には何故かそれが分かった。
琴音のその死に顔は、幸せそうだった。
何で？　何で何で何で？
何であんなにも琴音は、幸せそうなの？
死んだのに。死んだのに死んだのに死んだのに。
もしかして、妹が喜んでるから、嬉しいの？
じゃあ、妹を喜ばせたくて、死んだの？
妹を喜ばせたくて、殺されたの？
妹を喜ばせたくて、飾られたの？
芸術的に。醜く美しく。対義語の矛盾を超えた奇跡と軌跡を残して。
昨日、クラスメイトの男子が言っていた言葉が頭をよぎる。
今日は、彩音の誕生日で、琴音の誕生日。
妹を大事にしていた、琴音。琴音琴音。
集会中、生徒は全員運動場にいただろうし、遅れてくる奴も途中抜ける奴もいなかった。これをできたのは、やったのは、一体誰なんだろう。
分からない。分からない、分からない分からない。
曖昧模糊。
解からない。解からない、解からない解からない。
理解不能。
もう一度、彩音を見る。
喜んでる、喜んでる、あれ、……よろこんで……る？
喜んでるけど、あれ？
あれあれあれ？

雫根彩音。その、本質は――？
「誕生日。犯人。共犯。琴音。姉。妹想い。しっかり者。彩音。妹。死体好き。芸術肌。資料室。闇。ペルソナ。奈野奈乃子。友達。親友。僕。告白。好き。大好き。鬱陶しい。調子狂う……よろこんで、る？　ほんし、つ？」

繋がった。

「フフ……」
群集の中。今ここで、
笑って、しまいたい。
相変わらず、分からないことばかりだ。
意味が分からない。
でも、何がどうなってるのかは、分かった。
何が起こっているのかは、分かった。
ゆがみが、分かった。
ひずみが、分かった。

論理的に、殺してやるよ。

・つづく・

三章：芸術的な雫根彩音3

1　六月三十日

やはり、当然、必然、学校はまたもや休みとなった。
生徒達は、全員帰ることを強制される。
ただ、僕は教室に戻る途中。
呼び出しを受けていた。
「琴吹サン、きっと学校休みになるけど、終わった後、資料室に、行きますよね？」
「うん」
「じゃあ、そこで、何があっても、絶対に、待っていてください」
「分かったよ彩音」
こんな感じ。
そして僕は、資料室に向かっている。
警察が来る前に。渡り廊下を渡り、階段を上がり、廊下を歩き、資料室の扉を開けた。
「なんだ、君か」
亜由は、物騒にも、ナイフを構えていた。
「何してるの、亜由」
と、亜由に近づいていく僕の足が、何かにあたった。
見る。
「！？　……いや」
一瞬驚いた。本物の、人間の腕かと思った。
「人形の腕だ」
「分かるよ。何でここにあるの？」
「さっき、殺されそうになった」
「……」

何を言ってるんだろう。
「そういえば、あそこに並べられているのは、あの彩音とかいう女の姉らしいじゃないか」
資料室の窓からは、例の死体が並べられている屋根を見ることができる。余談だが、ベランダは資料室の隣の教室までしか備え付けられていなく、資料室は窓から落ちたらそこまでだ。前に亜由に落とされそうになったな。まぁ、この下は花壇だから、落ちてもそこに落ちれば、死にはしないかも……
「何で知ってるの？」
この学校の生徒じゃないのに。
「髪型が違う。前にここで、彩音とかいう女、言っていたじゃないか。“お姉ちゃんに頼んで連れてきてもらう”とかなんとか」
そういえば。読書してたけど、意外と僕らの話聞いていたんだな。
「ところで、あそこにアレを並べてる奴、私見ていたぞ。生徒達がゾロゾロ運動場にほうへ行った後、あの廊下の窓から屋根に出て、並べてた」
「……」
これで確定。亜由は生徒じゃない。
亜由のほうも、どうせバレているんだし、みたいな感じなのだろう。
まぁ、そこは関心なし。あまり突っ込んじゃいけない気がする。
亜由怖いし。
「さきほど私を殺そうとした、人形だったよ」
「……人形ですか」
「ああ。さっき鋸を持った人形がここに押しかけてきてな、いきなり襲ってきたんだ。私は護身用にいつでも制服のポケットにナイフを入れているから、それで腕を切り落としてやった」
そういや亜由は夏でもブレザー着てるけど、暑くないのかな。僕はもう夏服だけど。
「その腕が、それだ。人形はそれでも襲ってきたんだが、次に額に

ナイフぶっ刺してやると、逃げていったよ」
だがまぁ、犯人は生徒でも教師でもないし、証拠として腕もここに落ちているし、亜由はこんな冗談言うはずないし、
だいたいこの前、呪いなんてあるか、って講義したら、もうすでに呪いによって窮地に立たされてたしな……
「ふふ、分かるぞ、君が何を言いたいのか。人形が動くはずない、と言いたいのだろう？」
「まぁ……ね」
「でも、たとえばその人形を作った人間が、よほど思いを込めて作った。もしくは、誰かがその人形をとても愛しく思った。それで、人形に魂が宿った、と考えれば不思議じゃないだろう」
「……」
「泥人形（ゴーレム）、なんて例もあるし」
それなら姉から聞いたことある。
「ゴーレムって泥人形だろ？　作った主人の命令だけを忠実に実行する人形。土をこねて、呪文を唱えて、ｅｍｅｔｈ、という文字を書いた紙を人形の額に貼り付けることで完成する、ってやつ」
ｅｍｅｔｈ、真理という意味。
「で、確か壊すときはｅを消して、もしくは切り取ってｍｅｔｈにする」
ｍｅｔｈ、死という意味。
「よく知ってるじゃない。すごいわね。そうよ、それであってる。細かいこと言うとそんな簡単じゃないけれど。ユダヤ教伝承に登場するのよね。まぁ、とにかく、それだって土に魂を宿らせて、動かす。今回の人形だって同じ感じでしょ」
いや、それはそのゴーレムというのが本当にいると仮定した場合の話だろ。
「それにしても、人形、か」
でもおそらく、本当なのだろう。
突拍子もないけれど。

辻褄は合う。
そういう、お話。
その時、扉が開いた。
「やぁ、彩音」
「……」
一瞬、本当に一瞬、注意していなければ分からないほどの刹那的時間、絶句していた。
でも、すぐに平常さを取り戻す。
「はい。琴吹サン、亜由サン」
きっと、驚いたのだろうな。
亜由は人形が、殺してくれたはずなんだから。
そのつもりで、僕に“何があっても、絶対に、待っていてください”と言っていたのだから。
でも、殺さないといけない。
須藤を殺したのが僕だと知っていていいのは、僕と亜由だけなんだよ、やっぱりね。
「着いて来て彩音、話がある」
「え、あ、はい」
僕はその小さくてやわらかくて暖かい手をとって、
屋上に、向かった。

2◆闇斗　同日

僕は闇斗。
僕にこの名前をつけてくれたのは、彩音だ。
いつ作られたのか。それは分からない。
ただ、ずっと、この美術科資料室で、光も当たらないこの部屋で、何も思わず、何も言わず、本当にただただ、埃をかぶり続けてきた。
他の人形たちと並んで立っているだけ。生きてなんていなかった。
永遠にここにいるしかないんだ、それだけは分かっていた。

暗くて、陽のあたることのないあの部屋の隅で、崩れていくんだ、それだけは分かっていた。

だんだんと体の色も変わっていく。

たまに生徒や教師が部屋に入ってくるだけ。僕達にかまう者などいない。不気味がって見て、すぐに部屋から出ていく。

埃をかぶって、そこにずっと立っていた。朝なのか夜なのかも分からない。どこかからか人の声が聞こえて、たまにチャイムの音が聞こえるだけ。僕は造られた当時のような温もりは、もうずっと自分には与えられないんだと思っていた。造られた時はよかった。僕を造った人は、完成した僕を見て満足そうにしていた。それでも、僕を「作品」としてしか見ていなかったんだ、ということも分かってきた。

僕は人形なんだ。いつか朽ちる日を、待っていた。特に退屈だとか、悲しいだとかは思わなかった。だって僕は人形なんだから。

心なんて持たない人形。

この部屋に捨てられた人形。

人間になりたい、とも思うことすらできない人形。

それだけ。

立ち続ける。

経ち続ける……

そんな時だった。この日、きっと僕は初めて“生まれた”んだと、思う。

美術科準備室を、一人の少女が訪れた。

興味本位で、入ってみた、という感じ。どうせいつも通り、不気味がるかすぐに飽きるかで出て行くと思っていた。

しかし少女は、突然数多く並んでいる人形の中から、僕のほうへ、近寄ってきたんだ。

「わぁ……」

少女は、感動したかのように、感激したかのように、僕を見た。

「きれい……」

少女は、幸せそうな顔になって、人形の僕に、抱きついてきた。
その時だった。
「ア……」
自分でも驚いた。少女も驚いていた。
僕は、言葉を、話したんだ。
「アリガトウ……」
僕が最初に言った言葉はそれだった。なぜか、その言葉が口から洩れていた。
次の瞬間、僕は膝を折り、床に倒れた。両目から、なにか熱い液体が流れ出した。それが涙というものだということを、僕は知っていた。
涙は流れ続ける。
「ア……ア、あああああっ」
僕は叫んだ。人形である僕が、涙を流している。声を出している。動いている。嬉しい、そんな感情が胸の奥から込み上げてきた。
少女はそんな僕を見て、目を見開かせて驚いていた。でもやがてニッコリと微笑むと、僕に手を差し出したのだ。
「私、雫根彩音！　お友達になろうよ、人形さん！」

あれから、半年くらい経ったんだろうか。
僕に命を吹き込んでくれた彩音。
彩音を幸せにしてあげたい。彼女は僕に希望をくれた。ずっと独(ひと)りだった僕に、初めてできた友達だった。彼女は僕にとって太陽だ。次は僕が何かお返ししなきゃなんだ。僕にできる精一杯のことをやらなきゃいけない。最高の誕生日プレゼントを彼女に贈る。彼女は笑ってくれるに違いない。僕の好きな笑顔を、きっと見せてくれる。
二人で笑いあえる、微笑みあえる。
でも、何をすればいいんだろう。悩んでいた僕に、一昨日。つまり月曜日の昼休み。彩音の双子の姉である琴音は教えてくれた。

「ああ、彩音が多分一番喜ぶのはね、僕らが死ぬことだよ」
と。
「彩音は芸術的な死体を見るのがすごく好きなんだ。彩音って、家だと猟奇殺人とか調べたりしてるんだよ。読んでる本もそんなのばかりだし。で、それが自分にとって親しい人間であればあるほど、喜ぶ。僕には分かるよ。だって、世界に一人しかいない妹のことだもんね」
と。
「僕を殺して、美しく飾るんだ。するときっと彩音は喜ぶと思うな。うんうん、僕も今年は彩音にどんなプレゼントあげようと思ってたけど、そうだね、今年はそれをやろうか」
と。
「あは、僕が死んでしまうことになるけれど、彩音のためなら僕は、何だってできるな。再度繰り返すことになるけれど、世界に一人しかいない妹さ。双子といっても、彩音は僕の妹なんだ。僕が生きてるのは、彩音のためなんだよ。僕のあとには、君が自殺すればいい。崩れた人形なんて、彩音、喜ぶんじゃないかな」
と。
「でも、本当に喜ぶのかな？」
僕は問う。
「あは、じゃあさ、彩音の友達で試してみるかい？　奈野奈乃子って子さ。僕にとっても友達だけど、妹と天秤にかければ、全然彼女が死ぬのに抵抗はないね。きっと奈乃子も喜ぶと思うな。だって親友である彩音に喜んでもらえるし」
そして僕は言う。
「そうだね。それじゃあそうしよう」
琴音とは、彩音と初めて会ってから一ヶ月くらいしてから、彩音に紹介されて会った。
琴音は、とても妹想いで、僕も好感が持てた。
琴音も彩音に笑顔になってもらいたいんだろう。僕もそう。

その計画だと僕も琴音も死んじゃうけれど、彩音のためならどうってことない。

で、ここまで計画通りに進めてきた。奈野奈乃子は琴音がここに来るよう言ってくれて、僕が殺した。そして夜中遅くに、庭園に飾った。琴音は昨日の放課後、自分からここに来た。それで殺して、今日集会とやらが行われている間に、あの屋根のところに飾った。本当は授業中にやろうと思っていたけれど、集会というのが行われて、好都合だった。

でも、少し予定変更。

今日の朝、彩音はここでこう言ったのだ。

「それにしても、奈乃子の死体、きれいだったなー。お姉ちゃんも消えて、どうやら殺されちゃったみたい。でも、どこに飾られてるんだろう。見たいなー。あ、でもでも、闇斗は死なないでね？　あ、でも犯人サンは人形なんて殺すわけないか、うん、なら安心。死んでほしいって言うと、資料室にいるあの女、亜由、だっけ？　アイツに死んでほしいなー。だって琴吹サンと付き合うのに、あの女邪魔なんだもん！」

それを聞いて、僕は思った。

僕じゃなくて、その亜由って女が死んだほうが、彩音は喜ぶんじゃないだろうか。

亜由という女については、彩音から前に聞いていた。資料室でのことや琴吹闇斗に関することは、この部屋で僕と琴音に自慢するように話していたからだ。

ちなみに僕の名前、闇斗。それは彩音が二年前から好きだという琴吹闇斗からとられた名前だ。僕の顔が、その琴吹闇斗に似ているらしい。もしかして、彩音が最初この部屋に来て僕のところに真っ先に歩いてきたのは、そういう理由があったんだろうか。

で、先ほど亜由を殺しにいったんだが。腕を切り落とされ、頭を刺された。血は出ないけど、激痛がする。

どうすればいいんだろう。このまま、どうすれば。どうすればい

いんだろう。
亜由を殺さないと。彩音を喜ばせないと。琴音や奈野奈乃子のためにも、彩音を幸せにしてあげないと。
その時。
美術科準備室の扉が、開いた。
「……？」
入ってきたのは、琴吹闇斗と、亜由だった。
「何しに……来た？」
僕は、切り落とされていない左手で、鋸（のこぎり）を握り、立ち上がる。フラフラ、と。
「やぁ人形さん。僕らはね、君にあることを教えにきたんだ」
琴吹闇斗が言う。
コイツが、彩音の好きな人。
コイツが、僕に似てるという人。
その隣、亜由。
そういえば、琴音は言っていたよな。
彩音は、死体が親しい相手なら親しい相手ほど、喜ぶと。
なら、この琴吹闇斗を殺せば。
闇斗は二人も要らないし。
「フフ……いいところに来てくれたね」
僕は二人に近づく。
「おお本当だ。喋れるし、動けるのか。すごいな。ただね人形さん、君は誰のためにそんなことをしているんだい？」
分かりきったようなことを訊くな。
「決まっているだろう、彩音のためだッ！」
「へぇ、彩音のため、ねぇ」
「何がおかしい！」
殺す殺す。コイツ気に入らない。殺す。
そして琴吹闇斗は言う。
軽く、当然のことのように、なんの感情もこもっていないような、

その声で。

「でもさ、雫根彩音は、死んだぜ？」

……。

「何を驚いてるんだ？　見に行くか？　北校舎と柔剣道場の間のアスファルトの上でソイツ、潰れてるぜ？」

……。

「おいおい、なんか言えよ人形さん。別に人形は悲しいとかそういうの、思わないんじゃないの？　一緒に行こうよ、僕は彩音のこと結構好きだったからさ、拝んどかなきゃ。葬式には行けそうにないからね。あ、でもさ、子供が二人も一気に死んだら、彩音の両親、自殺しちゃうかもね」

聞いてなかった。

二人を左手で突き飛ばして、僕は走った。

「嘘嘘嘘

いるんでしょ？　いてくれるんでしょ？　笑ってよ、無邪気にも邪気にも、心底でも偽造でも、僕に微笑んでよ。

琴吹闇斗。ふざけやがって。

「彩音が死んだなんて、あるわけないじゃん？　ないよね？　ないよな。ないの？　ないか？　ない。ないんだ？　ないっつってんだろォがッ！」

殺す殺す殺す。彩音も喜ぶし、僕も喜ぶ。皆望んでるんだ、琴吹闇斗の死を。なら僕が殺す。殺す飾る、飾って殺す、殺して飾る、飾るために殺す、殺すために飾る、殺したから飾る、とにかく殺す。

「だいたい、彩音が死んだら、僕がここにいる意味がなくなっちゃうじゃないか」

友達なんだ。親友なんだ。

「彩音のための僕だ。彩音だけのためのこの僕なんだッ！」

希望なんだ。太陽なんだ。

息遣いも荒いままに、僕は走り続ける。

「僕が朽ちてもこの世界が朽ちても何が朽ちても腐っても壊れても変わっても無くなっても構わない！　僕にとって世界なんて彩音だけだッ！」

意味なんだ。意義なんだ。

僕の。生き。る意。味で意義で。

ああ、自分が泣いてることに気がついた。なんだろう、胸が苦しい。痛い。吐いちゃいそう。なんでなんで、僕人形なのにさ。

北校舎と柔剣道場の間のアスファルトの上。

冷たさの上。

雫根彩音が、友達で親友で希望で太陽で僕の生きる意味で意義が、死んでいた。

「ア……あアア……」

理解、できなかった。

認識、できなかった。

理解、したくなかった。
認識、したくなかった。
何も、できなかった。
何も、してあげれなかった。
「あああ……アあぁア……」
彩音が死んだ？　どうして？　なんで？　本当に死んだの？　僕に希望を与えてくれた人。はじめての友達親友。僕にとっての希望太陽。生きる意味意義。それが……消えた？
消えたって、死んだ？
死んだら、終わりなの？
こんなの、あんまりじゃない？
何でなの？　どうしてなの？　誰に訊けばいいの？　訊いて答えてくれるの？　答えなんてあるの？
「ああ、あああ……ッ！」
嫌だよ嫌だよ助けてよ彩音助けてよ救ってよ彩音救ってよ認めないよこんなの嫌だよ嫌だ嫌だやめてよ違うよ、
こんなはずじゃ、なかったんだよ。
「あぁッ！　あッ！　あああああああああああああああああああああッ！」
目から涙があふれ出た。力の限り声を張り上げた。
嘘だ。彩音は死んでない。今日は彼女の誕生日なんだ。この後、二人で一緒に楽しく祝うはずだった、一年に一度だけの大切な日なんだ。僕のプレゼントはどうなる？　彼女のために僕は今までやってきたんだ。人を殺したんだ。彼女の親友も双子の姉も。
呆然と呆然と呆然と呆然と、冷たさの上で潰れている彩音を見る。飛び散る血。流れ出る血。曲がった手足、捩（ねじ）れた体、ぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ……
「あああああああああああああッ！　あああああッ！　あああッ……！」
喉が潰れた。僕の体のどこに水があったのか分からなく普通に考

えて出るはずのない涙で、目がぐちゃぐちゃになった。信じられないほど熱くて体中がドロドロにボロボロにガタガタに……

とても長い時間。あの暗く埃まみれの部屋にいた。そこに彩音が現れて、僕にいろんなことを与えてくれた。教えてくれた。生きることの素晴らしさ。せっかく知ることができたのに……

彩音に、手を、伸ばす。

「誕生日おめでとう、彩音」

喉は潰れたはずなのに、声が、出た。

「彩音は僕のことも好きって言ってくれたよね」

視界がかすむ。

「嬉しかった」

今までの、短い人生が、場面が、頭の中をかけめぐる。

「楽しかった」

笑った彩音。僕に向かって、楽しそうに笑ってくれている。

「幸せだった」

人形だけど。人形だけど。ただの人形だけど。それは元から無理な望みだったのかもしれないけれど、でも、やっぱ、彩音を喜ばせてあげたかったなぁ。

「本当はもっと話したかったな。遊びたかったな。いろいろ、教えてもらいたかったな――」

ああ、生きることって難しいんだな……

大事なものができたと思ったら、すぐに壊れちゃうんだ……

「――ありがとうね。僕も彩音が、大好き、です」

僕は、崩れ落ちた。

3　同日

僕と亜由は、ソレを見た。

屋上から転落し、仰向けに潰れている、ぐちゃぐちゃの少女。
そして、その少女に、残った左手を伸ばすような格好をつくって、バラバラになっている人形。
血で花を咲かせている少女に、それを求めるようにする人形。
「芸術的だね」
まさにこれこそ、彩音の大好きな芸術的な死体（アート）（さくひん）だ。
見てみると、人形の顔は、どこか僕に似ていた。
「うーん、でも意外ね」
隣で亜由が、呟いた。
「自分が芸術になれたんだから、喜ぶんじゃないかな、って思ってたけど。あくまで見るのが好きだったのかしらね」
血で汚れた散切り頭の少女。その顔は、とても幸せそうではなかった。嘆いているような、悲しんでいるような、絶望しているような、ペルソナを崩された、残骸。
「何言ってるんだ亜由」
僕は亜由に言う。
「彩音はちゃんと、芸術になれて幸せそうだったじゃないか」
「？」
「僕は帰るよ。警察に見つかったら面倒。じゃあね」
「ええ、そうね。私はここでしばらく死体観察」
「……」
案の定だ。
僕は小さく溜息をついて、その場から、立ち去った。
おかしなことばかり知っている、不思議な少女、亜由。この学校にはいないはずの人間。
亜由は何者なのだろう、それを知るのには、あの日記を見るのがいいように思えた。亜由がつけている日記。彼女はあれに何を書いているのだろう。
今なら、資料室に戻り、見ることができる。
いや、今はやめておこう。早く帰りたいし、資料室に行くのも面

倒だ。
「これは論理的じゃないけれど」
それに、いつか見れる時が来るだろう。
その時に、全ての謎が解け、真相が明らかになる。僕にはそんな予感があった。
ただそれは、先の話さ。

4

回想。暇だから、回想。他に考えることがないから、回想。
結局今週は、ずっと学校は中止の予定らしい。テストも先延ばし。当たり前だ。三人連続で生徒が校舎内で死んで、さらにそのうち二つは完璧に殺人で、犯人は見つかっていないんだから。
「ま、一生見つからないだろうな。犯人は人間ですらないし、もう崩れたから」
というわけで、自宅。
というわけで、前述の通り、回想。
あの、屋上での話。僕と亜由が人形のいる美術科準備室に行く直前の話。
……。

僕は屋上に到着した。誰もいない。下から見えない位置まで、少女の手を引いたままで歩き、途中で手を離して五歩くらい進んでから、振り返り、少女と向き合う。
「屋上なんて来て、何なんですか？　琴吹サン？」
少女は少し不安げにしている。
「琴吹サン、ねぇ……」
僕は溜息まじりに言う。
「君は僕のことをそんな風に呼んでたっけ？　いい加減さ、仮面は外そうよ」

「ぺる、そな？」
怪訝そうな顔をする少女。
「それでさ――」
僕は問いかけた。
「何のつもりなんだ？　琴音」
少女は、否、雫根琴音は一瞬、停止した。
そして直後、琴音はいつも通り、微笑する。
「あはっ、すっごい闇斗。なんで分かったんだい？」
その微笑。ペルソナ。ペルソナ被り。
「君の演技は完璧だったよ。ただ、僕は人の本質を見れる能力があってね。いくら君が完璧に演技しても、本質は雫根琴音のソレだ」
あの時。バラバラにされた彩音の死体が屋根に並べていたのを眺めていた琴音を見て、僕はその本質を見て、真相に気付けたんだ。
この下らない一連の曖昧模糊な、茶番劇の真相に。
「うんうん、さすが闇斗だよ。当然だよね。闇斗、もう全部分かってるんだろう？」
「まぁ、だいたいはね」
空が底抜けに明るい。ここから見える世界は、ひたすらに平和だ。
ふわふわ漂うような時間。
「簡単な話だ。君は“動く人形”と、それが起こすこの連続殺人事件――もっとも君が指示した、もしくは誘導したんだろうけど――とにかくこの事件を利用して、妹とすり替わった」
誰もそれに気付けなかった。僕のようなペルソナ崩しを持っていない限り。多分その人形とやらも、気付けていない。
「ああ、やみ……いや、人形のこともバレてるのか。美術科準備室にいる、動く人形。どうやら彩音と出会って動けるように喋れるよ

うになったようなんだ。あは、面白い話だよね。小説よりも奇だ」
美術科準備室。よし、知りたいことの一つを知ることができた。
そこに行けば、人形に会えるみたいだ。
「昨日、僕に電話をかけてきたのは、君だった」
「うん」
あの公園で僕と会ったのも、琴音だった。
「簡単な話。荷物と髪型を取り替えたんだ。君は散切り頭になって、君は彩音をきれいなショートカットにした。もっとも、切ったことがバレないように、極力切る量を減らしたんだろうけれど。それと鞄（かばん）、靴（くつ）、名札の交換」
「あと下着ね。じゃないとお母さんにバレちゃう」
「ああ、うん」
気を使って言わなかったのだが……
「多分昨日の朝の時点では、まだ入れ替わっていなかった。入れ替わったのは、昨日の放課後だろう？」
彩音と琴音は一緒に帰っていったから。そして僕は資料室にいた。
「そうだよ。人形にイタズラしようってことでね、入れ替わったんだ。面白そうだろ、って言ってね。人形が、髪型とかが変わっても彩音だって分かるか試そうとしてね。それと、もう少しで彩音の誕生日だから、僕のフリして、彩音に何かプレゼントをあげるつもりなのかを聞き出したらいいよ、とも言った」
面白そう。それだけの理由でも、あの子なら、彩音なら承諾しただろう。大好きな姉からの提案だから。
「まぁ彩音が一番気になったのは、闇斗、君が僕の格好をした自分を見て彩音だって気付けるかってことだったみたいだが。あとね、僕ら髪伸びてきていたから、どのみちそろそろ切るつもりだったんだ。だったら一度やってみようってことで、僕が持っていたハサミで、学校裏のところでお互いに切ったのさ。鏡は彩音が持ってたし」
まぁ女子だから、鏡は持ってるだろう。
「人形には、僕を殺すように指示していてね。僕の決心が鈍ると嫌

だから、来たら話を聞かずにすぐに殺せって言っておいたんだ」
「ああ、彩音は芸術的な死体が好きだからね。それが親しい人間であればあるほど。君はそれを人形に話して、まず奈野奈乃子を殺害させた。それで喜んでいる彩音を見せて、次に自分を殺せと言ったんだろう？」
「その通り。闇斗は頭いいね、あは」
笑う琴音。目が笑っていない。
「ただ、どうして亜由を殺させようとしたんだい？　それともう一つ。僕がどうしても分からないことがある」
「何？」
「琴音、どうして君は、こんなことをしたんだ？　悪いけれど、死体解剖とかさ、他にもいろいろで、すぐに君が琴音だってことはバレるよ。なんで妹になったの？　どうして、世間的に、自分、雫根琴音という存在を殺したの？」
そこが、曖昧模糊。
好意も行為も動機も何も、曖昧で僕には理解不能。
だから真相に気付くのに、時間がかかった。
論理的に思考、しずらかった。
と、その時。
その時琴音が突然、声を張り上げた。
「そんなもの、決まっているだろう！」
「ッ？」
予測もしなかった、突然の大声に、僕は驚く。
そして次に琴音は、本当に意味の分からないことを、僕に、言った。
「僕は君が、闇斗のことが……好きなんだ」
……。

「なんで気付かないんだよ！　鈍感すぎるよ！　そりゃ僕もおかしくなるよ狂うよ！　だって、小学校四年生の頃から、ずっと君だけが、好きだったんだから！　君だけを見てたんだから！」

好き？　好きって、何？

どういうこと？

え、何なの？

「彩音と違って、僕は小さいときから暗かった！　今なら分かるさ、僕は気味悪かったんだよ！　内気で引っ込み思案で根暗で根暗で根暗で根暗で根暗で根暗で！　皆から嫌われて陰口をたたかれて、というかたたかれて、というか殴られて蹴られて罵られてイジメられて、当然のクズだったさ！」

「あ」

そうだ。琴音は小学校の頃、イジメられていた。

目の前の少女は、ペルソナの崩れた人間は、雫根琴音は、もう止まらない。

「でもさ覚えているかい？　いや、君はまったく覚えていないだろうねぇッ！　でも僕は覚えてる、一生、生まれ変わっても忘れはしないさ！　僕と同じクラスだった君は、僕に、唯一、教師ですらも僕を嫌がってた中で、唯一、僕に優しくしてくれたんだッ！」

たしかに僕はそんなこと、まったく覚えていない。

というか、断言できる。していない。

「隣の席の僕に、僕が忘れた教科書を、見せてくれて！　僕が落とした消しゴムを、踏むんじゃなくて遠くに投げるんじゃなくて、拾ってくれて！　僕のことをキモイとかクライとかブキミとか言わずに、普通に琴音って名前で呼んでくれて！　僕に挨拶をしてくれて！　僕に話しかけてくれて！　僕の話を聞いてくれて！　僕のそばにいてくれて！　僕が寄っても嫌がらなくて！　時には自分から僕に寄ってきてくれて！　普通のなんでもないようなことなのかもし

れないけれど、あの、死ぬように辛かった僕に手を差し伸べてくれて、支えてくれたのは、死体好きの気持ち悪い偽善者妹や口先ばっかりの親じゃなくて、闇斗だったんだよ！」

知らない。

そんなの、知らない。

そんなの、全く全部、知らない。

そんなの、全く全部、全然本当、知らない。

「好きになって当然だろう！　愛して当然だろう！　ずっと一緒にいたいって思って当然だろう！　好きで好きで好きで、本当に好きだったんだ！　どっかの女みたいに、中学上がってちょっとしてから、よく知りもしないくせに闇斗が好きだなんてほざいてるボケと違って、僕は本当に君のことが大好きだったんだ！　だから、僕はここまで変わったんだよ！　君に好きになってもらえるためだけに、あれから全てを注いできた！」

止まらない。

歯止めが利かない。

僕でも、どうしたらいいか分からない。

予想もしなかった。

まさか、そんなことを、思われていたなんて。

何もいえない。

こんな展開、知らない。

全然、論理的じゃない。

どうしたらいいの？　どうしたらいいの？　僕は。僕は。

「小学校四年生のクラスアルバム、好きな異性のタイプ、闇斗は頭がよくて清潔で論理的な女の子が好きなんでしょ？　ねぇ、そうでしょ？　そう言ってよ。僕は、全然頭が良くないのに、君に好きになってもらいたくて、ここまで勉強をがんばり続けてきたんだよ？　週に何回も塾に行って寝る時間もほとんどなくさぁッ！　それに清潔じゃなきゃだから、根暗な僕なんて嫌いだと思って、こういう明るい性格に自分を変えたのさ！　僕が、君が大好きな女の子だよ

ね？　そうじゃなかったら、僕がしてきたことは、何なんだよッ！」
「そ、それは……」
「知ってるよ、嘘だったんだろう？　嘘で適当に済ましちゃおうと思って、書いたんだろ？」
「……」
昨日の朝の言葉を、聞いていたのか。
そういえば琴音は、同じクラスなんだから、聞こうと思えば、確かに聞けた。
「僕は最初、こんなことするつもりじゃなかった。無駄だと信じていて、どうせ闇斗は頭の悪いヤツは嫌いだって信じていたから、彩音が君のことが好きだって教えたんだ。でも少し時が経つと、何故か君は彩音と仲良くなりだした！　僕が五年間かけて立ちたかった位置に、あの女はいとも簡単に立ちやがったんだ！　しかもあの性悪、僕に自慢してくるのさ！　まったく、殺してやりたかったね！」
素顔。
これが琴音の、仮面の裏。
分かっていたけど、見透かしていたけど、明らかにコレは、歪みすぎている。
「そう！　だから僕は人形を利用して、彩音を殺させようと思ったのさ。美術科準備室は暗いからね、ちょっと入ってきただけじゃ、僕と彩音の区別はつかない。だから人形には、僕と間違って彩音を殺させ、殺した後にそれに気付いて絶望して自殺してもらうってシナリオだったんだ！　でも、僕は聞いちゃったんだよ闇斗、昨日の朝の、君の言葉をね！」
あれ、嘘で適当に済ましちゃおうと思って、書いたんだ。
という、クラスメイトの男子に言った言葉。
これを琴音は聞いたんだ。
自分が五年間、僕に気に入られたいがために目指して、そして到達した存在。でもそれが、全部無駄だったって。
「ご、ごめん琴音、でもそれは……」

「同情しないでよッ！」
「……」
琴音は、泣いていた。
ぼろぼろと、涙をこぼしていた。
あの、琴音が。
「そんなに僕を哀れまないで。お願い。そんなことされたら、僕……死んじゃう……」
消え入りそうな、声だった。
そういう、ことか。
そういう、ことだったのか。
僕のその一言を聞いて、琴音は計画を変えたのか。
そういえば、僕はあの時こうも言ったよな。
「じゃあさじゃあさ、お前って意外と雫根彩音みたいな馬鹿っぽくて明るい子がタイプってこと？」という問いに対して。
「ああ、そうだね」と。
そして琴音は、彩音になったんだろう。
僕の好きなタイプに、なるために。
軽い気持ちで「ああ、そうだね」などと言った僕。その言葉を、本気で信じて。
僕に好かれるために、自分を捨てて、殺して、妹になった。
亜由のことは彩音に聞いたんだろう。僕と親しい謎の女がいる、と。きっと琴音は僕と二人きりになりたいがために、邪魔な亜由も消そうとした。
「ねぇ、闇斗。闇斗闇斗闇斗」
昨日公園でしたように、琴音は泣きながら、唱える。
「闇斗が言ったとおり、僕が琴音だっては、すぐにバレる。僕はもう終わりなんだよ。僕は、ほんの少しの時間でも君に愛してもらいたくて、こういう道をとったんだ。だから……」
次の言葉は、ある程度、予想がついていた。
「一緒に死のうよ、闇斗」

疲れきって、すべてが終わったような顔をして、消え入りそうな声で、琴音はそう、言った。

僕の適当な行動のすべてが、この少女を、こんなにしてしまった。

僕のせいで、この少女は、駄目になってしまった。

本当に全部、僕のせいで。

今になって、さらに痛感させられる。

僕は屑(くず)だ。生きてもまわりに迷惑をかけるだけ。まわりを不幸にするだけ。死んで初めて安心される。須藤と変わらない。

僕は、琴音に、言った。

「知らねぇよ」

琴音の顔が、蒼白になる。

「勝手にほざかれて、僕は迷惑だ。いらない罪悪感を抱いちゃったじゃないか。悪いんだけどさ、僕は好きとかそういうの、嫌いなんだ。全然論理的じゃない。それにね琴音、僕は自分が誰かに愛してほしいがためだけに、妹すらも殺すようなクズ人間、大嫌いなんだ。幼い頃から、そういう汚いものばかり見てきたから。だから君みたいな汚い人間、ウンザリなんだよ。勘弁してよ」

琴音が、どんどん、憔悴する。

「まったくさ、ペルソナ被りはだから嫌いなんだ。なんで本当に心の底から綺麗な人っていないんだろうね。とにかく僕は君が嫌い。君、どうかしてるよ。頭狂ってる。君と話してるとさ、こっちまで狂っちまうよ」

「あ、闇斗……嘘、嘘って言ってよ闇斗、もうそんなこと言わないでよ……僕、僕、」

琴音が、僕に、ふらふらと、近づいてくる。
手を伸ばし、僕に抱きつこうとする琴音。
僕はそんな琴音を、突き飛ばす。

「死ぬなら死ねよ。早く死んでくれないかな。君が死んでくれないと。次の段階にうつれないんだ。僕と同じで、君もとんでもない屑だね。僕のしていることは君に匹敵するくらいに汚いってのは自分でも理解してるけどさ、それでも僕は君が気持ち悪い。自分見てるみたいだよ。そのクズっぷり。たださ、僕は君と違って、他人に一緒に死のうなんては言わないな」

「やめて……やめて闇斗」
震える琴音。屋上でうずくまり、両手で両耳を抑え、凍えるように縮こまる琴音。

「ごめんね、琴音」
僕は最後に、言った。
琴音は、顔を上げる。僕を見る。
琴音は、最後の希望にすがりつくようにするかのように、立ち上がる。

「でもさ、本当、君は一度死んだほうがいいよ」

この言葉が多分、決定的だった。
琴音は、蒼白になった顔のまま、おぼつかない足取りで、屋上の隅まで行き、フェンスを越え、そして最後に、僕のほうを向いた。

「生まれ変わったら、また闇斗のことを好きなっていい……かな」

「うん」

もっとも――
僕のような屑が君が生まれ変わった頃まで生きていたら。
最後に琴音は、力なく、うっすらと微笑して、落ちた。
「僕を好きになるなんて――」
――不幸だね。
……。
回想を終える。
言い訳のようになってしまうかもしれないけれど。
僕は琴音のこと、結構好きだった。あと、彩音のことも。
ただ、琴音は歪んでしまった。
もっと普通に、彩音のように僕に告白すれば良かったのだろうが、琴音も元は根暗で内気な女の子だったんだ、やはりそれはできなかったんだろう。
「ごめんね、琴音、彩音」
僕の存在が、君達を狂わせてしまった。
やはり僕は、生きていちゃいけないんだろうか。
自分が、嫌になる。
なんで僕は、他人の痛みが分からないんだろう。
人の本質を見抜けても、人の気持ちが分からないんだろう。
小町夢羽同様、雫根姉妹同様、どこか僕も抜け落ちているんだ。
テレビでは、隣町で殺人事件が起きたという報道がされている。
僕の学校の連続殺人事件は、人形と琴音の死で幕を閉じただろう。
それにしてもまさか、同時期に隣町でも殺人事件とは。
まぁ、そんなことはどうでもいい。

彩音と琴音。こんな僕を好きになってくれた二人……
特に琴音のほう。気付かなかった僕は、本当相当馬鹿だ。途中で琴音の気持ちに気付いてあげられれば、この物語はとてもいいものになっていたのかもしれない。
「そうだね琴音、もし生まれ変わったら、僕を好きになってよ」
僕は話しかける。
そこにいるはずのその子に向かって。
「僕も、できるだけ頑張って、君を、好きになる」

5

予想通り先週一週間は学校は休みだった。
そして今日、月曜日から再び学校。
と、美術の授業が終わり僕が帰ろうとしていると、美術の教師が僕を呼び止めて、言った。
「いや実はね、この前見て思い出したんだが、君のお姉さんが一年生の頃に仕上げた人形があるんだよ」
「そうなんですか」
「うん、ただね、いろいろあって、体がバラバラになっちゃったんだ。……うん。今その人形、手元にないんだけどさ。うん、これだけだよ」
「そうですか」
僕は、教師に背を向けて、歩き出す。
「へぇあの人形、僕にどっか似てると思ったら、姉さんがつくったのか」

・つづく・

四章：死神誘引の鷺凪砂１

1

お前に世界を見せてやろう。
そう言われれば、僕はこう返すだろう。
そんなものは見飽きた。
そう、僕はこの世界をもう見飽きた。生まれて十五年、映画なんて二回みたら飽きるだろ？　世界なんてもう十五年見たんだ。飽きを通り越して呆れてるさ。
この世界は、どこまでも汚く偽りで、もうこれを今まで何回言ってきたのか全く分からないが、とにかくどうしようもなく、悲しい。
もしも世界がもっと優しかったなら、こんな事は起こらなかっただろう。
鷺凪砂（さぎなぎさ）は、死ななくてよかったはずだ。
この物語は、どこまでも醜く滑稽で、もうこれを今まで何回やってきたのか全く分からないが、とにかくどうしようもなく、狂おしい。
救いようもないし、そもそも救いを求められるような話でもなかった。
それは、あの少女が、どこまでも純粋だったことに、どうしようもなく不幸だったことに、起因する。
死神に狙われ続けた鷺凪砂。
死神誘引の鷺凪砂。
さぁ、どこから話すべきだろうか。
やはりまずは、あの資料室で、亜由に連続殺人事件の説明をしているところからだろう。

論理なんてことごとく無意味で、
仮面なんてことごとく無価値で、
希望なんてことごとく無意識で、
そして凪砂はことごとく……

2

今日は月曜日。
先週は人が死にすぎた。奈野奈乃子（なのなのこ）に雫根彩音（しずくねあやね）・琴音（ことね）。
まぁとにかく、あれはもう先週で、今は今週なわけだ。
昼休み、資料室で、亜由はいつも通りに読書をしていた。
「須藤の死体処分は順調？」
「あと三日で終わるでしょうね」
「そうか。それはよかった」
さて、僕は何をしよう。
どうでもいいけれど、明後日（あさって）は七夕（たなばた）だな、とか思ってみたり。
「ああ、そういえば亜由知ってる？　今連続殺人事件起こってるんだよ」
「本当に？」
亜由は本を閉じて、僕に顔を向けた。おお、予想通り、面白いほどの食いつきの良さだ。
ちなみに、本当。
「うん。ちょっとこのあたりじゃないんだけどさ。先週あたりから、連続殺人事件。殺されているのは、隣町の学校の生徒達。もうその学校は休校情態に今なってるんだけどね」
「へぇ、そうなの。詳しく教えてよ」
「うん」
僕は話し始める。
「隣町で、ある中学校の三年生が、次々と殺されてる」
「さっき聞いたぞ」

「もう一度言ってるんだよ」
「そうか。続けろ」
一度溜息をはさんで、また説明再開。
「今のところ犠牲者は四人」
「多いわね。アメリカじゃそうでもないんでしょうけど」
「ここは日本だ」
だから、珍しい。
だいたい、先週この学校で死んだのは三人だったが、それも本来異常なのだ。
「先週の木から始まり、金、土、日と、一人ずつ、毎日死んでる。多分今日、五人目の死者が出るだろうね」
「何故同一犯だと思われているの？　事件現場や殺害方法に特徴的な共通点でも？」
「ああ、あるよ」
言うと、亜由は目を輝かせた。
きらきら、と。
ラブコメしてる少女みたいに。
可愛い。そう思った。
なーんてね。
……さて仕切りなおし。
僕は亜由に教える。この事件の、異常性を。とても簡単に。

「残酷過ぎるんだ」

亜由は、怪訝そうな顔をする。
僕の発言が具体性に欠けていたからだろう。
「でもさ、僕もニュースで見ただけだから、詳しいことは分からないんだよ。ただ報道されていることによると、この一連の殺人は、過去に類を見ないほどに、猟奇（りょうき）的だということだよ」
「猟奇的といえば、先週のこの学校での殺人もそうだっただろう。

腹に内臓のかわりに首おさめたり、バラバラにして並べたり」
「まぁそうなんだけどさ、でもアレは醜くなかった、美しかった。だって人形が彩音のために、飾ることを目的に殺していたんだからね。そこには憎しみは一切混入していない」
「じゃあ今起こってる連続殺人事件は、明らかに憎しみが込められている、と？」
「らしいよ」
報道によると。
「つまりさ、バラバラにされても、先週の事件みたいに並べられないで、ばら撒かれているんだね。それに、腕・足・顔みたいにきれいに切り分けられてるんじゃなくて、もっと細かく、きざまれている」
「へぇ、それは興味深いわ。是非実際に見てみたいわね」
「……」
もう慣れてきた。
「で、全員学校外で殺されてる。木・金は住宅街の道路でおそらく下校中に、土・日はそれぞれの自宅でだ」
「それはその子供が一人で家にいた時間なわけね？」
「いいや、一日中親が家にいたはずなのに、部屋に行ったら殺されてたってケースらしい。まぁこの季節窓は開けっ放しだろうからね、犯人はそういうところからおそらく侵入したんだろうね」
「なるほどね。で、それだけ？」
「うん、それだけ」
「そう。確かに面白いけれど、隣町じゃ私には無縁だわ」
「まぁね」
僕にも無縁。
話題も尽き、僕は適当に本棚の本をとり、読書を始める。
変な儀式的なことが書かれたおかしな本だった。呪いのことも書いてあった。
ページをめくって、めくって、めくって、めくって

カサリ

「……？」

何かが落ちた。

見て、拾う。

「ッ！」

驚愕、した。

何で何で何で何で何で何で何で何で……

亜由を見る。

亜由は僕がこれを発見したことに気付いていない。

何で、ここに、コレが、あるんだ。

それは、

紅葉（もみじ）の栞（しおり）だった。

僕と姉が昔おそろいで買った紅葉の栞。

それと完全に、同じモノだ。

偶然……で、すませられるのだろうか。

栞のはさまれていたページを、ふと見る。

「……これって……」

3

今日は曇りなので、この時間でもかなり暗い。薄暗い。この世界に黒色を少し溶かしたように、曖昧に闇が漂い、視界をくすぶる。まるで、僕をそのままその闇の中に誘（いざな）おうとするかのように。立ち込め続ける不確定。薄く濃く、浅く深く、明るく暗く、さらさらとどろどろと、広く狭く、短時間いつまでも、進行に停止に、全てを惑わす。

というわけで、下校中だった。彩音と琴音が死んだことで、登下校はまた独りでするようになった。こちらのほうが僕らしい。以前亜由に「一緒に帰ろうよ」と言ったら「きっと家の方向が正反対よ」と返された。

住宅街。何故かまわりに人がいない。住宅街なのだからあたり一面住宅で、中には人がいるのだろうけれど、でも、そんな気がしない。もうこのまま世界に存在してるのが僕だけになってしまったと認めてもいいくらいに、殺伐と空虚だった。

暗い暗い暗い暗い。真っ暗なくらい暗い。

物音が、遠い。とても遠くからかすかにあらゆる喧騒が聞こえる。もうこれじゃあ夜だろってくらいに暗い。そのうえ街灯がついてないから、余計暗い。下手に真夜中よりも暗いかもしれない。

暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い。

暗黒暗黒暗黒暗黒暗黒暗黒暗黒。

溶けちゃいそう……

――――と。

その時。

不意に突然に突如に突拍子もなく前触れもなく刹那に瞬間に、前から人が、襲い掛かってきた。

「――――っ」

僕は前方からの襲撃を、左に動いて、ぎりぎりかわす。

チッ

「？」

頬が、裂けた。

シッ、と。

少量、血がはねる。

暗闇。暗黒。黒の中、
その人物が持つナイフの刃が、不気味に光る。
ギラリと、
不適に輝いて、
襲い掛かってくる。
「――――ちッ！」
後ろに飛んで、かわす。
その人物は、またすぐに方向転換をして、僕に距離をつめ、ナイフをふるう。
僕はその手を、上へはじいた。
目の前の人物の腹が、無防備になる。
そこへ、頭突きする。
「ぐッ！」
相手はうめき声をあげた。相手はニット帽をかぶっている。目が、見えない。あまり観察していられない。どんなヤツだか、分からない。ただ、大人じゃなさそうだ。小柄。小さな体躯（たいく）。華奢というより小柄。
だがそれで倒せるような相手じゃなかった。
ソイツは後ろへ飛ぶことで、僕の頭突きのダメージを最小限に押さえ、バランスを崩した僕は……

ずしゃあ

とその場で倒れた。
いや、格好悪いので言いたくないのだが、転んだ。
頭突きだなんて、論理的じゃなかった。一番愚かな攻撃だった。
起き上がろうとする。なんとか、立ち上がろうとする。
だが目の前にはもうソイツはいて、立ち上がろうとする僕をそのまま、押し倒してきた。
全体重をかけてのしかかられたので、たまらない、僕は仰向けで

地面に倒れた。頭を打って、視界がブレる。
「ぐあ……ッ」
須藤の時は花瓶が落ちていた。でも今ここに、武器になるものはない。だいいち、相手は須藤じゃない。
相手は、本気で僕を殺す気だった。
相手は僕の上に覆いかぶさる。相手の片手に、ナイフが、鋭利なナイフ。血がついてる、僕の血だ。
ぼたぼた。
頬から血が流れてる。認識すると、痛くなってきた。
ズキズキズキ！
「……」
無理だ。この状態じゃ、無理だ。
ここで僕は殺されるみたいだ。
仕方ない。
死ぬのは僕の願望だ。
僕は死んだほうがいい人間だ。
僕がいなければ、
小町夢羽は死ななかったし、
奈野奈乃子は死ななかったし、
雫根彩音は死ななかったし、
雫根琴音は死ななかった。
そうだ、殺してくれ、僕は自分じゃ死ねないから、殺してくれよ。
いいよ。
ただ一つ注文。
なるべく痛くないように。
僕は尋ねる。
「君が、隣町で流行中の連続殺人事件の犯人？」
相手は頷いて、肯定する。

そうか。じゃあ、痛くないようにってのは無理な注文だろう。
これから僕は、バラバラにされる。
バラバラバラバラバラバラバラバラ……
つまんない最期。
呆気ない最期。
退屈な最期。
無駄な最期。
無な最期。
オワリ。

「じゃあ、殺せよ」

相手は、ナイフを逆手持ちして、振り上げて。
振り下ろしたら、見事に心臓をエグられるだろう。
ああ、本気で死ねるわ。
……。
……。
……。
……あれ？
全然、攻撃がこない。
なんだ、すぐ殺せよ。
その時。相手はぶんぶんと首を横に振って、僕の上からどいた。
「あ～～っ！　やっぱり人なんて殺せないよ～～っ」
……。
「むぅー、うーうー、ういー、無理無理。なんで私ってこんなに駄目な子なんだろう。駄目駄目。殺さなきゃなのに殺さなきゃなのに」
……。
「困ったなー。でも！」
キッと再びナイフを構え、僕を睨み付ける。といっても目は見えないんだけど。

しかし次の瞬間には、ナイフを落として、うなだれる。
「……あーもうっ！　やっぱり人殺しなんてできない、うー……」
驚いた。
この声。
この子、女だ。
見ると、スカートはいてる。
僕は呆気にとられながらも、体を起こす。
えーっと……。
観察。
女の子は黒いニット帽をかぶっていて、後ろ髪や前髪は普通に黒色。その前髪に隠れてここからだと目は見えない。学校の制服を着ていて、何故か制服はスカートもYシャツもサマーセーターもボロボロだった。まるで強姦にでも襲われた後っぽかった。手足は細くて、見るとむき出しの足には無数のアザがあった。
「なんで制服、そんなにボロボロなの？」
話題作りに、そう質問。女の子として、そんな穴だらけの制服はどうかと思う。
「ふぇ？　あ、えーと、これは、学校でイジメ……られてるから」
「……そう」
えーっと、じゃあそれはその、やはり強姦に襲われたってのはあながち間違ってなかったわけか。
「あの、」
もじもじと。なにやら言いにくそうにしている女の子
「何？」
「イジメられてる女の子は……嫌いですか？」
俯けていた顔を上げて僕を見る女の子。可愛らしい大きな目に、涙をためていた。
ドキリとした。
「いや、嫌いじゃないけど」
「そうですか。良かったです。はい、同じクラスの女の子たちに、

服むりやり脱がされたり……」
「女の子なの？」
「はい。……これ」
「？」
何をするのかと思ったら……
「！」
突然服を脱ぎだしやがった。
「何してるの」
「あ、目塞がなくて大丈夫です。というか、目塞がれると脱ぐ意味ないじゃないですか」
「いやいやいや脱がないでくれ」
道端だぞ。誰かに目撃されたら僕はいろいろと変な誤解を受けそうだ。
「下着つけてるから、大丈夫ですけど？」
「それでも駄目だよ」
こんな僕にも理性はある。
でも女の子は僕のほうに近づいてきたらしく、無理やり僕の手をどかしてきた。
「っ」
女の子はセーターを脱いで、Ｙシャツの前を全て開けて、僕に体を見せてきていた。
ただし、すぐに僕はその異常さに気がついた。
アザだらけ。傷だらけ。というのも勿論驚くべきことなのだろうけれど、しかし、
「……何なの、ソレ」
女の子の体には、墨で、お経のような文字がびっしりと書かれていた。
「私、死神に狙われているんです」
「死神？」
それは何かの比喩だろうか。

「このお経が消えると、私は死神に殺されます」
「……、というか分かったから、もうボタン留めてくれるかい？」
目のやり場に困るよ。
「ほぇ？　あ、はい、そうですよね。すみませんすみません」
泣きそうになりながら、ボタンを留め始める女の子。
「あれ？　留められない。あれ、おかしいな、難しいな、うぅー……」
「……」
この子なんだか挙動不審だ。まぁイジメられてるみたいだし、精神的に不安定なのかもしれない。
「はい、これでオッケーです。すみません。平気で裸見せる女の子って、嫌いですか？」
不安そうに聞いてくる女の子。
「いいや、別に嫌いじゃないけど、困るね」
「ですよね、すみませんすみません……」
なんか悲しみだした女の子。
「ところで君、名前は？」
「ほぇ？　名前ですか？　あーっと、鳥の鷺に波の穏やかな情態の凪に砂で、鷺凪砂……です」
さぎなぎさ？　反対から読んでも、鷺凪砂か。
「あの……、あなたの名前は、何なんですか？　あ、えと、突然名前聞いてくる馴れ馴れしい女の子って、嫌いですよね……」
「いや嫌いじゃないよ。僕は琴を吹いて闇に昔の重さの単位の斗で、琴吹闇斗」
「ほぇー、闇斗さん……ですか。かっこいい名前ですね」
感動したかのように言ってくる凪砂。
「では私はそんな闇斗さんをヤミッピと呼びます」
「呼ぶな」
「ひぇっ！　……ああ、すみませんすみません、闇斗さんじゃなくちゃ駄目ですよね……」

「いいや、闇斗でいいよ」
さん付けだと、なんとなく彩音を思い出して気分が沈む。
「は、はい！　闇斗、ですね。闇斗闇斗……えへへ」
「……」
何故か嬉しそうにしている凪砂。
「えーっと、ところでさ、凪砂は連続殺人犯なんだよね？」
さっき頷いていた。
「はい、そうですよ」
「じゃあなんでさっき僕を殺さなかったの？」
「……り、理由は二つです。で、でも教えられるのは一つ……です」
「そう。じゃあ教えられないほうから聞こう」
「なんでですか！」
おお。
ツッコミを入れてきた。
「いいよ、教えられるほう」
「はい。私、実際に殺すのは、はじめてで……」
「？」

凪砂の話を簡単にまとめていくと、つまりこういうことだった。
凪砂の家は三人家族。凪砂と、その父親と母親。
幼い頃から凪砂は父親に虐待を受け続けてきた。それは凪砂だけでなく、母親のほうも、凪砂よりひどい暴力を振るわれていた。
そんな凪砂だが、幼い頃、歩道で母親と歩いていたらトラックが突っ込んできたり、突然木が倒れてきたり、ガス栓をしめたはずなのにキッチンが火事になったり、本人の記憶になく風呂場で寝てしまっていたり、泳げるのに海で突然溺れたり、とにかくそういう死の危険が、頻繁にあったらしい。
母親の実家は寺をやっているらしく、そこで育った母親は、凪砂は死神に憑かれている、と考えたようだ。
「死神って外国の文化じゃないの？　寺、日本にはそぐわないんじ

ゃない？」
「そうですか？　それは誤解ですよ。日本にも死神はいます。日本で最も古くから“死神”とされてきたのは、イザナミという黄泉国の主宰神ですね」
「へぇ……」
そういや姉に聞いたことあるな。愚問だった。
まぁとにかく凪砂が死神に憑かれていると考えた母親は、凪砂の体中にお経を書くようにしたらしい。
「母は、お経を書き、その効果をあらわす能力を持ってました」
「ふぅん」
驚く話じゃない。こちとら最近、呪い遣いだの動く人形だの見てるからね。
で、お経を書いた結果、凪砂にそういう死の危険は訪れなくなった。
風呂に入るたびにお経は当然の如く流れるので、毎晩母親にお経を書いてもらっていたらしい。
しかし父親はそんな凪砂を不気味がって、何度も殺そうとしたそうだ。
「……つらかったです……もの凄く。今も……つらくてつらくて、死んじゃいそうです」
「……」
母親によると、お経のおかげで結界がまわりに張られているだけなので、お経なしだと、もう死神によって容赦なく命を絶たれてしまう状態のようだ。
しかし――
「先週の火曜日……お母さんが、死にました……」
「ああ、そういえばニュースでやっていたな。鷺直美（さぎなおみ）……だったかな？」
「はい……」
とても、とてもとても悲しそうで、辛そうで、苦しそうで、体中

をプルプルと小刻みに震えさせ、今にも泣き出しそうな声で言う、凪砂。

「お母さんが死んでから私は、お風呂に入っていません。入るとお経が流れて、私は死ぬことになります。お母さんが書いてくれたお経じゃないと、きっと無駄だし……あ、あの、」

「何？」

「お風呂に入らないような不衛生で不清潔な女の子は、嫌いです……よね？」

「いいや、全然」

安心した様子の凪砂。どうやらこの子は基本自分は嫌われていると考える、かなりのネガティブ思考の持ち主らしい。

「私のこのお経のこと、学校でも皆に知られちゃって……、皆にイジメられて……死にたいです、私」

「……」

「でも、私は死ぬ前に、やらなきゃいけないことがあるから」

「それは何？」

凪砂は、強い決意をにじませて、言った。

「お父さんを、殺すことです」

自分達に虐待を繰り返した父親への復讐、か。

「それだけではありません。お母さんは、お父さんに殺されたんです」

「というと？」

「警察には、簡単に自殺ってことで片付けられちゃいましたけど。火曜日、私はお父さんに、殺されそうになりました。いつものことですけど……殴られ続けて蹴られ続けて、でもいつもよりも長く、本当に、血を吐いても続いて……それでお母さん、私を守るために、お父さんを、ナイフで刺そうと襲い掛かって……、っ！」

そこで、突然自分の口を押さえてうずくまる凪砂。

凪砂は嗚咽する。気持ち悪そうに。
僕は隣でかがんで、凪砂の背中をさすってあげる。
「でも、返り討ちにあったわけだ？」
「はい。ナイフをとられて、お腹を刺されて、多分出血多量で。お母さんは最期私にごめんなさいって何度もあやまっていました」
「……で、君はお父さんに“自殺だったと言え”と強制されたんだね？」
「はい、その通りです。警察の人に、私は嘘をつきました。そう言わなきゃ殺すぞって言われて、恐くて恐くて、私、本当に恐がりで駄目で……」
「駄目じゃないよ。決して、駄目じゃない」
僕は凪砂の背中をさすりながら、諭すように言う。
「……ありがとうございます。闇斗、闇斗は……優しいんだね」
凪砂は僕に向かって薄く、微笑んだ。何かに安心するように。幸せそうに、微笑む。
「警察にお父さんはこう説明しました。“自分は実は前々から、家庭内暴力を振るっていて、でも、それで妻が自殺してしまったんです。もう反省しています”って。家庭内暴力って立派な犯罪だから捕まるんじゃないかって思ったんですけど、そんなことは全然なくて、軽く注意されただけで……」
「まぁ、そうだろうね。世の中なんて、そんなものさ」
全部ペルソナ。仮面かぶった偽善者支配の偽造世界。
「次の日もその次の日も私は学校で、いつも通りイジメられました。辛くて辛くて、それで木曜日、帰って部屋で、呟いたんです。飯島さんが死んでくれたらいいのに、って。あ、飯島さんというのは、私をイジメている中で、一番リーダー格の子で……」
「うん、それくらいは予想できるさ。で、その子は死んだわけだ」
「はい。殺された、みたいです。部活をやって、下校中に。帰宅部の私なので、時間的には、部屋で願った後です。きっと、私が願ったから……死んだ」

「……」
「部屋で私が死んでほしいと呟いた子は、その日、確実に殺されています。私、あの、こういうことあまり言ってはいけないことなのかもしれないけれど……嬉しくて。私をイジメていた人たちが皆死んだから……私、最悪な子だよね。闇斗も、私は狂ってるって思うでしょ？」
「全然、思わないよ」
「え？」
「だから、思わないって。それは普通の思考だよ。君が自己嫌悪に陥る理由は何もない。論理的さ。大丈夫、君は何も間違っていないよ」
「……ありがとう。闇斗は……あったかいね」
そう言って安心した顔をする凪砂。
「それで、何故僕を殺そうと？」
「私、このまま一生お風呂入らないで生きるなんて無理です。一応、女の子ですし……。だから死ぬ前に、お父さんを自分で殺したいんです。いえ、殺さなきゃなんです。これは自分で、やらないと」
やはりそれだけは、強い意志を持って凪砂は言う。
「でも私にとってお父さんは、とても強い人だから、勝てる自信が全然なくて……」
そうか。自分達にずっと虐待をし続け、自分の前で母を殺した男は、凪砂にとって絶対的な存在なのだろう。それでは確かに殺せる自信はないに違いない。一生勝てない存在だと、体に痛みとともに刻み込まれているだろうから。
「だから練習ってことで、ここで誰かが通りかかるのを待っていたんです」
「なるほどね。つまり実際に人を殺すのはこれが初めてで、やってみたらやっぱり人を殺す勇気なんてなかったわけだ。で、それが教えられるほうの理由か。じゃあもう一つの理由を聞こうか」
「だから教えられないって言ってるじゃないですか、もう！」

何故か赤面しながら、怒ったように言う凪砂。
「冗談さ。別にこの程度分かればあとはいいよ。うん、なるほどね――」
僕は言った。凪砂の目を、しっかりと正面から見て。
「力をかしてあげるよ、凪砂」
「え？」
凪砂が、目を見開かす。
「そこまで聞いてしまっては、そうするしかないだろう？　だいたい、君もそれを期待して僕に話してくれたはずだ」
「そ、それは違います」
「？」
凪砂は慌てた様子で僕の言葉を訂正する。それで少し照れたようにして、
「なんだか闇斗になら、全部、話していいような気がして……」
全然意味の分からない非論理的な理由を聞かされた。
うーん、それはつまり、誰かに話すことで不安を解消した・辛さを半減させたってことだろうか。
「まぁとにかく、力をかしてあげるよ。君がちゃんと父親を殺せるように、ね」
「でも、何でですか？　何で、今日会ったばかりの私のために、そんなこと、してくれるんですか？」
母親以外の全ての他人から迫害されてきた凪砂。きっと人間不信なのだろう。
でも何故か僕にだけ、心を開いてくれている、ような気がした。
それがペルソナでも何でも。
「君の言葉を借りれば、教えられる理由と教えられない理由が一つずつ」
教えられない理由とは、イジメという境遇に昔の姉を重ねたこと。

で、教えられるほうの理由。

「凪砂はとっても、純粋で、綺麗だからだ」

言うと、何故か直後凪砂はうつむいてしまった。なんか、すっごい顔を赤らめている。え、何だろう。

まぁつまり、凪砂は仮面の裏、つまり素顔が、他の子と比べ、とても純粋だということ。

僕が見てきた中でも、この子は本当に綺麗なほう。

やっと、会えた。

汚くない、人間に。

だから、この子にもう少し関わってみたい。

全然僕らしくない、興味・関心。

「わ、私が……綺麗？」

うつむいたまま訊いてくる。

「うん、とても」

全然歪んでない。そういう人間は一緒にいて、気持ちがいい。ちょうど、亜由や姉もそうだ。彼女らは、仮面の裏を見透かせないからこそ、安心する。

「あの、闇斗」

「何？」

「ありがとう、ございます」

「それは全部が終わってから言いなよ。だいたい、僕は君にいろいろ教えてあげられると思うよ。実際人を殺したことがあるからね」

「そうなんですか？」

ぱっと顔をあげる凪砂。

「ああ、それも一人じゃない。直接殺したのが一人と、僕が死ぬよう仕向けたのが三……いや、二人と一体か」

言うと、凪砂はしばらく間を開けて、それから感動したように、言った。

「すごいですねぇ～」
「そうかな？」
別に、大したことはない。死ぬのって、殺すのって、意外と簡単。
「もう一度整理するね。僕は君を、人を殺せるように、教育する」
「つまり、先生さんですね」
「そういうこと。凪砂の家庭教師といったところか」
「ふふ。じゃあよろしくお願いします、やみ……あの、じゃあ先生って呼ばなきゃですか？」
何故か不安そう。
「いいや、それはやめてくれ。闇斗、のままでいいよ」
「ありがとうございます。じゃあ闇斗、闇斗は私のこと、ナギっぴーって呼んでください」
「呼ばないよ」
「……ですよね、すみません、調子に乗って……」
「……」
ところで先ほどから、通りかかる人々の視線が気になる。多分、凪砂は制服が穴だらけだらけでだしなんだか涙目なので、僕はおかしな誤解を受けているだろう。下手をすれば警察も来そうだ。
……冗談じゃない。
「ねぇ凪砂、移動しない？　ちょっとここは居ずらいよ」
「ああ、そうですよね。じゃあどうです？　あの、その、わ、わた、わたわたしの……」
「ん、何？」
「えと、……私の家、来ますか？」
このタイミングで上目遣いだ。くそこの女、心得てやがる。……いや、これは意図的じゃなさそうだ。この子は本当純粋で、素晴らしいね。
しばらく間があいたことをどうとったのか、凪砂はまた泣きそうになった。
「すみませんすみません。いきなり家に招待してくるような女は嫌

いですよね。本当にすみません。許してください、お願いだから、叩かないで……」
「大丈夫だって。まずはその、すぐに泣いちゃう癖を直そうね」
「……はい。でもその、一つ質問。いきなり家に招待してくるような女は」
「嫌いじゃないよ」
だいたい、彩音もそうだったし。
「じゃあ、好きですか？」
「好きでもないよ」
「……」
また泣きそう。困った子だな。これは僕も相当いろいろ教えてあげないとだろう。
「うん、じゃあ、そうだね。行こうか、君の家」
「いいんですか！？」
突然大声。
びっくりした。
「あ、すみませんすみません、いきなり大きな声出して……こんな口切り落とします、私ってやっぱり駄目な子なんだ、どうぞ殴ってください蹴ってください」
「……」
変な子。

おそらく凪砂は死ぬことになる。
それはこの時にはすでに分かっていたことだ。
ただ僕は今になって思う。
もっと他に、いい結末があったんじゃないだろうか。
よりにもよって、こんなにも救いようのない終わり方なんて。
まぁそれは、今だからこそ言えるようなこと。
僕らしくもない。

・くづり・

四章：死神誘引の鷺凪砂２

1

人は汚い本当の自分を隠すために、誰もが仮面（ペルソナ）を被っている。
しかしその仮面の裏を覗けるのが、僕。
つまり僕は、幼い頃から、人の裏側が汚いものだということを知り尽くしてきて。
それで今回、鷺凪砂（さぎなぎさ）と遭遇した。
凪砂は、仮面は確かに被っているけれど、本性は純粋で綺麗だった。仮面といっても、そこに素顔との差異はあまりなかった。ようは、僕が求めて続けてきた“仮面を被らない綺麗な人間”にとても近い存在。
故（ゆえ）に今回、とても惹かれた。
僕がいてもいなくても、きっと凪砂の結末にはあまり関係のないことだ。
僕は本当に、予定調和のためですらない、歯車にもなれない、かといって物語を大きく揺らす不確定因子となりうるわけでもない、ただのドラマのエキストラ、たまたま背後に映っただけの通行人、それくらいのものである。
「何で凪砂は制服を着ているんだ？　君の学校は今日休みのはずだから、私服にすればいいだろう。わざわざそんなボロボロの制服なんて着ないでさ」
「いえ、私は制服しか持っていないんですよ、闇斗（やみと）」
「なるほどそういうことか。納得したよ、凪砂」
僕と凪砂は二人並んで今現在、住宅地の中を歩いている。向かっている先は、凪砂の家。
「何で凪砂はニット帽を被っているんだ？　この季節、暑いだろ。

全然論理的じゃない」
「人を殺すつもりで来ましたから。やっぱり変装しないといけませんん」
「なるほど、しかしそんなニット帽じゃあまり効果は望めないな。全然論理的じゃない」
「論理とは、何ですか？」
「辞書を引くとこう出てくる。“考えや議論などを進めていく筋道。思考や論証の組み立て。思考の妥当性が保証される法則や形式”」
「よく分かりません」
首をかしげて、右の人差し指を唇にあてて、眉を顰める凪砂。どうやら、あまり頭はいいほうではないようだ。
「僕が言うところの論理ってヤツはさ、感情の混入しないものなんだ。きっと人間は論理的になんて行動できない。誰もが心理主義。でもね、僕は論理的を目指している。行動の目安さ」
「じゃあ、私も論理的に行動するべきですか？」
「いいや、君にはできそうにない」
「そうですか……」
悲しそうな表情になる凪砂。感情表現の豊富な子のようだが、明らかに“悲しい表情”が多いように思える。
雫根彩音の正反対といったところか。
「凪砂の家は遠いのかい？　あんまり遠いと、僕は結構不都合だ。だいたい、さっきから僕の家と正反対の方にどんどん突き進んでいる」
「すみません……やっぱり、迷惑、ですよね……、ここまでで十分です、ありがとうございました、ご迷惑をおかけしました」
さらに悲しそうな表情になって、凪砂は頭を下げてくる。というか、ほとんど泣き声だった。
この子をイジメてる方の気持ちも、分かるかもしれない。凪砂はきっと、イジメられっ子の模範解答みたいな性格なんだ。
「いいや、帰らないよ。凪砂の力になるって決めたからね」

これはだいぶ心理主義的。
「闇斗……――」
そこで凪砂は僕の一歩先にひょいと移動して、僕を見上げるようにする。
「――ありがとう」
「……」
「闇斗は、とっても、いい人だね」
「……」
「私、人を信じるのって、怖い。私には、そんなの、無理。お母さんしか、信じられなかった。でも闇斗は。……闇斗なら、信じられる」
「……」
しばらくの、間。
それがあって、凪砂は突然うつむいて、バッと回れ右すると、無言ですたすたと歩いていってしまう。
……なんだろう。
照れてるの……だろうか？
分からない。
こんな気持ち、この前もあった。
分からなくて解からなくて曖昧模糊（あいまいもこ）。
彩音、琴音。双子の姉妹。
僕を好きになって、おかしくなった双子。
「ここです」
凪砂が立ち止まった。そのまま、目の前にあった家の敷地内に入っていく。
当然の如く、必然の結果、ここが凪砂の家なのだろう。
普通の一軒家。と呼んでいいのか、判断に困る。
暗い。
とてつもなく、負のイメージ。
ありえなく、死のイメージ。

別に、様相自体は、普通の一軒家と呼べる。
庭も手入れされてるし。汚い点、問題とすべき点はない。おそらく、先週までは凪砂の母親が全部手入れをしていたのだろう。
ただ、雰囲気は、普通のそれとは大分違かった。

ここは、死んでる。

「闇斗、来て」
「ああ、悪いね。ちょっと観察をしていたんだ」
「ごめんね、中、結構散らかってるの」
「それなら問題はない。僕はそういうの、気にしないんだ」
嘘だ。不衛生というのは、なかなかどうして論理的じゃない。“病気にならない”ために“清潔”にする。それが論理。
玄関で、靴を脱ぐ。
家の中は、埃っぽかった。お母さんが死んでから、掃除はされていないのだろう。
それと、とても散らかっていた。
「部屋を綺麗にできない女の子は、嫌いだよね」
「いいや好き。大好き。愛しちゃう」
「本当？」
「嘘」
「……」
凪砂の部屋は二階にあった。
入って、驚いた。
お経、だらけ。
壁が、床が、天井が、お経で埋め尽くされている。
「これは？」
「お母さんが書いてくれました。この文字で守られているので、お父さんはこの部屋に入ってこないんですよ。無意識のうちに“あの部屋には入りたくない”と思わせられるんです」

「なるほどね」
しかしその部屋は暗くはなかった。カーテンと窓が開け放してある。今まで無人だったのに。
「開けっ放しでよかったの？　ずいぶん無用心だね。まぁ二階だから大丈夫か」
「いえ、そういうことでなく、少しでも室温を下げておくべきだと思いまして」
「……ああ、なるほど。汗かかないようにか」
「はい」
汗でお経が流れては台無しだ。
なるほど、そこから考えても、凪砂がお経を流さないよう生きていくことは不可能みたいだ。
この年頃の女の子らしくない、簡素で素朴な部屋だった。ベッドと机と棚だけ。ただ、私物がとんでもなく少ない。
「お父さんが、買ってくれないし。お母さんが私に何か買うと、殴ってくるから……」
「嫌な奴だな。僕が殺してあげようか？」
「いえ、自分で殺します。それは、きっと私が生まれてきた理由です」
「そう」
クローゼットを開けようとした僕の手を、凪砂が引っ叩いた。
「ん？」
「ん、じゃありません！　そこは私の下着その他諸々が入ってるんです、私これでもやっぱりレディですよ、も……もう、闇斗……」
「……そうか、分かったよ。じゃあ見るね」
「何でですか！　酷いです、酷いですよ……」
どうやら凪砂は大声を出すと恥ずかしくなってしまい、後半からはだんだんと声を小さくしてしまうらしい。
面白い。
「まぁいいや、後回し」

「後にも先にも回さないで下さい」
「何ソレ……」
僕はまた、ぐるりと部屋を見回す。
「あの人形は宝物か何かかい？」
ベッドの上。枕元に熊の人形が置いてある。さわるとふかふかしてそうな、柔らかそうな、テディベア。いやに殺伐としているこの部屋の中で、それは少し目を引いた。
「はい、お母さんが、私が幼い頃に買ってくれました。たしか、三歳の時だって言ってました。私が持っている人形なんて、あれだけです。だから、とても大事です。お母さんの形見、でもありますし……」
「へぇ」
いいお母さんだったんだろうな。ペルソナ抜きで。
時計で時刻を確認。午後六時過ぎ。普段ならとっくに家についている時間帯だ。
「まぁいいか」
「はい？」
「いいや独り言。僕はね、独り言が多いんだ」
「なんでですか？」
「……分からないな。どうしてなんだろう」
「もしかして、闇斗は、寂しいんじゃないですか？　寂しいから、独り言でそれを紛らわせている、とか」
「……」
「あっ、すみません、知ったようなこと言って！」
「大丈夫だよ。寂しい、か。うん、そうかもしれない。こんな世界だし」
「この世界は、寂しいですか？」
「寂しいね。空しいし虚しい。いや、悲しい、かな。この世界にこの時代に人間で生まれてきたという、どうしようもなく滑稽なまでの不幸。なんとも世知辛い。ぎこちないよね」

「言うのは簡単です。ですが、根拠はあるのですか？」
「ああ、あるね。凪砂はペルソナって知ってるか？」
「いえ。ぺるそな、ですか？」
「そう、ペルソナ。人が被る仮面のことだよ。皆、本性は汚いのに、うまく社会を生きていくために、偽りの自分を演じるんだ。善意も親切も愛情も友情も、所詮は嘘。そういうことだよ。例えば僕は君を助けようとしているが、これにも本来なんらかの得が僕にあるわけだから、しているにすぎない、そういう考え方さ」
「それはとても、悲しいですね」
「うん、そうだね。無様な世界だよ」
と、その時。

ガチャリ。

「！」
鍵が、開く音。
玄関の扉が開いた音が、それに続く。
「なんで……お父さんがこんなに早く帰ってくるなんて……」
「まずいな」
「え？」
「玄関には、僕の靴がある」
「ッ！」
この場合、どうするべきか、思考する。
「この部屋にいる限り、絶対に君の父親はここには来ないのかい？」
「いえ、来ることは、ありますよ。あくまで“近寄りたくないな”って思わせるだけなんで……」
「そうか……」
凪砂が同年代の男子を無断で家に連れ込んでいた。それだけのことでも、凪砂の父親は激怒するだろう。僕がここで出て行っても、残された凪砂は、いつも以上にひどい虐待を受ける羽目になりそう

だ。

それに、今の凪砂に自分の父親を殺せるのだろうか。

いろいろ見ていると、凪砂が自分の父親を殺したい、と思っているのは確かなようだ。

しかし、殺す覚悟が、本当にあるのかどうか、それは分からない。

僕を殺せなかった凪砂。

僕の頬の傷はそれほど深くはなく、もう血は止まっている。

あの動き。

俊敏なあの動き。

しかし、ひ弱な女子中学生が、大の大人、しかも男性を、殺せるだろうか。

背後から隙をつくにしても、寝ている隙をつくにしても、一撃でしとめられるのか？

まして正面からぶつかっていったところで、殺せるか？

凪砂の母親でさえ、逆に殺されてしまった。

ということは、とるべき行動は……。

「凪砂、十五秒で荷物をまとめろ」

「え？」

「君は今日、僕の家に泊まれ」

「え、えええっ？」

「静かに。さぁ、早くするんだ。十五、十四……」

「え、でも、……はい、分かりました！」

凪砂は、机の上にあった学生鞄をひっくり返し、教科書類を出して空（から）っぽにすると、クローゼットを開いて、下着などをつめ始めた。

「……八、七、六、五……」

数えていると。

コツン、コツン、と。

人が階段を上がってくる音。

「はい、準備完了です」
最後にベッドにおいてあった、“思い出のテディベア”を鞄に入れると、凪砂は言った。
「一、〇。ピッタリだ」
本当にピッタリ。
凪砂の部屋の扉が、廊下側から、開かれた。
「行くよ、凪砂」
僕はベッドの上にあったシーツをバッと手に取る。
そして、廊下に立って、丁度僕と目が合った、その男、凪砂の父親に向かってシーツを、投げつけた。
瞬間、まさに隙をつき、僕は凪砂の手をとって、部屋を飛び出した。
後ろで、男が何かを言った。
何を言っていたか分からなかったが、僕は男に言った。
「このことを警察に言ったりしたら、あなたが自分の妻を殺したということを、バラしますよ」
階段を駆け下り、玄関。履き慣れているので、靴を履くのに時間を要することはない。
扉を開け、外に出る。
走る。
僕は亜由の言い方をまねて、凪砂に言った。
「瞬時に正しい決断をする。それが大事だ。覚えておきな、凪砂」
「はい、来世でも忘れません、闇斗」
凪砂の手を引き、僕は自分の家に向かって、走る。

2

無論、両親に、女の子を家に泊めていいか、なんて訊けるはずもないし、知られるのもまずい。
だいいち凪砂はただでさえボロボロの制服着ていて、もういろい

ろと怪しすぎる。
　というか僕の個人的な趣味嗜好とは関係なく、凪砂はきっと美少女に分類（カテゴリ）されるのではないだろうか。
　駄目駄目駄目。言えるはずがない。
　結果、隠れて泊めることにした。
　凪砂は風呂に入れないのでそこはいいとしても、問題は食べ物。
　ということで、最寄のコンビニでおにぎりを二つ購入。
「ご迷惑かけて、すみません」
「大丈夫だよ」
　ただ、コンビニを出て、僕はそれを見た。
「……」
　見るたびに、姉のことを思い出してしまう。
「どうしたんですか闇斗。本屋さんなんて見つめて。買いたい本でも？」
「いいや……、でもちょっと寄っていこうか。本当はもう夜遅いし、親も心配してるだろうけど、何、五分も居はしないよ」
　その書店は、僕にとって特別なものだった。
「凪砂はさ、一年前にあった連続殺人事件、いや大量殺害事件を知ってる？」
「……そういえば、一年前、ありましたね」
　姉が行方不明になった夏休み前日よりも、少し前までの話。
「あの事件の容疑者が僕の姉さんだったんだ」
「でも容疑者ってことは、犯人ではなかったんですよね？」
「……どうかな、変な人だったから。まぁ、死んだんだけどさ」
「そうなんですか？」
「行方不明になって一年、何があったのか知らないけれど、少しは引きずってるかな。結構いい姉さんだったよ」
　姉の本性は、僕の能力でも見破ることができなかった。だから僕は姉さんといる時、安心できた。汚いものを見ないですむから。
「それで、この本屋さんがどうしたんですか？」

「行方不明になる前、姉さんが通いつめていた」
書店に入る。冷房が効いていて、涼しい。
一階建てで、横よりも奥に広いタイプ。といっても、どちらかといったら小さな書店だった。
「大量殺害事件の容疑者だった姉さんだけど、アリバイがあってね。事件当時、だいたいの場合この書店にいたんだってさ。でも姉さんがいたっていうのが、監視カメラに映らない場所だったから、そこは証拠があるわけじゃない。ただ、バイトの人がずっと見てたって証言したらしいよ。姉さん、立ち読みばっかやっててね」
「そうなんですか」
書店内を見回す。レジのところに店員二名。あと見える限りでは、商品整理をしている店員が一人。
「……」
商品整理をしているのは女の人だった。結構背の高い女の人。おそらく天然パーマ。秋元拓哉と同じだな。
眼鏡をかけていて、光の反射の影響で、どんな目をしているのかは分からない。
少し、気になった。
「どうしたんですか闇斗」
「いやなんでもないよ。ほら、あそこが姉が立ち読みしてたらしい場所」
見ると、そこで一人の女の子が立ち読みをしていた。
「ああ、うちの学校の子だな」
女の子の着ている制服から、判明。
ピンクのカチューシャをつけている。なんか、今にも死にそうな無気力な表情を、いや“無表情をしていた”。こんなの言葉遊びだけどさ。
「二年生みたいですね」
見かけで言っているらしい凪砂だが、ふむ、当たっているだろう。
学年が違うから、見覚えがないのも無理はない。なんとなく名札

を見てみる。
蒼春未（あおいはるみ）。
そう読めた。
「蒼？　蒼って言ったら、隣のクラスの蒼刹流（あおいせつる）の妹かな。あいつ妹いるって言ってたし……」
「闇斗は本当に独り言が多いんですね」
「あ？　ああ、そうだよ。さて、もういいや、そろそろ行こう」
「はい」
書店を出て、僕と凪砂は再び僕の家を目指す。

家に着いたのは、夏なのにあたりがすっかり暗くなった頃だった。
親が心配のあまり警察とかに通報していないかなとか思いながら、鍵を使って扉を開ける。
「ただいま」
僕は言う。凪砂も一緒に家に入る。
親が来ないように、急いで僕単独でリビングへ。
キッチンで夕食の準備をしていた母親に「迷子の幼稚園児を助けてきた」と嘘をつき、再び廊下へ。
僕は足音をたて、凪砂は極力足音を立てないよう、階段を上がる。
ちなみに凪砂は自分の靴をちゃんと手に持ってきている。
そして、僕の部屋に無事到着。
「ふー、第一関門突破かな。これで安心するのは論理的でなく愚の骨頂だけれどね。あ、靴はベッドの下にでも入れときな」
僕は用心して、小声で言う。
「で、どうするんですか？」
凪砂も僕にならい、小声。
「凪砂はクローゼットの中で過ごしなよ」
僕はクローゼットを開ける。
「えー、闇斗悪魔です。こんな埃まみれの狭く暗く息苦しい密閉空間に女の子を解禁だなんて。めちゃくちゃ犯罪です」

「いや僕は君を守る立場なんだけどね」
「いえ女の子を親に秘密で家に連れ込むなんて、誰がどの角度（アングル）から見ても変態です」
「酷いね。窓から落としていいかな」
「ひえっ！　嘘なのに！　あ、すみません調子に乗っちゃって。やっぱ迷惑ですよね、私みたいなのに懐かれると……。私、お母さん以外の人からこんなに優しくしてもらうのって、初めてで……嬉しくて……」
　なんか泣き出しそうな雰囲気だった。困る困る。
「迷惑じゃないよ。君の言うとおり、連れてきたのは僕だしね。君がお父さんを殺す覚悟を固めるまでいてもいいよ。といってもずっといられると困るけど。迷惑なんじゃなくて、困るだけだよ」
「……ありがとうございます、本当に。ではお言葉にべったり甘えて、私は闇斗のベッドをお借りしますね」
「殺すぞ」
「ひえっ！　怖い！　お父さんより怖い！」
　あくまで二人とも小声だ。
「まぁ、いいか。絶対に大声を出さないように。あとベッドの上から動かないように。足音って以外と一階から分かるものだからね。くしゃみとかしたら最悪」
「はい、努力します」
　そう言って僕のベッドの上で体育座りをする凪砂。
「凪砂、明日僕は学校に行くけれど、凪砂は当然ここにいるんだろ？」
「……そうですね、はい」
「じゃあ退屈するよね。本でも読んでるかい？」
「はい、そうします」
　凪砂には一冊適当に本をかして、僕は普段通りの生活をした。凪砂はコンビニで買ったおにぎりを夜食にしたようだ。
　凪砂はとてもいい子に、つまり静かにベッドの上で読書をしてい

てくれた。途中トイレに一回行ったのだが、その時は二階のトイレを使わせたので、一階の親からは僕が入ったのだと思わせられただろう。

そして、困ったのが夜だ。

「ベッドで寝るのは僕だ。凪砂はベランダで寝てくれ」

「な、なんという残酷な発言。闇斗酷すぎます。極悪非道もここまで来るとすがすがしいですね」

「……分かった。じゃあ一緒に寝よう」

「はい」

「ただ一つ条件」

「何ですか？」

「凪砂の体が少しでも僕に接触した瞬間、殺すね」

「……」

凪砂の顔面が一気に蒼白に。

「気をつけてね」

そう言って、僕は電気を消した。

普通にベッドの中央に横になる。凪砂は端のほうで縮こまっている。

「な、なんで闇斗そんな真ん中で寝るんですか。い、意地悪しないでくださいよ……」

凪砂は泣きそうだった。

いくら何でもかわいそうだったので、仕方なく僕もベッドの端（言うまでもないが凪砂と逆サイド）に移動。

普通に寝た。

3

七月六日。

雨だった。梅雨明けはいつになるのだろう。

少し心配だったが凪砂を家に残し、僕は学校に登校する。

亜由のいる資料室へ習慣的に足を運び、亜由の第一声はある程度予想した通りのものであった。
「おはよう、闇斗。連続殺人事件、昨日も被害者は出たのか？」
「出なかったよ」
僕がその被害者なりそうになったとは言わない。面倒だ。教えなきゃいけないようなことでもないし、亜由の機嫌をとれそうな話でもない。
「そう。犯人はビビッちゃったのかしら。つまんないの」
子供みたいに言って亜由は、読書に戻る。
結局僕は、何をやっているのだろう。そんなことをふと、考える。
「ま、ようは凪砂を観察していたいだけなんだけどさ」
「何か言った？」
「いや、独り言」
「君は独り言が多いな。鬱陶しい。特にこの季節、暑いなか近くにいる人間がぶつぶつ独り言を言っていては、うっかり殺しそうになってしまうよ」
「……」
その日は、変わったこともなく、普通に終了した、と言って間違いないだろう。
ああそういえば、昼休み、ふと気になって、昨日書店で見た女の子のことを調べてみた。
三組の蒼刹流のところに行って。
「えーっと、琴吹……だっけ？　なんか用か？」
刹流は冷たい表面上だけの笑みを浮かべながら訊いてきた。大抵この男子生徒は、こういう表情をしている。冷笑主義、なのだろう。
「刹流の妹ってさ、何て名前？」
「あん？　蒼春未だけど、オレの妹がどうかしたか？」
「いや、昨日僕行き着けの書店で見かけてね」
「ああ、あそこか。オレもよく行くぜ。そこのバイトの店員とちょっとばかし仲いいんでな」

「それってもしかして、天然パーマで眼鏡かけた女の人？」
「ああ、そうそう。なんだ、お前も知り合いなのか？」
「いいや。ただ、よく見るからね」
「そうか」
「うん、これだけだ。ありがとね」
「あ？　ああ、じゃあな」
「うん」
それで、このお話は終わり。
蒼春未、ねぇ……
死にそうな無表情。空気に接していることが気だるそうな、そんな感じの少女。
これからの僕の人生には、きっとなんの影響も与えない、なんでもない人物だろう。
そう思った。

放課後、帰宅。お母さんの様子に特におかしな点はなく、凪砂のことがバレた様子はない。
部屋に行くと、ベッドの上で読書をしている凪砂の姿があった。
「あ、闇斗おかえりなさい。闇斗がいなくて寂しかったです」
「そうか、悪かったね」
僕は鞄を下ろして椅子に座り、一息つく。
「どうも疲れる世の中さ」
「闇斗はこの世の中が、嫌いですか？」
「ああ嫌いだね。ありえなくつまらないよ。ま、所詮は世の中なんて人間が構成したもので、僕が嫌いなのは世の中じゃなくて人間なのかもしれないな。でも僕も人間なわけだから、滑稽だ」
「闇斗、明日は七夕（たなばた）ですね」
お、いきなり話題が変わったな。凪砂はそんな頭のいいほうではないようだし、こういった哲学的な話は、本当は嫌いなのかもしれない。ああ、琴音がいてくれれば、こういう話が合いそうなのだけ

どな。亜由は亜由で、こんな話しても「だから何？」としか言ってくれなさそうだし。鏡ヶ崎恵仔は僕の苦手な存在だし。

「そうだね」

「闇斗は、短冊にお願い事を書く、なんてしないんですか？」

「小さい頃はしてたっけな、そんなこと。ま、下らないなって思いながらだっただろうけれどね。僕ってサンタのトリックにも幼稚園年長で気付いたし」

「夢がないんですね」

「希望もないよ」

「……」

さて、ところでなんでいきなりそんなことを凪砂は言ってきたのだろう。

「何、凪砂はそういうの、やりたいの？」

「はい。短冊にお願い事、なんてロマンチックじゃないですか」

「そうかな。だいいち梅雨明けしてないから、明日は星きっと見えないんじゃないかな。日本はただでさえ温暖湿潤気候だしね」

「……そうなんですか、ショックです……」

「……ま、決まったわけじゃないし。なんなら、明日の天気調べてきてやるよ」

「結構です。雨だって知って、絶望したくありません」

「天気予報なんて外れるもんだろ」

「なら晴れの場合でも外れるかもしれません。期待させといてドーンッていうのが、一番嫌ですし……。闇斗は――」

そこで凪砂は一度俯いて言葉に詰まったようになり、そして顔をあげると、申し訳なさそうに、というか不安そうに、僕に向かって口を開いた。

「――私を、裏切りませんか？」

「……」

裏切り。

凪砂はきっと、それに敏感だ。

ずっとイジメられ続けた人生。
期待させといてドーン。
おそらく、何度も“友達のフリをして近づいてくるペルソナ被り達”に裏切られ続けてきたのだろう。
それにこれは本当に“もしかしたら”の話だが。でももしかしたら、も・し・か・し・た・ら。
自分をおいて先に死んで苦しみから逃れた母親にも、裏切られたと感じているのかもしれない。
だから、敏感。
恐怖する。凪砂は裏切りという行為に怯える。
人間不信。
「大丈夫だよ」
そんな凪砂に、僕は言う。
言葉で遊ばず、仮面を被らず。
「僕は鷺凪砂の望みを叶えるまで、絶対に裏切らない」
凪砂の望み。父親を殺すこと。復讐。最後の最後に未練を、宿命を、義務を果たし、運命を、因果を、因縁を絶つ。
「絶対に凪砂の望みを叶えてあげる。だから――」

君は僕を、信用してくれていい。
他の誰もを信じられなくても、僕だけは信じていていい。
他の誰もを頼れなくても、僕だけは頼っていていい。
他の誰もが敵でも、僕だけは味方と思っていていい。

そう、言った。
もっとも、口先だけだ。
もしかしたら、僕は一つくらい、裏切ることがあるかもしれない。
最後の最後は、やはり裏切ることがあるかもしれない。
凪砂の望みも、もしかしたら叶えてあげられないこともあるかもしれない。

ただ、それを注意書きとして添えておくことはしても、言いはしないさ。
希望だけを並べれば。
絶望を知らなくてすむ。
その分希望が絶たれた時の絶望は、大きいけれど。

「ありがとうございます」

凪砂は、照れるように、安堵したように、心酔したように、僕に言った。
そして、これまで以上の決意を滲ませ、僕にこう言った。

「闇斗、私は明日の夜に、父を殺します」

僕はそれに答える。応える。

「ああ。論理的に、殺してやれ」

明日。
鷺凪砂の物語はきっと、全て終わる。

・つづく・

四章：死神誘引の鷺凪砂３

1

七月七日。
七夕。
昨日の夜、凪砂が父親を殺すことについて、いろいろと作戦みたいなものを立てた。
寝るときは、なんだかベッドの端のほうでビクビクしている凪砂が可哀想に思えてきたので、接触してきたら殺す、っていうのはナシにしてあげた。結果、朝起きてみたら故意なのか違うのか計りかねるが、僕に抱きつくかたちになっていた凪砂なのだが、学校に来る前に口を押さえた上で何度か殴っておいた。何女に暴力やってんだ、なんて言われても、僕は知らん。
で、作戦というのは簡単だ。
凪砂の家の近くに寺があるらしく、そこに凪砂の父親を呼び出すこととした。
僕は、殺人には手をかさない。凪砂が、そこは自分でやりたいと主張したのだ。そこは譲れないところなのだろう。
ただ、もしも殺されそうになった場合はこうしろ、という最終手段は伝えておいた。
水の入ったペットボトルを近くに置いておけば、いざとなったらそれを自分の体にかけろ。つまり、お経を消せということだ。
すると、何か不幸が起こり、凪砂は死ぬ。それに、父親を巻き込め、ということだ。話によると、幼い頃に凪砂が死神に殺されそうになったとき、車に撥ねられそうになったり、とまわりを巻き込むことが可能な話が多かったので、おそらくこれは最適。だがしかし、あくまで最終手段だ。
そういえば余談だが、朝の天気予報によると、今日はずっと曇り、

とのことであった。凪砂にとっては残念だろうけれど、今日は星空を拝むことは難しいだろう。

そして、僕は学校から帰ってきた。

「闇斗おかえりなさいです」

凪砂は無事に僕の部屋にいた。

どうやらこの調子だと、両親には凪砂のことは知られずに済みそうだ。

「うん、ただいま。凪砂、プレゼントをあげるよ」

「ほぇ？」

僕は鞄から、細長い色紙を二枚、取り出した。片方、ピンク色のほうを、凪砂に渡す。

「……これって、もしかして」

「うん、凪砂、短冊にお願い事書きたかったんだろ？」

「……闇斗……、ッハイ！　ありがとうございます！」

「うるさい」

「す、すみません……」

謝ってから、凪砂はベッドの上から下りて、僕の机の上にあったペンを手にとると、何やら文字を書き始めた。当然、お願い事を、書いているのだろう。

やっぱり、“ちゃんと父親を殺せますように”とでも書いているのだろうか。

「えへへへへ……」

照れ笑いみたいな表情を浮かべながらペンを動かし続ける凪砂。

「何て書いてるんだ？」

「み、見ないで下さい！」

僕が覗き込もうとすると、凪砂は慌ててそれを手のひらで覆い隠す。

「闇斗、いくらなんでも、ごもも……」

「大きな声を出すな」

僕は凪砂の口を右手で覆う。
これも以前彩音とやったようなやり取りだな。
「……」
と。
何故か凪砂は顔を真っ赤にして、僕に目を合わせないようにしているようで、って何なんだその反応は。
僕が手を離すと、凪砂はペンと短冊を持ったまま、ベッドの上にさっと戻り。毛布に包まってしまった。
……何なんだろう。
意味分かんねぇ。
「さて、僕はなんて書こうかな」
僕も自分の机で、短冊にお願い事を綴る。
『琴音の生まれ変わりと出会えますように』
……。
「めちゃくちゃ下らねぇ……」
ま、ただの暇つぶしだし。
僕は自分の短冊をぐしゃぐしゃに丸めて、ゴミ袋に入れた。
そして、凪砂を見る。
毛布に包まったままだ。
「……」
さて、そろそろ行動を開始しよう。
「凪砂、君のお父さんの電話番号、知ってるか？」
「いいえ」
毛布から声が返ってきた。
「そうか」
ふむ。
現時刻、五時前。
「さすがにまだ帰ってきてねぇよな……」
う～ん。
となると、もう少し待たなければいけないか。

ところで凪砂の家の近くの寺というのは、どういうところなのだろうか。
僕も知らないし、どうせ小さくてボロっちぃ寺なんだろうな。
勝手に予測。
「夜遅くになるだろうしな。コーヒーでも飲んでおこうかな。カフェインカフェイン」
と、僕はベッドの上、端のほうにおいてある、人形に目を向けた。
凪砂が持ってきた、母親との、思い出のテディベア。
それと、目が合った。
別に人形と目が合ったからと言ってどうというわけじゃないけれど。
気になるよな。

夜8時過ぎ。
早めに夕食をすまし、風呂から上がって、僕は部屋に戻った。
凪砂にはあらかじめ三日分くらいの食料を買わせておいたので、凪砂が食事に不便しているということはない。
「凪砂、家の電話番号を教えて」
凪砂はベッドの上で寝転びながら、本を読んでいた。
すっかり独占しやがって。
「あ、お父さんに、電話、するんですか？」
本を閉じて、体を起こし、僕と向き合うようにする凪砂。
「ああ。呼び出し。家から一番近い寺って言えば、分かるのか？」
「はい。そこくらいしか、ありませんから」
「そうか、なら心配いらないな」
そして僕は凪砂から家の電話番号を教えてもらい、パジャマから私服にまた着替え、親に見つからないよう、家を出た。
用心のため、公衆電話から電話をかけるのだ。
なんとなく、家から一番近い電話ボックスを避け、二番目に近い電話ボックスに向かう。結構遠い。夏の夜で、むし暑い。

見上げると、輝きを競い合う星達。
曇っていない。
「ま、天気予報なんて外れるもんだし」
偶然か。必然か。
凪砂、喜ぶかな。
電話ボックスに到着。入り、十円玉を投入。
記憶していた番号をプッシュ。
電話がつながり、ツーコールで相手は出た。
『はい、鷺です』
大人の男性の声。
凪砂の父親で、間違いないだろう。
「凪砂のお父さんですね。お久しぶりです。僕は秋元と申します」
偽名。
なんとなく、秋元拓哉の名を借りた。
「一昨日は突然シーツを投げたりして、すみませんでしたね。ま、厳密には違いますが、正当防衛ですよ」
『……言ったのか？　警察に』
一瞬何のことをさしているのか分からなかったが、瞬時に理解。
ああ、それを脅しに使ってたっけな。「鷺直美さんを殺したのはあなただと、警察に告発するぞ」と。
「いいえ、まだですよ。だいいち、あなたのところに警察は来ていないでしょう？　論理的に考えれば、分かりそうなものですが。まぁ、僕がそれを言うか言わまいか、これからのあなた次第です」
『何が目的なんだ、貴様は凪砂の彼氏とでもいったところか？』
「はは、面白く間抜けな推測ですね、最近は大人も頭が悪いときた。ま、通常思考なら大多数はそう勘違いする……かな。さしずめ単純計算みたいなものか。それに対する返答は、いいえ、ですよ。あんな可愛い女の子、僕にはとっても勿体無い。だいたい僕には彼女いますよ。その子は自分の双子の妹を殺してでも僕と一緒にいようとする子で、まさしく僕にベタ惚れですね、困った困った」

『……』

「さて本題です。今晩零時。あなたの家から最も近い寺に来てください。勿論、一人で。手ぶらでね。これに反した場合、警察にあなたの罪を告発します。大丈夫、取って食おうってんじゃありませんよ――僕はね」

『……』

「あなたの娘さんが、あなたといろいろ話したいそうですよ。いい事じゃないですか、あのくらいの年頃の女の子、自分の父親とコミニュケーションなんてとらないでしょう。うらやましい限りだ」

『で、そこに従えば、君が俺のことを警察に告発するってことはないわけか』

「その通り。そこは大人、話が早いですね。嬉しいですよ。ではもう一度確認。今晩零時、あなたの家から最も近い寺に、一人で何も持たずに来てください。あと、そのことを、誰にも言わずに。あとからこのうちのどれかの条件が破られていたと分かった場合も、告発することになります。では、論理的で正しいご判断を、どうぞ宜しく」

僕はそこで、一方的に電話を切った。

「……こんなもんか」

僕は電話ボックスを出て、一旦また自宅へと戻った。

僕と凪砂はいろいろな話をしながら、時間まで、待った。

三十分ほどでその寺には着けるだろうということなので、いろいろと逆算し、この家を十一時十五分に出ることに決めた。ナイフは、凪砂がちゃんと持っている。僕をあの時襲ったナイフだ。

「緊張、する？」

「……はい。とても、どきどきします」

「不安？」

「いいえ、……闇斗がいてくれるから、平気です。闇斗、ちゃんと、いてくれますよね？」

「ああ、いるよ。約束どおり、僕は手をかさない。ちゃんと、殺せるんだろ？」
「はい。私、それだけは、ちゃんと、できます。……やります」
「うん、それが大事だよ。絶対に、同情なんてするな。感情移入はこの場合、もっとも愚かしい。敵は死ぬべき人間だ。それを殺して悪いことは何もない。人殺しは、正義なんだよ。死刑も、そうだ」
「はい。……闇斗は、人殺しは、赦されるものだと思いますか？」
「僕も人殺しだけど、そうだな、人殺しは赦されないかな。許されないよ。――緩されるだけだ」
いつも通りの、言葉遊び。
「凪砂、君にとって人生は、どうだった？」
「つらかったです」
凪砂は、ためらわず、言った。
「生まれてきたく、ありませんでした。生きていたく、ありませんでした。でも、活きたかったです」
「そうか。ふ、僕と三日間いただけのことはあるよ。言葉遊びも、上手になったね」
僕はとんだ反面教師だったけれど。
これから人殺しをするという人間には、丁度いい。
「人間に生まれ変わったら、どうしたい？」
僕は質問する。
凪砂はそこで俯いて、顔を赤らめ、答えた。
「闇斗に、会いたいです」
琴音のものとよく似た台詞を、彼女は言った。

2

僕と凪砂は無事、僕の両親に見つからずに、家を出ることに成功

した。

凪砂は、全ての荷物をまた学生鞄に詰め込んで、持ってきている。

「わぁ……きれい……」

凪砂は、夜空を見上げ、そう言った。

七夕。

「あれがアルタイルだね。彦星(ひこぼし)だ」

僕は他に比べて、さらにきれいに輝く星の一つを指差して言う。

「あれがベガですよね。織姫(おりひめ)の」

凪砂が、きれいに輝く、もう一つの星を指差して言う。

彦星と、織姫。

七夕(きょう)の主役。

「きれいです、とっても」

「そうだね」

凪砂はとても、幸せそうだった。

寺に、到着する。

「少し早く来すぎたかな」

やはりとても小さく、ボロい、今にも崩れそうな寺だった。

凪砂の家の近くの山。小さな階段を少し上がったところに、それはあった。

小さな鳥居をくぐる。

誰もいない。

小さな御社(おやしろ)（この建物の固有名詞が御社であってるのかどうかは知らないが）があり、賽銭箱が前に置かれている。

少しはなれたところに物置みたいなのがある。

それだけ。

「寺と呼んでいいのか？　これ」

何がまつってあるんだろう。

というかこんなの、そこらのちょっと偉い感じの人のお墓、って解釈したら丁度いいくらいのものだぞ。

掃除もされてねぇ。地面には落ち葉が散らばっている。
木々に囲まれた、小さな敷地。
小さな御社といっても、まぁ、そこまで小さいわけじゃない。中に入れば、人一人くらいは寝泊りできそうな大きさはある。
ま、こんな汚いところに寝泊りするのは浮浪者くらいか。
「凪砂、君の父親が来たら、すぐに攻撃するんだ。僕は木の陰に隠れてるよ。万が一、君の父親が逃げて行きそうになった場合だけ、僕がそれを食い止める」
「はい」
「じゃ、そろそろ来ると思うから……」

ぎゅっ。

「……」
突然凪砂は、正面から、僕に抱きついてきた。
細い腕を、僕の背中にまわして。小さい顔を、僕の胸のあたりに埋めて。
小さい力で。
「……闇斗、」
凪砂は、僕に、言う。
「ありがとう」
「……」
「闇斗に会えて、良かった。私の人生、つらいだけだったけど。闇斗に会えたことだけで、生きてきて良かったって、思えたよ」
「……」
「闇斗は、かっこいいよ。私、闇斗が、好き。私が闇斗を殺せなかった理由。教えられないほうの理由は、それなんだよ。あの時、闇斗を見て、本当、一目見ただけで、好きに、なっちゃったんだよ」
「……」
「闇斗と、もっと一緒に、いたかったな」

「……」
「私が普通に生まれてたら、闇斗とずっと一緒に、いれたのにな」
「……」
「でも、嬉しいよ、闇斗。私に優しくしてくれて、嬉しかったよ。私のこと嫌いじゃないっていってくれて、嬉しかったよ。初めて、嬉しかった。お母さんといて嬉しいこと、あったけど、闇斗と会えたのが、一番、嬉しかった」
「……」
そこで凪砂は顔を上げ、僕をまっすぐ、見る。
「闇斗は私のことなんか、なんとも思っていないんだと思うよ。知ってるよ、分かってる。闇斗、意地悪だし、性格もひねくれてるし。でも、私は闇斗が、好き。誰よりも、だよ」
「……」
なんで。
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで。
なんで皆、こうなんだ――
いつも。
いつもいつもいつもいつもいつもいつもいつも。
僕は、こんな屑人間（くずにんげん）なのに――
「僕も、凪砂が、大好きだ」
「嘘つき」
凪砂はそう言って、微笑んだ。
微笑んで、
「ちゅっ」
僕にキスして、僕から、離れた。
「闇斗はやっぱり優しい。闇斗、私のこと、覚えてて」
凪砂は、ポケットから、紙切れを取り出し、僕に、渡した。

凪砂の、短冊。

「闇斗、ずっと、大事に、持っててね。私のこと好きなら、持ってて。この短冊（わたし）と、ずっと、一緒にいて……――闇斗！」

どんっ。

「――」

僕は凪砂に、跳ね飛ばされた。

直後、僕と凪砂の間を、何かが通過する。

「！」

凪砂の、父親だった。

その手に握られているのは、鋭利なナイフ。

秘密を知って、それを告発するぞと脅しをかける僕。そして、秘密を知るもう一人、自分の娘、凪砂。

凪砂の父親は僕らを、殺すつもりだ。

今、ここで。

踏みとどまり、こちらに振り返る凪砂の父親。

そこへ、同じくナイフを持った凪砂が、飛び掛る。

僕はその場から、少し離れる。

夜空を見上げる。

空は曇っていた。

午前、零時。

七月七日（たなばた）は、終了した――。

凪砂の父親は、優秀なほうだったんだろう。

結構優秀なままに人生を過ごしてきて、就職。

しかし職場で馬鹿にされていた。

今までずっと優秀だった自分が、見下されて。

それで凪砂の父親は、家庭内暴力をすることで、自分が強く偉い

人間であるという考えを、保とうとしたのだろう。
ペルソナ崩しの僕は、そう分析する。
汚い。やっぱり世界は、汚い。
親子（ふたり）の殺し合いは、ずっと続いた。
暗闇の中、二人が振るうナイフが、不気味に光る。
ナイフが空気を切り裂く音。
僕はそれを離れた位置から、ずっと見ていた。
血。
血。
血。血血血

見ているこっちが、激痛を感じる。
その時。
凪砂の右胸の少し上に、父親の振り下ろしたナイフが、突き刺さった。
「凪砂！」
そのまま父親は、そのナイフを押し込むのではなく、下に向かって……
凪砂の体を、裂いた。
縦一本、凪砂の体に亀裂。

ぶしゃあっ。

鮮血が、闇を赤く染めた。
赤い赤い赤い赤い。
紅い紅い紅い紅い。
思わず走り出そうとしてしまった自分を、抑える。
「駄目だ」
論理的じゃないけれど。
全然論理的じゃないけれど。
これは、僕が手を出していい戦いではない。
「凪砂の、復讐、なんだ」
凪砂の鞄は、御社の階段のところに置かれていて、その中には水が入っている。
絶対ではないけれど、
それを使えば、父親を道ずれにできるだろう。
しかし凪砂は、それをしない。
それを許さない。
凪砂は、倒れなかった。
父親は、油断した。
凪砂の体を縦一本に走る、切り傷。

噴出した血は、父親の視界を赤く染めた。
つまり、見えなくしたのだ。
凪砂は、
死を覚悟した少女は、
復讐を自分の生きてきた理由だと言った人間は、
そのチャンスを、逃さなかった。
普通、あんな傷を負っては、そんなことができるはずないのに。
執念、だった。
凪砂の、強い、それだけは譲れないという、執念。
凪砂は、ナイフを、父親を左胸、心臓に向かって、強く、
強く強く強く

凪砂は、立っていた。
殺したのだ、父親を。
自分の存在する意義。
使命を、果たした。

ぽたり。

ぽたぽたぽたぽた。

雨が降り始めた。

だから、凪砂が涙を流しているのか、雨で濡れただけなのか、分からない。
雨は、強くなる。
血だまりの中、死んでいる、自分の、父親。
傷ついて、傷だらけの少女は、立ち尽くしていた。
僕も、立ち尽くしていた。
無言で。
血だまり。
血。黙り。
沈黙。

雨は降り続ける。
雨は全てを洗い流す。
洗い流す。
ミシミシ。
音が聞こえる。

御社が、崩れた。
凪砂と父親に覆いかぶさるように。

御社は、凪砂に、襲い掛かるように、崩れた。
まるで、死神が大鎌(おおがま)を振り下ろしたかのように。
僕はそれを、黙ってみていた。

3◆鷺凪砂

私、鷺凪砂は、とある施設にいた。
そこで、暮らしている。
何不自由なく、普通に暮らしている。
この施設は、孤児を集めて住まわせている、児童擁護施設(じどうようごしせつ)である。
ついこの間、私はここに来た。
友達もすぐにできて、楽しい毎日だ。

記憶喪失。

私はまさしく、それらしい。
以前の私がどんな人間だったのか、とか、思い出とか、両親のこととか、友達はいたのか、とか、そういう記憶を、全て無くしている。
私はひどい怪我をしていて、今も体中に包帯を巻いたりしている。
何故そうなったのかは分からないけれど。
ただ、私は事故にあったのだとだけ、聞かされている。
私に両親はいないらしい。それもあり、今ここで暮らしているわけだ。
以前の私はとても暗い子だった、ということは聞かされた。
まったく、信じられない。
だって、そんなに暗くなんてしてたら、幸せが逃げていっちゃう。
そう思う。

午後。
私は普通に、友達とお喋りをしていた。
すると、そこに年下の女の子が駆け寄ってきた。
「凪砂お姉ちゃん、なんか知らないお兄ちゃんが、凪砂お姉ちゃんのこと呼んでるよ」
「私のこと？」
「うん、門のところにいるよ」
「う～ん、誰だろう」
私は不思議に思いながら、外に出て行った。
門に向かう。
そこに、知らない男の子が立っていた。手に、なんか汚くてぼろぼろの熊の人形、テディベアを抱えていた。
誰だろう。
なんか、怪しい。
私と同年代、かな。
「あの、私を呼んでるのって、あなたですか？」
敬語で私は話しかける。
門越しに。門は閉まっているから。
「ああ、そうだよ」
男の子は答えた。
「何の用でしょうか？」
「えーっと、僕のことなんか覚えてないよね」
「はい、すみません、私の友達、ですか？　私、記憶喪失だから……」
「うん知ってるよ。僕は……ヤミッピ、だ」
「やみっぴ？」
何だろう、名前だろうか。
「僕のことを君は以前そう呼ぼうとしていたよ。もっとも、呼ばせなかったけれど」
「……」

やはり、以前の私の友達、ということで合っているのだろうか。
「今日は君に、渡しておかなければならないものがあってね」
男の子は、抱えていた汚いテディベアを、私に差し出してきた。
穴が開いていて、中の綿が見えてしまっている。
「ん？」
綿が、筆で書かれたらしい文字で埋め尽くされていた。
「ずっと気になっていたけれど、こういうことだったんだね。君が部屋で口に出した人間が死んでいた。それは君をイジメている子達だった。あの殺人の被害者の生徒達は、皆体をバラバラにされて、残酷な殺され方をしていた。つまり、お経の効果で、君のお母さんの魂はそのテディベアに宿っていたんだろう。動く人形に、まさか連続で遭遇することになるなんてね」
独り言らしく、何を言っているのか、私には分からなかった。
「ま、君が今生きているのは、このテディベアのおかげさ。御社に潰されそうになった時、このテディベアが鞄から飛び出して、君の頭を庇ったんだ。だから、記憶を持ち去られただけで、命は助かった。もう君、死神には狙われてないようだね。まぁ、当然か。以前の“鷺凪砂”は確かに“死んだ”もんな。鷺凪砂は死んだんだ。死神が人を殺すというのは、こういうことだったのかもな……。魂を、奪う」
また独り言らしい。独り言の多い人だ。
「ま、受け取っといて」
強引に押し付けられ、仕方なく私はそのテディベアを受け取る。
「あと、最後にこれ。……帰すよ」
男の子はポケットから、ピンク色の紙切れを取り出し、私に渡した。
「やっぱりさ、僕みたいなのを好きなっちゃ駄目だよ。凪砂みたいな可愛い女の子には、もっとお似合いのいい人が、いるからさ」
男の子はそう言うと、こちらに背を向けて、歩き出した。
「あ……」

私は何か言おうとしたが、結局何も言えなかった。
何故か胸が、チクリと、痛んだ。
テディベアを、見る。
なんでだろう、なんだか、懐かしい、感じ。
そして、次に紙切れを見る。
何も書いてない。
裏返してみると、そちらには文字が書いてあった。

『闇斗とずっと一緒に、いられますように』

なんでだろう。
なんでだろう。
なんでこんなに、悲しいんだろう。

私はしばらく、立ち尽くしていた。

・つづく・

五章：鏡依存の鏡ヶ崎恵仔1

1

お前は生きているだけで満足なのか。
そう問われれば、僕はこう答える。
生まれてきた時点でもう不満さ。
じゃあ死にたいか？
いいや。死ぬのは痛いじゃないか。僕にはそんな度胸も勇気もない。それに、まやかしかもしれないが、もしかしたら僕が死んで悲しむ人がいるかもしれない。迷惑する人がいるかもしれない。まぁ、家族だね。
つまり、何がお望みなんだ？　理想はなんだ？
簡単さ。死んだように生きる。つまり、論理的に。

「またそれか、琴吹は」
以上のような会話をしていて、僕の最終的な答えを聞いた鏡ヶ崎恵仔は、そう言って溜息をついた。
「論理論理論理ね。論理ロンリーナ。なぁ琴吹、論理っていうのはそんなに格好いいか？　悪いけどさ、私には論理なんて、不確かなばかりだな。そもそも論理っていうのは人間が作ったものだろ？心理学くらい曖昧なものだよ、それは。要領を得ない。人間が、あらゆる行動に理由付けをしたくて、否、あらゆる行動を意味づけたくて、確かな行動をさぐるために作り出した、ハリボテくらいのものだ」
「まったくもって同感。でもね、論理ってのは、簡単に言えばさ、安心したいから作られたのさ。僕は安心したい」
「安心安心安心ね」

「で鏡ヶ崎、一体全体、何のようだ？」
「ああ、そうそう、それそれ」
僕は鏡ヶ崎が苦手だ。気がおかしくなりそう。彩音よりも、相手にしにくいかもしれない。でも気は確かじゃないとね。人間（サル）も気から堕ちる、なんてね。
「あのさ琴吹」
「うん？」
鏡ヶ崎は、言った。
「須藤を殺したのは、お前だろう？」

2

今日は火曜日。
鷺凪砂（さぎなぎさ）の記憶喪失並びに、あの隣町を騒がせていた連続殺人事件の終焉は、先週の話である。
今は昼休み。
ということは、無論、僕は資料室に向かっている。ただ、少し、行くのが遅れた。それが、この偶然につながったわけだろう。
僕は今、北校舎の階段、四階へと上がる階段のところで、立ち止まり、身を潜め、耳を澄ましていた。
上の階の廊下から、声が、聞こえてきた。
「奈野奈乃子を殺したのは誰なんですか。今すぐ答えてください」
と。
この声、学年一のエリート鏡ヶ崎恵仔の声だ。
彼女と僕は、仲がいいといえば嘘になるし、仲が悪いというにも嘘だし、友達と呼ぶにはあまり話さないし、でも知り合いというよりも気は合うし。とにかくそんな曖昧な仲。
僕は少し階段をあがり、踊り場から、こっそり、鏡ヶ崎の姿を見

る。階段の上で鏡ヶ崎は、こちらに背を向けていた。両手で、顔くらいの大きさの鏡を持って、顔の前に持ってきている。こんなところで何をしているのだろう。

というかさっき、鏡ヶ崎は鏡に語りかけていたのだろうか。

その時。また鏡ヶ崎の声。

「分かったわ。奈野奈乃子ってのは、検索には一人しか引っかからないわね。だから間違いない。その子はね、動く人形によって、殺されたわ」

「ッ！？」

驚愕。

まさに、驚愕。

こちらに背を向けているといっても、横顔くらいは見える。

鏡ヶ崎の口は、まったく動いていなかった。

対して鏡に映る鏡ヶ崎の口は、動いていた。

それに今、なんて言った？

奈野奈乃子は動く人形によって殺された、だって？

なんで、知ってるんだ。

僕は困惑する。

僕は混乱する。

何をしているんだ、あんなところで。あの鏡はなんだ。見間違いじゃない、鏡ヶ崎は喋っていないのに鏡ヶ崎の声がした。何で動く人形を知っている。

――と、鏡ヶ崎がこちらを振り向こうとするのが分かった。僕はさっと引っ込み、階段を音を立てずに降りる。三階のここは、図書室になっている。鏡ヶ崎はすでに階段を下りてきていて、僕は仕方ないので、図書室から出てきたように装った。鏡ヶ崎が僕に気付く。鏡は持っていない。多分、サマーセーターの内側にでも隠しているのだろう。

「やぁ琴吹」

「……鏡ヶ崎、なんで知ってんの？」

僕は前触れなく突然、尋ねた。

今日の朝、僕の三年二組の教室にやってきた鏡ヶ崎は、僕に「須藤を殺したのは、お前だろう？」と言ってきたのだ。無論僕は驚愕する。もともと突然の不確定要素（イレギュラー）は苦手なんだ。不測の事態ほど、論理的対処が難しいものはない。結局僕が絶句していたらチャイムがなって、鏡ヶ崎はニッと笑って帰っていった。

教室だったので、皆が集まってきた。僕に「今のどういうことだよ闇斗」などと口々に質問する。当然、僕はそれらの質問をかるく否定してあしらって、これからどうするべきかについて考慮していた。

「ああ、まぁ私にもいろいろあるのさ。だいたい私はお前を鬱陶（うっとう）しく思っているからな」

「……」

顔には出さないが、結構ショック。

鏡ヶ崎みたいな、背高くてスタイルよくて顔もいい、非の打ち所なし向かうところ敵なしのエリート美少女中学生から、面と向かってはっきり「鬱陶しい」なんて言われたら、いくら僕でもそりゃ落ち込む。

本当は、夢羽に嫌い嫌い言われてたのも、少し応えていたし。

僕は好きとか嫌いだとか、他人からどう思われているかとかどうでもいいし、それに嫌われて当然の人間だ。でも、まぁ女の子に嫌いって言われたら、ただ単純に、深い意味とかなしに少し落ち込む。やっぱり僕を好きになってくれる子なんて、彩音や琴音みたいな最悪のペルソナ被（かぶ）りしかいないのか。凪砂もいたけれど。

「まぁ琴吹なら気付いてるだろうけどさ。今はまわりに生徒がいないから言うが、本当に私は君が邪魔だ。理由はひどく単純明快で、学年トップの成績を誇る私を追い越す確率のある生徒は学年二位のお前だから、ってことだな」

「そんな心配しなくても、僕は鏡ヶ崎には一生及ばないよ。ただの屑人間（くずにんげん）だからね」

「心配心配ね。心配などしていないさ、私は単純に二位のお前が嫌なのさ。だって、“この学年で頭いいのって誰”という話題なら、間違いなく皆“鏡ヶ崎と琴吹”というのだよ。つまり、私はお前と並べられてしまうのさ。そんなお前が私は鬱陶しい。邪魔だ。死んでほしい。お前が死んだらどうなにいいだろうね。私とお前とじゃ点数的には誤差だよ。本来私のほうが圧倒的に優れているのだが、テストは五十点で満点だろ？　私が五十点でお前が四十八点だったとする。すると皆これを誤差だというわけだ」

死んでほしいとまで言われてしまった。終わりだな、僕も。

「ただしこれは誤差じゃないよな。だってお前は四十八点の実力だが、私の五十点のほうは、たとえ六十点の実力を持っていても、たとえ百点の実力を持っていても、たとえ五万点の実力を持っていても、満点である五十点にされてしまうのだから。まぁ、ようは私はお前が嫌いってこと」

「……」

返す言葉ナシ。

「よく覚えておいてくれよ琴吹、」

そう言って鏡ヶ崎は、僕に近づき、本当に目の前に立ち、背中を腕に回せるくらいの至近距離に立ち、僕の耳元に口を寄せて、囁（ささや）いた。

「私は、いつでもお前を破滅させられるんだ」

ゾワリ、と。

緊張した。

鏡ヶ崎はそのまま、僕の耳元で囁き続ける。

「今日の朝、あそこで私が発言したことで、もうお前が須藤を殺したらしい、という噂は、学年中に広まるだろうね。ただ、当然誰も信じないだろう。しかしだね、私が証拠を出したらどうなると思う

？」

鏡ヶ崎の右手が、僕の左頬にぴたりとついた。僕は思わず金縛りにでもあったかのように、動けなくなる。

「そうなったら、お前は終わりさ。お前が人殺しだってことは露見して、お前の人生は滅茶苦茶。殺人はバレなければそれだけの話だが、バレれば取り返しがつかないからね。殺しただけじゃ取り返しはつく。ただ、バレれば取り返しはつかない。そうだろう？」

鏡ヶ崎の指が、僕の頬を這って、首筋を這って、僕はさらに動けなくなる。汗がにじみ出る。

「言っておくが、私はそんな証拠、すぐに出せるんだ。よォくそこんトコ、理解するんだね。お前の人生はさ、私次第で崩れるんだよ」

「……もともと人生なんて崩れてるよ。僕は人間が崩れてるからね」

なんとか、声を、出す。

「ふぅん？　じゃあバラしていいのかい？　君は確かに人生なんて下らないと思ってるだろうね、でも、これからやりづらくなるだろうなぁ」

鏡ヶ崎の右頬が、僕の右頬にくっつく。くそ、この手の勝負に僕が負けるなんて、だからコイツは苦手なんだよ。まさに僕の天敵なんだ、こういう奴は。

「両親も悲しむだろうね。子供のうち、姉は行方不明で弟は殺人者。ふふふ。それで、どうなんだい？　怖いだろ？　私が」

「……っ」

緊張緊張緊張。

どうしたらよいか、分からない。

……。

時間経過。

「おっと。こんなところを誰かに見られては、抱き合ってるなどと誤解されかねない。そろそろ私も帰るとしよう」

鏡ヶ崎は僕から離れる。

僕は、訊く。緊張しながら慎重に。

「……何が、目的なんだ」
「目的目的か……。考えてなかったよ。それはこれから考えるところさ。じゃあね琴吹、せいぜいこれからも私と“仲良く”してくれ」
皮肉たっぷりに言って鏡ヶ崎は、ポニーテールの綺麗な髪を揺らしながら、遠ざかっていった。
「……」
少しばかり、沈黙。
また、面倒だ。
「なんだよ、マジで下らないな」
僕は呟いて、階段を上がった。

資料室で、亜由はいつも通りに読書をしていた。
「もう君はすっかりこの部屋に溶け込んだな。始めのうちは目障りでならなかったが」
「酷いことを言うね。須藤を殺してあげたのに」
「その分私は須藤の死体処分をした。今学校中のゴミ箱をあさってみなさい。二個に一個くらいの割合で、肉片が見つかるわ」
「全部終わったのか？」
「当然」
それはよかった。あとはゴミ業者が持ってってくれれば、全て完了。安心できる。
この階は静かだし、もしかしたら亜由は恵仔の声を聞いていたかもしれない、と推測したのだ。
「ねぇ亜由、その階段の上のところでさ、鏡ヶ崎って女子生徒が何かやってたんだけど、分かる？」
「いいえ、全く知らないわ。鏡ヶ崎……。誰？」
「学年トップのエリートだ。三年生なら知ってるだろ？」
「……ああ、思い出したわ」
おお、この子嘘つきだ。

「その子にさ、須藤を殺したのはお前だろって言われちゃってさ。また面倒な事態に」
「なんで知ってるんでしょうね」
亜由は言う。
僕はそんな亜由に尋ねる。
「亜由が鏡ヶ崎に情報を漏らしたわけじゃないだろ？」
「当たり前でしょ」
ということは、秋元かな。
秋元拓哉。須藤を殺したあの日、僕を唯一目撃した男。写真部の秋元拓哉。
可能性があるとすれば秋元が……、まぁ、考えにくいことだけれど。
「にしても何してたんだろう。なんかさ、鏡に話しかけてて不気味だったんだよね」
「……鏡？」
「ああ、独り言。気にしないで」
「ちょっと待って闇斗、君、今鏡って言ったよな？」
「うん」
なんだろう。何か知ってるのだろうか。
「鏡に話しかけてたのか？」
「うん。信じてもらえないかもしれないけどさ、鏡の中の鏡ヶ崎が喋ったのも見たんだよね」
「いえ、信じるわ。というかその鏡、私のなんだけど」
「は？」
思わず、間の抜けた声を出してしまった。
何だって？　鏡ヶ崎が持ってた鏡が、亜由のものだって、そう言ったのか？　え、でも、亜由は鏡ヶ崎のことを知らないわけで……
「質問に答える鏡」
亜由は言った。
「過去、もしくは未来を知ることができる鏡」

「……どういうことだ？」
「誰が質問しようと関係なく、一日一回。鏡に今までのこと、またはこれからのことについての質問をすると、その答えが返ってくるの。それがその鏡。以前は、社会科資料室というところにあったのだけれど、いつの間にか無くなってたわ。私もたまに利用していたのだけれど、残念無念。ということだったが、そうか、その女が持っていたのか」
なるほど了解。
もうそういう奇妙な話には慣れている。亜由と関わってから。
それで今回は、そういう話か。
「これからのことについて質問した時、その鏡が教えてくれるのは、“鏡が干渉しなかった場合、このままいったらどうなるか”という情報よ。だから、変えることが可能」
「へぇ。そいつは便利な鏡だな」
須藤を殺したのが僕だと分かったのも、そのためか。それは、今までのことについての質問。
須藤武を殺したのは誰ですか。
とでも質問したのだろう。
「……面倒なことになっちまったな、おい」
呟く。
本当に、面倒。
「やはり、殺すのでしょう？　その鏡を持っている女を」
「ああ、それしかないね。秘密を知っている奴には、一人残らず死んでもらわなきゃ」
亜由除き。
いや、もしかしたら、いずれ亜由も。
その時が来れば。
「今回は直接殺すしかないでしょうね」
「うん、だけどなぁ……」
難しいなぁ。

殺さないといけない。
ただ、どうやって殺そう。
いつ殺そう。
どこで殺そう。
……。
難しいなぁ。
「ま、これから考えるさ」
「論理的に？」
「論理的に」
「そう。じゃあ、くれぐれも、正しい判断を、お願いするわ。私を巻き込まないで頂戴ね」
「ああ、そうするよ。忠告ありがとさん」
僕は一旦、資料室を出る。
何かを思考するのは、静かな場所のほうがいい。
亜由は静かだけれど、できれば一人でゆっくり。
となると、
「屋上……か」
屋上には、少し嫌な思い出があるよな。
感慨深い、ものがあるよな。
雫根琴音との会話。
今でも、覚えてる。
「にしても、質問に返答する鏡、ねぇ……」
一日一回。
誰が質問しようと関係なく、一日一回。
条件がついている。
「ん。てかその鏡使えば、テストの問題も事前に分かるよな……」
……納得。
「なるほどね。あいつのエリートは、作り物の偽物か」
まったく、ペルソナだよなぁ。
で、僕は四階の中腹にある、屋上へと向かう階段を、上がる。

ダンボール箱が、両端に積まれている。
実は屋上は、行ってはいけないのだ。
屋上の階段を上がると、屋上に出る扉があるが、そこは閉ざされている。
ドアノブの真ん中に鍵を差し込むところがあり、そこの鍵はかかっている。屋上の側のドアノブの中央にはボタンがついていて、そこを押して閉めると鍵がしまる。そのタイプの鍵・ドアノブだ。
だが、かかっているはずの鍵は、かかっていない。何故なら、この間僕が、開けたからだ。
無論、鍵を使ってではない。
このタイプは、ドアノブを何回か強く叩くと衝撃で鍵は外れるものなのだ。
資料室にあったノコギリで叩いたもんだから、ドアノブの上はへこんでいる。
まぁとりあえず、鍵はかかっていないので、出入りは自由にできるというわけである。琴音が屋上から飛び降り自殺をしたということでこの間鍵が再びかけられていたが、この間再度開けておいた。
で、扉を開け、屋上へ。
「……」
先客がいた。
その人物を見て、僕は少なからず面食らった。
驚いた。
フェンスを乗り越えようとしている、第二学年の生徒。
姉が行方不明になる以前に通いつめていた書店に、同じく通いつめているらしい少女。
蒼春未（あおいはるみ）が、そこにいた。
「……」
まさか人がいるとは思ってなかった。

黙りこむしかない。
僕はイレギュラーに弱いんだってば。
春未は僕に気付き、一旦フェンスから離れた。僕と彼女との間の距離は、それほどではない。だから、春未の起伏がなく冷淡で亜由に似ている声は、僕に十分聞こえた。
「邪魔です」
邪魔らしい。
「何の邪魔なんだい？」
「自殺の邪魔です」
間髪入れずに答えてきた。
自殺……ねぇ。
書店で見たときと同じく、春未はピンクのカチューシャをつけている。背は普通。二年生としては、普通だ。
死にそうな、表情。
だるそうだ。
一年中夢遊病って感じ。
「自殺なんてするんだ」
「はい。私は死んだほうがいい、と判断しました」
素っ気ない、喋り方だ。
亜由よりも起伏なしで、亜由よりも冷めてる、かもしれない。
「死んだほうがいい、と判断したからって、死ぬことはないんじゃないか？　僕なんてほら、こんなに死んだほうがいいのに、のうのうと生きてるよ」
「それはいけませんね。ちゃんと自覚しているのなら、あなたも死ぬべきです。どうせだから、ご一緒に、どうですか？　というか、屋上に来たということは、あなたも自殺ですよね」
「勝手に決めるな。僕は自殺しに来たんじゃないよ」
「なら帰るべきです。屋上は自殺するためにある場所です」
「いや違うね」
「違くありません。……と、ここで一つ疑問が湧きました。冥土の

土産に教えてください。あなたは何歳ですか？」
　冥土の土産かよ。
「十五歳だ」
「ということは私よりも年上の方でしたか。失礼しました。では、先輩、と呼ばせていただきましょう。なるほど、先輩は、屋上は自殺専用の場所じゃない、と、そう仰るわけですか」
「そうだね、後輩」
「慣れ慣れしく後輩だなんて呼ばないで下さい。なるべく人は殺したくありません」
「……」
　この子は、どういう子なのだろう。
　全然分からねぇ。
　仕方ない。ペルソナ崩しでも使いましょうかね。
……。
「どうしたのですか、いきなり黙り込んで。まぁ先輩の汚い声を聞きたくない私にとっては願ったり叶ったりですが」
「へぇ、なるほど。君、本当は死ぬの怖いのか」
　言うと、そこで初めて、春未の表情は変化した。
　驚き。
　まさに、それだった。
「……何故、そう思うのですか？」
「簡単さ。君の深層心理を見破っただけ。君はさ、ペルソナって言葉知ってる？」
「はい、存じ上げております。ペルソナとは、仮面という意味ではなかったでしょうか」
「その通り。僕はさ、人が被るペルソナの裏、本性を見ることができるんだよ。ペルソナ崩し、そう呼ばれたこともある」
「ペルソナ崩し、ですか。それで、私の心理を見破った、と？」
「ああ、そうさ。君は、自分は死んだほうがいい、と思っているが、死ぬ勇気、ないんだろ？　自殺する度胸なんて、ない。君に自殺は

無理だよ」
「確かに、私はここ最近、毎日ここで自殺をしようとしていますが、無理です。昨日なんとかフェンスを乗り越えたのですが、後一歩を、踏み出せませんでした……」
相変わらず淡々と喋る春未なのだが、少し弱弱しく感じた。落ち込んでいる、のだろうか。
「どうしても、死にたいのかい？」
「……？」
尋ねると、春未は表情一つ変えずに、首をかしげた。疑問、をあらわしているらしい。
「はい、死にたいです」

「じゃあさ、僕が殺してあげるよ」

僕はそう言った。
そこで春未は、目を見開かせた。
僕からの提案に、少しの間、戸惑うようにする春未。
で、少し経って、
「い……いいんですか？」
初めて、口調が、淡白でなく、申し訳なさそうだった。
少し上目遣いぎみに、僕を見る春未。
その言い方、凪砂を思い出してしまう。
「ああ、勿論だ。でも、今すぐにってわけにはいかない」
「……？」
「少し、僕に協力してくれないか？　そうしてくれたら、君を殺してあげる」
「……分かりました。……お願いします」
「ああ」
歪んだ関係、だと思う。
やはりこの少女、蒼春未。

僕と無関係で終わるということは、なかったようだ。

ありがとう。
僕は心の中で、春未にお礼を言う。
本来、お願いをするのは、僕のほうだ。
だって――

君のおかげで、鏡ヶ崎恵仔を、論理的に、殺してやれるかもしれないんだから。

2◆鏡ヶ崎恵仔

私がその不思議な鏡を手に入れたのは、去年の夏休みが明けてすぐのことである。
多くの生徒が殺される大量殺害事件が夏休み前にあり、その連続殺人事件は犯人は逮捕されていないが、まぁ止まり、夏休みがあり、その夏休みが明けてすぐ。
丁度、私がこの学校に転入してきた、翌日であった。
二年生の夏休みが明けると共に遠くの学校から、この学校に転入してきた私。
私は幼い頃から、普通の、本当にごくごく普通の、どこにでもいる、長所と短所が普通に入り混じっていて、別に皆の中心にいるわけでも、皆から尊敬の眼差しを受けているわけでも、スポーツが特別できるわけでも、勉強が特別できるわけでも、なんでもない、凡人であった。
だから転入してきても、これまでの生活・人格・全てにおいて特に変化することもなく、普通に学校に馴染み、普通に友達をつくり、普通に遊んで勉強して部活しようと、ぼーっと考えていた。いや、考えてはいなかったが、まぁなんにも感じてなかっただろう。
で、転入してきた翌日。

朝、学校に一人で登校し、図書室に行った。読書は結構好きだったので（といってもライトノベルしか読んでなかったが）、本を借りに行ったのだ。

しかし図書室はしまっていた。おいおい、私の前いた学校は図書室は朝から開いてましたよー、とか文句を垂れながら私は教室に戻ろうとした。

と、そこで、図書室の隣の隣のそのまた隣にある部屋に、女子生徒が一人で入っていくところを、目撃したのだ。

社会科資料室。プレートにはそう書いてあった。

何故か。

何故か。

今でも分からないが、本当に、本能的に、何故か何故か何故か。

私は、とても、その部屋が、その女子生徒が、気になった。

その女子生徒がまとうオーラのようなものが、影響していたのかもしれない。確証はないけれど。

ただ、運命、と呼んで差し支えないほどに、その時、その瞬間こそが、私の人生を大きく変えるキッカケとなった、というのは間違いない。

そう、私は女子生徒を追い、こっそり、気付かれないように、ドキドキしながら、手に汗を握り、社会科資料室へ入ったのだ。

暗くて埃っぽくて、今では使われていないんだろう、とすぐに分かった。

足音をたてないように移動し、私は女子生徒を見つけた。広い部屋でもなかったし。

部屋の奥。壁に、何の変哲もない、どこにでもあるような、まわりを木のふちで覆われているだけの縦に楕円形（だえんけい）となっている鏡がかけられていた。その前に女子生徒は立ち、こちらに横顔を向けていた。

私は本棚の陰に身を潜め、女子生徒の動向をうかがう。

三年生……だろうか。

二年生……だろうか。
一年生では、ないだろう。
「　はい　に　いま　か。今すぐ答え　くだ　」
小さな声なのでいまいち聞こえなかったが、女子生徒は鏡に向かって何かを言った。
何をしているのだろう……。
そして、次の瞬間であった。
「来年の　月　に　う」
「……ッ！？」
思わず、声を出しそうになってしまい、私は慌てて自分の口を押さえる。
なんだ、今の。
声がした。女子生徒の声だ。それはいい。でも、
なんで口がまったく動いてないんだ？
女子生徒はそこで溜息を一つつくと、振り返り、歩き出し、社会科資料室から出て行った。私には気付かなかったらしい。
名札を見ようとしたが、女子生徒の着るブレザーには名札がついていなかった。
長い黒髪を持ち、前髪は目の上で切りそろえてある、神秘的な感じの、女の子だった。
私は女子生徒が去ってしばらくしてから、鏡の前に移動した。
普通の鏡だ。鏡には、普通に私がうつっている。
どうやら先ほどの女子生徒は、この鏡に質問のようなものをしていた。
で、それの答えらしき声が聞こえてきたが、女子生徒の口は動いていなかった。
つまり。
ありえないことのはずだけど。
でも実際に見たから。
そう、つまりこれは――

質問に答える鏡？
童話「白雪姫」に登場するような、話す鏡？
私はそう考え、緊張しつつも、鏡に質問をした。
「あなたは、質問に答える、鏡……なんですか？」
返答はない。
先ほど女子生徒が、質問の最後に「今すぐ答えてください」みたいなことを言っていたことを思い出す。
「今すぐ答えてください」
慌てて付け加える。
しかし――

……。

返答は、ない。
……。
「馬鹿馬鹿しい」
私は言って、その日は社会科資料室を出た。

で、その翌日。
私は早起きしたこともあり、朝早くに登校してきた。まだ教室には誰もいない。
それで、私は時間つぶしの散歩がてら、再び社会科資料室を訪れたのだ。
本当は気になっていたのだろう。あの鏡のことが。
あり得ないとは思いつつも、あの不思議な少女のことと鏡のことが、頭から離れなかった。
そして私は再び質問した。
「あなたは質問に答える鏡なんですか？　今すぐ答えてください」
しばらく答えは返ってこなかった。
あきらめかけた、その時。

「あー、待って。分かった答えるよ。私はさ、そういう“〇〇とは何ですか”とか“〇〇なのは何故ですか”とか“どうすればいいですか”とかの類の質問には答えられなくて、“今までにあった出来事について”と“このままいくと何が起きるかについて”しか分からないんだけど、まぁその質問は特別に今回ばかり、初めましてのあなただからオッケーにしといてあげるわ」

「……ッ！」

鏡にうつっている“私”が喋りだした。

しかも、超饒舌。

驚いて唖然としていたが、しかし一字一句逃してはなるまいと思い、鏡の話をよく聞いておく。

「で、答え。その通り、私は質問に答えられます。質問は一日一回。誰がしようと関係なく、私は一日一回しか目覚められません。今すぐ答えろって言わないと何時答えていいか分からないからよろしくさん！　じゃあね！」

直後、鏡は押し黙り。

鏡にうつる私はマシンガントークをやめ、口をポカンとあけていく“この私”に戻った。

一日一回。なるほど、だから昨日は私が質問をしても無駄だったのか。さっき“初めまして”と言っていたから、昨日のは無視してたわけではなかったらしい。

私は興奮冷めらやぬ、といった感じでその日を過ごした。

あの鏡を使えば、何でもできるんじゃないだろうか。そんなことを考えていた。

次の日。

朝早く登校した私は社会科資料室に向かい、鏡に質問をした。

しかし答えは返ってこない。

考えられることは一つ。

あの名札をつけていない黒髪の女子生徒が、私よりも早く登校し

てきて、質問をしてしまったということ。
そして私は、考えに考え、迷いに迷い、結果、鏡を盗むことにした。
鏡を壁からはずし、そして私は、持ち去った。鞄に入れ、家に持ち帰った。

鏡を使い始めて分かったこと。
鏡が教えてくれる“このままいったらどうなるか”というのは、あくまで“このままいったら”であって、自分が手を打つことにより、変更することが可能だということ。
私はこれを利用し、部活を選択した。
まず心の中で「女子バスケ部」に入ると決めてから「私は部活で活躍できますか」と質問。
鏡は「できない」と返答。
次に心の中で「女子ソフトボール部」に入ると決め「私は部活で活躍できますか」」と再度質問。
返答、「できない」。
次に「吹奏楽部」
返答、「できない」。
で、次に試したのが「女子テニス部」だった。テニスなんてやったことなかったけれど、順番的にそのくらいしかマシなのがなかったというのもある。
その答えは「大活躍できる」。
私は即女子テニス部に入部した。
そしてしばらく練習をするうち、みるみる上達していき、部活の中で一番上手になっていた。テニスはとても楽しかった。
そう、私にはテニスの才能があったのである。
テニスのために体を鍛えたことが功を奏し、その他の運動能力もアップ。
やればできる。まさに私はそんな子だったのだ。

今まで気付けなかっただけで。

「次のテストの答えを教えてください」という質問をすれば、いつになるかは分からないが、とにかく回答が返ってくる。こういう質問にしている理由は、突然行われる抜き打ちテストなどに対応するためだ。

私は答えを暗記すればいいのだから、当然テストの結果は良く、学年トップ。

何の取り柄もなく、ごくごく普通の人生を送ってきた私だったが、鏡を手に入れることにより、わずか一ヶ月足らずで学年トップのエリートとなることができた。転入してきて間もなかったので、皆私が突然いろいろとできるようになった、とは思わず、もともと秀才、と思ってくれたのも好都合。親は驚いていたけれど。

成績がよくなれば、立ち振る舞いも変わってくる。

何も恥じることはない。

私は堂々と、気品正しく、まさに完璧な学年一のエリートとして過ごした。

口調。性格。すべてが変わっていく。

何か決断するべきことができれば、鏡をうまく利用し、最善の決断を導き出す。

しかし、学校ですぐに決断するべきことができる場合もある。それに備え、私は朝には質問をせず、鏡を常に学校に持ってきていた。で、鏡を使う必要がなさそうだと思ったら、昼休みに北校舎四階に行き、気になることを質問。

完璧だった。

まさに全て、完璧。

鏡を手に入れることができて良かった。そう思う。

私は変わることができた。

平凡から非凡へ。

素晴らしい世界。

毎日が輝いていて、楽しい。

3◆鏡ヶ崎恵仔

私に水曜日、琴吹闇斗は話しかけてきた。
「なぁ鏡ヶ崎」
「何？」
「いや別に大して重要な話でもなくてさ、お前見かけたからちょっと声かけようかなって思って、その話題づくりで適当に言うだけなんだけどさ」
「回りくどいわね。何なの？」
昨日、琴吹には「須藤を殺したのはお前だろ」と脅していろいろと釘を刺していたのだが、こうも馴れ馴れしく話しかけられるとちょっと拍子抜けだ。
今は三時間目の休み時間である。場所は廊下。私は体育で運動場（今日は水泳は男子の番）に行く途中なので、話なら速く済ましてほしかった。
「自分はいつ死ぬのだろうって、考えたことない？」
「……」
突然だった。
「僕の今の悩みさ。いつ死ぬんだろうって。ああ、こんなこと相談されても迷惑だよね。ごめん」
そう言って琴吹はとっとと行ってしまった。
何だったんだろう……
「いつ死ぬのか……か」
呟いて、私ははっと我に帰り、再び運動場へ行くために歩き出した。
前から、二年生の可愛い女の子が歩いてきていた。
三年生の教室が並ぶこの階に、二年生が何の用だろう。
女の子と、目が合った。
無表情。冷たい顔をしている。

名札を見る。蒼春未。
女の子と、すれ違う。
何か、モヤモヤする。

昼休みになり、私は北校舎四階に、鏡を体育着の内側に隠して、やって来た。
琴吹の言っていたこと。
いつ自分は死ぬのか。
それが凄く、気になったのだ。
怖いけれど、気になる。
テストも終わって、しばらくは鏡に質問しなければならないことはないだろう。
まぁテストやらなにやらで立て込んでいたことで、琴吹が須藤殺しの犯人だと知るのが遅れたのだが。
私は唾を飲み込み、少し震えながらも、質問した。
不安と期待。
どうだろう。八十歳以上は生きたい、と思う。できれば長生きしたい。私は特に不健康なわけではないから、九十はいくだろうか。
「私はいつ……死にますか？　い、今すぐ、答えてください」
いつだろう。
ドキドキドキドキ。
緊張する。
百歳までとかだったら、すごく嬉しいけど、そんなうまくはいかないだろう。
平均年齢までは生きたいな。
そして鏡にうつる私は、告げた。

「今週の金曜には死ぬね」

私は凍りついた。

・つづく・

五章：鏡依存の鏡ヶ崎恵仔2

1◆鏡ヶ崎恵仔

今週の金曜日に死ぬ。
そう……言ったのか？

ガクガク、と。
足が震え、立てなくなる。
私はその場で崩れ落ちた。
そして、ゆっくりと、思考する。
「聞き間違え……かな？」
そうでないと困る。
今週の金曜って、いくらなんでもそれはないだろう。
聞き間違えだよ。
今週の金曜っていったら、鏡が水曜日だから、明後日じゃないか。
そんなはずない。
「聞き間違えだよ聞き間違え。明日もう一度、質問しよう。絶対、違う。違う違う」
――と。
その時。

「いいや、聞き間違えじゃないさ。君が死ぬのは、確かに明後日だよ」

「――ッ！？」
声のしたほうに、目を向ける。
階段の踊り場から、琴吹闇斗が、私を見上げていた。

哀れむでもなく、喜ぶでもなく、あざ笑いもせず、ただ、冷たく。
怖い。
そんな感情を抱いてしまう。
怖い怖い怖い怖い。
って、やめろ。やめろやめろ。何でこんな奴に私は怯えなくてならないんだ。
私は、立ち上がる。
震えは止まらないが、こんな姿を見られていたくない。
「何をしてるんだ、琴吹」
私の問いに、しかし琴吹は答えなかった。かわりに、やはりあまりにも冷徹に、当然のことのように、飄々と、淡白に、こう告げた。
「だって、僕が君を、殺すんだからさ」

停止、する。
時間が。
世界が。
色がモノクロへ変わるような感覚。
空気がいきなり重圧となり、のしかかってくるような感覚。
暑い。
突然、暑い。

「これは宣戦布告さ。僕は明後日、お前を殺す。今のその鏡によると、僕の殺人は成功するらしい。ちょっと嬉しいね。ま、鏡の告げる未来は変更可能らしいから、まだ油断はできないけれど」

意味が分からない。
何で鏡のことを知っている。
何でそんな平然としていられるんだ。
「分かってるの？　私はお前を、いつでも警察に突き出せる」

「ハッ」
琴吹は、私の言葉を笑い飛ばした。
不安になる。
怖い。コイツは、凄く怖い。
心臓が、痛い。破裂しそうだ。
気持ち悪い。
「たとえ君が今から警察に僕が須藤殺しの犯人だと告発したところで、僕が逮捕されるには、まだまだ時間があるだろ」
「……」
「だって、証拠もないのに、警察は僕を逮捕することはできない。鏡ヶ崎、お前、僕が犯人だって証拠、あるのか？　ハッタリだろ。その鏡を証拠にしたって、警察は信じないよ。それ以前にできないよな。それが本物だってなれば、お前がテスト問題をあらかじめ知っていたこともバレるんだからさ」
「……」
「あ、でも保険はきかせておこうかな。君が警察に僕の罪を今日にでも告発すれば、僕は君を殺す日を金曜日から木曜日、つまり明日に、変更する。鏡の告げる未来を、僕だって意図的に変えられるんだぜ？」
「……」
圧倒されている。
今まで、コイツ相手に引けをとることなど、なかったのに。
琴吹って、こんな奴だったか？
こんなのを私は今まで相手にしていたのか？
こんなの、どう見ても、バケモノじゃないか……！
「じゃ、頑張ってね鏡ヶ崎。賢い選択をすることだよ。明後日、僕は君を、確実に、殺す」
「……」
言えない。
何も言えない。

言葉が、出ない。
言葉を出したら、崩れそう。
「ばいばい」
言って、琴吹は踵(きびす)をかえし、階段を下っていった。
「……」
体が動かない。
金縛りにあったようだ。
動かない。動けない。
そして、直後。
今度は一転し、体中の力が抜けた。
脱力。緊張が解かれたことによる、脱落。
私は再びその場にべしゃりと座り込む。
ギリ、と歯を食いしばる。
涙が、出てきた。

2◆鏡ヶ崎恵仔

「お姉ちゃん、お帰りー！」
家に帰ると真っ先に、そんな声が聞こえた。
妹の理仔(りこ)が、無邪気に笑いながら、リビングから飛び出し、私のもとへと廊下を駆けてきた。
「ただいま」
いつも通りを装い、なんとか、微笑む。
しかし、内心では焦りと恐怖とが渦巻き、今にも狂って暴れだしそうだ。
「今日はね、川原で四葉(よつば)のクローバー探してきたんだよ」
小学三年生の妹は、そんなことを言っている。
「へぇ、今日も。どう、見つかった？」
「見つからなかったの……」
肩を落とす理仔。

「そうなの。でも、きっとすぐ見つかるって。見つかったら、お姉ちゃんに教えてね」
「うん！」
最近の理仔のマイブームは、四葉のクローバー探しだった。
まだ一枚も見つけられてはいないのだけど。
休日になったら、手伝ってあげよう。
……いや、下手をしたら、休日になる前に、私は死ぬ。
殺される。
「……ぅッ！」
気分が悪い。
吐いちゃいそう。
「どうしたの？　お姉ちゃん」
心配そうに、私の顔を覗き込む理仔。
「……何でもないよ。じゃあお姉ちゃん、宿題があるから」
「うん、分かった！」
私は階段をあがり、理仔はリビングへと駆けていった。
「今日の夜ご飯はハンバーグだよぉー」
理仔がそんなことを言っている。
「……はぁ」
私は溜息をついて、自室へ入った。
鞄を下ろし、ベッドにそのまま倒れこむ。
「……」
“どうすれば助かりますか”というような質問を鏡にすることはできない。しても答えてくれないのだろう。
できるのは、自分で“そうならないように”対策を施し、その上でもう一度質問をして未来が助かるというように変わっているかどうかを確認する、ということ。
どうすれば、いいのだろう。
考える。
考える。考える。

考える。考える。考える。
ずっと考えて、そして、至った――
「金曜日、学校を休もう……！」
なんだ。簡単じゃないか。
考えてみれば、簡単だった。
そうだよ。家にずっとこもっていれば……
琴吹は私を殺せない。
外に出なければいい。
それだけ。
それだけのことだ。
「は。はは……はははははは……」
なんだよ。
全然心配する必要なんかなかったじゃないか。
これで解決だ。警察には、電話で琴吹が須藤を殺したのだと告発しよう。
証拠はないけれど、琴吹が犯人だと見当がつけられた上で警察が調査をすれば、証拠はきっと出てくるだろう。
それまで、学校を休んでいればいい。
「はははははは」
完璧じゃないか！
今日は夜中まで起きていよう。そして日付がかわったら、改めて「私はいつ死にますか」と質問すればいい。きっと、明後日なんかじゃなく、八十年後とか、そのくらいになっているはずだ。
「くぅ～～ッ！」
私は喜びに震えた。
やった。
やっぱり、鏡のある私は最強だ。
あんな奴に殺されるはずがない。
やったやった。
勝った。

琴吹闇斗に。
あのバケモノに、勝ったぞ！
私はベッドから起き上がり、鞄の中から鏡を取り出そうとして――
「――あれ？」
鏡が、なかった。

3◆鏡ヶ崎恵仔

翌日、木曜日。
私は普通に登校した。
いや、普段よりもかなり早くに登校してきたのだから、普通とは言えないか。
教室に飛び込み、何をするよりもまずはじめに私は、自分の机の中を見た。
ない。
続いてロッカー。
ない。
どこをさがしても、鏡がない！
昨日、ちゃんと北校舎四階から戻ってきて、鞄にしまったはずなのに！
鞄の中にしまったんだ、落とすはずがない。
どういうことだ。どういう……
「探し物はコレだろ？」
「ッ！」
背後から、冷たい、声。
一気に固まる。
恐る恐る、なんとか、首を回転させ、背後を見る。
「……」
見下されていた。

琴吹闇斗が、相変わらずの無表情で、立っていた。
その手が持っているのは、鏡。
私の、質問に答えることのできる特別な鏡。
「……返して」
声が震えた。
弱弱しい声だ。
「うん、そのつもりだよ。ただ、ここでは返さないかな。ついて来なよ」
「……」
「ついて来いって言ってんだよ？　殺されたくなかったら、さ」
まわりにはクラスメイト達もいる。しかし、この会話を聞いている者は皆無だろう。
こんな中で、琴吹が私を殺すことはない……と思う。
しかし私は、それに従うしかなかった。
鏡も取られ、私は今、どうしたよいのか、全然、分からなかったのだ。

琴吹につれてこられたのは、北校舎四階。あの階段の上だった。
私は、琴吹から常に一定の距離を保って、ついて行った。用心のためだ。
「質問してみるといい」
琴吹は、こちらに向き直り、そう言った。
「“明日、私はどんなふうに殺されますか”ってさ。もし殺されないなら返答は“殺されない”ってくるだろ？　で、殺される場合は、どんなふうに殺されるか分かる。一石二鳥。論理的だよ」
「い……いいの？」
普通、琴吹は私にそんな質問を許してはいけないのだと思う。このまま鏡を壊すか、自分のものにするのが、ベストのはずだ。
こんなことをして、何の意味があるんだ？
琴吹にとって、これはリスクを背負うだけだ。

賭けだとしても、頭が悪い。
しかし琴吹の態度は、平然としたものだった。
「いいよ。楽しまなきゃ」
「楽しむ……？」
「ああ。生きるとか死ぬとか、そういうゲーム、嫌いかい？　退屈な生活ばかり送っている僕ら人間は、そういう危機的事態に直面すると、興奮し、楽しい気分になると心理学的に証明されてるんだよ。怖いもの見たさとか、スリルとか」
「……」
何考えてるのか、分からない。
こんな存在、解からない。
そもそも、理解しようという方が間違っている。
違う。
圧倒的にコイツは、外れてる。
「さぁ、早く質問しろよ。時間もないしさ。結果が同じことになるのなら、その過程にかかる時間は短縮するのが論理的だ。質問が終わったら、鏡は返してあげるよ。僕には必要ないものだ」
「……わ、」
質問、するんだ。
今のうち……に。
私は明日、学校を休むつもりでいる。これで、私は殺されないはずだ。鏡の返答がきて「殺されない」だったら、私は今すぐ早退して、警察に琴吹のことを告発して、ずっと家にこもっていることだってできる。
できれば欠席日数は増やしたくない。
私はもう学年トップのエリートで。皆の尊敬の対象で。
そしてだからこそ、この完璧な、輝かしい人生を、終わらせたくない。
死にたくない。
死にたくない！

「私は、明日、どんなふうに、殺されますか？　今すぐ、答えて、下さい」
　刹那の空白。
　それがあって。
　しかし鏡は、鏡に映る私は、残酷に告げた。
「まず頭を鋸（のこぎり）の刃で打たれて、次に手の指を全て切断されるね。体中を浅く、鋸で傷つけられて、左足が根元から切断される。目を箸でぶっ刺されて、でも気絶する暇もなく、歯を全部へし折られるね。次に左手首を切断されて、そこで絶命。死んだ後は、体をさらにばらばらにされて、道路にばら撒かれるよ。醜く、ね。いや、滑稽、かな。ははははは」
　その光景があまりに面白いらしく、鏡にうつる私はげらげら笑った。
「ははははははははは……」
　笑い声が北校舎四階の廊下に響く。
　私は、何も、言えず、できず、
「……嘘」
　呟くことだけできて、立ち尽くすことだけできた。
　気付くと、肩に手がおかれて、琴吹が真横にいた。
「この鏡、すごいね。僕が想像していた通りの殺し方だ。うん、明日が楽しみだな」
　琴吹は、まだ笑い続けている鏡を私に強引に持たせた。
　しかし力は入らず、鏡は床に落下する。後ろの木の面から落ちたので、割れはしなかった。
　琴吹はそのまま去っていく。
　鏡の笑い声は、しばらく、続いた。

4◆鏡ヶ崎恵仔

体育で水泳の授業の途中、気分が悪くなり、私はその日、早退した。
お母さんが迎えに来てくれて、私は家にかえった。
お父さんは勿論仕事で、妹はいなかった。また四葉のクローバーを探しに行ったのだろうか、いや、この時間だからまだ学校か。
お母さんの声も、耳を素通りするだけで、何を言っているのかも分からない。
私はベッドの中、布団をかぶった。
途端、体がガクガクと、震えだした。
ガチガチと、歯が音を鳴らしている。
寒い。
夏なのに。
寒い寒い寒い

寒い。
凍ってしまったように寒い。
何も考えたくない。
忘れたい。
痛いのは、嫌だ。

「まず頭を鋸の刃で打たれて、次に手の指を全て切断されるね。体中を浅く、鋸で傷つけられて、左足が根元から切断される。目を箸でぶっ刺されて、でも気絶する暇もなく、歯を全部へし折られるね。次に左手首を切断されて、そこで絶命。死んだ後は、体をさらにばらばらにされて、道路にばら撒かれるよ。醜く、ね。いや、滑稽、かな。ははははは」

鏡の言葉が思い出される。
頭を、おさえる。鋸がこの頭に、振り下ろされる。
手の指を見る。この指が鋸で、切断される。
体中を撫でる。鋸が、この体中を浅く傷つけるんだ。
左足がむず痒い。この足が、根元からえぐられる。
目をそっと両手で覆う。この目が突きぬかれる。
歯をギチギチと重ね合わせる。へし折られる。
左手を開いて、見つめる。今までいろいろなものに触れてきたこの左手が、なくなる。
そこで、絶命。
そこまでは、死ねない。
その痛みを、全て、味わう。
ゆっくりと。
琴吹のことだ。きっと私に、叫び声をあげさせないようにするのも怠らないだろう。
本当に、そんなことを、するのか？
信じられない。

そんなことができるなんて、人じゃない。
というか、どうやって、やるんだ？
明日私は家にずっといるというのに。
明日、何が、あるっていうんだ？
怖い。
恐い。
分からないことは怖くて。
解からないことは恐い。
怖いのは痛い。
恐いのも痛い。
痛いのは嫌だ。
死ぬのは嫌だ。
嫌だよぉ。
助けて。
助けて助けて。
「う、ぁぁぁぁぁぁぁー……」
泣き続けた。
怯えながら。
脅えながら。
泣き続けた。

5◆鏡ヶ崎恵仔。

金曜日。
朝、目覚める。
眠ってしまっていた、らしい。晩御飯も食べず、お風呂にも入らず、昨日はずっと寝てしまっていたらしい。
金曜日……
「あ！」
ガバッ、と。

私は体を起こす。
今の時刻を、確認。
午後四時二十分。
「……午後四時二十分？」
信じられない。そんなに私は眠っていたのか。
午後四時二十分。
金曜日、私の学校は五時間目の授業までしかない。帰宅部の琴吹はもう、下校が可能な時間帯だ。
「何やってんだよ！」
私は怒鳴った。
一人の部屋で、誰にということでもなく、怒鳴った。
家が、妙に静かなことに気がつく。
「……、――ひ！」
私は部屋を飛び出した。
階段を下るとき、足がもつれた。
「――はッ！？」

ガンガンガンガンッ！

「――――っ、っ、っ、っ！」
私は階段を、転がり落ちた。
一気に一階の廊下まで転がり、そこでやっと、止まる。
「う、う。うぅぅぅ」
涙があふれ出てきた。
痛いよ。
体中が、痛い。
「うぅぅぅぅぅぅ……！」
熱い。
熱い水滴が、頬を伝う。
私は這って、リビングに行く。

「……なんで。なんでなんでなんでなんで」
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで。
……なんで誰も、いないんだ！
「買い物か？　お父さんは仕事、お母さんは買い物で、理仔は四葉のクローバーを探しに？」
私は混乱したままに、辺りを見る。
「！」
窓が、開いていた。
夏だから、開け放してあるのだろう。
「馬鹿！　アイツが入ってくるじゃねぇか！」
アイツ。
琴吹闇斗。
あのバケモノが、私を殺しに、やって来る！
私は立ち上がると、全ての窓を閉めた。無論、鍵もだ。
家中の全ての窓を確認した。玄関の扉はさすがに鍵がかかっていた。
何度も確認する。
閉まってる。閉まってる。
大丈夫だ。
「何やってんだ！　早くお母さん帰ってきてよ！」
私は喚き散らしながら、階段を上がり、再び自分の部屋へ。
私は鞄から、鏡を取り出した。
「私はいつ死ぬんだ！　はやく答えろ！」
しかし。
しかししかしししかし。
「……なんで、答えねぇんだよ？」
なんで。
そこで、思い至る。
「偽物？」

琴吹に渡された鏡は、あの時では、本物だった。だって、笑っていたから。

しかし、その後、琴吹が鏡を摩り替えることは、十分に可能だったはずだ。

外見はどこにでもある普通の鏡。似たようなものなどどこでも売っている。

そうだ、あの水泳の時間。

あの前の休み時間で、琴吹は鏡を偽物に摩り替えたんだ。

鏡は返してもらっていると私に安心させておくために、か？

「……駄目だ。やらなきゃ」

やらなきゃ。

殺らなきゃ、駄目だ。

私はまた部屋を飛び出すと、階段をくだり、キッチンへ。

そこで私は、包丁を探す。

包丁を見つけると、柄を強く握り締め、再び自分の部屋へ。

扉を閉め、その閉めた部屋の扉の前に、包丁を構え、立つ。

「来てみろよ琴吹。逆に殺してやる！」

体中はやはりガクガクと震えた。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

吐きそうだ。

いや、吐くよ、こんなの。

「はー……はー……」

その時。

ピンポーン。

そんな音が、家の中に響いた。

来た。

琴吹だ。

しばらく経って、

ガチャリ。

「!?」

嘘だろ?

なんで鍵の開く音が?

なんで琴吹がこの家の鍵を持ってるんだよ!

意味分からない。

こわい。

扉の開く音、そして、階段を足音が、上がってくる。

タンタンタンタンタンタンタンタンタンタンタン。

淡々(たんたん)と。

タンタン、と。

足音が私の部屋の前で、止まる。

ドアノブが下がり、

扉が、開いた。

「――う、」

私は、包丁を振り上げ、飛び掛った。

「うわあああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

馬乗りになった。

そのまま顔面を、体中を、包丁で突き刺す。

グサグサ、と。

一心不乱に。

狂喜乱舞に。

陶酔。

酔った。

「あ、ア、あああああああああああああッ! アアアアアアアアア

アアアアアアア！」
わけも分からず、
刺す、
刺す、
刺す、
刺す、
刺す、
刺す、
刺す。
ばらす。粉々にする。
刺して刺して刺して

「もう君のその口癖はうるさいな。論理論理と馬鹿の一つ覚えみたいに。あとその髪型も長くてムサムサしていて、まったく、男なのだから、サッパリさせてくれよ」
「……、まぁとりあえず、鏡ヶ崎は自殺したよ」
「自殺か」
「ああ。話によると、妹を殺してしまって、ショックで自殺をした、んだそうだよ。自分で自分の腹を刺しでもしたのか、首を吊ったのか、知らないけどね」
「ふぅん。で、君は一体何をしたというの？」
「簡単に言えば、鏡ヶ崎を狂わせた、だね。自分が殺される、という精神的ショックを与え続けて」
「確かに簡単に言ってはいるけど、全然要領を得ないわね」
「まず水曜日。鏡ヶ崎が体育の授業で運動場に向かったあとに、二年生の蒼春未（あおいはるみ）という子と一緒に、鏡ヶ崎の教室に侵入したんだ」
「蒼春未？　誰だ」
「死にたがりだよ。それだけの子だ。でも自殺の勇気はないみたいだから、僕が殺してあげると約束した」
「歪んでるな」
「まぁね」
資料室に、もう須藤の血のにおいはなかった。もう学校中のゴミは先週ゴミ収集車が持って行ったし、須藤の死体処分は無事に終わった、ということでよさそうだ。
「で、鞄の中にあった鏡ヶ崎のその鏡に向かって、春未に質問させたんだ。“私はいつ死にますか。次に誰かがこの鏡に向かって同じような質問したときに、答えてください”ってね」
「ふふふ」
亜由はおかしそうに笑った。
「そうか。返答時間をずらしたのか。うん、確かに可能なことだな。今まではきっとその鏡ヶ崎という女も“今すぐ答えてください”と言っていただろうが、なるほど、君は返答時間をそう設定したのか」

「うまくいくかどうかは、分からなかったけれどね。でも、理屈はあってると思ったから、やったのさ。で、その前に鏡ヶ崎には“自分がいつ死ぬのか”気になるように少し話をしておいた。で、昼休みに鏡ヶ崎をつけていったのだけど、ちゃんと鏡ヶ崎はそれを質問し、ちゃんと鏡は“春未が僕に殺される日”を告げてくれたよ」

今週の金曜日に殺してあげる、と火曜に僕は春未と約束していた。

「で、僕はその場で鏡ヶ崎に言ったんだ。“僕は君を殺す”とね。鏡ヶ崎が打ってくる手は分かっていたよ。学校を休むだろうな、ってさ。そうされると、僕は鏡ヶ崎を殺せない。でもさ、鏡が告げているのは、あくまで“鏡ヶ崎が死ぬ時”じゃなくて“春未が死ぬ時”なんだ。だから、鏡ヶ崎が何をしようが、鏡ヶ崎の質問に対する鏡の返答は“死ぬのは今週の金曜”になる。もちろん鏡ヶ崎はそれが自分の死ぬ日だと勘違いするよね」

「なるほどね」

「水曜のうちに僕は鏡ヶ崎の鞄から鏡を盗んでおいた。鏡ヶ崎が木曜になって、勝手に質問をしないようにね。で、木曜の朝に春未と再び合流し、春未に“私は明日どんなふうに殺されますか。次に誰かがこれと同じような質問をした時に、答えてください”と質問させる。で、鏡ヶ崎にこんな感じの質問をさせる。鏡ヶ崎は学校を早退したよ。ただ、その前に僕は鏡を偽物と摩り替えておいた。金曜鏡ヶ崎は学校を休むだろうから、今までやってた春未トリックは使えないだろ？」

「で、追い詰められた鏡ヶ崎は自殺、と？」

「いいや。どうやらうまくはいかなかったようだね。僕も自殺に追い込む魂胆だったんだ。自分はとても痛い思いをして死ぬ、と思わせ、だったら自分で死んだほうが楽、という結論に至らせようとした。まぁ、結局鏡ヶ崎は死んだし、結果オーライというやつさ」

気が動転していた鏡ヶ崎はおそらく誤って自分の妹を殺してしまい、それに気付いて自殺をしたのだろう、と勝手に推測。

「で、ほら、君の鏡だよ。すり替えといたから」

僕は制服の内側に隠して持ってきていた鏡を取り出し、亜由に渡した。この鏡、もとは亜由のものらしいし。

「ありがとう。君、何かこれに質問した？」

「ああ、ついでだから、次の定期テスト問題を教えてもらったよ。あとは面倒だったから、やめといた。鏡ヶ崎みたいに、この鏡に病みつきになって、狂いたくはなかったからね。その鏡には人をおかしくさせる魔力があるよ」

鏡ヶ崎はこの鏡に依存していたんだ。

「そうね」

亜由は頷いて、次の瞬間、何をするかと思ったら、いきなり鏡を床に叩きつけた。

バリンッ！

無論、鏡は粉々に割れた。

「これで使い物にならないわね」

「……」

「で、その蒼春未という女は殺したの？」

「いいや、これからだよ。金曜日、面倒くさかったから殺すのは後回しにしたんだ。今から屋上に行って、殺してくる」

「そう」

確かに鏡は“春未が死ぬのは金曜日”と言っていた。僕もあの時点ではそのつもりだった。

しかし、僕も鏡のその返答を聞いていたのだから、こうやって意図的に未来を変えることはできるのだ。

というわけで、今回の鏡ヶ崎の事件の後始末。

蒼春未殺し。

「じゃあ、行ってくるよ。一発で楽に殺してあげるさ」

春未の死に方も、僕は意図的に変えられる。

あの時は、鏡が告げたあの通りに殺そうと考えていたが、それは

鏡ヶ崎にショックを与えるために過ぎない。
「行ってらっしゃい」
「うん」
僕は資料室を出て、屋上へ向かった。

ただ、この時の僕は予想もしていなかった。
鏡ヶ崎のことなんて、今回の事件なんて、
これから起こる大事件の、ほんの序幕に過ぎなかった、だなんて。
春未の中に住む悪魔は、もうこの時、舌なめずりでもして、僕を
待っていたのだろう。

・つづく・

五章：鏡依存の鏡ヶ崎恵仔2（後書き）

こんにちは。

「琴吹闇斗のペルソナ崩し」、多くの皆様に読んでいただけて、とても嬉しく思っております。

と、毎回毎回シリアスな感じで物語が終わるので、なかなか後書きをやることができませんでした（いい感じに終わったのに僕が出てきて雰囲気ぶち壊し、なんてこともありますし）。

今回は比較的後書きに出てもいいんじゃないかって感じだったので、この場で皆様にご挨拶、といいうわけであります。

「琴吹闇斗のペルソナ崩し」も、いよいよ次回からはクライマックス、と呼んで差し支えないかと思われます。

事件としては、次の蒼春未をめぐるものが最後ですし。

ということで、ラストスパート、頑張って執筆したいと思っております。

ではっ！

六章：悪魔内包の蒼春未1

1

「死なない方法って、あるんでしょうか」
「生まれてこないことだろうね」
「そうですか。やはり先輩は格好付けのキナ臭いキザ野郎ですね。嫌いです」
「なかなか酷い言い方だね」
「仕方ありません。だって先輩って、きっと嫌われやすい性格してます」
「でも僕を好いてくれた子もいたよ」
「それは驚き。どんな子ですか？」
「芸術的な死体が好きな子と、僕に好きになってもらいたくて妹殺した子と、死神に狙われてて体中にお経書いてあったイジメられっ子」
「皆変態じゃないですか」
なんて会話があった。
僕と蒼春未（あおいはるみ）の会話。
さて、今回の物語を始めよう。
どうしようもなく狂ってて、常人には概念を理解することすらできないほどの、荒唐無稽で滑稽で、醜いばかりの殺人狂（サツジンキョウ）ならぬ殺人（サツジン）酔（ヨイ）の物語を。

2

火曜日。
先週、学年トップの秀才（エリート）、鏡ヶ崎（きょうさき）恵仔（えこ）が自宅で自殺した。おかし

くなって。狂ってしまって。
結果、僕の身の安全は保証された。苦手だった鏡ヶ崎がいなくなって、僕は結構上機嫌である。
それで、今から後始末をしようというわけだ。
後始末。それは、
蒼春未（あおいはるみ）を、殺すこと。
どうしてかは知らないが、春未はとてつもなく、死にたいらしい。だが、自殺するのはどうも勇気が出ないので、殺してほしいのだそうだ。
「金曜に殺さなかったこと、もしかして、怒ってるかな……」
今朝、春未の下駄箱に『昼休み屋上に来ること』と書いた手紙を入れておいたから、きっといてくれると思う。
亜由（あゆ）に、鏡ヶ崎がどうなったのかを簡単に話し、そして今僕はそのまま、北校舎の屋上へと向かっていた。
屋上への階段。本来、屋上へは行ってはいけないのだが。極論、バレなきゃいいってのが世の理（ことわり）である。
僕は屋上に到着した。
簡単な仕事だ。春未を、屋上から突き落とせばいいだけの話。
屋上に、春未はいた。
こちらに、背を向けて。
「やぁ、春未。約束通り、殺してやるよ。いや、やっぱ死にたくないっていうんなら、別に殺さなくてもいいんだけどね」
僕は言って。
春未は、こちらに振り向いた。
「ア？　ワタシを殺す、だって、オマエ今、そう言ったのか？」
ぞわり。
ぞわりぞわり。
ぞわりぞわりぞわり。

ぞわぞわぞわ

この姿。
蒼春未の仮面（ほんしつ）の裏ってワケでは、ない。
まるで、別人。
ペルソナ崩しが、通じない。
しかし、姉や亜由と違い僕を安心させるのではなく、焦らせる。
僕の体中、汗が、滲み出る。
喉（のど）が乾く。
心拍数が、突然跳ね上がる。
死んじゃいそう。
「ふハ。ほんじゃま、ここらで無駄バナシは終わりにしてさァ、そろそろ本題に入ろうぜェ？」
「本題？」
「ああ。さっきオマエ言ったじゃんよ。“殺してやる”って。てゆーことはアレだろォ？」
そして春未は、否、悪魔は、ニタァと、笑った。

「殺し合いの、ハジマリだろォ？」

直後、悪魔は僕に向かって、駆け出した。
いや、駆け出したところを僕は視認することができなかった。
直後。本当に直後。直（す）ぐ後には。
悪魔は僕の、目の前にいた。
四メートルほどの距離を、一瞬で詰めて。
それを認識した途端、僕は後ろに、吹っ飛ばされる。

――。

ずしゃあっ。
「ぐあッ……！」
背中から屋上の硬い床にたたき付けられただけでは衝撃は吸収さ

れず、僕はそのままごろごろ転がる。
がしゃん。
気付くと、屋上端のフェンスまで僕は、飛ばされていた。
「ぐぅ……」
遅れて、激痛がくる。
腹が、いたい。
きっとさっき、蹴られたんだ。
で、上を見ると、

「なんだなんだァ？　いくら不意打ちだったとしても、さすがにこのザマはねェだろォ」

悪魔が僕に、馬乗りになっていた。
春未の顔で、ニタリと不気味に嗤(わら)う悪魔。
どういうことだよ。
どういうことだよ。
どういうことだよ。
「んー？　なんだソノ、“死ぬのは別に怖くない”って感じの顔はヨォ。やめてくれよ、そんな顔されると、急につまんなくなっちまう。萎(な)えちゃうぜェ。もっとも――」
悪魔は鋭い犬歯をむき出しにして、僕に言う。

「殺さねェ理由には、ならんがなァ」

――戦慄。
を、覚えた。
そして悪魔は大口を開けて、僕の首に噛み付いてきて――

ぴたり。

「……」
歯がある程度刺さっていて、暖かい血が流れていくのを感じる。
幸い、頚動脈（けいどうみゃく）は避けられている。
動けない。
しかし悪魔は、それ以上歯を深く入れてはこなかった。
何故か、止まっている。
す、と。悪魔は歯を僕の首から抜き、体を起こした。
「あァ、テンション下がんよなァ」
「……」
とても、つまらなそうな表情の悪魔。春未が普段絶対にしない表情を多彩にする、悪魔。
「考えてみりゃあサ、学校で人殺しっツーんはキツイよなァ。だってよ、いろいろ証言集めりゃ、昼休みに誰にも目撃されていない人間なんて、少ねーもんナ。犯人が春未（コイツ）だってバレると、ワタシもそりゃそれで面倒だもんなァ……」
頭を悩ませている様子、考えをまとめている様子の、悪魔。
僕は、何もできない。
動けない。動けない。
血が、ドクドクと、首から、流れている。
ドクドク。
ドク……
そして、
「やーめた！」
「……」
「やめやめ、あぁア、つまンねェ。興ざめだゼ、オイ。オマエ殺すのは簡便しといてやんよ。精々生き延びろ。――っっても、今ここでは、って話だけどなァ。ぎゃハハハハハハッ！」
狂ったように笑いまくって、悪魔は僕の上からどいて、ひょいと立ち上がる。

そして、僕を見下ろす。
「二度とワタシにゃ関わらないコトをお勧めするぜェ。オマエの処分は今後しだいサ。ワタシ、気分屋だしサ。ぎゃハハッ！」
言って、悪魔はさっさと去っていった。
……。
一人、倒れたまま、屋上に、取り残される。
「首、いてぇよ……」

3

「うおうお、何だよお前、その首！　ビビるビビる、グロいって！　おいおい、矢でも食らってんのか？　この時代に？」
「……」
保健室に行くと、保健室の女教師の他に一人、よりにもよって蒼刹流（あおいせつる）がいた。
「おっと……取り乱しちまったぜ、オレとしたことがさ。にしても治療だ治療、寝てなんかいられねぇや」
刹流はベッドの上で寝転がっていたが、すぐに下りると、ずかずか歩いて、保健室の棚から、治療セットみたいなのを取り出し始めた。
僕はソファーに座る。
見ると、保健室の女教師も、絶句している。いや、全然絶句なんてしていなかった。
「ホント、何があったっていうの？　ちょっと琴吹くん、説明しないと針千本飲ましちゃうぞって、そんなにたくさん用意できませんなんちゃって」
「……」
こんな時でもこの人は、こんなフザケタ口調なのか。
保健室の先生、ウチの学校では有名な、ふざけた人である。
まだ若く、二十五歳くらいと見積もられている。誰かが質問した

らしいが、「分からないよ。もしかしたら、魔法で姿を誤魔化してるのかも、魔法が解けちゃったら意外とカエルだったりして、あははははなんちゃって」とかで誤魔化されているようだ。

口癖は「なんちゃって」のようである。

「はいはい蒼くんは出しゃばらないで寝てていいからさ、その救急セット貸す貸す、ほら早く早く、速きこと風の如しってね、あはは、それって北風なのかな違うのかなってどうでもいいだろなんちゃって」

「ほら先生。早くそいつ治療してやれって。口より手動かせよ」

どうやら刹流は、保健委員会か何かのようだ。で、今日は当番なのだろう。勝手に推測。

「はいはい手動かすのね手を、でも満員電車で手動かしてる人って十中八九痴漢だねなんちゃって、ってあはは面白い」

「いいからやれよ！　あんたそんなんで給料もらってやがんのか！　畜生羨ましすぎるぜ！」

「じゃあ蒼くんもお勉強して資格とりなさい。だいたい私サボッてばっかじゃなくて治療してるんだよ、れっきとしたドクターなんですドクター、そういや私サボるって“サイボーグる”の略だと思ってたんだよね、昨日まで！　なんちゃって！」

「お前やっぱふざけてんな！　って、サイボーグるって何だ！？」

出血多量のせいで意識が朦朧（もうろう）とするけれど、この二人の会話面白いな、とか思ってみたり。

と、まぁこの保健室の女教師、意外と喋りながらも僕の首の消毒・止血・ガーゼ貼りを済まして、今包帯巻いてる最中だ。なるほど、ちゃんと仕事してる人だ。案外すごい人なのかもしれない。

「じゃあ琴吹くん、私先生呼んでくるから、蒼くんとここにいて。蒼くん、いくらボーイズラブだからって琴吹くんに手出しちゃ駄目だよ」

「出さねぇよ！　ふざけんな、つかテメェ、なんで今回だけ“なんちゃって”つけねぇんだよ、おいほら、琴吹が信じまってる顔だぜ

どうしてくれんだ！」
　刹流が騒いでいるうちに、女教師は「またねまたねまた来週ー」と言って保健室を出て行った。廊下から、「なんちゃってなんちゃってー」という高い声が聞こえてくる。
　それで女教師が出て行き二人きりになると、突然刹流の顔つきが真剣なものに変わった。そして、僕をベッドの上に座りながら、見つめてくる。って何何何マジでこの子同性愛者なの？　やめろやめろ、この展開はイレギュラーすぎるって。

「春未に、やられたのか？」

　そう、尋ねられた。
「……ああ、そうだよ」
「やっぱりか。お前が前にオレの妹のことをオレに訊いてきた時から、こうなるって気はしてたんだがな。そうか、春未……、喘まれたんだろ？」
「うん、屋上でね」
　言うと、刹流は深い溜息をついた。
「ま、お前でよかったってトコかな。もちろん、誰にも言わないでくれるだろ？」
「ああ、いう必要もないさ」
「詳しく、聞かせてくれねぇか？」
　僕は、春未と屋上で初めて会い、殺す約束したところから、特に何を隠すこともなく、話した。鏡ヶ崎との話はもちろんしなかったし、亜由のことも話さなかったけれど。
「なるほど。お前、オレの妹を殺そうとしてたのか」
「うん、怒ってるかい？」
「当たり前だ」
　即答された。
「大事な妹が殺されそうになってたんだぜ。そりゃ怒るわ。ま、実

際殺されてないから結果オーライだが……いや、春未の秘密、悪魔について知られたのは、致命的だったか……」

と、そこで、保健室の女教師が他の男教師を連れてきた。僕の担任だった。

「にゃははただいまー。で、事情聴取ね事情聴取。取調べを始めますなんちゃって。どうせ女子生徒のスカートめくろうとしたけど激怒されて噛まれたんでしょ？　それか女子生徒の胸触ろうとして噛まれたか」

「してねぇ！」

怒鳴ってしまった。

おっと。冷静論理的キャラは保たないと。

キャラじゃなくて素だけど。

素……だよな？

にしても何言ってやがんだこの女教師。まぁ、女子生徒に噛まれたっていうのがあっているのだけれど……。

「話の続き、放課後あいてるか？　お前が行きつけてるって言う本屋に来てくれよ。その、春未も通ってるとこ」

刹流が耳元で囁いてきた。

「うん、分かった」

「おお、琴吹、首にそんな包帯ぐるぐるまきにされやがって！　何があったか言ってみろ！　大丈夫、好きな子のリコーダー舐めてたのが目撃されて噛まれた、なんて俺も中学ん頃はあったって！　ほらほら、誰のリコーダーだ？」

「僕がそんな奴に見えるか！　お前ら二人して共犯かよ！」

再び怒鳴ってしまった。

「おお、琴吹って意外とツッコミできる人だったんだな、意外だぜ」

「……」

殺してやろうか、と思った。

「柔剣道場の裏の、掃除ロッカーとか木片とかがあるとこで寝てたんですよ。そしたら木片からつきでてた釘に首が刺さっちまって」

「へぇ、誰と寝てたんだ」
「最悪だな、お前は！」
まぁ何はともかく、騙せた……よな？

4

学校が終わり、僕は自宅に向かわず、そのまま書店に向かった。
パソコン部の刹流は、週に部活の日は三日しかなく、火曜である今日は帰宅部の僕同様、早い時間に帰れるということであり、僕が書店につくと、すでに刹流はレジの前であの眼鏡をかけた天然パーマのバイトの女性と何やら雑談をしていた。
「よぉ、来てくれたか琴吹」
「うん」
客は僕と刹流以外には見当たらなかった。まぁ棚に隠れて見えていないということもあるだろうけど。
とそこで、バイトの女性と目が合う。どうやら今日はレジ打ちの係らしい。店員は他に見当たらない。客も少ないし、裏方で雑談だの商品整理だのしているのかもしれない。
「ふむ、君がそうか」
「はい？」
女性は僕に、突然そう言った。さっぱりとした声だった。いや、本当に形容しがたい声だったのだ。殺伐としているというか、颯爽としているというか。すっきり、さっぱり、くっきり。
「琴吹闇斗くん、だろう？　話は刹流からも聞いているが、君の姉からも聞いている。いや、いただね、この場合」
「姉を知っているんですか？」
初対面の挨拶もまだ済ましていないが、どうやらこの人、そういうものを必要としないらしい。
無駄を省く性格。
うーん、声同様、さっぱりしてるなぁ。

冷めてる、とは違うみたいだけど（それは亜由と春未だけで十分だ）。

「ああ、よく知っているね。部分的に見れば、君よりも知っている。うん、私は君の姉を良く知っているよ。琴吹弥子、うん、私の記憶・記録の中では、まだ新しい方の名前だ」

この場合、それ以外の解釈はできないと思うが、琴吹弥子というのは僕の姉の名前だ。

母の旧姓は中実というもので、姉はよく「中に“み”だから、私の名前は“やこ”でなく“やみこ”となるな。うん、その方が弟の名前ともうまく対比されている気もするし、これから私は闇子と名乗ろうか」などと言っていた。どうでもいい話ではあるが。

「ところで、あなたの名前は何ですか？」

質問すると、バイトの女性は「ふふふ」と笑った。

「私は名前など持たんよ。ほら、名札もつけていない。私のことは“バイトさん”とでも呼んでくれ」

そいつは不便だな。

「そうですか。どうやら僕に自己紹介の必要はなさそうです」

「うん、まさしくその通りだ。いいね、君はなかなかに賢しい。なんでも聡く敏いというのはいいことさ。ところで閑話休題だ。私をよく理解してもらうために言っておくと、私は少女趣味、なのだよ」

「……はぁ、そうですか」

としか言えない。

いきなり何を言い出すのかと思えば、少女趣味。

「おっと、これでは情報伝達に齟齬が生じるか。少女趣味とは意味が二つあるからな。この場合の私が言う少女趣味とは“少女に共通した好みや傾向。甘美で感傷的・夢想的な情緒を好む傾向”ということではなく、簡単に言ってロリータ・コンプレックス、少女偏愛というやつだよ」

「……はぁ、そうですか」

横目で見ると、刹流は苦い顔をしていた。どんな顔だよ、とツッ

コミを入れられそうだが、苦い顔、である。苦笑いから笑いを抜いたらこんな表情です、といった感じだ。

「まぁ私自信も女性であるわけだから、これは同時に同性愛、レズビアンという意味も含むのかもしれない。俗に言う百合（ゆり）という奴だよ。私は百合でロリコンなんだ」

「……」

もう無言しかねぇ。

「というわけで、私はここでバイトをしつつ――といっても、家族で営んでいるのだがね――可愛い薄幸の少女にいろいろと手助けをしているということなのだよ。ようはカウンセラーだな。で、一年前、その対象が君の姉であった、というわけなのさ」

「なるほど」

そう繋がっていくわけか。

「で、今仲良くさせてもらっているのが、まだ来ていないが、春未ちゃんなわけだよ」

「そういうこと」

やっと刹流が口を開いた。

「だからこのバイトさんも、春未の事情は知ってるんだよ」

「へぇ。で、あれは結局何なんだ？　二重人格、ってのでいいのか？」

二重人格。解離性同一性障害（かいりせいどういつせいしょうがい）。ジギルとハイドのようなものだ。その名の通り、二つの人格を所持している、精神病の一種。

「いいや、違う」

刹流は断言した。

「あれは、そんなんじゃない」

「そうだね」

僕もそれは思う。

二重人格なら、“ペルソナ崩し”を使えば分かる。

しかしあれは、確実に、“違う人間”だった。いや、人間でなく、悪魔、か。

「本人に自覚は？」
「あるよ。もっとも、入れ替わっているときの記憶はないみたいだけど、なんとなく分かってるみたいだ。そりゃそうだろ。いつの間にか意識失って、気付いたら違う場所にいたり、ってことが度々だ。オレも教えてやったしな」
「病院に連れて行ったりは？」
「してねーよ。アイツ、嫌がんだ。病院になんか行ったら“悪魔が暴れる”ってな」
「いつからなんだ？」
「オレの知る限り、初めてアイツが悪魔になったのは四年前だ。小学校五年生の時だな」
生まれてからずっと、というわけではないのか。四年前、突然、そうなったのだろう。
「今回、私は何もできないんだけどね。君の姉、弥子ちゃんには、ちょっと協力してあげられたんだけど」
「姉の何に、協力したんですか？」
「ふふふ、なぁに。君も分かってるだろう？　一年前の連続殺人事件、それに君の姉が関わっている、ということには」
「……そうですね。やはり、あれは姉が？」
「弥子ちゃんとの約束でね。それは言えない。君の姉の身に一年前、何があったのかも、ね。まぁ、君の姉の言ったとおりだな」
「言ったとおり、とは？」
「約一年後、弟は確実に私が何をしたのか、突き止める。君の姉は一年前に、君がこうしてここにやってくることを、予測していたのだよ」
「……」
ちらりと確認してみると、刹流は怪訝そうな顔をして、僕とバイトさんを交互に見ていた。無理もない。彼には僕達が何の話をしているのか、まったく分からないだろうから。
と、その時。

僕らの背後から、あるかなしかの、小さな声がした。
「バイトのお姉ちゃん、終わったよ」
振り返って見てみると、一人の女の子が、そこに立っていた。
まったく気配を感じさせなかった。全然、気付かなかった。
僕の学校の制服を着ている。名札にはマジックペンで名前が書かれている。
詩時故露。

名前の横に学年クラス番号が書かれている。二年生。春未と同じか。
前髪が長く、目にかかっている。おかっぱ頭だけど、ヘアスタイルとしては、散切りの彩音に近かった。彩音が髪をのばしたら、こうなっていただろう。
春未と同じくらいの身長。
暗そうな子で、
この子はこの子で、
死にそう、だった。
どうやら極度の恥ずかしがり屋、もしくは人見知りなのか、僕を避けて、刹流の方へちょこちょこと移動する。僕のことをちらちらと、伺いながら。そこは凪砂を連想させた。
「おお、やってくれたか。ありがとう、とお礼を述べさせてもらうよ。さて、君達男子諸君にもいろいろとやってもらうよ。ただでさえこの書店は人手不足なのだ。一家三人で営んでいるからね。春未もそろそろ来るだろう」
「と、その前に。琴吹は初めてだろ、紹介しとくよ、コイツ春未の幼馴染で、詩時故露だ。ほら故露、お前からも自己紹介しろよ」
言われて故露は、逡巡するようにしてから、こちらを申し訳なさそうに見上げて、やはり小さな声で言った。
「詩時……故露です。よろしく、お願いします」

「僕は琴吹闇斗だ。春未の先輩だよ。よろしく」
僕は握手をしようと手をのばしたが、故露はそれにビクンと震えるようにし、一歩僕から離れた。
「触らないで下さい」
言って故露は、逃げるようにさっさっさっさ、と本棚の中へ消えていった。
「……」
「まぁまぁ、ショック受けんなよ。オレも最初はああだったって」
「いやショックは受けてないんだけどね」
うーん、ああいうタイプは、確かに春未とは合ってそうだよな。
「はいじゃあ二人とも、早速なんだが、棚の商品整理に行ってくれ。冊数の少ない本や、シリーズもので例えば三巻がないよーとかの場合に、下の引き出しを開けて、棚に加えてくれればそれでいい。頼んだよ。私は寝るから」
寝るのかよ。
なんだか、マイペースな人だなぁ。
結構好きなタイプかもしれない。
「はいはい」
刹流は頷いて、故露同様、棚の中へと入っていった。
仕方ない。僕もやろう。
「まったく、何やってんだよ僕」
論理的じゃ……ないよなぁ？

5

商品整理をしていると、春未が来た。
時間的には部活の最中のはずだ。
いや、春未は帰宅部なのだろうか。
だったとしたら、もっと早くくるはずだが。
まぁ、いいや。

「先輩、私の秘密、知ってしまったんですよね」
最初の発言がそれだった。
「うん。ほら、君にやられた」
僕は首に巻いた包帯を指差す。
どうやら春未は誰にも見られず、真っ先に僕のところへ来たらしい（レジのバイトさんは寝ている）。つまり、刹流と故露（僕とは別の場所で商品整理をしているだろう）はまだ春未が来たことに気付いていない。
春未はそこで、ペコリと頭を下げた。
「すみません、先輩」
意外と素直なんだな、と感心。している場合じゃない。
「いや、いいんだ。頭を上げなよ」
「はい」
す、と背筋を伸ばす春未。姿勢のいい子だなぁ。
「君が自殺をしたい理由・原因は、アレなの？」
アレ。春未の中に潜んでいるという、悪魔。
「はい。アレは、皆に迷惑をかけてしまいます。先輩のことも、傷つけてしまいました」
そこで肩を落とす春未。相変わらず口調は冷淡なんだけど。
「気にするなよ。春未がやったわけじゃないだろ」
「兄から聞いたのですか？」
「ああ。だいたいのことは」
「そうですか」
「で、どうするんだい？　やっぱり、殺して欲しいの？」
「……はい」
「じゃあさ、明日の昼休み屋上に来てよ」
「え、でも……」
そこで言葉につまる春未。
「また悪魔が出てきてしまうかもしれません。そうしたら先輩……」
「大丈夫さ」

「根拠はあるのですか？」
「あるよ。悪魔は僕を殺せない」
「？」
ハッタリだ。
「ところで、その悪魔が出てくるタイミング、みたいなのはあるのか？」
「いえ。いつでも、です。決まったタイミングというのはありません」
「そうか」
それは厄介だな。
と、そこで。
「おお、春未、来てたのか」
刹流が本棚の陰から現れた。
僕と春未は当然、会話を中断させることになる。
「うん」
春未は自分の兄にそう頷き、僕に小さく告げた。
「あ、それと先輩、誤解しないで下さい」
「何が？」
「私、先輩のことが嫌いです」
「……」
春未は僕に背を向け、刹流のところへ言ってしまう。
ショック。

しばらく店の仕事を手伝わされ、僕はやっと帰れることになった。
日が暮れる頃である。
結局、刹流とは作業をしながらいろいろ会話を交わしたが、春未は僕のこと嫌いらしくあまり話してくれなかったし、故露は僕のことを避けていた（春未と仲よさげに話しているのは見た）。
「ありがとう琴吹闇斗くん、礼を言わせてもらうよ」
「ああ、別にいいですよ」

社交辞令。
「そういえば琴吹闇斗くん、君――泥人形（ゴーレム）というのを、知っているかい？」
突然バイトさんは、そう尋ねてきた。
それは、亜由とこの間話したばかりだ。
「泥でつくった人形のことですよね。作り主の意のままに動かせるっていう」
「うん、それだ。君、作れると思うかい？」
「はい、作れるんじゃないでしょうか」
動く人形なら、実際に見た。そういえばあの闇斗とかいう名前の人形（つけたのは彩音らしいが）、姉の作品だったな。
「そうか」
「それがどうか、したんですか？」
「いいや。ところで健康そうな男子中学生である君に訊くのだが」
「はい、何でしょう」
「男性というのは、別に好きでもない女性にキスなんてするものなのか？」
「……」
は？
何言ってんだ？
「どうなんだ、答えてくれないか、結構私は返答を所望しているぞ」
「……さぁ、分かりませんね。僕はしたことありませんし、興味もありませんし」
「そうなのか？」
「はい。だいたいそういうの、なんか、気持ち悪いですよ」
「ふむ。まぁ、何の参考にもならなかったな」
悪かったな。
「ではまた来てくれよ」
「はい、おそらくね」
そして僕は、書店を出た。

刹流と春未と故露は、まだ書店に残るみたいだけど。

6

一年前あの書店で、姉はずっと立ち読みをしていた、と証言をしたという店員。

それはあのバイトさんなのだろうか。

確認はしなかったが、どうやらあの人は、姉のことに関していろいろと知っているらしい。春未の事情を知っているのと同様に。

なら、それを訊き出さなければならない。

今度一人でまた行こう。そして、姉の身に起こったことについて質問をする。

ただ、あの人が積極的に姉の手助けをした、ということはないのだろう。

あの人の本質はあくまで、傍観者、だ。

あらゆる現象を、安全な位置から観察する立場の人間。

「面倒だなぁ」

というわけで、帰り道である。

あたりが暗くなり始め、僕は少し早足に、住宅街の中を自宅へと向かっていた。

ここ、前に凪砂と通った道だな。

どうでもいいけど。

「にしても、アレは一体何なんだ？」

屋上で、僕は悪魔から攻撃を受けたわけだが、

あれは、確実に人間技ではなかった。

まして、普通の女の子にできるような動きじゃない。

視認さえもできなかった、あのスピード。

僕の腹を一発蹴られただけで、屋上の隅っこまで吹っ飛ばされた。

どういうことだ？

「分かんねぇ分かんねぇ」

僕が頭を悩ませていると、
「お兄ちゃん」
と、背後から声をかけられた。
いや待て。お兄ちゃん、だって？　僕に妹はいない。よって、これは僕が呼ばれたわけではない、と判断してそのまま僕は歩みを進める。
「お兄ちゃん、琴吹のお兄ちゃん」
うわぁ、僕のことだ。
にしても、誰の声だろう。
振り返ると、詩時故露がいた。
前髪に隠れて、表情は伺えない。
書店から走って追ってきたのだろうか、呼吸が少し荒い。
「えっと……何？」
「あ、その、えと……来て、もらえますか？」
蚊の鳴くような声でそう要求してくる故露。
「だから、何の用？」
「少し、言いにくいです。あの、」
故露は一歩僕に近づき、僕の右手をとって、軽く握った。いくら前髪が長いといっても、顔が真っ赤になってることくらいは分かる。何故だかは分からないけど。
またこれだよ、“分からない”。
最近多いよな。
「……こっち」
故露は僕の手を引き、少し道を引き返させる。早く帰りたい。
そしてT字路になっているところで曲がり、立ち止まった。
と思ったら、次の瞬間、故露は僕の方に向き直り、突然正面から、しなだれかかってきた。
「……」
僕は少しよろめいて、背後にあった誰かの家の塀に背中を押し付けられるかたちとなる。

と、そこでようやく理解する。
僕はどうやら、抱きつかれている、と。
腕は背中に回っていないが、でもそれは十分、抱きつかれたと形容して構わない姿勢であった。
塀と故露にはさまれるかたちとなる僕。
当然故露は僕よりも背が低く、頭は僕の胸元にあった。
故露の小さな呼吸音が聞こえる。
どうすりゃいいんだ？
……。
「――え？」
そこで僕は、気付く。
気付いても、理解には及ばない。
感知しただけで、意味が分からない。
なんだ？
コレは、何だ？

ナイフの刃先が、僕の胸に突き立てられていた。

まだ刺さってはいないけど。
突き立てているのは、勿論故露。
「……ッ」
認識する。
この事態に、思考が追いつく。
「何でナイフなんて持っているんだい？」
何かを言わなければならない。
だから、僕はそう尋ねた。
「女の子だから。こういうのは、携帯してる……」
相変わらずの、恥ずかしがりや特有の小さな声で返答がくる。
時間稼ぎにもならなかった。
「琴吹のお兄ちゃん、春未のこと、殺すつもりなんでしょ？」

「……」

そうか。あの時本棚を挟んで、故露は僕と春未の会話を、聞いていたのか。

春未の幼馴染。

接する機会が少なくて、この子の歪んだ本質に気付けなかった。

コイツ、春未のためなら、誰でも殺すつもりだ。

「お兄ちゃん、」

故露はそこで、顔を上げる。

ゾクリとする。無表情だった。

「――死んでよ」

気付くべきだった。

油断してはいけなかった。

僕はもうこの件に、関係してしまったのだから。

・つづく・

六章：悪魔内包の蒼春未2

1

「春未はさ、何で僕のことを先輩と呼ぶんだ？　もしかして、尊敬してくれてる？」
「そんなわけないじゃないですか。やめてください、虫唾が私の全身を駆けっこしてます」
「……」
「私、思うんです。どんな屑人間、生きている価値のない人間、いい例として琴吹先輩のような人間だったとしても、やはり年上というのは敬うべき存在であり、先輩と呼ばなければならない、と」
「それは何故？」
「私よりも多く生きているからです。多く生きているということは、その分、多くのことを感じてるはずなんです。私よりも多く、この世界を見てきたはずなんです。その見てきた密度がどうであったとしても、量ということでは、物理的に私はその人に勝てません」
「なるほどね」

2

「――――らッ！」
僕は詩時故露の腹に、膝蹴りを食らわせた。
しかし故露はそれを読んでいたらしく、後ろに自分から飛ぶことによって、衝撃をうまく逃がす。ようは、ノーダメージだった。
対する僕も、ナイフをそのまま胸に押し込まれることはなく、ノーダメージである。故露を僕から一旦離すことができただけでも、この攻撃は成功といっていいだろう。

「琴吹のお兄ちゃん、なんで、私の大切な春未を殺そうとするの？」
故露はナイフを僕に向けて、そう問いかけてくる。
日は沈み始め、あたりは薄暗く、人通りはない。
「春未が僕にそう頼んできたんだよ」
「そんなの、嘘ですッ――！」
言って故露は、僕に飛び掛ってきた。
空いた距離を、一気に詰めて。
ふむ、なるほど。棚ごしに書店での僕と春未の会話を聞いていたことは間違いなさそうだが、当然僕らも小声だったわけだから、明瞭に全て聞こえてきた、というわけではないのだろう。
つまり故露の認識としては、僕が春未を殺そうとしている、ということでしかない。
故露の攻撃は正面からだったわけで、僕は容易にかわすことができた。
今日の昼休みにあの悪魔が僕にしたようなスピードなわけがなく、目で追うことも容易い。
「逃げないでよ、面倒臭い」
しかし故露は、僕がさきほどまで背中をつけていた塀を蹴るようにし方向転換をすると、僕にそのまま襲い掛かってくる。
ナイフを横振りしてくる故露。僕はわずかに後ろに身を引いてよける。
しかし、故露はそこでナイフを順手持ちから逆手持ちに変え、再び横振りに僕を攻撃した。

チッ――

頬。
以前凪砂にやられたのとは逆の頬を、ナイフの刃先がかすめる。
わずかながらの鮮血が視界を彩る。
畜生。せっかく凪砂にやられた傷が治ってきたかと思ったら、ま

た顔傷つけちゃったよ。
しかしそれだけで攻撃が終わることはなかった。
故露はナイフを横振りした勢いのまま体を半回転させ、僕の腹を思い切り蹴りつけてきた。
「――ぐッ！」
バランスを崩し、僕は後ろに倒れそうになる。
そこに故露が、飛び掛ってきて、僕はやはり地面に仰向けで倒れる。そこにすかさず故露は馬乗りしてくる。マウンドポジションをとられたわけだ。油断していた。コイツ、凄いスピードだ。
意外と運動神経が良い子なのかもしれない。
こうなったら、最終手段。
「あ！　ぁ……――――――」
大声を出そうとしたがしかし、その僕の口に、僕に馬乗りしている故露は、ナイフを持っているのとは逆の手を、半ば強引に、押し込んできた。
「……」
これでは、声はだせない。
故露の指先は、もう少しで喉に達しそうな位置にまで入ってきている。
さらに故露は逆の手で逆手持ちしているナイフの刃を、僕の包帯を巻いてある首筋、ちょうど頚動脈（けいどうみゃく）が通っているあたりに、当ててきた。
包帯ごしなのでその冷たさは感じないが、それでも僕は、固まってしまう。
動けない。
口中に手を捻じ込まれ、首にはナイフを当てられて、さらに馬乗りされている。動けるはずがない。
にしても口に手を入れるって、この子、凄いことを平気でやってくるな。相手は年上で、しかも異性なのに。
恥ずかしがりやの故露だが、もうそんな彼女ではない。

故露は僕を上から覆いかぶさるようにして見ているので前髪は重力に従うわけであり、その普段は前髪に隠されている目を僕は見ることができた。

無気力。

春未と、同じだ。

何も見ていない。

濁り、だ。

「もう一度訊くね。なんで春未を殺そうとするの？　何か恨みでもあるんですか？」

この子は敬語なのか違うのか分からないな。国語の力が足りてないんじゃないか？

なんて軽口や軽愚痴を言うわけもなく、しかし嘘をついても仕方がないので、僕は先ほどと同じように答えた。

「だから、春未がそう頼んできたんだって」

「そんなわけがないよ。春未がなぜ死にたいだなんて思わなきゃいけないの？　理由がないですよ」

……なんでか知らないが、故露は指先で僕の舌を弄りながら、質問を重ねてくる。

「そんなの、決まってるじゃないか。気付いてないのかい？　春未は君のことが……」

仕方ない。ここは一つ、逃げの一手としよう。いくら相手が女子だからって、凶器のあるなしじゃ、あまりにハンデが大きい。

「君のことが、嫌いらしいよ」

「な――！」

嘘も方便。無論嘘。

しかしそれは、故露に一時的な衝撃を与え、隙をつくらすのには十分な言葉だった。

相手が気を抜いた一瞬を、僕は逃すわけもなく、

一気に体を起こし、横に回転――

「きゃっ」

可愛らしく悲鳴をあげて故露は横にどてっと倒れる。
そのまま立ち上がろうとする僕――しかしその僕の腕を故露は掴んで、離さない。
すっかり立ち上がる気でいた僕は体制を崩し、故露の上に覆いかぶさることとなる。
僕の顔面を狙ったナイフの一突きを僕はかわし、ナイフを握るその手を掴む。
「……」
「……」
膠着状態（こうちゃくじょうたい）。
ではない。
何故なら、僕と故露の位置は先ほどと正反対になったわけで、僕の口の中にもう故露の手はなく、ということはつまり、
「僕は大声を出して、助けを呼べるよ」
「……」
故露は、黙り込むしかないようで――ってあれ？　なんでそんなに顔を赤らめてるの？
「……やめて下さい」
故露は僕の顔から目を逸らすようにし、小さく言った。
「……恥ずかしいです」
……そっちかよ。
なるほど確かにこの体制は男女間にしてはアウトで、しかもここ路上だけど。
「と、とりあえず、僕は帰らせてもらう。だから、その手を離してくれ」
故露は、まだ僕の手を握ったままだ。
勿論、僕も故露のナイフを持つ手を握ったままである。
「春未に確認すればいいだろう。自分の内に住む悪魔の存在に、春未は怯え、その悪魔のせいで傷つく周りの人々の様子に耐えられなくなり、自己嫌悪に陥り、そして死にたいと言っているんだ」

「……」
「離せ、って言ってるんだぜ？」
故露はやっと、僕の手を離した。
僕は起き上がり、故露のそのナイフを握る手も離す。
僕はそのまま故露に背を向けると、家に向かって再び、歩き出した。

3

思考するべきことがありすぎて、それらが混み合い、僕の頭をぐったりさせる。
それが嫌になったので、僕はあらゆる思考するべきことを一旦捨て、無心となり、自室のベッドの上で読書をしていた。読んでいるのは小説でなく戯曲である。僕は小説を読む場合でも、ほとんどが外国のものと限っている。最近売れているらしいエンターテイメント小説などに興味はない。そんなもの、僕にとっては下らなすぎて気持ち悪すぎて、娯楽にもなりはしない。特に恋愛小説なんて、吐いてしまう。
と、ちょうどその時だった。
「闇斗ー、電話よー」
一階から母の声がして、僕は本を閉じると、自室を出て、一階のリビングにある電話機へと向かった。
「はい、闇斗です」
『私は私だ』
「……」
随分気取った、しかし電話口では意味不明なことこの上ない台詞を吐くその声は、おそらくバイトさんのものだった。名前が分からないのは不便だな。
「なぜ名前を教えてくれないのですか？」
『ふふふ、それはね、私は何にも関与しない存在でいたいからさ』

またも意味不明。

『いや気にしないでくれ。ちょっと詩人になってみただけさ。さて本題だ。本題にはさくっとすぐに入ってしまうのがいい。私は手紙では、最初の季節の挨拶を何よりも嫌うのだよ。何だねアレは、イライラする。回りくどさ、というのは日本人独特の文化だよな』

「早く本題に入ってください」

『はは、手厳しいな。ところで君、お姉さんの話を、訊きたいかい？』

「……」

少しばかり、面食らう。

姉の話。

この人が、姉のことについて何か、重要な何かを握っているのは確実だ。

聞きたい。聞きたい聞きたい聞きたい聞きたい。

わさわさする。

緊張なんかしない、興奮する。

わくわくする。

「はい、聞きたいです」

僕ははっきりと、答えた。

『ふふ、そうか。なら教えてやろう。ここに来てくれ』

「ここ、とは、書店のことですか？」

『ああ、そうだ。午後十時ぴったりに頼むよ。いいかい？　ぴったりだよ。遅れても、速くても、駄目だ。ぴったり午後十時。今から三時間後、午後十時に、来てくれ。といっても、店はそのころには閉まっている。だから、裏口から入ってきてくれ。正面から左にそれて、狭い通路をしばし歩けば、裏口はある。鍵は開けておくから』

「はい、分かりました。午後十時ですね」

『ああ、午後十時丁度に、だ。それでは、待っているよ』

ブツリ。

ツー。ツー。

通話終了。
「なんで番号知ってたんだろう……」
まぁそれは、後で確認すればよい。
午後十時……
こっそり家を、抜け出そう。
あと三時間経てば、姉が何をしたのか、知ることができる。
「よっしゃぁ」
小さくガッツポーズ。
願ってもない、機会だった。

4

僕は言われたとおり午後十時ぴったりに書店に着くよう、家を出た。風呂にもすでに入ってある。しかしもちろん、パジャマから私服に着替えなおして、来ている。
そして、書店に到着する。
もう閉まっていて、店内は暗い。いや、レジの向こうの部屋から、わずかに明かりが漏れているのが分かる。
僕は事前に聞いた道順で、裏口にたどり着く。
「姉さんは、僕がこうして真相にたどり着くことを、一年前から予想していたんだよな……」
さすが、だ。
僕が唯一、尊敬に値すると判断した存在。それが姉だ。
扉の前で一度、深呼吸。
そしてから、
僕はドアノブを、捻(ひね)る。
扉を開け、中に入る。
真っ暗だった。
ここは、レジの裏の部屋だ。
別にすごく広いというわけではないが、本がおそらく入っている

のであろうダンボール箱がところどころに積んである。この部屋にも、本棚がいくつか並んでいた。
先ほどまで明かりがついてたはずだが、何故今は暗いのだろう。

ミシミシ。

「ん？」
何だろう、今の音。
「バイトさん、何処ですか？」
進み、並んだ本棚のほうへ、目を向ける。
「……」
本棚と本棚の上を、かけてある板がつないでいた。
その板に、ロープが結ばれており、そのロープを辿ると。

バイトさんが、首を吊って、死んでいた。

「……」
何だ、これ。
難だ。これ。
「――――――ひ」
認識して僕は、後ずさる。
「う。うぅぅぅぅぅ」
吐きそう。
気持ち悪い。
ぶらーんぶらーん、と。
バイトさんが、死んでいる。
目を剥き、口からだらしなく舌を垂らし。
眼鏡は床に落ちている。
足は勿論床についていない。
少しはなれたところに、椅子が倒れていた。

「自殺？　自殺だって？　何でだ？　自分から呼んどいて、自殺かよ」

――いや。

少し離れたところにテーブルがあった。

そしてテーブルの上には、カップが一つ。

中にはコーヒーが入っていた。しかも、ほとんど飲まれていない。

一口二口ほどしか。

触ると、冷えている。

はっとなり、次に僕はバイトさんに近づく。

脈を取る。

「死んでるな……。でも……」

体はまだ完全には冷え切っていない。

死んでから、時間はあまり経っていない。

さっきまで電気ついてたし……

「死ぬ人間が、コーヒーなんて飲むか？　しかも飲みかけだ」

僕はその場で、少し考える。

「コーヒーは冷めてる。バイトさんは死んだばかりらしい。ん、何故電気を消したんだ？　しかも、バイトさんは自ら僕をここに呼んだ」

……。

――――ぞくり。

「ッ！」

僕はあたりをキョロキョロと見回す。

「はー、はー」

そうだよ、首吊りだからって、自殺とは限らないじゃないか。

他殺かもしれない。

つまり、コーヒーの中に睡眠薬が入れてあり、それを飲んでバイトさんは眠り、犯人は眠っているバイトさんの首を吊らせ……

電気がさっきついていて、今消えている。
つまり犯人は、まだこの書店のどこかに、いるかもしれない。
しかし僕は今、武器も何も持っていない。
「……論理的にいこう。落ち着けよ、僕」
僕は走って、書店を出た。
そのまま走って走って走って、家へ向かう。
後ろを振り向かず、走って走って……

5

自殺に見せかけるための殺人だったというのなら、何故犯人はコーヒーを残していったのだろう。
もし僕の推理通り、睡眠薬をいれていたのなら、なおさら、あのコーヒーを残しておくのはおかしい。
ミスか？　あんなミスをするだろうか。
それに、全て僕の考えすぎで、バイトさんは自殺しただけなのかもしれない。
昨日見たバイトさんの死体のことを考えながら昼休み、僕は屋上にやってきた。
春未と約束したとおり。
さて、いるのは春未か、悪魔か。
しかし結論を言うと、春未だけではなかった。
故露もいた。
「……」
昨日のこともあったし、少しきまずい。
「聞きましたよ琴吹さん、故露を昨日、路上でいきなり押し倒したんですってね」
「してねぇ！」
だいたいどちらかといえば、それは故露だ。
「琴吹のお兄ちゃんも来たから、私、質問するね」

その故露が、春未にそう言った。幼馴染らしいし、故露は他の人と接するときよりも、春未と接するときのほうが、いろいろと遠慮しなくてすむらしく、あのおどおどした喋り方は少しこちらのほうがマシになってはいるが、しかし声が小さいのは同じのようだ。

「うん、何？」

春未も故露のほうを見る。少し、自分がおきざりにされた気分だ。

「……春未、死にたいって、本当なの？」

「うん」

間髪入れずに、淡白に、春未は答えた。

故露の表情が、驚愕のそれになる。

「な、なんで？」

「なんでって、私には悪魔がついてるからに決まってるよ。コレは、周りの人たちに迷惑をかける。だから私、琴吹さんに殺してもらおうと思ったの」

「……、なんで、私に相談してくれなかったの？」

「心配かけたくなかったからね。それに、私が死にたいって言ったら故露、止めるか、それか自分も死ぬって言い出すでしょ？」

「……ぅ」

故露は途端、春未から視線を外すと俯いて、僕の方へと走り出した。前髪に隠れて、表情は分からない。

故露は僕の横を通り抜けて、階段を下っていった。

屋上には、僕と春未だけが残ることになる。

「良かったの？　あれで」

僕は春未のほうに近づきながら、質問する。

「はい、こういう風に接しないと。故露、私にべったりですから」

「……」

「……それに、私一人で背負わなきゃいけないものですから」

春未はそう言って、俯いた。

しかし次の瞬間。バッと顔をあげて、

「なぁぁぁぁぁぁぁンちゃってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇエッ

！」
「……」
「よーよー、ぴったり昨日ブリ！　元気にしてたかい“琴吹サン”ってかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ？」
言って、ゲラゲラ笑う春未、否、悪魔。
「いつから？」
「えーっとえーっと、昼休みが始まった直後から。故露がいろいろ話しかけてきてさ。デ、その話によると、どうやらワタシはここに来なきゃいけないラシイって判明。で、来ましたト」
相変わらずのハイテンションだった。甲高い声で喋りまくっている。
「なぁ、悪魔」
「ナンダ悪魔」
「僕は人間だよ」
「同じジャネ？」
「まぁね。なぁ、悪魔」
「ナンダ人間」
「お前昨日、バイトさんのこと殺したか？」
「……ア？」
首をかしげる悪魔。
「バイトさん？　誰だヨそれ」
もはや知らないらしかった。
まぁ、悪魔が犯人じゃないだろうことは、なんとなくだが、予想はできていた。詳しくコイツのことを知っているわけではないが、あんな、自殺に見せかける、なんて方法を、この性格の悪魔がとるはずがない、と。
だいたい、犯人はまったく僕の知らない人間、ということもあり得るのだから。
「いや、こっちの話」
「あっソ。ン？　オマエ、その頬の絆創膏は、故露にやられたトコ

か？　ワタシが昨日噛んだトコは首だけのはずだゼ？」
「ああ、そうだよ。首のほうが重症だけどね」
「ぎゃハハッ！　皮肉かイ？　おもしれーおもしれー、アア、オマエの肉はウマかったゼェ？」
「……」
悪魔は飛んだり撥ねたりしている。楽しそうな奴だ。
「なぁ、悪魔」
「ナンダ人間」
「春未って、僕のこと嫌いなのかな？」
昨日書店で言われたことが、少し気になっていた僕である。
「知るかヨそんなの」
「知らないのか？　自分が住んでる奴のことなのに？」
「アア、了解了解。説明してやンヨ。悪魔サンの悪魔講座、ってカ？　ハハハハハ！　こいつァうめぇや」
「いいから説明してくれ」
どうやら今日はこの悪魔に、僕を襲おうという気はないらしい。
「もっちロン。話は簡単でサ、つまりワタシは春未（コイツ）の体を使ってるだけで、コイツがどんな人間なのかとか、記憶とか、意志とか、そういうのは全部わかんねぇっツーワケなンヨ」
「なるほどね。あくまで体を借りてるだけってことか」
「そゆコト。いいネ、オマエ頭よくテ。サクサク話がすすみやがる。ま、春未（コイツ）がどんなヤツなのかっテのは、こうして何度も体使ってりゃ、周りのヤツからの話でオオカタ分かるんだけどヨ。ああ、でも春未（コイツ）が好きなのは春未（コイツ）の兄チャンかもしれねーゼ？」
「は？」
何だと？
「話によりますとサ、春未（コイツ）のファーストキスのアイテ、兄チャンらしいデス。ぎゃハッ、おいおいそんな顔すんなよ、残念ながら嘘のような真のオ話」
「ど、どっちからだ？」

「それこそ知るかヨ。マ、普通に考えりゃ、兄チャンからなんじゃネーの？」

おいおい刹流（あのやろう）、ボーイズラブどころかシスターコンプレックスかよ。

「何だイ何だイ、もしかしちゃって落ち込んじゃってルゥ？　ぎゃハ、ワタシでよかったらしてやろーカ？」

「いやいいよ」

「そうかイそうかイ。モテないねぇワタシも。がっかりがっかり」

「なぁ、春未が死ぬと、お前も死ぬのか？」

「もっちロン。だからワタシは最近焦ってんダ。自分が生きるか死ぬかの一大事」

それにしては緊張感が足りない気もするけれど。

「まぁいいや。僕、帰るよ」

「おおツレねぇじゃん。もっとオ話しよーぜェ」

「嫌だ」

僕は告げて、悪魔に背中を向けると、屋上から出て行くために、歩き出す。

その僕の背中に、悪魔は言った。

「なァ、さっき言ったとおり、ワタシは春未（コイツ）を殺されると困る。でもアンタはどうやら春未（コイツ）を殺すつもりらしい」

いや、僕はもう春未を殺そうとは思っていない。

簡単な仕事だったから気まぐれでちょっとやってあげようとは思ったけれど、悪魔だの何だのと、いろいろあって面倒になった。

助けてやる義理もないし。

それに、姉のことについて何か知っていたらしいバイトさんも死んじゃったし。ああ、バイトさんが何故死んだのか、もしくは殺されたのかについては、少し調べてみてもいいかもしれないな。

「だからサ、ワタシ決めたゼ。近いうち、機会をつくって、ワタシはオマエを殺す」

……。

どうやら、後戻りはできなくなってしまったようだ。

6

結局あの後は、亜由のところで時間を潰した。
亜由には、春未を殺せなかったことから話し始め、ほとんど全てを話してやった。
まぁ、それだけだが。
で、放課後。
僕はパソコン室を訪れた。
パソコン部の刹流に、話を聞くために。
しかし刹流はまだ来ていないらしかった。
「すぐ来ると思うよ。そこらで待ってなよ」
同級生らしいパソコン部員にそう言われて、僕は室内を見渡して、そして気付いた。
「……」
秋元拓哉（あきもとたくや）がいた。
写真部のはずだが、何だ、転部でもしたのだろうか。
秋元のところへ行き、パソコンの画面を覗く。
それで納得。
「へぇ、面白いことやってんだな」
僕が言うと、秋元は作業をやめ、椅子を半回転させ、僕に向き直った。
「闇斗か」
「ああ、もちろんパソコン部に転部してきたんじゃないだろ？」
「当たり前さ。このオレが写真部以外になるだなんて、もしそうだったら気が知れねぇよ」
「だよな」
秋元がそこまで写真好きなのは知らなかったが。
そういえば、僕の姉も写真部に所属していた。ということは、秋

元は僕の姉の後輩だったんだろうな。
あの姉のことだ。どうせ誰とも会話なんてしなかっただろうけれど。
「闇斗は、泥人形（ゴーレム）って知ってるか？」
「……？」
またその質問。
昨日バイトさんにやられたばかりなのに。
何だ？　今は泥人形（ゴーレム）がブームなのか？
「知ってるが、それがどうしたんだ」
「いいや何でもない。こっちの話だ。……本当はお前の話なんだが……」
「ん、何だって？」
後半は声が小さく、聞き取れなかった。
「いいや何でもねぇよ。泥人形（ゴーレム）だなんて話、つくった奴の気が知れねぇってだけだ」
「そうか」
ガラガラ、と。
その時扉が開いて、刹流が入ってきた。
「ん、何で琴吹がいるんだ？」
「ああ、刹流、ちょっと訊きたい事があるんだ」
僕は秋元から離れ、刹流のもとへと行く。
刹流や春未、それに故露は、犯人でないのなら、バイトさんの死をまだ知らないはずなので、僕はそれには触れずに質問する。
「昨晩、何してた？」
「何してたって、寝たぜ」
「何時に？」
「えーっと、確か早かったな。九時ごろだったか」
「早いな」
「ああ、やることなかったしな。ウチ、母子家庭でさ、母さんは夜遅くまでパートだから、晩御飯とかそういうのはやく済ましちまう

んだよ」
「へぇそうなのか。春未もそのくらいに寝た？」
「寝る前に春未の部屋行って、おやすみは言ったぜ。春未は本読んでたけど、私ももう寝るって言ってたな。多分すぐ寝ただろ」
「そうか。ありがと」
「ん、それだけかよ。何で訊いたんだ？　ああそういや春未が“一緒に帰りませんか？　校門で待ってます。って琴吹さんに伝えて”って言ってたぜ。すまんすまん、お前に言うのすっかり忘れてたわ。今頃お前のこと待ってるかもな」
「冗談じゃねぇ」
僕は言って、走り出そうとしたがしかし、腕を刹流に掴まれた。
刹流は僕の耳元で囁く。
「妹殺したら、承知しねぇ」
僕が頷くと、刹流は手を離した。

校門で、春未は待っていてくれていた。
「遅いです、先輩。私、待ちました。今日は委員会の仕事も放課後ないので、先輩と帰ろうかなっと考えていましたのに。まったく先輩、嫌いです」
また嫌いって言われた。
それと、ああ、昨日書店に少し遅れてやってきたのは、委員会の仕事があったのか、と一人合点。どうでもいいけど。
「ごめんね。ところで春未、春未のファーストキスの相手って刹流なのか？」
「ッ！　な、なんで知ってるんですか？　誰から聞いたんですか？　まさか、兄から？」
いつもクールな春未だが、そこで少し顔を赤らめ、少し口調が慌てたものになった。
可愛い。
「いいや、悪魔に訊いた」

「ああ、そうでしたか。今日の昼休みも、どうやら出てきていたようですし……。あ、今日は先輩に、危害、与えませんでしたか？」
「ん、大丈夫だったよ。余談だけど、僕は学校で怪我したくないんだ。保健室のあの女教師が苦手でね」
「私もです。私、あそこに行くと保健室の先生に“可愛いー！”とか言われて抱きつかれますから」
何やってんだあの人。
「春未の家の方向もこっちなの？」
「はい、途中まで先輩と同じですよ。その途中にあの書店があるんで。寄って行きますよね？」
「いいや、多分今日は閉まってるよ」
「何故ですか？」
「予想だよ」
嘘だよ。
「春未、昨晩、何時に寝た？」
「女の子の夜を質問とは、はしたないです」
「……」
「でも先輩ならいいですよ。私のこと気にしてくれているんですね」
ちげぇ。
「九時過ぎには寝ましたよ。兄はもっと早くに寝たようですけれど」
証言は食い違ってないな。
「そういえば、故露は？」
「分かりません。いつも一緒に帰るのですが、何故か今日、故露は私を避けているみたいです」
ああ、昼休みのことが影響してるんだろうな。
そのまま、どうってことのない話をしながら、歩き続けた。
意外と楽しかった。
雫根姉妹と会話をしたことを思い出した。
鷺凪砂と会話をしたことを思い出した。
あの時の楽しさと、似ていた。

途中、春未の家の位置も訊いた。あの書店の近くだった。
そんなことをしながら、歩いて歩いて、僕と春未は途中で別れ、僕は自宅へと帰った。
「考えることありすぎなんだよ……」

7

夜の七時頃だった。
その電話がかかってきたのは。
「はい、闇斗です」
『詩時故露です。こんばんは、お兄ちゃん』
何故電話番号を知っているのか気になったが、バイトさんと違い故露は我が学校の生徒なので、同じ生徒の電話番号を知るのは容易であり、方法はいくらでもあるということに気がつく。
「何の用だい？」
『私、決めました。お兄ちゃんにも、伝えておこうと思って……』
電話越しでもおどおどしている子だ。
しかし次に故露は、はっきりと告げた。
『私、春未を殺します』
「……」
『そして、自分も死にます』
「……」
『ではさようなら、お兄ちゃん』
プツリ。
……。
……。
……。
関係ないはずだった。
それならそれでいい、はずだった。
なのになのになのに。

「何で春未を助けようと、思っちまうんだよ」
全然論理的じゃねぇ。
でもそんなの、どうでもよかった。
自分の中で、何かが変わりつつある。
しかしそれが何だか分からずに、
僕は家を、飛び出した。

偶然だったとはいえ、不幸中の幸いと言えるのかどうかは知らないが、春未の家の位置を知っておいて良かった、と思った。
春未の言っていた通りの場所に、蒼家（あおいけ）はあった。
インターホンのボタンを押す。
返事がない。
一向に、返事が来ない。
春未も刹流も、家にいる時間のはずなのに。
僕は門をあけて敷地内に入る。
玄関の扉のドアノブを捻ると、開いていた。
「何で開いてんだよ……」
もしかして、すでに故露が……？
僕は扉を開けると、家の中に入る。
母子家庭で、母親は夜遅くに帰ってくる、と言っていた。つまりこの時間、親はこの家にいない。
汗が滲む。
鼓動が早くなる。
心臓が破裂しそうだ。
いやもういっそ、破裂させてしまいたい。
誰も居ない。
誰も居ない。
一階には誰も居なく、僕は二階に上がる。
いくつかの扉のうち、二つにはプレートがかけられていた。
春未の部屋。

刹流の部屋。
静かだ。
この家は、まさに今、無音だ。
迷わず、春未の部屋を空ける。
……誰も居ない。
次に、刹流の部屋を空ける。
「……ッ！」
勉強机があり、その前にある椅子の上……

蒼刹流が、死んでいた。

・つづく・

六章：悪魔内包の蒼春末3

1

「故露は、本当に自殺したいのと私が言うと、ひどく驚いていました。あの後一度だけまた会ったのですが、その時故露は、私は死にたくない、そう言っていました」

「死にたくない、か。そいつは裏を返せば、生まれてこなきゃよかった、って意味だよな」

「何故ですか？」

「生まれてきた、ということは、いつか死ぬということ。死ぬということは、生まれてきてそれまでは生きていたということ。つまり、生まれると死ぬはイコールで結べるんだ。表裏一体、ということかな。つまり、死にたくないは、生まれたくない。生まれてこなきゃよかった、ってことなのさ」

「死にたくないのは普通のことです。皆言っています。ということは、皆生まれてこなきゃ良かったと思っているのですか？」

「そうだろうね。だって赤ん坊って、生まれてきた瞬間にこの世界に絶望して泣くじゃん。空気に接しただけで分かるんだろうね。ここが気持ち悪い偽りの汚い世界だってことに」

「先輩も、生まれてこなきゃ良かったって思いますか？」

「いいや、僕は思わない。ただ、生きていたいとも思わないね。よく考えてみると、死にたいとも特に思わない。つまり“無”かな」

「無、ということは、それはつまり、死んでいるということですね」

「その通り。僕はさ、生きていないんだ」

2

僕は刹流のもとへ駆け寄る。
外傷はない。どこにも。
腕をとり、脈をはかる。
「……なんだよ」
僕はそこで少し、安堵する。
死んでない。
「刹流、起きろ」
僕は刹流の肩を揺する。しかし、刹流は一向に起きようとしない。
そこで気付く。机の上に、カップが置いてあり、中にコーヒーが少しまだ入っている。触ると、だいぶ冷めてしまっていた。
「おいおい、嘘だろ」
僕は呟いてから、より激しく刹流の肩を揺する。最終的に叩いたり殴ったりすると、刹流はやっと目を覚ました。
「……っなんだよ、ん？　は？　琴吹か？　おい、なんでいるんだ」
「んなことどうでもいい。春未はどこだ」
「あ？　あーっと、部屋じゃねぇのか？」
「いねぇよ、何処にも」
「は？　ちょっと待て。どういうことだよ」
刹流は怪訝そうな顔をしながら立ち上がった。途端、少しふらつく。
もしかしたら、僕が叩いたり殴ったりしたせいかもしれない……。
「頭がぐったりするぜ。あ、そういや」
「何だ？」
「そうだよ、思い出した。春未がコーヒー持って来てくれたんだけどよ、それ飲んでしばらくしたら急にすっげー睡魔が襲ってきてさ」
「これか？」
僕は机の上に置いてあるコーヒーを指出す。
「ああ、それだ」
「故露って、来てないか？」
「故露？　いいや、来てないと思うぞ」

僕はそこで、刹流に故露から電話がかかってきたことを話した。
「で、このコーヒーなんだけどさ。刹流の証言もあわせて考えると、どう考えても睡眠薬入ってるよな」
「は、睡眠薬？　おい待てよ、そんなの小説やらドラマやらの世界だろ」
「何言ってんだ。睡眠薬なんて市販されてるだろ」
「へぇ、そうなのか」
「当たり前だ」
「でもよ、なんで春未が睡眠薬なんか」
「その春未、悪魔じゃなかったか？」
質問すると、そこで刹流はしばし沈黙した。思い出そうとしているようだ。
「いいや、分からないな。ただ、いつもの春未と変わんなかった気もするけど」
でもあの悪魔、意外と春未の真似できるんだよなぁ。
「なんなら、春未の部屋で探せばいいじゃねぇか。睡眠薬」
刹流がそう提案してきた。
「そうだな」
それが今できることのうち、最優先だろうと思う。春未がどこに行ったのかなんて分からないし、かといってやみくもに外に出て走り回るのも馬鹿馬鹿しい。
僕と刹流は、隣の春未の部屋に入った。
にしても簡素な部屋だな。凪砂の部屋よりは部屋っぽいけれど。
机の引き出しを開けてみる。
「あんま妹のプライベートなもん他人に見られたくねーけどよ」
刹流はそんなことを言っている。まぁ、そうだろうな。
構わず僕はあるかどうかも分からない、しかしおそらくあるだろう睡眠薬を探し続ける。
と、クローゼットを開けようとしたところで。
「おいおいおい、待て待て待て、待てって！」

「ん？」
刹流が僕の腕を掴んで、僕の前に立ちはだかった。
「ん、じゃねぇ！　このクローゼットの中には春未の着替えの他に下着などその他諸々はいってんだよ、何だお前変態か！」
「あー、なるほどね。ではそこは君に任せよう」
「え、そうなるのか？　嫌だ嫌だ、なんで妹の下着あさんなきゃいけねぇんだよ。そんな趣味ねぇよ」
「でも春未のファーストキスの相手は君らしい」
「ほっとけよ！　……分かった分かった、やりゃぁいいんだろ。やるってやりますって。向こう向いてろオラ」
「はいはい」
僕は後ろを向く。
そういえば、前に凪砂のクローゼットあけようとしたときも怒られたっけ。
退屈なので、僕は凪砂とのあれこれを思い出す。
あー凪砂可愛いなー。
フッちゃったのは間違いだったかなー。
でも凪砂記憶喪失だし。
あ、でも記憶喪失って、記憶取り戻すことあるんだっけ？
「おい」
「ん？」
肩を叩かれ、振り返る。
目の前に、何か錠剤が入っている瓶（びん）があった。着替えの中にまぎれていたらしい。
瓶にテープが貼ってあり、そこに文字が書かれている。
商品名は聞いたことのないものだったが、それがベンゾジアゼピン系睡眠導入剤であることは分かった。
「ああ、市販されてるやつだな。ベンゾジアゼピン系の睡眠薬は、睡眠効果強いんだよなぁ」
「どういうことだと思う、琴吹。正直、オレには何が何だか分から

ねぇよ」
「うん、僕にもさっぱりだ」
ただ、この時点で僕は確信した。
バイトさんを殺したのは、春未だ。

3

バイトさんが死んだあの夜、蒼兄妹は寝ていたらしい。しかし、二人とも寝ていたということは、もう片方が寝ていたかどうかは、実際には分からないということだ。
そして、もし春未が寝ている時に悪魔が出てきて、春未の体を使いバイトさんを殺して、そして家に戻って眠り、また春未に戻ったのだとしたら、
春未にとっての認識は「自分はずっと寝ていた」になるのではないだろうか。
そんなことを考えたのは昨日の夜、春未の自宅から帰ってきてからだ。結局あの後僕は、春未が戻ってくるよりも前に帰り、家についた頃に、刹流から「春未が帰ってきた」と電話をもらった。春未はひどく混乱していたらしい。気がついたら道のど真ん中にいたのだという。自分が何をしたのか、全く分かっていないらしかった。部屋で勉強をしていたと思ったら、突然道路の上だったということだ、無理もない。
で、今僕は学校に登校してきている。
休み時間、僕が所属する三年二組の教室に、刹流がやってきた。
刹流が僕に言ったことは、事前にある程度予測ができていたものだった。
「詩時故露が、自宅で殺されたみたいだ」
別に驚かない。
ただ、意味が分からないというだけで。
バイトさんの死。

次いで故露の死。
理由が分からない。
あの悪魔、何を考えてるんだ。
僕は授業中も、思考を続けた。
何がどうなっているのか。何が起きているのか。
睡眠薬。悪魔。バイトさん。少女趣味。首吊り。呼び出し。詩時
故露。幼馴染。兄。蒼刹流。妹。蒼春未。寝ていた。書店。自宅。
コーヒー。屋上。自殺……
さまざまな単語（ワード）が、キーワードの羅列が、頭の中を駆け巡る。
点と点を線で結び。結び結び結び結び結び結び——
「——ん？」
待て。
不自然だ。
おかしい。
絶対おかしい。
あれは絶対におかしいはずだ。
あれも絶対におかしいはずだ。
「そうだよ」
そうだそうだそうだそうだ。
何故、気付かなかった？
一つ分かれば、他の全てもおのずと見えてくる。
「ハッ、そういうことか」
僕は笑う。失笑する。
いや、笑止。
全然笑えない。
「ペルソナだ」
僕は心の中で、宣言する。

春未の内に住む悪魔、
論理的に殺してやるよ。

4

僕としたことが、全然論理的じゃなく、迂闊で軽率だった。

故露が僕に「春未殺して自分も死ぬ」と電話をしてきたのは事実だが、何も、今すぐやるとは言ってなかったじゃないか。

少し反省しつつ、僕は昼休み、春未の教室を訪ねた。

「先輩……」

春未はだいぶ、疲れたような顔をしていた。僕は春未の手をとり、北校舎四階の階段の上、鏡ヶ崎恵仔がよくあの特異な鏡に質問をするときに来ていた場所へと連れてきた。

「何でこんなことになっちゃったんでしょう……。私です。きっと私がこの手で、故露を殺したんです……」

「ああ、確かにその手が、故露を殺したんだろうね」

「慰めてくれないんですね。先輩、嫌いです」

「ああ、嫌ってくれて構わないさ」

「……もう、殺してください」

春未は消え入りそうな声で、そう言った。俯いて。

「死にたいです。先輩、今すぐ私を、その手で絞め殺してください」

泣いていた。

春未が泣くのを、初めて見た。

純粋で綺麗な涙だった、と思う。歪んだ思考だけれど。

「どうしたんですか、先輩。殺してくれないんですか？　約束してくれたのに。私を殺してくれるって。私は生きていちゃいけないんです。生きてるだけで、周りの害です。優しくしてくれる人も、何もかも、全部私は殺してしまいます。先輩だって、私が邪魔で嫌いで怖くて、関わりたくないでしょう、迷惑してますよね。私って、なんでこんなんなんでしょう。これじゃあ、生まれてこなきゃ良かったじゃないですか」

春未は一歩僕に、近づいてくる。涙でくしゃくしゃになった顔を、

僕に向けて。
「もう終わりですよ。今まで生きていたのがいけなかったんです。皆、近づいてこないでほしかったです。怖かったです、つらかったです、人を傷つけてしまうのが。悪魔なんて都合のいいこと言っても、それは私に違いないんですよ。責めてください、私を。もっと罵倒してください。嫌です、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ」
そこで春未はよろけて、倒れそうになった。それをとっさに僕は支える。
「殺して、下さいよ」
「悪いけど、それはできない」
「何でですか！」
春未は、叫んだ。
「死にたいのに！　なのに私は自分で死ぬことができません！　次に何をしてしまうのか分からない。死ななきゃいけないのに。死ななきゃ死ななきゃ……」
春未は気持ち悪そうにした。うっ、と。自分の胸をわし掴むようにして。体が小刻みに震えていた。
嗚咽をもらす春未の背中を、僕はさすってあげる。
「なんで……なんでなんでなんで……」
僕はそんな春未に、話しかける。
「もうじき、君は悪魔になってしまうから、早く質問しておくよ。ねぇ、春未、いくつか僕の質問に、答えてくれるかい？」
「？」
僕に肩を抱かれるようにして支えられている春未は、そこで僕をまっすぐに見てくる。相変わらず、泣いているけれど。
「大丈夫。心配しないでいい。僕に任せてよ」
「何を、ですか？」
僕は春未の耳元で、そっと囁く。
「悪魔を、殺すんだよ」

その後春未にいくつか質問し、その答えを得て、さらに一つある指示を出してから、僕は一人で、資料室を訪れた。

亜由はノートになにやら書き込んでいた。日記をつけているのだろう。

「君は女たらしなのだな。今回はどんな女の子を抱いていたんだ？」

「殺すぞ」

「おやおや怖いね。悪い冗談じゃないか」

「悪い冗談なのかよ……、昨日話した、悪魔内包少女だよ」

「ああアレか。どうなんだ？　まだ殺せてないのだろう？」

亜由はいつも通りの平淡な声で尋ねてくる。

冷たい声、というより、温度のない声だ。

「うん。でも今夜多分、殺せるよ。悪魔のほうだけ」

「悪魔、ね」

ふと、亜由の来ているブレザー（夏なのにまだブレザー）のすそに、カレーのシミがついていることに気付く。思わず笑いそうになってしまった。亜由でも、カレーを制服のすそにつけてしまうことがあるのだな、と。

そこで思い出す。前に家で、姉の制服（帰宅しても姉は制服から着替えない人だった）に僕がカレーをはねさせて、シミをつくってしまったことを。あの時は、姉に殺されるかと思った。いや実際、カッターナイフを頸動脈にぴったりつけられていろいろと罵倒されたものだった。

しかしそこで、思考がソレへと行き着く。

あれ？　そのシミ、完全に僕が姉に前につけてしまったシミと場所が一致していないか？

いや、それはまた、いつか考えよう。

今は他に、やるべきことがある。

僕は亜由に言った。

「亜由、ちょっと、協力してくれないか？」

5

放課後、僕は家に帰り、そして夜になってから、家を出て、蒼家を訪れた。

刹流は家にいた。

玄関で僕は刹流に迎えられ、家に入った。

鍵はしめずに、僕は刹流に続いて、二階の刹流の部屋へと上がる。

刹流の部屋にある時計は、八時三十五分を指していた。

「刹流。春未は？」

「書店に行くとか言って出て行ったぜ。で、帰りに弁当買ってくるって。でも遅いからよ、ちょっと心配してるところだ」

「そうか。なぁ、春未って、携帯持ってるのか？」

「持ってるよ。母さん夜遅いし、いろいろ連携とるのに必要だからな」

「電話させてくれるか？」

「ん？　ああ、別にいいけど」

刹流は机の上にあった自分の携帯電話を取ると、番号をプッシュした。

繋がったらしく、刹流は携帯電話を僕に差し出す。

「もしもし、春未か？　……そうだ。春未、今から、学校に来てくれ……いいから、三年の昇降口の前に来てくれ。二十分もすれば来れるか？　……そうか。僕もそこに今から行く。一人で来てくれよ。それじゃあ」

僕はそこで通話を切る。

「おいおい、どういうことだよ？」

刹流は少し慌てているようだった。

「悪魔と決着をつける」

「は？　どうやってだ？」

「悪魔に出てきてもらって、話をするんだ」

「何で今なんだよ」

「別にいいだろ。とにかく僕は行く」
宣言通り、僕はすぐに刹流の部屋を飛び出し、階段を駆け下った。
蒼家から出て、学校を目指す。

夜の学校。
時刻は九時。
職員達は全員帰ったようだった。もしかすると九時ではまだ残っているかと心配していたのだが、まぁテストも終わり、特別な行事も控えていないので、最近は遅くまで仕事をする必要がないだろうと踏んでいたのだが。
勿論電気はすべて消え、校舎は闇の中に聳え立っていた。昼間見るよりも何倍も大きくなったように見える。
運動場と南校舎の間。
以前、奈野奈乃子の死体が芸術的に飾られた庭園に、僕はいた。
「来たか」
向こうから、人影。
蒼春未だった。
否、悪魔。
「よォよォ、ちょっとオーバーして昨日ブリだなオイ。何してんだァ、ンなトコで」
両手を広げ、口を大きく開けて笑う悪魔に、挑発するように僕は告げる。
「昨日ぶり？　三十分前にも会ったじゃないか」
悪魔が一瞬、ピクリと固まる。

「どうした？　何か不思議なことでもあったのかい？　蒼刹流」

悪魔は、五メートルほど先の地点で、立ち止まった。
ニタァリ。
春未の顔で、悪魔、否、刹流は不気味に笑った。

「すげェすげェ。こいつは驚キだぜェ。何デ分かったンだ？」

「いくつか、不自然なことがあったからね」

「教えてくれヨ」

「まず一つ。昨日春未のフリをした悪魔が、僕のことを“琴吹サン”と呼んだこと」

刹流はニヤニヤしながら、腕組をして、聞いている。

「春未はさ、僕のこと“先輩”って呼ぶんだよ。でもこれ、刹流の前では一回も呼んでないってことを思い出したんだよね。で、放課後パソコン室での君の台詞を引用。《ああそういや春未が“一緒に帰りませんか？　校門で待ってます。って琴吹さんに伝えて”って言ってたぜ》。ここで思ったんだよ。春未は刹流の前では、僕のことを“琴吹さん”と呼んでいるんじゃないか、ってね。そして今日確認してみたら、やっぱりそうだった。春未の体に移り、春未のフリをした君は、墓穴を掘ったわけだよ」

「ふムふム、なるほどなァ」

やはり腕組をしたまま、刹流は何度も頷きながら聞いている。

「憑依能力（ひょういのうりょく）。それが君の才能だった。憑依というのは本来、霊などが乗り移ることらしいから、厳密には違うだろうけどね。まぁ簡単に言うと、他人に乗り移れる能力だ」

「ああ、その通りだゼ」

春未の顔で、満足そうに笑う刹流。

「話を戻すよ。僕が悪魔が君だと気付いた理由として、二つ目。それは、昨日君の家に行ったときの、君のやり口さ」

「ン？　なんかミスしたか？」

「いいや、ほとんど完璧だったけれど、不自然な点がいくつか。まず、君が、何もしていなかったことだ」

「何もシテいなかっタ？」

「机の上にはコーヒーカップしかなかった。勉強してたわけでも、

本を読んでいたわけでもない。かといって音楽を聴いていたわけでもなかった。つまりさ、君は何をしている途中でもなく、椅子に座って、眠っていたんだよ。いかにも、これから眠る準備万端、って感じでさ」

「ン？　それがどうしたんだヨ？」

もう正体は割れているので、自分のことを「ワタシ」とは言わないようだ。

「すぐに分かるよ。それとさ、あの睡眠薬、君がちゃんと春未のクローゼットの中から見つけたところ、僕見てないんだよな。君はあの時、僕に後ろを向くよう指示していただろ？　大方、ポケットの中にでも入れていたんじゃないか？」

刹流は「ククク」と笑う。しかし何も言ってこないので、おそらく肯定ということでいいだろう。

「それに、あの睡眠薬が、結構使われていたことも気になった。さらに、悪魔もおかしい。道路の途中で突然春未に戻るなんて、ね。それはきっと、戻らなくてはいけない理由があったんじゃないかって思う。それで僕はふと思った」

「何を？」

「僕が君を無理やり起こしたせいで、悪魔は引っ込んだんじゃないか、ってさ。で、確認してみると、昼休み、春未が悪魔状態になっていた時、君は保健室か教室で寝ていたんだってね。そういや、僕が悪魔に首噛み付かれて保健室行った時、君はベットの上にいた。さらに、君は犯人なんだからバイトさんの死は知ってるだろ？　あのバイトさんが死んだとき、君は寝ていたんだろ？　そこから僕は推理した」

ニヤニヤと、刹流は薄気味悪く、まだ笑っている。自分が今ピンチだとは思っていないらしい。

「君は自分が寝ている間しか、憑依できないんじゃないかってね」

「ぎゃハッ！　すげェすげェ、よほどの妄想癖がある奴じゃねェとンなの分からねェよ！　正確には、自分の意識を空っぽにさえして

れば憑依は可能なんだけどヨ、デモそれには寝るのが一番てっとり早いってワケなんだよなァッ！」

ぎゃハハハハハ、と楽しそうに笑う刹流。憑依した情態の刹流は笑ってばかりだ。

悪魔（これ）がコイツの、本性だ。

「それと憑依について僕の推測をあと二つ。まず、君は何も春未にしか憑依できないワケじゃない。バイトさんにも憑依していたんだ。君はバイトさんに憑依して、首を吊った」

「オ？　それもすげェな、気付くなんて」

「さらにもう一つ。君は誰にでも憑依できるわけじゃない。条件を満たした人間でないといけないんだ。だって、そうじゃないと、故露も自殺させられたはずだからね」

「その条件については分かるカ？」

「ああ。キスした人間だろ？」

「ぎゃハハハハハハハハッ！　満点！　テメェは最高だな！　まさしくその通り。オレはキスした人間に乗り移る。これについてはオレもまァヒントは出してやったんだけどサ」

「ああ。春未のファーストキスの相手は君。これは春未の体での君も言っていたし、春未にも確認した。あと、バイトさんが書店で僕に質問したことも気になった。引用すると《男性というのは、別に好きでもない女性にキスなんてするものなのか？》。男性という言い回しで気付かなかったけど、これは君のことだろ？」

「ソノ通り。憑依できる奴増やしとこうッテ思ってサ。でも故露は駄目だった。あいつ、ガードかてェんだよナ」

確かに固そうだ。

握手求めたら拒絶されたし。だいたいあの子、刃物携帯してるんだよな。

「じゃあ、君のしたことと、目的を述べよう」

「オ、オ、何ダ何ダァ？　探偵サンっぽいじゃんヨ。ぎゃハハハ、愉快愉快」

「う〜ん、目的からいこうか。まず今回の事件で不自然なことの一つとして、バイトさんの自殺の時、飲みかけのコーヒーカップが出ていたということがある。あれによって君は、僕にこう推理させようとした。《これは自殺じゃない。コーヒーに睡眠薬が溶かしてあり、バイトさんはそれを飲んで眠り、犯人はそのバイトさんを運んで首を吊らせたんだ》ってね。この《自殺じゃない》ってのが重要なんだ。十時ぴったりにこさせて、電気がついているのを目撃させたのも、きっと少し影響してるだろうね。あれによって、犯人がまだ書店内にいると思わせ、僕が現場に長く留まることを避けたんだから」

今、僕の声以外は、何も聞こえない。無音の世界だ。

「しかもあの呼び出しの電話は、僕を呼び出すためだけじゃなく、呼び出しといて自殺、という不自然さを演出させることもできる。他殺と思い込ませるためにね。他殺だと思わせれば、僕はこれ以上関与したがらなくなると考えたんだろ？　故露を殺した動機もこれだ。春未のまわりで殺人をいくつか起こし、僕にこれ以上悪魔のことについて詮索させないようにした」

「ああ。だってオマエを直接殺すにもさ、オマエもオマエでガードかてェんだモン。学校じゃ殺せねェし」

「でも君のしたことはもっと簡単なことだ。だいたい、眠った人間なんて重いから、首をかけさせるのなんて難しいよ。バイトさんは背も高かったし。まぁ悪魔情態の春未は身体能力高いみたいだから、どうだか分からないけど。とにかく君がしたのは簡単なことだ。バイトさんに憑依し、僕に電話をかけて呼び出し、十時になってコーヒーカップを置いといて電気を消し、首吊り。死ぬ直前に憑依中断。あのコーヒーカップの中には睡眠薬なんて入ってないから、警察には自殺だと思わせられるし」

「ぎゃハッ、完璧ダロ」

「バイトさんが“僕の姉がしたことについての真相”ってのについて握ってるってことは、書店で僕とバイトさんの話を真横で聞いて

いた君なら分かるしね」
話しながら、つけてきた腕時計で今の時刻を確認。
あと十分か……、まだ稼がなきゃだな。
「そして昨日。これは簡単だ。君のミスは春未に憑依して故露の家に向かうとき自宅の鍵を開けっ放しにしてしまったことと、これはミスじゃないかもしれないけど、故露が僕に“春未を殺す”と電話してきたのを知らなかったことだろうね。まぁとにかく、君は睡眠薬を使って眠り、春未に憑依し、故露の家にて故露を殺害。春未から聞いたんだけど、故露の家も母子家庭らしいね。だから親はいなかったんだろう」
同じ母子家庭だから、仲が良いというのもあるんだろうな。
「だが家に帰る途中、自宅で君は僕にむりやり起こされた。よって、道の途中で憑依が中断されてしまったわけだね。まぁ、これで全てかな」
「ああ、すげェすげェ、褒めてやンゼ。まァ付け足しとくコトとしては、故露を殺した動機がもう一個あるッツートコかな。アイツさ、放課後オレに相談しにきたんだヨ。“春未は死にたがってる。親友の私としては、そんな春未を殺してあげたいんだけど。それだと自分も死ぬことになるし”みてーな感ジでサ。アイツもアイツで頭オカシイ奴だったからナ。とにかくアイツも春未を殺そうとしていたってコトはオレも知ってて、だからアイツは殺さないといけなかった。用は“コロシドキ”だったンだよナァ」
春未が死んでも、刹流は死なない。だから悪魔は春未が殺されそう、ってことになっても、あまり危機感がなかった。
妹だから、なんて理由じゃない。利用できるから、ただそれだけの理由で刹流は妹を守った。
そういうことだ。
つまり刹流も――刹流こそ、最悪のペルソナ被りだったというわけだ。こんなことなら、刹流の仮面も見破っておくべきだった。幼い頃と違って、僕はある程度この能力をコントロールできるように

なってしまったのが、この場合は悪かったということだ。
「けどさァ、」
「ん？」
刹流はそこで、俯いた。
そして腕を広げると、大口を開けて、目を狂気に輝かせて、顔を上げた。
「そんなゴチャゴチャした理由（モン）、実はどォでも良かッたンだよナァ！」
「――な」
ぞくり、と。
身の毛がよだつ。
思わず体が身構える。
何だ？　コイツ。
「白状するとヨ、オレの動機はこうなんだヨ。退屈してたから、ちょっと面白いコトしてみてーなァ」
「……」
「オレはサ、四年前にコノ世界に絶望しちまってサ」
刹流は天を仰ぎつつ、語りだした。
流れるように。酔ったように。
「急に色褪（いろあ）せちまったンだよナァ。それまではコノ世界が好きで好きで楽しくて楽しくて堪らなかったのによォ。デモ気付いちまったンだよ。コノ世界の下らなさニ」
四年前。それは、春未が初めて憑依を受けた時期だ。刹流が自分の能力を、認識した時期だ。
能力・才能は、なんとなく分かるものだ。
夢羽も自分が呪いを使えることになんとなく分かったんだろうし。
僕も人の心を見透かすという能力・才能があることになんとなく気付いた。

だから刹流も、なんとなく分かったのだろう。自分の憑依能力に。

「オレはこうして生まれてサ、デ、自分の意思なんて関係ナク学校に通わされ、デ、大人になったらなったで、社会のヒエラルキーの下層付近に組み込まれて、いいように扱われて、デ、役に立たなくなったら捨てられて、老いぼれたジジイになって、朽ち果てていき、死んじまう。オレが死んでも、なんでもなく世界は普通に自然に何も変わらず進行してイキ、やがてはオレがコノ世に生まれて残したモンなんて一つも無くなって、オレはいてもいなくても同じだったってコトにされちまう。それに気付いたンだよ……」

あくまで刹流は、普通に話す。悲しみや哀れみも浮かべずに、普通に。

「所詮コノ世界動かしてンのなんて、オレが一生かかっても到達できネー地点に、キタネー手つかって居座ッてる、“上流階級のお人達”だけでサ。ソイツらのいいように世界が動いてんだよナ。デ、オレはその“上流階級のお人達”のために生まれて、死ぬわけだ。嫌だ嫌だ、嫌だよなァ。こんなンに気付いちまったら、もうオワリだよなァ……。なァ、そう思わねェ？　ズルいよな、オレは生まれた時点で、いてもいなくても同じ人間なんだゼ？」

そこで刹流は僕を見る。

僕は答える。

「どうでもいいよ」

刹流は笑う。

「だろうナ」

「ああ、君がこの世界をどう思おうが、僕にはどうでもいい。君の独白には、特に何の感想も抱かなかったよ。ただ、僕がこれから言うことに、君が何の感想もいだかないというわけにはいかないだろうな」

「ア？　オマエがこれから言うこと？」

僕は淡白に、告げる。
「八分」
「……なんの時間ダ？」
「君の寿命さ」
刹流は、不可解そうに顔をゆがめる。春未の顔が台無しだ。
「君の憑依は、三十分しか持たないんだろう？」
「ッ！」
刹流が息をのむのが分かった。
「今日春未に質問したよ。自分が悪魔になっている時間のうち、最高だったのはどのくらい、って」
無論、あの昼休みにだ。
「三十分。大抵の場合、憑依時間は三十分しかないらしいね。これは、限界（リミット）なんじゃないのかい？」
「グ……」
その反応。どうやら正解のようだ。
「ああ、確かにオレは三十分間他人に憑依すると、一時間はもう能力を使えないようになッてる。ケド、それがどうしたってんだ？さっきから随分余裕ぶっこいてるみたいだが、オレはナイフを持ってきてる。オマエが家を出てすぐに睡眠薬使って眠り春未に憑依し、来る途中にコンビニで買ったからな。オレはオマエをここで殺すつもりなんだゼェ？」
「一つ言っておくが、僕はもう君を殺した」
「……ア？」
ぽかん、と。
阿呆みたいに口を開けて固まる刹流。
「正確には僕の友達だけどね。僕には一人だけ友達がいてさ。亜由って名前で、そいつに協力してもらったんだ」
「……」
「簡単に僕がしたことを説明しよう。まず僕は亜由と合流し、君の家に行った。まず僕が君の家に入り、玄関の鍵を開けっ放しにして

おく。で、僕と君が二階に上がってから、亜由は家の中に入り、事前に僕が場所を教えておいたのだけど、一階のトイレに入ってもらう。事前に春未にも僕の計画は話しといたんだ。ほら、これなーんだ？」

僕はポケットから、携帯電話を取り出す。

無論、僕は自分の携帯電話なんて持っていない。

「……ソレ、春未のじゃねェか」

「そうだよ。春未は、悪魔の正体が君だということもすでに知っているのさ。春未には、マナーモードに設定した携帯電話を、一階トイレの便器の裏において置いてもらった。亜由はトイレに入って、それを取る。一方僕は部屋で君に、春未の携帯電話に電話をかけるようにさせる。しかしこの時電話に出ていたのは勿論亜由だ。僕はいかにも春未と学校で会う約束をするような内容の話を装う。亜由はずっと無言だったんだけど……。で、君に“僕が学校で悪魔と対決するつもり”だと思わせ、君が追って来れないように凄いスピードで部屋を出て、亜由から春未の携帯電話を一階で受け取る。そして学校へ」

話している最中、刹流の顔（春未の顔だけど）はどんどん青ざめていった。

「事前に計画を話していたから、春未は外に行ったっきり帰ってきてなかったんだよ。僕が去り、君は僕を殺すチャンスを得たわけだから、早速睡眠薬で眠り、春未に憑依した。僕は刹流の携帯電話を使った亜由からのこの春未の携帯電話への連絡で、君が眠った時刻を確認。ちなみに亜由は、もう君を殺したと思うよ。もしかして体が死ねば憑依中の君も死ぬかと思ったけど、それはなかったようだね」

そっちのほうが、好都合だ。

「亜由には、“起きる間も与えない殺した方をしろ”を言っておいた。起きられては僕の計画は台無しだ。まぁ、何も抵抗なしの人間を殺すなんて、亜由にしてみれば簡単だっただろうね。多分亜由は

もう君の家から逃げてると思うよ。どうしたんだろう、やっぱり起きる間も与えないとなると、頚動脈でも掻っ切ったのかな」

「……」

「おっと、あと四分だ。君は四分後、自分の体に戻るしかない。しかし君はもう殺されているから、戻った瞬間死ぬ。つまり、君の寿命はあと、えーっと……三分四十八秒だ」

僕は告げて、春未の携帯電話をポケットにしまった。

「……フ」

刹流は全身を怒りに小刻みに震わせそして、

ほえた。

「ふざけンなぁぁぁぁぁぁぁッ！」

ダンッ、と。

刹流は足で地面を蹴る。

「ぶっ殺ス！」

「――――くッ！」

僕は惨めにも横っ飛びをし、刹流の突進をよけた。

「殺す殺す殺す殺すぜってェ殺してヤル！」

狂ったように喚き散らしながらも、刹流は体の向きを変え、僕に飛びつく。

僕はよけるしかない。身をかがめると、刹流は僕の真上を通過していった。

僕はそのまま、前へ駆ける。

「逃げても無駄だ！　憑依中、オレはすっげェ身体能力を発揮できる。他人の体なため、あらゆる“体への制限”を取っ払って活動できるんだからナァッ！」

びゅんっ。

風を切る音がして、

「な」

背後に刹流がすでにいた。

「オラッ！」

ドガッ
「がはッ！」

僕は背中を蹴られ、
吹っ飛ばされた。
屋上での時のように。
ガンガンガン、と。
全身が下のアスファルトにすれて、血が出る。
「三分もありゃア、テメェを殺すのにはオツリがくるぜェ。にしてもクッソォ、憎い憎い憎い！　滅茶苦茶、苦しませてやるよ！」
刹流は僕との距離を一気に詰めてくる。
僕は逃げる。
三分。
三分逃げ切れば、僕の勝ち。
自分の口元がほころぶのが分かった。
「論理的じゃねぇなぁ……」
そう、種明かししないでもっと時間を稼いでいれば、僕は余裕で刹流を殺せた。もしくは、亜由に刹流がギリギリ起きるような殺し方をさせていれば。
しかしそうしなかった理由――
「死ネッ！」
「ぐはぁッ！」
再び背中を今度は殴られ、同じように吹っ飛ばされる。
メキメキ、と。嫌な音がした。
骨は折れてないようで、なんとか立ち上がる。
この行動の理由――
僕は、変わりたかった。
論理とかに縛られて、常に冷静に物事を見ているフリをしている自分が、嫌いになった。

もう嫌なんだ。
自分に嘘をつき続けて、生きてきた。
自分のせいで人が死ぬのが、本当は怖かった。
人が死んでも悲しむことのできない自分が、本当は怖かった。
変わりたい。
この戦いに勝ち、春未を救えたら、僕は変われるのだろうか。
分からない。
ただ、春未を救っても、僕のせいで死んできた人たちへの償いにはならない。
でもそれでも。
自分でも理解不能だけど。
僕は今までの自分じゃ絶対にしなかった何かを、したかった。
「チョコマカ逃げやがって糞野郎がッ！　ゴキブリかテメェ！　オレはゴキブリ殺すのが一番好きなんだけどサァッ！　ぎゃハハハハハハハ」
背後から、春未の声帯で笑う刹流の声が聞こえる。
どうやら先ほどからの攻撃を見ていると、刹流は怒りのあまり、自分がナイフを持っていることを忘れているようで、それは僕にとってかなりありがたかった。
僕は、すぐそばにあった、南校舎脇にある非常階段を上った。
「はぁ……はぁ……」
ギシギシと。全身が痛む。ただの二発でこれだ。あと数発食らったら、僕は死ぬだろう。
高さでいうと二階の踊り場まで来たときに、刹流は非常階段の下にいた。
逃げ切れる。
そう思ったのが間違いだった。
「ナメんなァッ！」
「はッ！？」
刹流は跳び、一気に僕のいる踊り場まで、上がってきた。

「くそッ！」
僕はさらに階段をあがり、二階と三階の中間の踊り場で、背後から襲いかかってくる刹流に気付き、とっさに、また横にとんだ。
ギリギリ、刹流のこぶしをかわすが、直後、

ぐにゃりッ

「――い！？」
刹流の拳は手すりにあたったのだが、その手すりが、ひしゃげた。
どんな威力だよ！
「いってェ！　畜生、そうなんだヨなァ。身体能力上がっても、うたれ強いとか、そういうワケじゃねェんだよなァ」
そんなことを言っている。
僕は急いでさらに階段を駆け上がる。
途中背後を振り返った途端。

ガンッ！

背中と頭に激痛。
気付くと、僕は仰向けで、三階踊り場に倒れていた。
刹流に、両肩を押さえつけられる姿勢で。
「オワリだなァ」
刹流はニタリを笑う。
僕は腕時計を見る。
「残り三秒」
「アッ！？」
同様する刹流。
「嘘に決まってるだろ」
その刹流の頬を僕は右手で、殴りつけた。春未に心の中であやまって。

「がッ！」
刹流は僕の上から離れる。
僕は急いで立ち上がり、再び階段を上がる。
「許さねェッ！　内臓えぐってヤルあの野郎！」
刹流も僕を追ってくる。
そして一番上、四階の踊り場までたどり着く。
その刹那、刹流が跳びかかってきた。
僕はそれをよけずに、受ける。
刹流は僕に飛びつき、そして、口を開けた。噛み付くつもりだろう。
僕は、決断する。
「――ぐ……ッ！」
「ハ！？」
僕は、自分から正面に倒れたのだ。
そう、階段の上に。

ドンッ

強い衝撃がくる。しかし、刹流がクッションとなり、僕はほとんどダメージなしだ。
そのまま、僕ら二人は階段を踊り場まで転がり落ちる。

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンッ

ぴたり。
「カハッ、ゲホゲホッ、テメェ……」
「くぅ……」
「……オラッ！」
「――！」
倒れた姿勢のまま刹流は噛み付いてきた。

僕は反射的に、左腕を顔の前に出し、刹流の歯が直後僕の左腕に、ドップリと突き刺さった。
しかし僕はそれを利用し、刹流の顔面を、右の拳で思い切り正面から殴りつけた。
「ギャッ！」
僕の腕の肉をすこし引きちぎり、刹流は少し吹っ飛ぶ。
僕はよろよろと、立ち上がる。
「グ……」
刹流も、立ち上がる。
――と、その時。
腕時計を見て僕は、言った。
ハッタリでなく。
「時間だ」
三。
刹流も、それを認識したようだ。
どんどん、表情が蒼白に。
そして髪の毛をガシリと掴み、地団駄を踏みながら、叫んだ。
二。
「クッソォ！　死にたくねェ！　死にたくねェ死にたくねェ死にたくねェ――」
一。
「死にたくねェッ！」
――――ぴたり。
零。
蒼刹流は、死んだ。
僕は溜息をつく。
「ああ、二発殴っちゃったし、階段落ちさせちゃったけど、許して

くれるかな……」
僕は息を荒げながらも、いつもの独り言。
ふっ、と。
春未の体が前に倒れこむ。
のを、僕はとっさに受け止めた。
そのまま、身をかがめる。
「……終わったんですね」
春未は言った。
「ああ」
僕は頷いた。
「……先輩、」
「ん？」
「大好きです」

月明かりの下、僕は思う。
果たして僕が変われたのか変われなかったのかは分からないし、
そんなものはやはり他人が判断するべきものなのだろうけれど――
変わるのは、悪いことじゃない。

変わろうと思うということは、
生きようと思うことと同義であるように思えるから。

・つづく・

六章：悪魔内包の蒼春末３（後書き）

こんにちは。
今回も、読んでくださり、ありがとうございました。
次回から「琴吹闇斗のペルソナ崩し」は最終局面となります。
皆さんならもう予想されているだろうとは思いますが、
亜由と、秋元拓哉と、闇斗の姉についてのお話となります。
では。

七章：資料室の亜由1

1

亜由（あゆ）は僕を殺そうとしている。
それに気付いた。
今まで、何故それに僕が気付かなかったのかが、疑問で仕方がない。
そうだ、明らかにおかしなことがあるのだ。
時を少しさかのぼらせ、あの、小町夢羽（こまちむう）というペルソナ被りの少女が僕を呪い殺そうとした事件。
何故、小町夢羽は僕が犯人だと分かったのだろうか？
最初、夢羽は犯人が僕だと分かっていなかった。その証拠に、彼女は資料室から髪の毛を摂取するなんて方法をとっていた。
しかし、翌日、夢羽は僕が犯人だと分かったようで、直接髪の毛を引っこ抜いた。
もう一度疑問に思う。
何故、分かったんだ？
考えられることとしては、一つしかない。
亜由が教えた。
もしくは秋元拓哉（あきもとたくや）が僕が犯人だということに気付いた可能性もあるが、しかし夢羽にそれを教える理由が分からない。
須藤の死体の胸にきれいな穴が開いたのを見て、それを小町夢羽が呪いを使ったんだと推理した亜由が、僕を呪い殺させるために、夢羽にそれを教えたのではないだろうか。
そんなもの、手紙に僕が犯人だと書いて、夢羽の下駄箱に入れるだけでいい、簡単なことだ。
確かな情報か分からなかったため、夢羽は僕にあの時“さぐり”を入れていた。

全ての辻褄があう。
しかし亜由は、何故僕を殺させようと？
自分の存在を知ったからか？
今思うと、鏡ヶ崎の鏡を亜由が渡した直後に壊したのは、きっと僕に鏡に質問する機会を作らないためだったのだろう。つまり、絶対に知られたくないことが、亜由にはある。
そこまで考えたところで、
「浮かない表情ですね、闇斗先輩」
「ん？」
正面から、声をかけられた。
そこでは、蒼春未がハンバーガーをほおばりながら、首をかしげていた。ダメージ加工の黒いTシャツに、赤と黒のチェック柄のプリーツスカート、茶色のブーツ、というファッションである。やはりピンクのカチューシャはつけていた。トレードマークなのかな。
日曜日。休日。
僕らは今、駅近くのファーストフード店で昼食をとっていた。
春未に言わせると、デート、らしい。
よくよく考えてみると、僕ってデート、初めて。
と言っても僕はこれをデートともなんとも思っておらず、後輩の買い物に半ば強制的につき合わされているだけだ。波風立てないようにする、という僕の性格が災いし、こういうことを断れないのである。彩音に家に招かれたときもそうだったように。
「浮かない表情ですね、と言ったのです。ぽけーっと壁をじっと見つめて。私を見てください。ほら。自分で言うのは気が進みませんが、私って結構可愛いですよね。見ていて癒されませんか？　顔だけじゃありません、この脚線美。それにほら、こうして頬っぺたにわざとケチャップをつけてみたり」
「うん可愛いよ。春未萌えー」
「そんな感情のこもっていない声で萌えとか言われたくありません」
「だよね」

「話を終わらせないで下さい。何がご不満なんですか？」
「外に出たこと」
「……うわぁ。それは今日のプランを全否定ですね。とても人間の言うこととは思えません」
そうか？
「さて、次は何を買いましょう。一応、私が買いたいと思っていたものは全部買えたのですが」
「なんで君が買ったものを持つのは全部僕なんだい？　僕は何も買っていないのに」
「彼女の荷物を彼氏が持つのは当たり前のことでしょう。何をそんなに驚いているのですか？」
「まず訂正しておくと、僕は君の彼氏になんてなっていないし、僕の彼女は君でなくて他にいる」
「……あの、それは……本当ですか？」
突然、春未は悲しそうな表情になった。
構うものか。
「うん。鷺凪砂（さぎなぎさ）っていう子でね、生まれ変わったら僕に会いたいって言ってくれてたし、七夕の短冊には僕とずっと一緒にいたいなんて書いてくれるほどのベタ惚れでね。無論、僕も彼女にメロメロで、すっかり虜さ。どんな子かって言うとね、とても恥ずかしがりやで勉強はできないんだけど、自分のお父さんを刺し殺せるほどに根のところでの意思は強い子だ。ちなみに僕はその子と一緒のベッドで寝たこともあってね――って、あれ？」
話してる最中、春未は唇をかみ締め、全身を小刻みに震わせ、今にも泣きそうに……というか実際に泣き出してしまった。
ここは駅前のファーストフード店なのだ。こんな休日の昼間に人がいないわけがないし、むしろ混んでいる。その視線が、きれいに全て僕と春未に集中した。
かわいそう……、そんな声が聞こえる。そう言っている人達の視線は春未に。

そして、皆の僕に向けられた視線は“怒り”であった。
やべぇ、調子乗りすぎたかも。いやいや、凪砂の話してたらなんか楽しくなっちゃって。
「春未、ここは出たほうがいいよ。下手をしたら、裏路地で不良軍団に絡まれるのと同等くらいの危険が僕の身にせまっている気がしてならない」
「ならお一人で帰ってください。私はここで閉店時間まで絶えることなき涙に耐えます」
「言葉遊びは後にして、さぁさ、立って発とう」
「だって先輩、彼女いるんでしょう？」
「いるわけないだろ。嘘だって。僕の彼女はなんとびっくり春未でした。うわぁ春未好きすぎー、食べちゃいたいかも」
「本当ですか？」
「本当本当。春未ラブー。さぁさ起って立って発とう」
「はい、起って立って発って絶ちましょう」
もう段々訳わからなくなってきた。
で、立ち上がったその瞬間、
パチパチパチパチ
「……」
まわりから、おー、と声が上がり、拍手が響いた。
仲直りできたようだな良かった良かった、という声が聞こえてくる。
もう全部訳わからねぇよ。

僕は、左腕に包帯をぐるぐる巻きにして、体のいたるところに絆創膏を貼っている。
つい先日、僕は“悪魔”に左腕を噛まれ、蹴っ飛ばされてアスファルトに体中を擦っていたのだ。
ああ、言い訳が大変だったなぁ。
のら犬に追い回されて、何度か転んで、最終的に噛まれました。

というのが僕の使った言い訳である。
そして春未のほうも体の節々が痛むと言っている。階段落ちをしたせいなのか、悪魔によって無理に身体能力を底上げさせられていたせいなのかは分からないけれど。
「本屋にでも行かない？」
僕はそう提案した。
「はい、先輩と一緒なら私、どこでも行きますよ」
「そう、そいつは好都合だ。当たり前だけど、あの書店じゃないよ」
「分かりますよ。だいたい、あそこやってるかどうか分かりませんし」
あの書店。
春未が通っていて。
僕の姉が通っていた書店。
そこの店員、天然パーマで眼鏡をかけた背の高い女性、バイトさん。彼女は姉になんらかの協力をしたらしい。
一年前にあった、姉の行方不明の直前まで続いた、大量殺人事件。僕の学校の生徒が、次々と殺された事件。あれに姉は関与していた、とバイトさんは言っていた。それはほぼ、姉が犯人だと言っているようなものだった。
殺されたのは、全員、姉にイジメを行っていた生徒だし。
しかし姉にはアリバイがある。ずっと書店で立ち読みをしていたというアリバイが。しかしそこはカメラの死角なので、実際にいたという証拠はないが、バイトさんがそう警察に証言したようだ。さらに出入り口のカメラでは、姉が入ったときの映像と出たときの映像があり、姉が書店にいた時間は割り出せていて、その全てが、ぴったり事件が起きていた時間帯だったらしい。
まぁとにかく、その書店はおそらくやっていない。バイトさんが死亡したことによって。
なので僕らは、適当に近くにあった書店に入った。
買い物袋をたくさんぶら下げいている僕の左腕に、春未は抱きつ

くようにしている。暑い。今は夏なのだから、離れて欲しい。幸い、当然だけれど書店の中は冷房が効いていたので、別に悪くもなかったけど。

「春未は、どんな本を読むの？」

「何でも読みます。雑食です。活字と闇斗先輩に飢えています」

春未は僕の腕に頬ずりしながら答えた。

ふーん、たくさん本読んでるくせに日本語がおかしいね。

「そうか。オススメとかってあるかい？」

「先輩の読みたい本のジャンルを教えてください」

「漫画」

「ぐはッ！」

「嘘だよ」

「ですよね。本当は何を？」

「春未のオススメのでいいや」

「それは、“春未が呼んだものをオレも読みたい”みたいなことですか？」

「僕の一人称は“オレ”じゃない」

「知ってます、私を誰だと思っているのですか。まぁそうですね、シリーズものとかじゃないほうがいいですか？」

「いいや、別に」

「なんなら私がおかししましょうか？　あ、でも私、全シリーズ、第一巻を持ってないんですよね」

――ピク。

「待って春未、今なんて？」

「ほえ？　全シリーズ一巻持ってないんですよね、と言いましたが、お気に障りましたか？」

一巻がない？

それは、資料室にある亜由の本と同じだ。

あそこにはシリーズものがあるが、全て、一巻がない。

「なんで、一巻がないの？」

「私はあの書店で、あらゆるシリーズものの一巻を立ち読みし、面白かったら二巻以降を買うということにしていたんです」
「……」
一巻は立ち読みし、面白かったら二巻以降も。
立ち読みといえば、一年前の姉も……
資料室の本にはさんであった、紅葉の栞を思い出す。
姉が持っていたのと同じ栞。
姉の部屋の本棚からは、本がほとんど消えていた。
もしかして、あの資料室にある本は全て姉の……
「あの、どうしたんですか、先輩」
春未が、心配そうに僕の顔を下から覗いている。
「ん、なんでもないよ」
僕が右手のほうで頭を撫でてやると、春未はとても嬉しがった。

2◆秋元拓哉

僕はある特殊なカメラを持っている。
このカメラで写真を撮ると、場所によって、あり得ないものが映るのだ。
簡単に言うと、過去に殺人が起こった場所で撮影すると、新しい映像から順に、殺害風景が映るのである。
僕の部屋の引き出しの中には、このカメラで撮った写真が多くある。
最近のものだと、人形が奈野奈乃子をノコギリで惨殺する写真があるし、多いのは、一年前の連続殺人事件の時の写真だ。
琴吹弥子（ことぶきやこ）先輩は、僕が唯一会話を交わした上級生だった。
僕は写真部に所属していて、弥子先輩はその写真部での先輩であった。
僕の撮る写真は、昔から変わっていた。普通の人間には理解できないようなものを撮っていたのだ。

それは、動物の死骸である。
道路で車にひかれたヘビの写真。誰かに踏まれて潰れたカマキリの写真。アリを水をためたビンの中に入れて溺死させた時の写真。ヘビ同様、車にひかれたネズミの写真。石で潰したミミズの写真……
そういうものを撮るのが好きだったのである。僕のこの趣向は、他の人間には理解されなかった。だから僕もこれを隠すようになった。でも、写真部に入り、どうしてもそういう写真が撮りたくなった。だから、誰も見ていない時に、こっそりセミの死骸を写真で撮ったのだ。それだけでは満足できず、石でそのセミの死骸を潰して写真を撮った。その時、肩に手がおかれた。僕は驚いて、振り返った。
そこに立っていたのが、弥子先輩である。
「君も死骸を撮るのが好きなのか？」
先輩はそう言った。僕は驚いた。も、ということは、この人も死骸を撮るのが好きなのだろうか？
「……はい、そうですが」
「なら私と同じだ」
その日から、僕と先輩はよく話をするようになった。
だがその話は、普通の人間には理解できないような内容のものだっただろう。
僕達の話す事は、全て暗く、重い、ドロドロとした話だったのだ。人の殺し方、何かの儀式の方法、死体の話など。僕達の趣味、趣向は完全に一致していた。そんな人に会ったのは初めてだったのだ。
ある日、先輩は僕にカメラをくれた。本に書いてあったのを元に、何度も実験を重ね、やっと完成したものらしい。それが今僕の持っている、殺害風景を映すカメラである。先輩の話によると、こういうものを作るには、本当にそれを信じることと、才能が必要らしい。
そんなことを僕は自分の部屋で思い出す。
そして、手元にある一枚の写真を見る。
「全く、何もかも徹頭徹尾、気が知れねぇよな」

3

今日書店で買った春未オススメの推理小説を読んでいるとき（やっぱり僕はこういうのあまり好きじゃない）一階から母の声が聞こえてきた。なんでも、僕に電話がかかってきているらしい。

一階に下り、母から受話器を受け取る。

何故か、母の表情はなんとも形容しがたい、無理やり例えるならばハエを飲み込んでしまったかのようなものだった。

「はい、闇斗です」

『や、あぁっん！』

「……」

変な声が聞こえてきた。

『……。どうしたのですか先輩、黙り込んでしまって』

「……お前こそどうしたんだよ春未」

『いえいえ、先輩も先輩で、一応は健康な男子中学生ですからね。そんなロリコン先輩に、ロリ系後輩として少しサービスを』

いらねぇ。

……ん？

「あっ、テ、テメェ、もしかして母さんにも同じことしなかっただろうな！」

『しましたよ。だって、先輩だと思ったんですもん』

「ふざけんな！　殺してやるぞ、明日昼休み屋上来いよ！」

『ふふふ、そんな強引な先輩もまた絶妙ですね』

「うるせぇ！」

と、そこで。

かなり取り乱している自分に気付く。

……。

「……いや、みっともなく喚き散らして悪かったね」

『はい、やはりクールな先輩が一番格好良くていいですね』

……。
「用件は？」
『ああ、そうそう、大事な用件があるのですよ。まぁそれはすこし置いておきまして、次は二人で映画を見に行きませんか？　えへへ、途中で手繋いじゃったり……、あ、それと、今日の私はどうでしたか？　かなり頑張ってスカートを短めにしたのですが』
切ってやった。
で、直後にまた鳴り出す電話機。
出なくていい。と思ったが、そこで僕は気がついた。
番号が違う。
春未じゃない。
「はい、琴吹です」
『よぉ、闇斗だな？』
「……」
秋元拓哉だった。
クラスも違うのに、秋元が僕に何の用だろう。
本当、何の繋がりもないはずなのに。
「ああ。何だ？」
『明日の朝、下駄箱に手紙を入れておく。それを見てくれって伝えたくてさ。ほら、もし気付いてくれなかったらどうしようって、ちょっとばかし不安になったもんでな。じゃあよろしくな』
「待てよ。手紙って何だ？」
『もちろんラブレターじゃねぇ。僕からの大事な手紙だ。一人で見てくれよ。中に写真を、一枚入れてある。それを見りゃ、お前も手紙の指示に従うしかないはずだぜ。ああ、あと学校には早めに来ることをオススメする。じゃねぇと見れねぇモンがあるからな。にしてもよ、本当、気が知れねぇよ』
「何の？」
『お前が、亜由と付き合い持ってることの気が知れねぇ、って言ってんだ』

そこで、秋元のほうから通話が切られた。
「……」
呆然とするしかない。
いや、こうなる気はしていたんだ。
何の関係もないなんて、そんなの嘘で、
僕と秋元は“亜由”という少女を通して、繋がっているんだ。

一昨日、金曜の朝の話である。
朝学校に登校してきて、僕は真っ先に資料室に向かった。
しかし資料室に前に来て、中から人の声が聞こえてくることに気がついた。亜由の声ではない。男子の声だ。
扉には少し隙間があって、僕はそこから中を覗いた。
「……」
そこで、こちらに背を向けていた男子生徒が、秋元拓哉だった。
秋元は、カメラを構えていた。
パシャリパシャリ、と、シャッターを切っている。
その時亜由が立ち上がった。
「何してるの！　やめなさい！」
亜由は珍しく、声を荒げていた。
亜由が、制服の内側からナイフを取り出したのが分かった。
しかし、秋元はそれに恐れを抱くなんてことはしなかった。
「次撮ったら殺すわ」
すると秋元は、カッターナイフをポケットから取り出し、刃をだした。
「死ぬのはお前になるんじゃないか？」
亜由は一歩後ずさった。
何でだろう。カッターナイフなんて、恐れるべき対象にはならないんじゃないか？
「なんで撮られるのが嫌なんだ？」
秋元が問いかけると、亜由は口ごもった。

「それは……」
秋元はその亜由を見て、再びシャッターを切る。
「やめなさい！」
亜由は秋元に襲い掛かった、いや――
――ナイフが秋元の顔の直前で止まる。
「やっぱり殺せないのか。お前にしては決断力が鈍いな」
「……」
亜由は秋元を睨んだまま、何も言わない。
「弥子先輩のこと覚えてるよな？　もちろん」
「ええ、忘れるわけがないわ」
「お前、先輩の行方不明のことについて何か知ってないのか？」
「本当に知らないわ」
「僕は先輩は誰かに殺されたんだと思ってる」
「私もよ。あの人が行方不明になる理由なんて、それしか考えられない」
「だったら誰が殺したと思う？」
亜由は少し間をおいてから答えた。
「分からない」
「お前、今闇斗と接触してるよな？」
「……」
「何が目的だ？」
亜由は溜息をついた。
「自分でも分からない。焦ってるのかもしれない」
「焦ってる？」
「なんでもない」
亜由はそう言うと、僕に背を向けた。
「君こそ、目的は何？」
「先輩のかたき討ちさ。犯人は分かってる」
「……誰？」
「分かってるだろ？　僕の邪魔をするなよ。僕も闇斗に接触する」

「どういうこと？」
「それも、分かってるだろ？」
亜由はまた溜息をつくと、秋元に背を向けた。
「今日は帰ってちょうだい」
「ああ、もう十分だ」
そう言って秋元は、こちらを向いた。
僕は足音を立てないように気をつけながら、そこから逃げ、男子トイレに逃げ込んだ。

と、まぁ、こんなことがあったのだ。
あの日。僕が須藤とすれ違った時、もしかしたら秋元はあの後、資料室に向かったのかもしれない。で、亜由に追い返され、僕とは遭遇しなかった。
つまり、秋元も資料室に通っていた。
うまく、僕と遭遇しないように。
だとしたら、何なんだ？
しかも秋元は姉の名前を出していた。
姉は殺されていて、殺したのだが誰だかも分かっているような口ぶりだった。
確かに、秋元は姉とは写真部で同じだったし、繋がりがあるはずがないなんては言えない。
しかし、これはどういうことだ？
とにかく、秋元が下駄箱に入れておいたという手紙だ。
それを見てから、考えよう。

４◆秋元拓哉

月曜日。
今日は終業式があり、明日からは夏休みである。
その、朝早く。

僕は柔剣道場の裏にいた。
そこに七時二十五分、約束の時間に、蒼春未はやって来た。
もしかしたら来ないかもしれないと思っていたので、僕は少し安心する。
「何の御用でしょうか。闇斗先輩のことについて、お話があると言っておられましたけれど」
彼女の第一声はそれであった。
ピンクのカチューシャをつけた、顔の整った女の子だった。
「ああ、なぁ君、蒼春未、今回僕はさ、君を殺そうと思って、君を呼び出したんだ」
僕は普通に、そう告げる。
さすがに蒼春未は表情をかえた。
警戒心をむき出しに、僕を睨み付けている。
しかし、逃げようという気はないようだった。
まぁ逃げてもすぐに追いつき殺すけれど、しかし、逃げようとしないというのは愚かだと思った。
「気が知れないよ。何君、死にたいのか?」
「死にたくありません」
蒼春未は即答した。
「私は以前のように、死にたいだなんて、言いません。死にたく、ないです。私のために、親友が死にました。尊敬していた書店の店員さんが死にました。私はその分も、生きていかねばなりません。それに、」
下らないな、と思いつつ、僕は蒼春未の言葉を聴き続ける。
逃げようという気はないようだし、すぐに殺さなくてもいい。
それに、琴吹闇斗に、少しチャンスをあげてやってもいい。この少女を、守るチャンスを。
僕はそこまでの悪党じゃないし。
「それに?」
「私には、好きな人ができました。だから、死ぬわけにはいきませ

ん。私は死にたく、ありません」
強い意志のこもった言葉だ、と思った。
真っ直ぐな言葉。
琴吹だったら、それを聞いて、なんと言うのだろう。「ペルソナだ」なんて言って、笑うかもしれない。
「その好きな人ってのは、琴吹か？」
「はい」
「僕はお前の気が知れねぇよ。アイツのどこがいいんだ？　顔か？　確かにアイツは格好いいナリはしているが、生物ってのは危険なものからは本能的に遠ざかるもんだ、つまり皆本能として分かるのさ、アイツには近づいてはいけないってことがな」
「あなたは分かってません」
蒼春未は、はっきりと、言う。
何かに確信しているかのような口調。
イライラする。琴吹を褒める奴が、琴吹を贔屓（ひいき）する奴が、琴吹を好きだという奴が、僕は嫌いで嫌いで嫌いで嫌いで嫌いで嫌いで嫌いで仕方がない。死んで欲しい。
弥子先輩は、僕よりも琴吹のほうが大事らしかった。
弟だからか？
それがどうした。アイツは僕のことなんてなんとも思っていないだろうが、僕はアイツが大嫌いだ。
「皆分かっていません。私も最初は、分かっていませんでした。ただ、助けてもらったから、優しくしてもらったから、闇斗先輩を好きになっただけです。しかし、今は、そんな理由だけで私は先輩を好きと言っているのではありません。ペルソナ崩し。人の仮面の裏側、人の汚さを、闇斗先輩はずっと、見続けて来た。それは知っていますか？　でも、それについて、深く思考したことはありますか？」
「ねぇな。ペルソナ崩しだかなんだか知らんが、そんなもんは、ちょっとした読心術があるってだけに過ぎない」

「それは違います。なんで分からないんですか？　これは、絶望的すぎることなんです。あなたに想像できますか？　生まれてからずっと、まわりの人々の汚さを嫌というほど見せ付けられて、人を信じられなくなって、それでもなおその中で生き続けている先輩の気持ちを。皆、分かってませんよ。私にも、想像できません、そんな気持ちは。しかしそれは、私だったら、とても耐えられません。耐えれるはずがない、自分以外の全員が、嘘ばかりついて、自分を欺こうとしていることを知りながら、社会に溶け込む自信なんて、ありません。自殺しない自信なんて、ありません。だからこそ、先輩にとって、先輩のお姉さんは、唯一安心できる存在だったのでしょう。先輩のお姉さんは、唯一、先輩の能力が通じなかった人だったようですから」

弥子先輩のことが話に出て、僕はさらにイライラする。

しかし蒼春未は続ける。

「それを知り、私は、闇斗先輩の支えになりたいと、思いました。先輩がそれを望んでいなくても、そばにいたいと、思いました。私は、先輩が大好きです。私は、先輩を、愛してます。先輩のためなら、私は私の全てを捧げたいと思います。しかしそれでも、先輩は私のことなんて、見てくれないんだと思います」

そこで初めて、蒼春未の表情は悲しくなった。

もうすでに、蒼春未の言葉は、僕に対する話ではなく、自分に対する独白のようであった。

殺すって言ってるのに暢気にそんなことをしている蒼春未に、イライラする。

「先輩は、おかしな行動をとっています。それは、須藤という男の死体を隠していた資料室に、毎日通っていたということです。あとをつけられれば、須藤を殺したことが露見してしまうのに、それは、論理的な行動を目標としている先輩にしては、圧倒的におかしなことです。しかし、それを先輩がした理由、私には分かっています。きっと先輩は、亜由さんが好きなんです。私なんか、自分につきま

とう邪魔なだけの存在だと考えているかもしれません。私は先輩が好きです。いつか先輩の見ている世界を、一緒に見てあげたいです。先輩の苦しみを、私が少しでも、和らげてあげたいです。先輩の横で、先輩とずっと一緒にいたいです。でも、それは、私には、出過ぎた真似で、できることのない、愚かな願望です。自分が情けないです。こんなんじゃ、駄目なのに……」

そこで蒼春未は俯いて、黙り込んだ。

僕は一応礼儀として、感想を述べてやる。

「へぇ、そいつはこれまた、気が知れねぇや」

他の人のことなんで、全然理解できない。

だから僕は、他人を理解することを「気が知れない」と呟くことで、放棄する。

僕の世界にいるのは、僕と弥子先輩の二人だけだ。

それ以外は、解からなくて、構わない。

僕はナイフをポケットから取り出す。

蒼春未も、ナイフを取り出した。

なるほど、戦うつもりか。

「私は死にたくありません。私は頑張って、闇斗先輩に、愛してもらいたいです」

「ふぅん、精々頑張りな」

結局その琴吹は、せっかくの蒼春未を助けられるチャンスを、棒に振ったようだった。

・つづく・

七章：資料室の亜由2

1

考えてみれば、今日は、ちょうど、一年前、姉が行方不明になった日だ。

朝学校に来て下駄箱の中の封筒を取り、そして僕は男子トイレの個室の中で、封筒の中身を拝見した。

中にはノートから切り取ったらしい紙切れ一枚と、写真が一枚、入っていた。

「……」

その写真には、僕が須藤に馬乗りし、花瓶で頭を殴りつけているという光景が映っていた。

「……」

そしてもう一枚の、紙切れのほうに目をやる。

それは秋元からの手紙になっていた。

琴吹闇斗へ。

用件を簡単に伝えると、今日の放課後、美術科準備室に来てくれ、という一言に尽きる。

勿論、一人で来てくれよ。

僕も一人で待っている。

何故美術科準備室なのかというと、他に生徒がいないから、というだけだ。

別に美術科準備室じゃなくてもいいんだが、まぁ、お前としては少し思い出がある場所だろうから、ここを選択したまでだ。

もし来なかった場合、僕はお前が須藤威を殺しているのを写した写真を、警察に送りでもしようと思う。僕はその写真を三枚持って

いて、そのうち一枚は、脅しと信用のために一緒に入れておいた。
まぁお前はきっと来てくれると僕は信じているから、ただの保険さ。
少し話があるってだけ。
君の姉についての、ね。
あ、それと、ちょっとしたサービスとして言っておくと（まぁこの場合は書いておくとか）、柔剣道場の裏まで来てみろよ。時間によっては、案外手遅れでもねぇかもしれないぜ。
じゃあ、メールが長い奴を毛嫌いする僕は、このあたりで筆を置こうと思う。
筆でなんて書いてねぇけどな。

「……」
考えるべきことは多い。
しかし今やるべきことは、どうやら一つにしぼれそうだ。
時間はまだある。
僕は手紙をビリビリに破いてトイレに流すと、柔剣道場裏へと向かった。
途中、過去に雫根琴音が屋上から落下して潰れていた地点の横を通り、柔剣道場の裏へ。
それは、当たり前であるかのように、そこに転がっていた。

「――――ウ、」

腹を割かれ、その中身をあたりにぶちまけて死んでいる、ピンクのカチューシャをつけた女子生徒。
蒼春未だった。

「ウ、ウ。ウ、ううううう、ううう……」
可愛い顔が、台無しだ。

あのさらさらした綺麗な髪が、台無しだ。
これじゃあ全部、関係が――友情も愛情も哀情も劣情も欲情も同情も温情も恩情も、悲痛も苦痛も苦悩も苦悶も憂悶も煩悶も沈痛も慟哭も悲壮も寂寥も暗鬱も気鬱も陰鬱も沈鬱も憂鬱も愉快も不愉快も不快も梗概も感慨も慨嘆も愁嘆も悲嘆も愁傷も哀傷も憤怒も怒号も何もかも丸ごと全部――感情が、感傷が、全てが、台無しじゃないか。
台無しだ。
終わった。
「ううううううう、うううううう……」
自分の口元を、手で押さえる。
嘔吐する。
こんなの嫌だ。
何で全部、無くなるんだ。
駄目だ。
全然駄目だ。
「……助けてよ」
全部思い出す。
蒼春未との思い出を全部思い出す。
あんなに楽しかった。
呆気なさ過ぎる。
意味なさ過ぎる。
「僕はなんで、こうなんだ」
人が死んだのに、友達が死んだのに、大事な人が死んだのに、
泣かない自分が、
泣けない自分が、
嫌だった。

2

春未が死んだのは、全部僕のせいだ。
昨日の晩、きっと春未は秋元から呼び出しの電話をもらって、その後僕にそのことについて相談するために、僕に電話をかけてきたのだろう。春未の用件は、それだった。
僕はそれを、聞かなかった。
秋元は昨日の電話で、早く学校に来たほうがいいと言っていた。
僕はそれを、聞かなかった。
後悔だ。
もう……酷い。
僕は何で、駄目なんだ。
春未のこと、好きだったのに。
いい子だった。
汚されていても、汚れていない、純粋な、いい子だった。
幸せになるはずの子だった。
普通に生きて普通に好きな人とでも将来結婚して、普通に幸せになれるはずの子だった。
まだ、十四年程度しか生きてないのに。
信じられない。
僕はもう、人を救おうとすることすら、叶わない。
僕に関わっただけで皆、死ぬ。
それほどまでに僕はいちゃいけない。
生きてちゃいけない。
僕はもう“普通”なんて夢見ちゃいけない存在だ。
僕はもう手遅れだ。
全然変わってなんかいない。
僕はもう、変われない。

放課後、僕は教室を出て、資料室へ、向かった。
僕に許された、唯一の場所が、きっと、そこだ。
世界から追放された人間の居場所、集まりが、そこだ。

そこで暮らしている、逸脱者――亜由は、そこにいつも通りに、いてくれた。
亜由だけは変わらず、いてくれた。
僕は全てに救われた気分になる。
ここは僕がすがる場所だ。
僕がすがれる、唯一の場所だ。
「亜由、」
いつも通りに変わりなく椅子に腰掛け、机に手を置き、亜由は本を読んでいる。
僕はふらふらと、最後の力で、その机までたどり着き、崩れた。
「亜由、助けてよ」
机に顔を伏せて、床に膝を着いて、僕は、僕は僕は僕は僕は。
僕は――なんだ?
僕の頭に、手が置かれるのが分かった。
亜由が僕の髪を、撫でてくれる。
その感覚に、溺れる。
沈む。
少し経って、亜由が口を開いた。
「秋元に、呼ばれてるんでしょう?」
何も言わずに、何も言わないことにより、首肯する。
そのまま何も言わずに僕は、ポケットから、写真を取り出して、机の上に、置く。
僕は須藤を殺している写真。
全ての始まりの日を、写した写真。
「秋元は、おかしなカメラを持ってるわ」
亜由は言った。
「過去に殺人が行われた場所でシャッターをきると、その殺人の風景が、新しいものから順に、写真に写るカメラ。これはそれで、撮影されたのね。ほらこの前、秋元がここで写真を撮っていたでしょ

？　あの時、君、覗き見してたから、分かるよね」
僕は何も言わない。
「窓からね、渡り廊下を歩いてくる君を見たんだ。あそこからここにたどり着くまでの時間を考えれば、君があれを覗き見してたことくらい、分かる」
僕は何も言わない。
「今から、秋元のところに、行くのね」
亜由は言う。
僕は何も言わない。
「行くのがいいわ。行けば、君は、全てを知る。君の姉のことも」
何故か亜由のその声は、とても儚げだった。
全てを諦めたかのような、声だった。
投げやりな、声だった。
僕の姉をどうして知ってる、秋元とどういう関係だ、姉のことについて何を知ってる、そんな疑問も、僕は言わない。
ただ、ただ、ただ、ただ、ただ、
僕は立ち上がって、亜由に正面から、自分から、抱きついた。
亜由の細い首に腕をまわして、亜由の肩に顎を置いて。
僕はそのままでいる。
もう力なんか入らなかったけれど、出来るだけ強く、抱き締めた。
何故そんなことをしたのか。
それは分からない。
僕には何も分からない。
ただ、救われたくて。
ただ、救いたくて。
そうしたように、思える。
これはもしかしたら、傷口の、舐め合いだったのかもしれない。
「私の正体を知れば、君はこんなこと、私にできなくなるだろう」
亜由はそんなことを言っている。
「構わないよ」

僕はそんなことを言っている。
「僕は君が好きだ」
その時初めて、僕は、偽りなく本心を口にしたように、思う。
「君が誰でも僕は君が好きだ」
しばらく、そのまま。
窓から風が入り、頬を撫でる。
亜由の長い黒髪も、揺れる。
僕はそこで腕を解いて、亜由をまっすぐに、見た。
「ナイフをかしてくれないか？」
僕はそう尋ねる。
亜由は頷いて、制服の内側から、ナイフを取り出し、僕に差し出してきた。
「私も君が好きだ」
僕は頷いて、ナイフを受け取った。
「行ってくる」

3

秋元拓哉は美術科準備室で、約束通りに待っていた。
美術科準備室はやはり暗く、まだ目の慣れていない僕は、秋元の細かい表情までは窺えない。
「よぉ、闇斗」
「やぁ、秋元」
僕らは挨拶を交わす。
「まず、コレ」
秋元は、写真を二枚、僕に飛ばした。
床に落ちて、すべって、僕の足元まで来る。
僕が須藤を殺している写真が二枚。
僕の手元の一枚と合わせて、これで全てということか。
「姉さんの話、だっけか？」

「ああ、弥子先輩の、話だ」
「その前に、何故、春未を殺したんだ」
敵意を込めた、言葉。
しかし秋元は、ひるむことなく、あくまで自然に僕の質問に答える。
「亜由のことを知ってるかもしれなかったからさ。まぁ結果、知ってたようだけどな。にしても気が知れなかったぜ、アイツ、僕を逆に殺そうとしてきた。結局、僕は傷一つ負わずに、アイツは死んだけどな」
当然だ。
春未は、普通の、どちらかといえば貧弱な、小柄な女の子である。悪魔によって強制的に体を動かされていた時と違い、なんでもない女の子が、年上の男子になんて、正面から戦って勝てるわけもない。
殺されて、当然なんだ。
しかし春未は、逃げずに、戦ったらしい。
僕のため、か？　僕に迷惑をかけないため、か？
そのために、僕の敵らしい秋元に、立ち向かったというのか？
「そんな話、どうでもいいけどさ。さて本題だ」
春未のことを、どうでもいいで済ます秋元。
僕は、ズボンのポケットの中に隠したナイフの柄を握る。
いつでも、殺せるように。
「この写真をまぁ見てくれや」
秋元は、もう一枚写真をポケットから取り出すと、それをこちらに見せてきた。
暗闇に目も慣れてきたので、それが何を写した写真なのか、判断することは可能だった。
「――――」
凍りついた。

写真の中で、亜由が姉さんを、殺していた。

亜由が、姉さんの胸にナイフを押し込んだ、その瞬間の映像。

「――――何だよ、ソレ」

何とか、声を出す。

予想外。

予想外。

予想外な、イレギュラーだ。

「見りゃ分かんだろ。弥子先輩を、亜由が殺したっていう証拠写真さ。僕のカメラの話は、亜由から聞いたかい？」

「……」

姉は、行方不明。

行方不明といえば、須藤もそれと同じ扱いにされている。

体を細かく切り刻まれ、学校中のゴミに混じらせる。

その方法を、一年前、亜由が姉にも使っていたとすれば――

姉は、須藤と同じく、行方不明と、なる。

考えたくないのに、

思考が無理やりに繋がっていく。

「もったいぶっても仕方がねぇ。もったいぶるってのは、全く気の知れねぇ行為だ。だから僕は前ぶりも何もなく、この事実を告げるぜ。闇斗お前、亜由の額を見たことあるか？」

「なん……だと……？」

亜由の額は常に、あの前髪に隠れて見えないが、

それが、どうかしたのか？

「アイツの額には横に長い紙がはっつけてあってさ、これはアイツの額からとれることはねぇ。もはや食い込んでる、体の一部になってるからな。そしてその紙には、こう書いてある――ｅｍｅｔｈ」

最近、何度か聞いていたワードだ。

亜由からも秋元からもバイトさんからも聞いたワードだ。

額に、「真理」を意味する「ｅｍｅｔｈ」と書かれた紙をつけ、

つくられる――泥人形（ゴーレム）。

作った人間の意のままに動き、壊す場合には紙を切り「死」を意味する「ｍｅｔｈ」という文字にすればよいという、ユダヤ教の伝承に登場する、「ゴーレム」――ヘブライ語で「胎児」。

「もう分かるよな？　亜由っていうのは、一年目に弥子先輩がつくった泥人形（ゴーレム）だ」

あの資料室にあった本。紅葉の栞がはさまっていたページは、泥人形（ゴーレム）について書かれたページだった。

考えてみると、姉には、おかしなものを作る能力・才能があった。あの人形や、おそらくあの鏡もそうなのだろうし、おそらく秋元のカメラもそうなのだ。

それだけじゃない。

幼い頃から、姉は変なものを作ってばかりいた。

作成能力（メイド・スキル）。

ならば、泥人形（ゴーレム）だって、例外ではない。

作れる。

「イジメを受けていた弥子先輩は、自分をイジメる奴らを皆殺しにするために、泥人形（ゴーレム）を作ったんだよ。泥人形（ゴーレム）は作った人間の意のままに動かせる忠実な人形だからな」

一年前の大量殺人事件。

姉には、書店で立ち読みをしていたという、アリバイがあった。

しかし、姉は書店にいてよかったんだ。

自分がアリバイを作ってる間に、泥人形（ゴーレム）に、殺人を行わせられるのだから。

「で、イジメてた奴らをほとんど殺して、弥子先輩は、あとは亜由を壊すだけだった。それが、ちょうど一年前、夏休み前日の話。しかしその日、弥子先輩は行方不明になった。僕は何があったのか知らない。しかし、亜由は壊れてなんかいなくて、亜由の証言では、弥子先輩は資料室に来なかったらしい」

僕は何も言えない。

そんなことが。
そんなことが、あったなんて、分かるわけがない。
「で、僕は推測した。亜由を壊そうとした弥子先輩は、逆に亜由に殺されて、死体を隠されたんじゃないかってな」
泥人形は、作り主に忠実なはずだ。
しかし、そんなことが起こったのだとすれば、そんな起こるはずのないことが起こったのだとすれば、
理由は、亜由が感情を持ったから、ということなのだろう。
感情を持った、泥人形。
この美術科準備室にあったあの人形みたいに。
亜由（ゴーレム）は、心を持った。
死にたくないと、考えたんだ。
「で、資料室にてこのカメラで写真を撮影した。したら、この写真を入手できたってわけさ」
亜由が姉を殺害している光景を写した写真。
「……」
「分かったか？　僕は今から、亜由を壊しに行こうと思ってる。弥子先輩の、敵討ちだ。僕は亜由を壊す」
額の紙を切るだけで、壊せる。
だからあの時、資料室で秋元は、カッターナイフを持っていたのか。
あれで十分だったから。
凍結（フリーズ）。
そこで思考停止。
「で、勿論闇斗、お前も一緒に来るだろ？　僕がお前を今日呼んだのは、亜由を一緒に壊すためだ。アイツは抵抗するだろう。仲間がいるに越したことはない」
秋元は、こちらに近づいてくる。
「さぁ、行こう」
その秋元に、僕は。

「――――――――フフ」

秋元は、怪訝そうに、首をかしげる。

構わない。

そんなの見てない。

「フフフフ

「そんなんに縛られるの、もうっ嫌だ！　僕は、こんなの、もう嫌なんだよ！　気持ちの悪い込み入った御託はもうたくさんだ、見飽きた聞き飽きた飽きた厭きた。僕はそんなのどうでもいい、関係ない、頼むからテメェのその汚ぇ言葉を僕の耳に入れないでくれ、頭が破裂して、脳みそぶちまけて死にそうになる。僕は本当、変わりてぇよ。たださぁ、やっぱ変わることなんて、できねぇんだよな。たかが一人の少女のために戦ってその一人の少女を救ったぐらいで変わった気でいた自分が、ひどく滑稽で愚かで、心底片腹いてぇよ。もう僕達クズは変わることなんてできないっつーことは、生まれる前から分かってたのによ、とんだ道化もいたもんだ。ツボミなら開くかもしれねーし、欠けた皿でもまだ使えるかもしれねぇ、でもさ、クズってーのは何にもなれずに消え去るだけだよな！　そうさ、クズっていうのは欠陥でも欠落でもなんでもなく、もとから失敗作なんだよ。僕みてーなクズは、本当、生まれた直後に死んどくべきだったんだ、生まれてきたことがめっぽうだらしねーな、ペルソナだか何だか知らねぇけどさ、論理だか何だか知らねぇけどさ、まるでこの世を知り尽くしたみたいな感じで全てを見下してるクズ人間っていうのは、周りから見てどんだけ邪魔で気持ち悪かったんだろうな、想像もできねぇや！　嫌だ嫌だ嫌だ、いてもいなくても同じだなんてことねぇ、いたら迷惑なんだな。何で誰も僕を途中で殺してくれなかったんだろう。何で毎回僕は助かってきたんだろう。死ぬタイミング間違えてるよなぁ。全部とっぱらっていきてぇのに、やっぱりいろんな御託が僕を縛り付けて、身動きをとれなくしやがる！　気が知れねぇのは僕のほうさ、何もかもの気が知れねぇよ！

　復讐だか敵討ちだかそれすらも知らねぇけど、そんなの僕には関係ない！　ただ、亜由を殺すのは許さねぇ。お前はまるで僕と姉さんという“クズ”が作り出した愚かな過去の産物だ、ここで全て精算してやる、変わりたいだなんて思わない、僕は僕を貫いて、醜くこの世を生き延びてやる、悪いか？　悪いんだろうケド、僕の勝手だ。殺す、秋元拓哉、てめぇはココで、感情的に殺してやるよ――

ッ！」

僕はナイフを取り出して、秋元に、跳びかかった。

振り上げたナイフを、秋元の頭上に振り下ろす。

しかし秋元は後ろに跳んでそれを交わす。

「――　　ッ！」

秋元が何かを叫んでいる。聞こえない。

秋元も隠し持っていたらしいナイフを構えた。

「――　　。　　ッ！」

聞こえない。

僕は奇声を発しながら、秋元に再度跳びかかる。ナイフを振るう。

何の計算も考えもなく、殺意だけで動く。

まるで、空っぽだ。

初めての、感覚だ。

秋元はまだ何か言っているが、聞こえない。

耳に入らなねぇよ。

僕はナイフを振り回して、秋元を追う。

殺す――ッ！

体をねじり、時に回転させ、僕は秋元に追いすがる。

暗闇の中、交差するたびに鋭い光沢を放つ二つのナイフ。

秋元の懐に入ることに成功する。

しかしその瞬間、腹に、おかしな感覚が。

熱い。

腹が、熱い。

ブシュッ、と。

血だ。

僕は構わずに、ナイフを振るう。

それが秋元の肩を、引き裂く。

ズシュゥッ、と。

血。

視界が血だらけだ。
お互い、奇声を発し、殺し合う。
こんなのは戦いじゃない、ただの殺し合いだ。
どちらかが、死ぬまで続く。
勝敗じゃなく、生死の問題。
自分の、ナイフを握る手が、ザクロみたいに引き裂かれる感覚があった。
腕にナイフが深く突き刺さっていて、それが一気に、僕の肩までそのまま裂かれる。
僕はナイフを左手に持ち替え、訳もわからず振り下ろす。
秋元の体のどこかにそのナイフは刺さり、僕はそのままさらに下へとナイフを押し込んでいく。
自然、僕の体は前のめりになり、僕の背中に冷たい金属が。
何故か、体が思うように動かない。
なんでだ?
気付いたら、頬が切れた。
秋元の腹に、僕が突き出したナイフは簡単に、入っていった。
喉がはち切れるんじゃないかってくらいに、叫ぶ。
痛みに叫んでいるのか、そんなの知らない。
もう何も、知りたくありません。
直後、僕の右胸に、ナイフが入ってきた。
中の臓器が、裂かれる感覚。
ぱちん、と。
僕はナイフを、思い切り、横にふり、
それは秋元の喉を、破壊した。
秋元のとれかかった首から溢れた血が、気持ち悪く、ぼたぼたと、僕にかかる。
どろどろしていてなまぬるくてほんとうにきもちがわるい。
僕は続いて、ナイフを秋元の左胸へ——
力が要る。簡単には入っていかない。

――押し込んだ。
どぶどぶどぶどぶどぶどぶどぶどぶ。
秋元は、倒れた。
僕も、倒れそうだ。でも、倒れない。
倒れるはずなのに、上から糸でつるされてるかのように、行動する。
僕は美術科準備室から、飛び出した。
走る。
走って、どこに向かっているのか分からない。
ああ、資料室に向かっているのか。
何故か、音が、聞こえない。
聴覚神経が、切れたのかも。
もう意識は遠い。
なんか、からだが、かるいなぁ。
途中、生徒達と、すれ違った。
でも、その生徒達の叫びも、聞こえない。
「　　」と、世界が無音だ。
渡り廊下を走っている時、資料室の窓を、見た。
「ッ！」
窓から、火がでていた。
燃えていた。
僕は走る。
何度も転んだけれど、分からなかった。
何度も壁に全身をぶつけたけど、分からなかった。
階段を、転がり落ちても、分からなかった。
全身が、すごく痛かった。
泣いた。
涙が出た。
なんか変な声が、口からずっと出ている。
もう、痛すぎる。

視界が、ぐるんぐるん回転する。
常にどこかに体がぶつかってる。
感情がない。
いや、悲しいの、かな。
怖い。
もう、どこにも自分の場所がないようで、怖い。
失敗した。
生まれてきて——間違え。
ずっと怖かったです。
みんなが敵で、ぼくはいつも、何かから逃げていました。
幼い頃から、ずっと、ずっとずっとずっと一人で、逃げてきました。
みんなの目が、怖かったです。
みんなが、ぼくを責め立てる目で見ていました。
世界にぼくは一人ぼっちで、
希望もなにも、ありませんでした。
助けて……

そして僕は、資料室に、たどり着いた。
「　　」
燃えていた。
資料室は、火の海になっていた。
ああ、あの本棚が、あの掃除ロッカーが、あのダンボール箱の山が、あの机が、あのカーテンが、あの亜由が日々つけていた日記が、あの亜由がいつも座っていた椅子が、あの机が、炎に包まれていた。
「ああ、ああ、ああ……」
そして、窓の前、その床に、
泥が、たまっていた。

泥の上に、紙切れが一枚、置いてある。
ｍｅｔｈ、と、そう書かれている。
理解、する。

亜由は、死んだ。

「あああ。あああああ……」
泣いた。
僕は人の死を、悲しんだ。
人が死ぬって、こんなに、重い、ことだったんだ。
初めて知った。
命が、こんなに重いなんて。
僕はたくさんの人を殺してきた。
なんて僕は、罪深いんだろう。
泣く。
涙だ。
涙は、熱い。
「あああああ……」
僕は救いを求めるように手を伸ばし、亜由のもとへ、駆け寄る。
炎の中を、進む。
膝を突いて、泥を、抱きしめた。
「亜由……亜由……」
その時だった。
「うッ！」
ひどい頭痛。
僕は、立ち上がる。
途端、足がふらつく。
後ろへ、後ろへ引っ張られる。
気付くと、僕の体中に、手が伸びていた。
僕は後ろに、その手によって引っ張られる。

まわりが、真っ暗だ。
見ると、そこには、血まみれの、みんながいた。
須藤威、小町夢羽、奈野奈乃子、雫根彩音、雫根琴音、鷺凪砂、
鏡ヶ先恵仔、バイトさん、詩時故露、蒼刹流、蒼春未、秋元拓哉、
亜由に、姉さんに……
僕が今まで関わってきた全ての人達が、みんな血まみれの姿で、
僕を見ている。
僕はみんなに、引っ張られる。
「あ。――あ、あ。あ――あ、あ」
資料室の、窓。
そこから僕は、落下した。
みんなに引っ張られて、下へ下へと落ちてゆく。
みんなが僕の名前を、呼んでいた。

僕は、自虐的に、笑った。
これで、終わりだ。

暗闇の世界へ、
僕は堕ちた。

・つづく・

終章：ペルソナ抜きの後日談

人を愛することができずに、人を呪い続けた少女のことを、思い出す。

『心のそこから感動したり、共感したり、感嘆したり、嬉しかったり楽しかったり、そんなのできないんだ！』

自分の大事な人が死んでも、その死体を美しいとしか感じられなかった少女のことを、思い出す。

『むぅーっ、でもッ！　彩音諦めません。諦めたら試合終了どころか彩音終了です！』

自分に希望を与えてくれた人のために人を殺し、最後に崩れた人形のことを、思い出す。

『本当はもっと話したかったな。遊びたかったな。いろいろ、教えてもらいたかったな』

ある人間に愛してもらいたくて、自分の全てを変えて、狂い続けた少女のことを、思い出す。

『生まれ変わったら、また闇斗のことを好きなっていい……かな』

生まれてから一度もいいことがなく、復讐だけが自分の使命だと言った少女のことを、思い出す。

『初めて、嬉しかった。お母さんといて嬉しいこと、あったけど、闇斗と会えたのが、一番、嬉しかった』

突然に完璧になれる機会を持ってしまい、自分の力を勘違いしてしまった少女のことを、思い出す。

『論理っていうのはそんなに格好いいか？　悪いけどさ、私には論

理なんて、不確かなばかりだな』

兄に利用され、自殺にまで追い込まれ、やっと助かったすぐに殺された少女のことを、思い出す。

『死にたいです。先輩、今すぐ私を、その手で絞め殺してください』

様々な少女を見続け、達観し、しかし物語の予定調和のために殺された女性のことを、思い出す。

『うん、私は君の姉を良く知っているよ。琴吹弥子、うん、私の記憶・記録の中では、まだ新しい方の名前だ』

幼馴染のために自分すらも捨て、しかし物語の予定調和のために殺された少女のことを、思い出す。

『琴吹のお兄ちゃん、なんで、私の大切な春未を殺そうとするの？』

世界がひどく色あせたものだと気付いてしまい、人を人とも見れなかった少年のことを、思い出す。

『ズルいよな、オレは生まれた時点で、いてもいなくても同じ人間なんだゼ？』

自分の理解者をやっと持てて、あらゆる面で壊れてしまっていた少年のことを、思い出す。

『分かったか？　僕は今から、亜由を壊しに行こうと思ってる。弥子先輩の、敵討ちだ。僕は亜由を壊す』

皆、全て、完全に、寸分の狂いもなく、僕のせいで死んだ人たちだ。

そして、今もこうやって無様にも生き続けている、自分。

僕は、とある病院の一室にいた。

「……」

今はもう夜中で、部屋の電気は消えていて、窓から月明かりがわずかに差し込んで来ていた。

この部屋は個室で、今は僕一人だ。

僕が目を覚ましたのは一昨日のことである。

全身に包帯が巻かれている。左足は吊るされていた。

全身のあらゆる箇所が骨折しているのは明白であった。

「……」

ぼーっと、窓から見える夜空を見上げる。星がない。

あの時。僕は資料室から落下し、下の花壇の土の中に落ちたようだ。それが幸いして、死なずにすんだと見ていいだろう。コンクリートの上だったら、絶対的に死んでいただろうから。

「……」

亜由……。

姉に、よく似た少女。

姉と同じで、ペルソナ崩しが通じなくて、本質を覗くことができなかった、あの少女。

……ん？　姉と同じで？

なんだろう、何か引っかかるものがある。

……。

思考する。

……。

――そして僕は行き着いた。なんとも呆気ない、なんてことのない、つまらない真相に。

「ハ、僕は馬鹿だったなぁ……」

人の気配を感じ、僕は自分の左側にある窓の外から、自分の右側へと視線を移動させる。

そこには、一人の少女が立っていた。

長い艶やかな黒髪に、大きいけれど何の感情も宿っていないガラスのような瞳。この世の闇を集めてそれを人の形にしたかのように、

神秘的であり、どれと同時にどこか不安定で儚げな少女。
その姿を、とても懐かしく感じる。

「やっぱり生きていたんだね、姉さん」

亜由、という名前は、姉の好きな小説に登場するヒロインキャラクターの名前だった。姉はそのキャラクターを気に入っていて、だから僕に名前を尋ねられ、姉は“亜由”と名乗ったのだろう。

「なんだ、気付いていたのか」

姉は、特に驚いた風でもなく、すまし顔だった。
そういえば、姉が驚いた顔というのを、僕は見たことがない。亜由としてでも、姉は驚きという表情をしていなかったと思う。
「僕としたことが、本当に論理的じゃなかったよ。たかが土が撒かれていただけで、それを泥人形（ゴーレム）である亜由が崩れた痕（あと）だと勘違いするなんて」
「うふ、まさか闇斗が窓から落下するだなんて、思っても見なかったわ。だいたい、私の計画では、闇斗は拓哉と一緒に資料室へ向かうはずだったのだからね」
「ああ、そうか。“姉が亜由に殺され、その亜由も死んだ、と勘違いし、もう姉のことについて永遠に調べたりしなくなる”っていうのが、姉さんのシナリオだったわけだ」
今頃になって僕に事情を知られたら面倒だから、とでも考えたのだろう。夢羽への密告も、こっちのほうが楽に僕を排除とでも考えたんだろうし。いや、もしかしたらあれには、僕を試す、という意味もあったのかもしれないな。
「そういうことだ。拓哉には悪いことをしてしまったな、闇斗がまさか拓哉を殺すだなんて、全然考えなかった。一年前に鏡に質問し、闇斗が一年後に私と遭遇することになる、ということを知ってから、

結構考えに考えた計画だったのだけれど」

「いえ、確かにすごかったよ。秋元の演技も上手だったし。泥人形（ゴーレム）って言葉を前々から僕に聞かせていたのも良かったし、あの紅葉の栞を泥人形（ゴーレム）についてのページに挟んでいたのなんか、今考えると凄すぎて涙が出る」

「ありがとうね。しかし、何故気がついた？」

「ほとんど適当で、あてずっぽうだよ。でも気になることはいくつかあった。まず“亜由が姉を殺しているシーンの写真”を秋元は僕に少ししか見せてくれなかったこと。あの下駄箱の手紙にその写真を入れておかなかったこともおかしいし、秋元は僕にその写真を少しだけひらひらさせて見せた後は、すぐに閉まっちゃった。あそこは暗くて、僕ははっきりとはあの写真を見れなかったんだよね」

「それは仕方ない。分かってるとは思うが、あれは合成写真だ」

「僕も、前に刹流に会いにパソコン室に行った時に、秋元が“合成の練習”をパソコンでしているところを見ていたんだよな。なんであの時それを思い出さなかったのか、僕は本当どうかしていたよ。でも、あのカメラは本当なんでしょ？　僕が須藤を殺しているところの写真なんか、どう見ても本物だ」

「勿論。お察しの通り、私はあの手のモノを作る才能・能力があるからね。ただ、泥人形（ゴーレム）は作れなかった。一年前、本当に私は、秋元が君に言った嘘話のように泥人形（ゴーレム）を作って使うつもりだったんだが、しかしできなかった。命をつくるのは難しいよ」

あの美術科準備室にあった人形だって、作ったのは姉だが、命を吹き込んだのは彩音だった。

ああ、でも一年前に一応泥人形（ゴーレム）を作ろうとしていたということで、バイトさんが書店で僕にしたあの“泥人形（ゴーレム）って作れると思うか？”っていう質問の意味が分かった。だってバイトさんは、姉と秋元の今回の計画のことは知らなかったはずだから。

「まぁ一番不自然だったのは、春未が殺されたことかな。よくよく考えてみれば、秋元には春未を殺す理由が、一切ない。だけどこれ

からまた姿をくらますつもりの姉さんからしてみれば、春未は邪魔な存在の一つだろうから」

僕が言うと、姉はそこで、話題を変えた。

「どうやって私は一年前、私をイジメていた連中を殺したのかも、分かってるんでしょ？」

「ああ、楽勝だ。バイトさんは確かに姉さんに協力したと言っていたんだしね。つまり、裏口を使って姉さんは出入りしていたんだろ？　レジのところにもカメラがあったけれど、それはバイトさんが物を置いたり、自分が立ったりすることで、死角をつくることは十分可能だ」

「ご名答。さすが私の弟だ」

姉に褒められ、僕は少し嬉しくなる。

「にしても困ったよ。僕の体の傷や、資料室からの落下から、警察は当然、僕が秋元を殺して教室と資料室に火をつけた、と考えてるだろうから、そろそろ、もしかしたら明日あたりに、ここに話を聞きに来るだろうさ」

「自業自得だ。しかし闇斗、思ったよりも怪我はひどくないんだな。普通に話せてるし」

「ああ、落ちたところが土の中だしな。運が良かった。秋元にナイフでやられた傷のほうが、捻挫や骨折より酷いかも」

「そりゃそうかもな」

「姉さんはもう、家に戻る気はないの？」

「ああ、ないな」

「というか、姉さんのアイバイは完璧で、大量殺人事件の犯人にされることは多分なかったと思うけど、なんで姉さんは整形までして、資料室で住むことにしたの？」

何故、自分を行方不明にしたのか。秋元はそれを知っていて、資料室にも姉に会いに通っていたのだろうけど。

「……疲れたのさ」

「何に？　世界に？」

「馬鹿ね。世界に疲れたなんて言ったら、そいつは自殺するしかない」
「そうだな。じゃあ何に？」
「社会に、かな」
「そいつはいいや。僕ももう疲れたよ。こんな茶番に付き合うのは。あ、今気付いたよ。姉さんに僕のペルソナ崩しが通じなかったのは、姉さんは歪んではいるけれど、でもペルソナなんて被ってなかったからだったんだね」
「その通りよ。闇斗も、そんな仮面、脱いじゃえばいいのに。皆馬鹿よね。ペルソナっていうのは、醜い自分を晒さないようにするためじゃなくて、醜い自分に気付かなくて済むように被るものだ。つまり皆、自分と向き合えていないんだ。それじゃあ駄目だ。でも闇斗は最近、自分と向き合い始めたんじゃないのか？　だから君は、変わった」
　変われないと思っていたけれど、
　僕は実際は、変わっていた。
　変われていた。
「多分ね。僕は弱くなったんだと思うよ。実は、もうペルソナ崩し使えなくなっちゃったんだ。その前兆はあったけどね、例えば刹流や春未の仮面の裏を、僕は覗けていなかった。これも今気付いたんだけど、春未も凪砂みたいな純粋な子だったんだろうな、だから僕は彼女を助けた。考えてみれば、二人とも、被害者だってところは同じだな」
「それは弱くなったんじゃないだろうさ。“ペルソナ崩しを使えなくなった”ってのは“ペルソナ崩しを使わなくても生きていけるようになった”ってことだろ？　闇斗はその能力をひどく恨んでいたようだが、しかしそれはきっと君自身が望んだ能力だったんだろう。怖かったんじゃないの？　人の被る仮面が」
「そうかもしれないね」
　僕はそのあたりで、姉から視線を外し、また窓の外の星空を眺め

た。
「一つ質問してもいいか、闇斗」
「いいよ」
「今回、闇斗はいろいろな歪んだ人間を見てきたはずだ。その中で、誰が一番怖かった？　私を含めてもいい。それを教えてくれ」
「そんなものは決まっているよ」
僕は夜空を見たままに、答える。
当たり前で、全人類に共通するはずの、その答えを。
「自分さ」
どうだろう。姉は、驚いた顔をしてくれただろうか。
分からない。
しばらくして、振り返ってみると、もうそこには誰もいなかった。
もう永遠に会うことはないだろう。当然、姉はもう資料室なんかにはいない。もっと別の、どこか遠い場所へと行くつもりだろう。
こうして、気まぐれだか何だか分からないけれど、会いに来てくれただけでも喜んでおかないと。
「こんなの全然、論理的じゃない」
でも、それが心地よかった。
ばいばい論理。
僕は今までの人生、ずっと僕を縛り付けていたモノに別れを告げる。
自分を見つめるようになり、僕はペルソナ崩しを使わなくても生きていけるように、強く、変わることができた。
誰もが、自分が怖くて被るペルソナも、僕は必要なくなった。
これは、良い事なのだろうか。
そんなこと、分からない。
この世界は分からないことだらけだ。
正解のない問いだって、たくさん、それこそ数え切れないほどにある。
「もう、ごちゃごちゃ考えることはやめよう」

これは逃げかもしれない。
いや、逃げなのだろう。
こんなの、知るか。
何が正しくて何が間違いなのか、なんて問題、僕の手には余りすぎる。
それでいい。
逃げてていい。
それは弱くない、なんてことは言わない。逃げるなんて、弱い。
でも弱いのは、悪いことではない。
僕は強くなったのか、弱くなったのか、それすらも曖昧になってきた。
あらゆる矛盾やあらゆる論理が、この夜の静寂と闇の中に溶けて、霧散していく。
この、なんともいえない快感に、しばらく僕は浸っていようじゃないか。
考える時間は、僕らには十分ある。無限にはないけれど、たくさんあるのは事実だ。
せめて今だけでも、何も考えなくてもいいだろ？
僕をもう少し、いい気持ちでいさせてくれ。
みんなのことを、思い出す。
僕は呟く。
「ごめんね、みんな。――ありがとう」
どのくらいで退院できるだろう。
夏休みは全て病院で過ごすことになってしまうだろうか。
そんなのやっぱり知らないけれど、退院してからやることだけは、今、決めた。
僕は、今まで僕のために死んでいった人達みんなの、お墓参りに行こう。
そんなもので、僕のしたことが全て許されるだなんて、そんな身勝手なことは思わないけれど。

でも僕はもう、自分は生きていないだなんて、思わない。
死んでいいだなんて、思わない。

僕は生きている。
こうして世界の中で、社会の中で、確かに僕らは、生きているんだ。

目を瞑ると、僕が僕に言っている。
「お前は、死ぬべきだ」
僕は答える。
「嫌だ」

・「琴吹闇斗のペルソナ崩し」終わり・

終章：ペルソナ抜きの後日談（後書き）

こんにちは。
今まで「琴吹闇斗のペルソナ崩し」を読んでくださり、本当にありがとうございました！
作者です。
これにて、「琴吹闇斗のペルソナ崩し」は完結、となります。
詳しい解説なんぞをここでしてもそれは蛇足だろうと思いますので、そんなことはいたしません。
完結しましたので、お気の向いた方は、この作品にご評価やご感想などをいただけると、とても嬉しいです。今後の参考にもしたいので。
さて、この作品は、とても長いです。長すぎです。もう少し短く出来たはずなのに、いつの間にかとても長くなってしまいました。その長い作品にここまでお付き合いいただき、とても光栄であります。
それにしても、結構多くのキャラクター達が登場したこの作品であります。全てのキャラクターは書いてて楽しく、全て僕の大切なキャラクターでありますが、しかし、登場したキャラクターで生き残ったのがまさか主人公と姉と保健室の先生と担任の先生だけだとは……。あ、凪砂は微妙なところですね。
ちなみに、この作品では、皆が「絶望」だの何だの暗いことを申しておりますが、僕はまったくそんなことは思っていませんので、皆様も真剣に受け止めないで下さいね。世界というのはとても素晴らしいですし、人というのはとても美しい生き物です。いや、僕が偉そうに言うことでもないのですが。
では、とてつもない感謝の念と共に、ここらへんで筆をおきたいと思います。
最後にもう一度、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7882l/

琴吹闇斗のペルソナ崩し

2011年3月29日19時10分発行